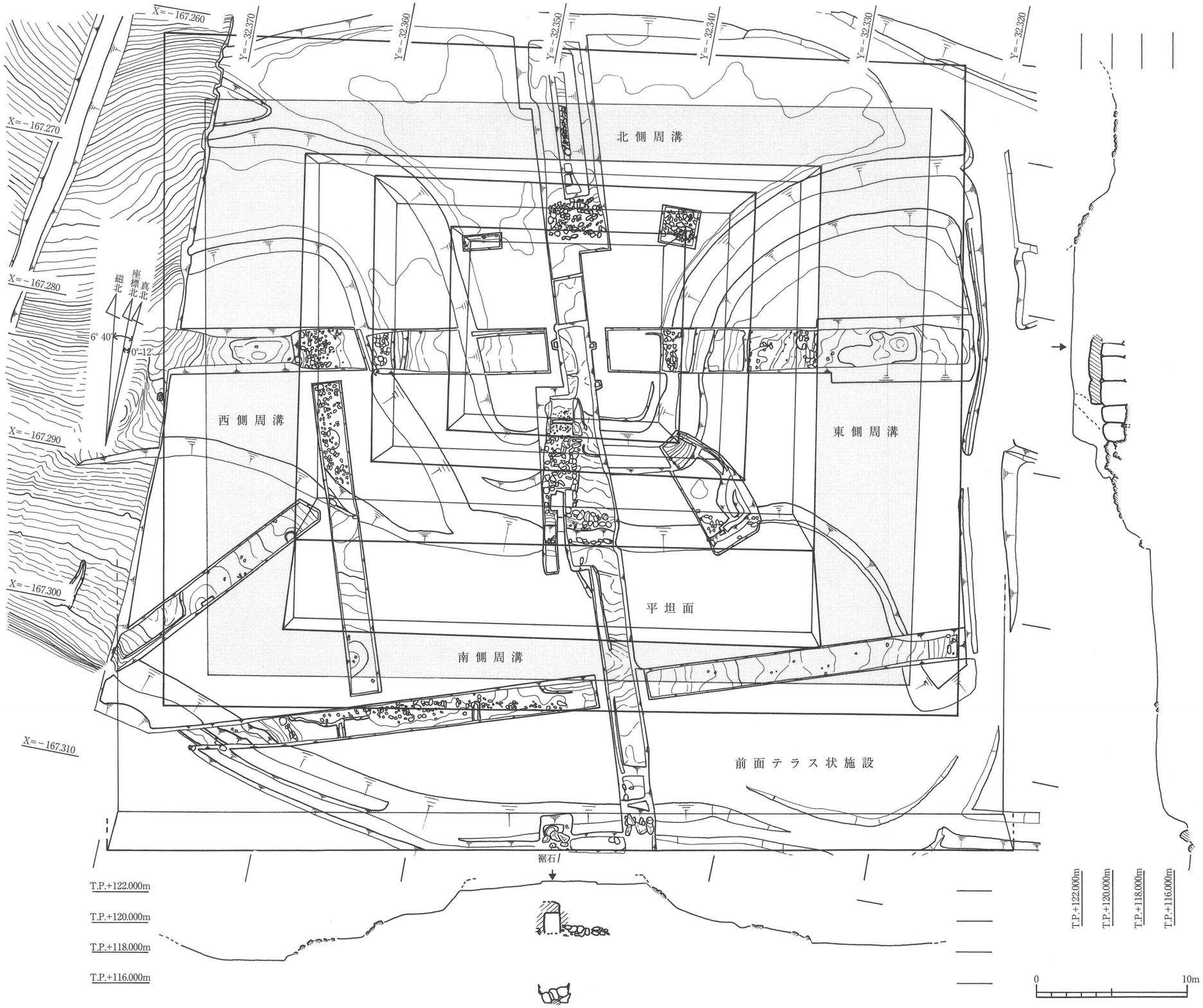
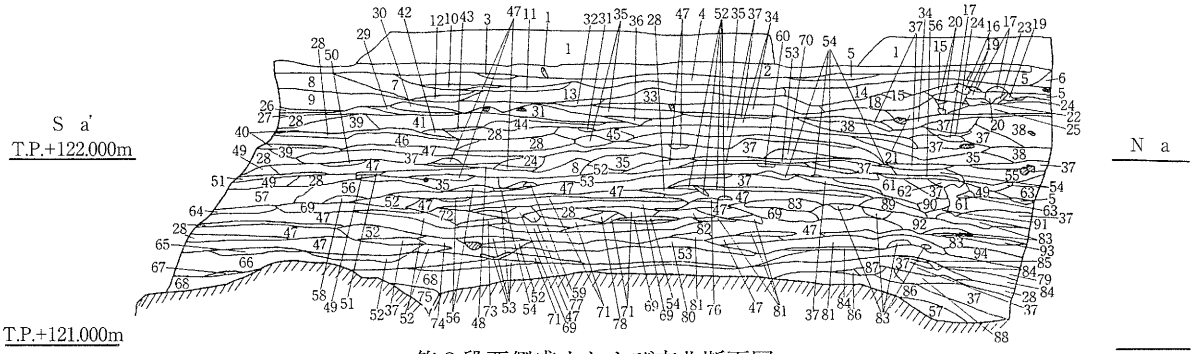
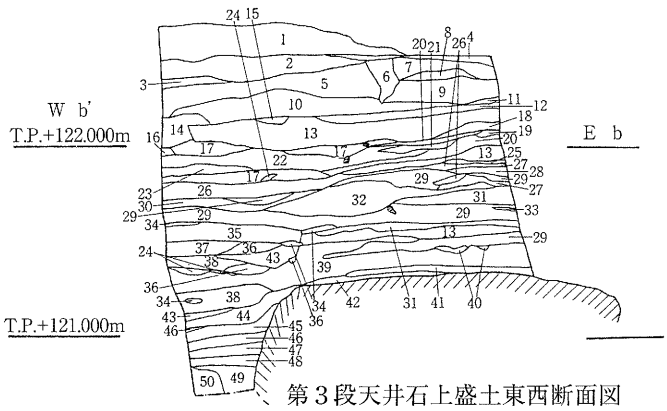


第41図　シシヨツカ古墳全体図（1/250）



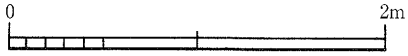
第３段西側盛土および南北断面図

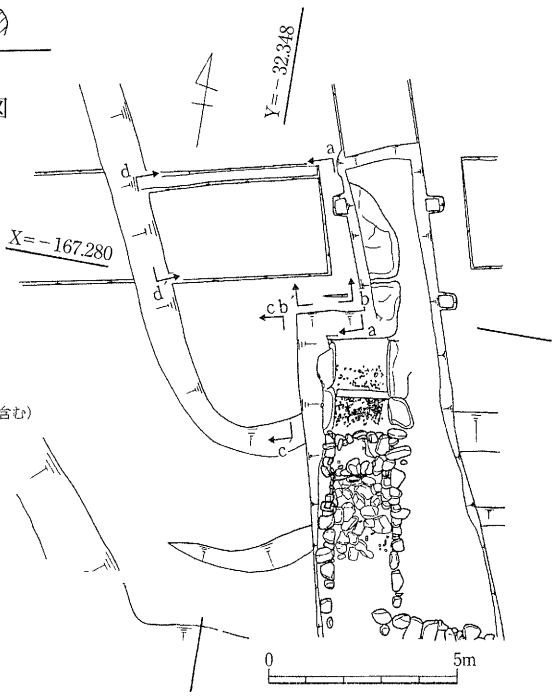
a-a'（第3層以下版築盛土）
1 緑黒色(7.5GY2/1)粘質土(耕土)
2 明黄褐色(10YR6/8)粘質土(床土)
3 黄褐色 (2.5Y5/3)砂質土
4 灰色(10Y5/1)粘質土(炭化物含む)
5 灰色(10Y5/1)粘質土(細砂)
6 灰色(10Y6/1)粘質土
7 黄褐色(10YR5/6)砂質土(炭化物を含む)
8 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
9 黄褐色(10YR5/6)砂質土(炭化物を含む)
10 灰色(10Y5/1)砂質土
11 黄褐色(10YR5/6)粘質土
12 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土
13 褐色(10YR4/4)粘質土(炭化物少量含む)
14 黄褐色(10YR5/6)粘質土
15 灰色(10Y5/1)砂質土
16 黄褐色(10YR5/8)砂質土
17 灰色(10Y5/1)粘質土
18 黄褐色(10YR5/6)粘質土(1cm程度の炭含む)
19 黄褐色(10YR5/6)粘質土
20 褐灰色(10YR4/1)粘質土ブロック(礫含む)
21 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土
22 明黄褐色(10YR6/8)粘質土ブロック
23 灰色(10Y5/1)砂質土
24 明黄褐色(2.5Y6/6)砂
25 褐色(10YR4/6)砂質土
26 オリーブ褐色(10YR4/4)砂質土
27 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(炭化物と礫含む)
28 黄褐色(10YR5/6)砂質土
29 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(炭化物含む)
30 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土
31 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(須恵器細片含む)
32 明黄褐色(10YR6/8)粘質土
33 黄褐色(10YR5/6)粘質土(炭化物少量含む)
34 灰色(10Y5/1)砂質土
35 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
36 褐色(10YR4/4)砂質土
37 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
38 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
39 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
40 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
41 灰色(10Y5/1)粘質土(炭化物と礫含む)
42 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
43 黄褐色(10YR5/8)砂質土
44 黄褐色(10YR5/8)粘質土
45 灰色(10Y5/1)粘質土
46 黄褐色(10YR5/6)砂質土(炭化物含む)
47 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土
48 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土
49 黄褐色(10YR5/6)粘質土
50 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
51 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(少し粘性あり)
52 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土
53 オリーブ灰色(10Y5/2)粘質土
54 灰色(5Y4/1)粘質土
55 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(少し粘性あり)
56 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘性強い)
57 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(礫多く含む)
58 にぶい黄褐色(2.5Y6/3)砂質土(炭化物含む)
59 オリーブ灰色(10Y5/2)粘質土(粘性強い)
60 にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質土
61 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粘性強い)
62 灰色(7.5Y5/1)粘質土
63 褐色(7.5YR4/4)粘質土
64 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
65 黄褐色(10YR7/8)砂質土
66 褐灰色(10YR4/1)粘質土
67 明黄褐色(2.5Y7/6)砂
68 浅黄色(2.5Y7/4)砂
69 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘土ブロック含む)
70 褐灰色(7.5YR4/1))砂質土(礫多く含む)
71 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
72 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土
73 褐色(7.5YR4/3)粘質土
74 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(粘性あり)
75 黄褐色(10YR5/8)粘質土
76 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
77 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
78 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘性強い)
79 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(礫多く含む)
80 にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質土(礫含む)
81 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
82 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(礫多く含む)
83 明緑灰色(7.5GY8/2)粘質土ブロック
84 明黄褐色(5YR5/8)砂質土
85 褐色(10YR4/4)粘質土
86 明黄褐色(10YR6/8)粘質土(粘性強い)
87 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(礫含む・粘性強い)
88 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘性強い)
89 黄褐色(10YR5/6)粘質土
90 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
91 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
92 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
93 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
94 黄褐色(10YR5/6)砂質土(細かい粘質土ブロックを多く含む)



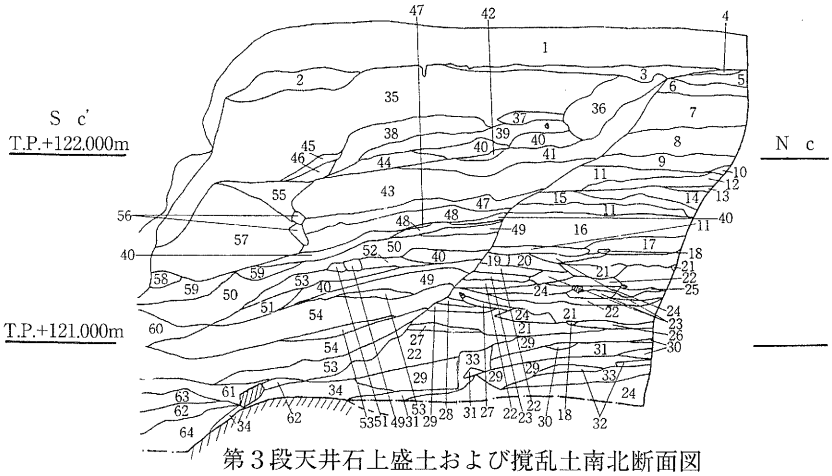
第３段天井石上盛土東西断面図

b-b'(版築盛土)
1 緑黒色(7.5GY2/1)粘質土(耕土)
2 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(床土)
3 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
4 床土(第6トレンチ西側断面8層に同じ)
5 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
6 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(汚れた感じ)
7 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
8 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(汚れた感じ)
9 黄褐色(10YR5/6)砂質土(炭化物少量含む)
10 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
11 褐色(7.5YR4/4)砂質土
12 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(炭化物と礫含む)
13 黄褐色(10YR5/6)砂質土
14 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
15 明緑灰色(7.5GY8/2)粘土ブロック
16 黄褐色(10YR5/6)砂質土
17 褐色(10YR4/4)砂質土
18 黄褐色(10YR5/6)砂質土(礫少量含む)
19 黄褐色(10YR5/6)砂質土(炭化物含む)
20 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
21 灰色(10Y5/1)砂質土
22 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(礫含む)
23 褐色(10YR4/4)砂質土(礫含む))
24 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土
25 灰色(10Y6/1)砂質土
26 黄褐色(10YR5/6)粘質土
27 灰色(10Y6/1)砂質土
28 褐灰色(7/5YR4/1)砂質土(少し粘性あり)
29 黄褐色(10YR5/6)粘質土
30 黄褐色(10YR5/6)砂質土
31 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(礫多く含む)
32 黄褐色(10YR5/6)砂質土
33 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
34 明緑灰色(7.5GY8/1)粘土ブロック)
35 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
36 灰色(5Y5/1)粘質土
37 褐灰色(10YR4/1)砂質土
38 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粘性強い)
39 褐灰色(10YR4/1)粘質土
40 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘土ブロック含む)
41 明緑灰色(10GY7/1)砂
42 明黄褐色(2.5Y7/6)砂
43 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
44 暗オリーブ色(5Y4/3)砂
45 暗オリーブ色(5Y4/3)砂質土
46 橙色(7.5YR6/8)粘質土
47 橙色(7.5YR6/8)粘質土
48 灰色(5Y5/1)粘質土(礫含む)
49 黄褐色(10YR5/6)砂質土
50 灰色(10Y4/1)粘質土(礫含む)



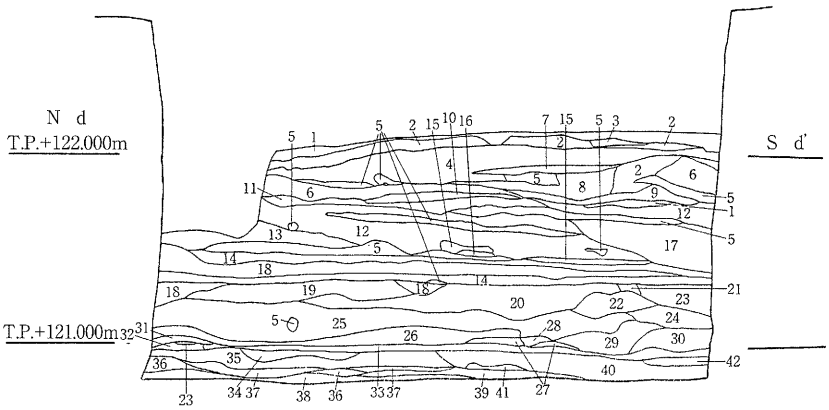


第42図　墳丘盛土断面図（１）（1/40）



第３段天井石上盛土および撹乱土南北断面図

c-c'（第4～34層版築盛土）
1 緑黒色(7.5GY2/1)粘質土(耕土)
2 黄橙色(10YR7/1)砂質土(耕土多く混じる)
3 床土(第6トレンチ西側断面4層に同じ
4 灰色(5Y6/1)砂質土(礫含む)
5 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
6 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
7 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
8 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
9 黄褐色(10YR5/6)砂質土
10 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
11 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(5mm程度の礫含む)
12 褐色(10YR4/4)砂質土(礫多く含む)
13 褐色(10YR4/4)砂質土(礫含む)
14 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
15 黄褐色(10YR5/6)砂質土
16 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土
17 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
18 明緑灰色(7.5GY8/1)粘土ブロック
19 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土
20 褐灰色(10YR4/1)粘質土
21 黄褐色(10YR5/6)粘質土(粘性強い)
22 黄褐色(10YR7/6)砂質土
23 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
24 褐灰色(10YR4/1)砂質土
25 黄褐色(10YR5/6)粘質土
26 明褐色(7/5YR5/6)粘質土(粘土ブロック含む)
27 黄褐色(10YR5/6)粘質土
28 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘性強い)
29 暗オリーブ色(5Y4/3)砂質土(礫含む)
30 橙色(7.5YR6/8)粘質土
31 暗オリーブ色(5Y4/3)砂質土
32 橙色(7.5YR6/8)粘質土(礫含む)
33 褐灰色(10YR4/1)砂質土(礫含む)
34 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
35 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(5mm以下の礫含む)
36 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
37 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土
38 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(1cm程度の礫含む)
39 黄褐色(10YR5/6)砂質土
40 灰白色(2.5Y7/1)砂質土(細礫含む)
41 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
42 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
43 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(5mm以下の礫含む)
44 黄褐色(10YR5/6)砂質土
45 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
46 黄灰色(2.5Y7/1)粘質土
47 にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質土
48 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(5mm以下の礫含む)
49 灰褐色(7.5YR5/2)粘質土
50 明褐色(7.5YR5/6)粘質土
51 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
52 灰黄色(2.5Y6/2)粘質土
53 暗褐色(2.5Y5/2)砂質土
54 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(5mm以下の礫含む)
55 黄褐色(2.5Y5/1)砂質土(旧耕土)
56 褐灰色(10YR5/1)砂質土(旧耕土)
57 黄橙色(10YR7/8)砂質土(5mm以下の礫含む)
58 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(旧耕土)
59 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(5mm以下の礫含む)
60 褐色(10YR4/4)砂質土
61 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土
62 黄褐色(10YR5/6)砂質土(礫含む)
63 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(礫含む)
64 褐色(10YR4/4)砂質土(汚れた感じ)



第３段天井石上盛土南北断面図

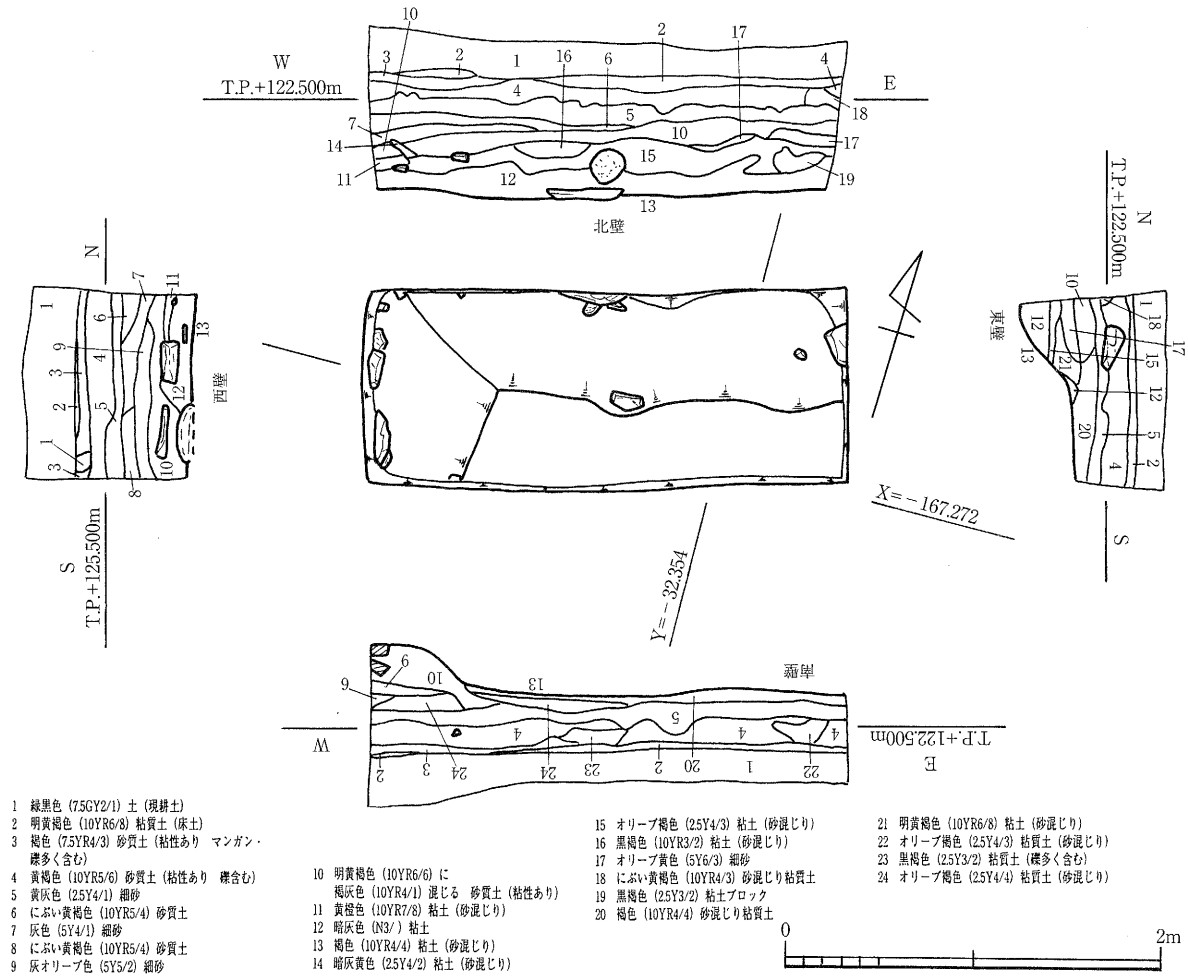
d-d'断面
1 黄褐色(10YR5/8)砂質土
2 灰黄色(2.5Y6/2)粘質土
3 褐色(10YR4/6)粘質土
4 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
5 明緑灰色(7.5GY8/2)粘土ブロック
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
7 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
8 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
9 黄褐色(10YR5/8)粘質土
10 褐色(10YR4/4)粘質土(第5層の粘土ブロック含む)
11 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(1～2cmの礫含む)
12 にぶい黄色(10YR5/4)粘質土
13 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
14 灰色(7.5Y4/1)砂質土(1cm程度の礫含む)
15 明褐色(7.5YR5/8)粘質土
16 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
17 黄褐色(10YR5/6)砂質土
(粘性あり・上面耕土混じる)
18 黄褐色(10YR5/6)粘質土
19 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粘性あり)
20 黄褐色(10YR5/6)砂質土
21 明黄褐色(10YR6/8)粘質土
22 黄褐色(10YR5/8)粘質土(礫含む)
23 明黄褐色(10YR6/6)粘質土
24 褐灰色(10YR4/1)砂質土
25 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
26 褐色(10YR4/4)砂質土
27 褐色(10YR4/6)粘質土
28 オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂質土
29 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土(礫含む)
30 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(礫含む)
31 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
32 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(礫含む)
33 オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂
(5mm程度の礫多量に含む)
34 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(礫含む)
35 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
36 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(1cm程度の礫含む)
37 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
38 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土
39 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
40 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
41 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
42 褐色(10YR4/4)粘質土(鉄分沈着)

0　2m

第43図　墳丘盛土断面図（２）（1/40）

しかしこれらの礫粒が認められるのは、特に天井石直上に限っている。このようにして締まりのある比較的硬い墳丘が構築されている。この版築状の盛土の１層（第31層）から器種は不明であるが須恵器細片が出土している。

西側では第２段の上に2.0～5.0cmの礫を含んで東から西へ流れるように堆積する褐色土の溜まり（第７トレンチ西側断面第37層）が観察された。おそらく後世、墳頂を削平して現状の



第44図　墳丘第３段北西コーナー平面図・断面図（1/40）

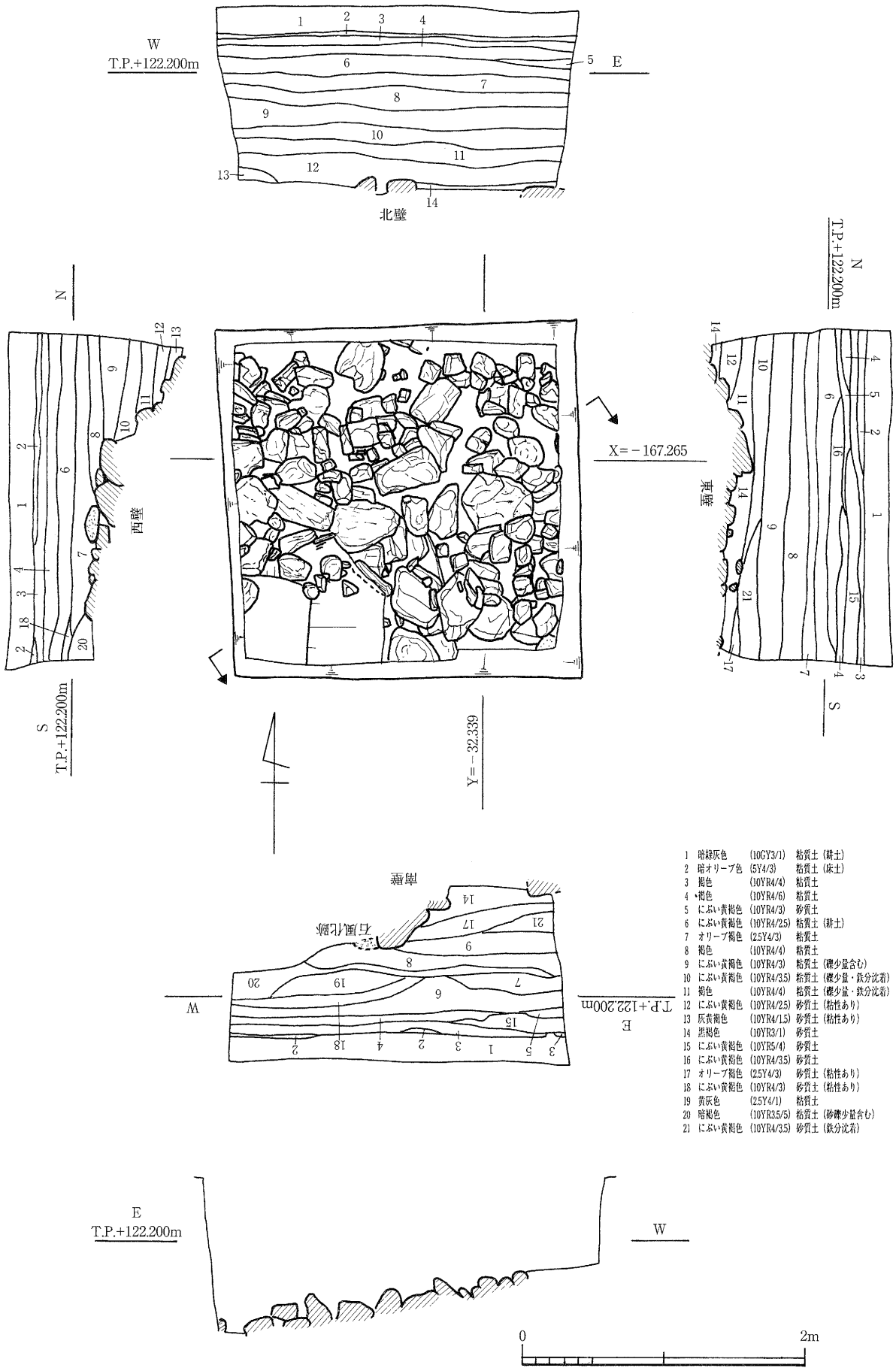
平坦な耕作面に造成する際に西側に落とされたものであろう。したがってこの褐色土とそれに混じる礫はもともと墳頂に施されていたものと想像できる。

墳丘第１段の基盤土は第２～３段のような版築状ではなく、砂質土を主体とする盛土である。後述するように、奥室に流入した撹乱土を除いて露出した奥壁下面砂質土（第６トレンチ第238層）と同じ土質が、南東トレンチｂ－ｂ'断面（第16層）で確認されている。これからすると第１段の盛土は石室を構築する基盤土であると考えられる。ただ違いは奥室のそれがより締まった硬い感触であった。

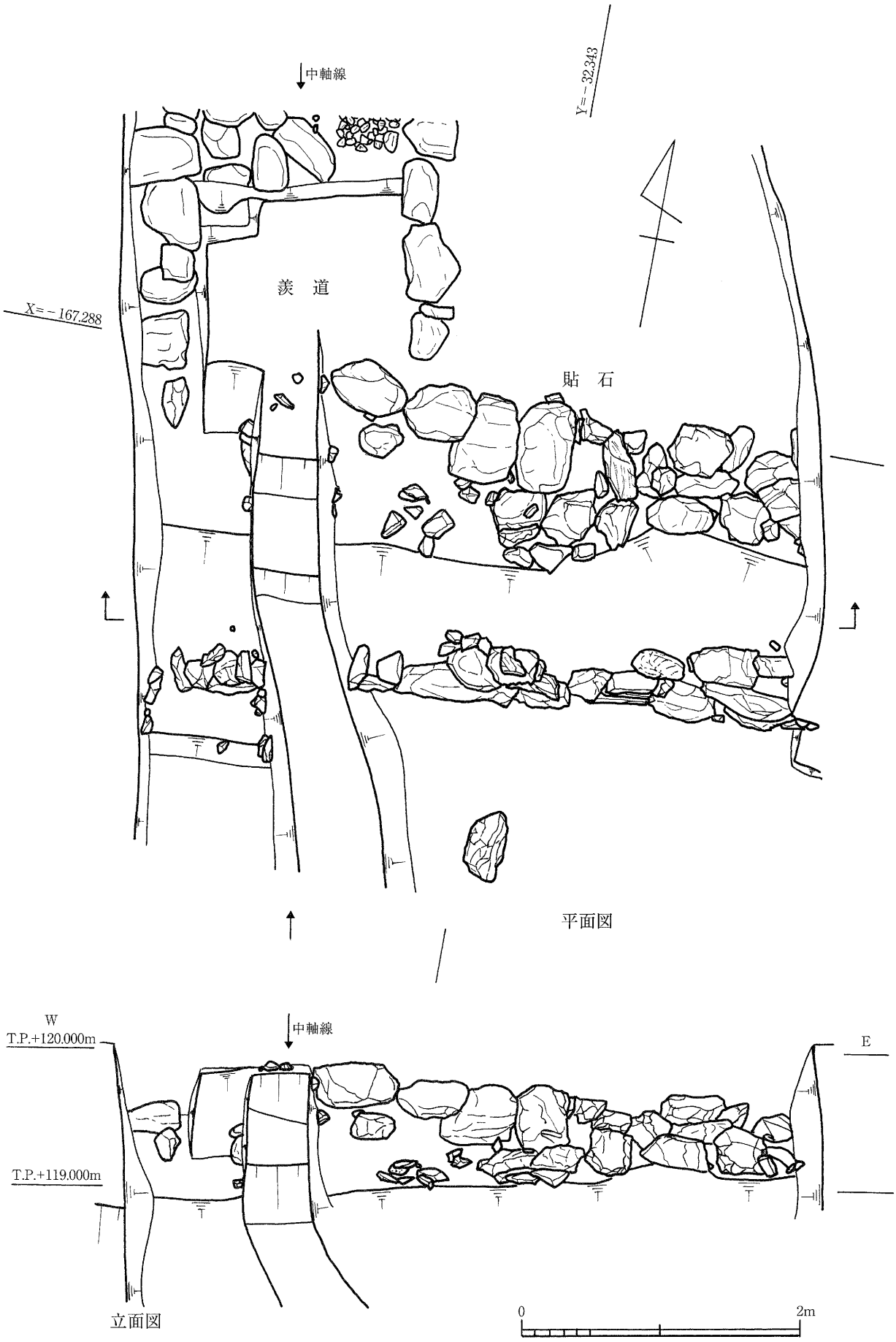
墳丘第１段盛土のデータとしては、平成11年度の試掘調査の際、ちょうど南側第１段テラスに当たる個所に設定した試掘坑№63の断面観察の結果がある。このときは現地表面から1.5mまで掘り下げ、耕土下に褐色土を基調とする６層を認めた。現地表面から0.5～0.9mで北から南に傾斜する３層の堆積土の内、上位２層には淡灰色の微砂が縞状に混じり、それらの下は灰色細砂で、さらにその下が黄褐色の砂質土であった。灰色細砂の上面（T.P.118.8m）は平坦面をなし、石室奥壁際の下面にみられた微砂（第238層）や南東トレンチｂ－ｂ'（第16層）であった。

（3）貼石（第45～51図）

貼石は、墳丘西側第３段、東側第２段の撹乱された部分を除いて各段の斜面に認められた。

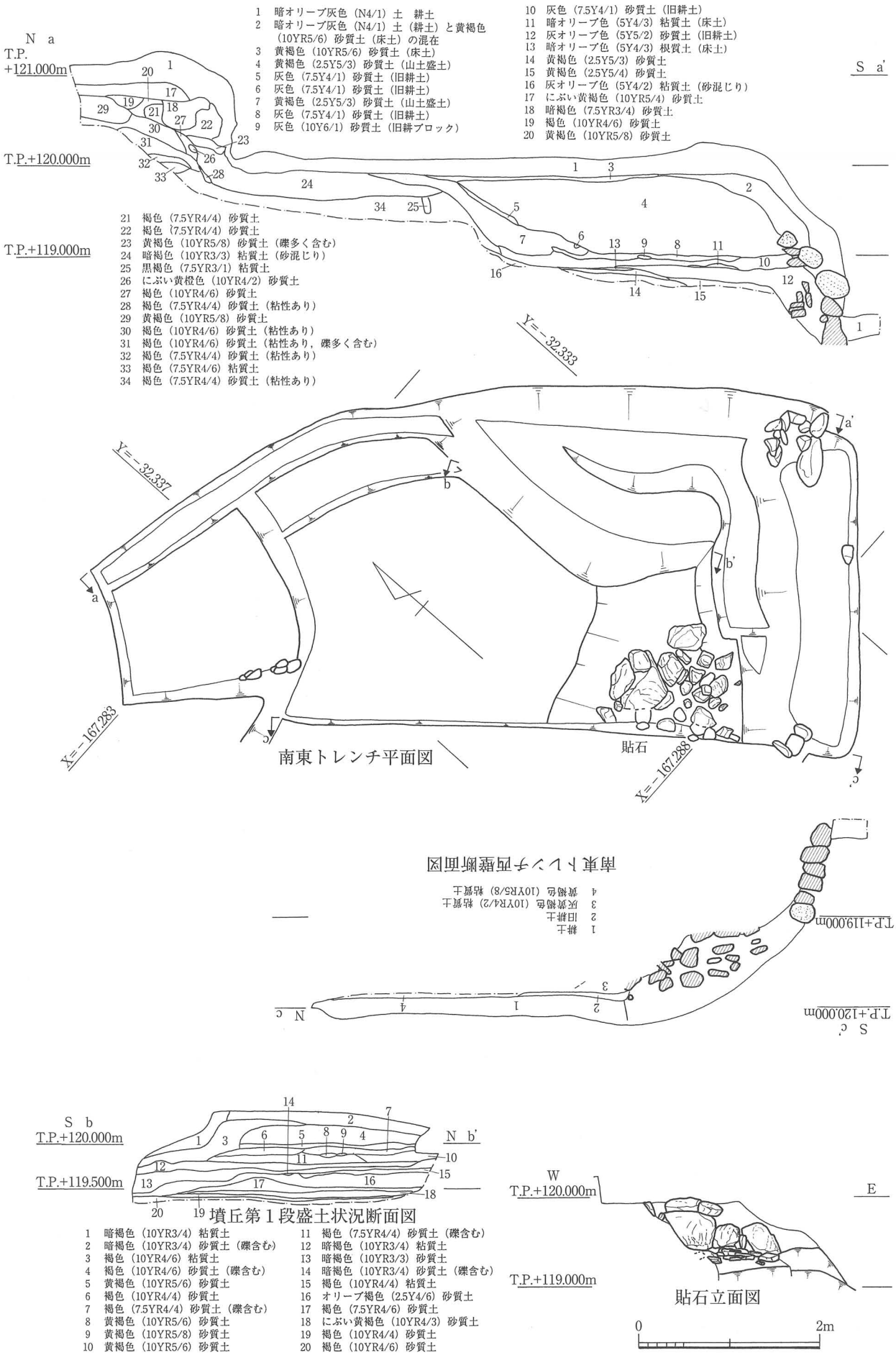


第45図　墳丘第３段北東コーナー平面図・断面図（1/40）

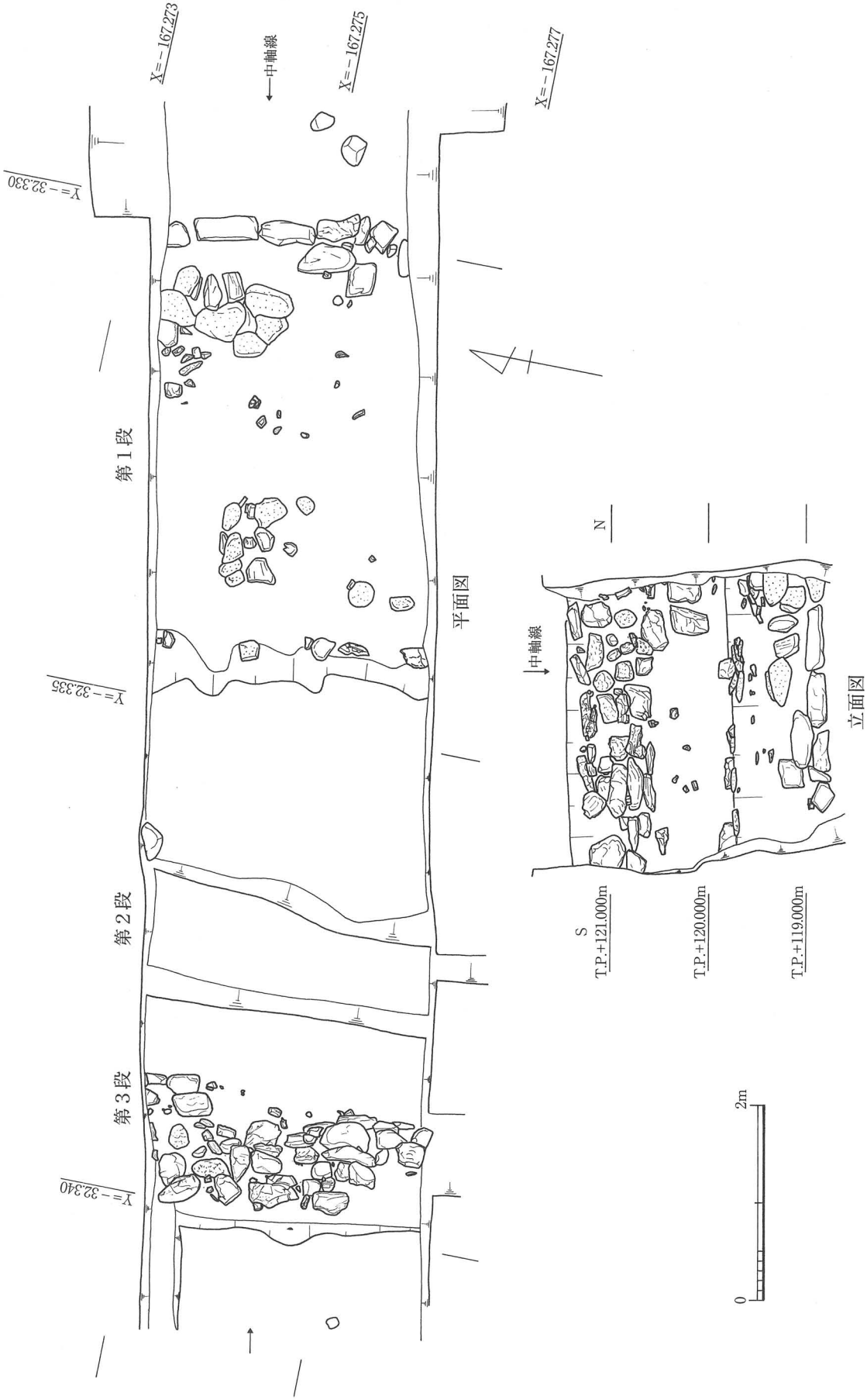


第46図　墳丘南側前面貼石平面図・立面図（1/40）

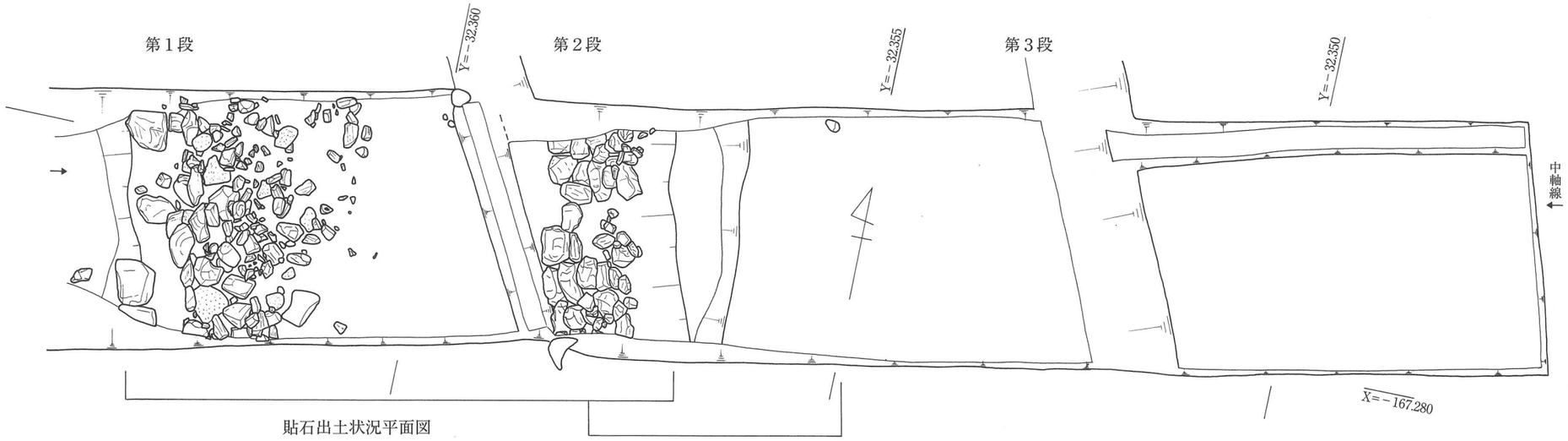
第47図　墳丘第１段西側貼石出土状況平面図・断面図（1/40）



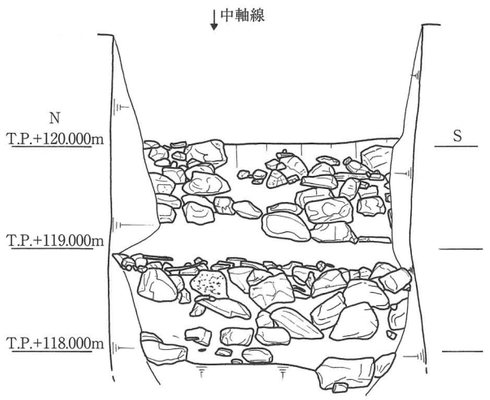
第48図　南東トレンチ貼石出土状況平面図・断面図（1/60）



第49図　第７トレンチ（墳丘）東側貼石出土状況平面図・断面図（1/60）



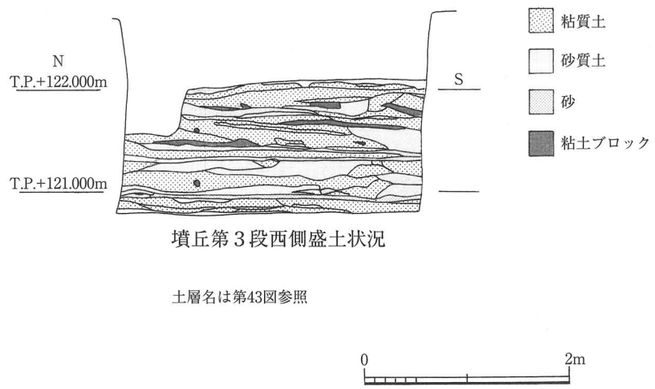
貼石出土状況平面図



貼石出土状況立面図

第37層礫出土状況平面図

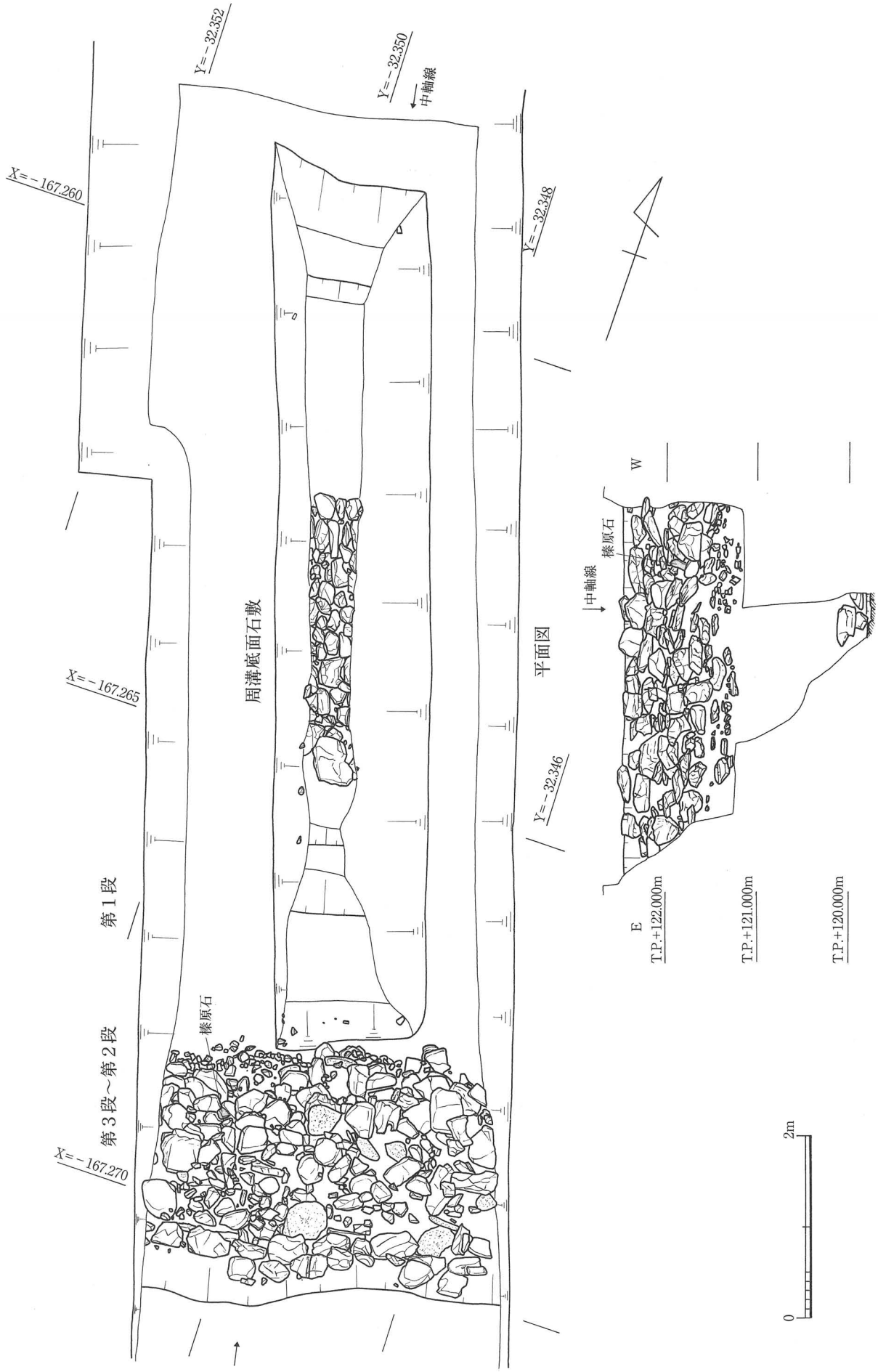
第37層礫出土状況断面図



墳丘第3段西側盛土状況

土層名は第43図参照

第50図　第7トレンチ（墳丘）西側貼石出土状況平面図・断面図（1/60）



第51図　第6トレンチ（墳丘）北側貼石・石敷出土状況平面図・断面図（1/60）

墳丘第１段南側では、段の肩部を中心に最大 40.0 × 60.0㎝・厚さ 10.0㎝の板石が斜面に貼り付けられ、それらの間に小石が詰められている。同じような貼石は墳丘第１段南東コーナー（南東トレンチ）でも一部確認できた。東側では第１段裾部に長さ 50.0 ～ 70.0㎝の同様の板石が横置きに貼り付けられていた。これらの貼石は墳丘第３段で残りがよく、それは東辺でよく観察される（第６トレンチ東側）。この東辺が北辺と接する部分に設定した北東トレンチでは、若干の崩れはみられたが、石積みの隅角の稜線を辿ることができた。北辺では、墳丘第３段の立ち上がりは高さ 0.2 m残り、30.0 ～ 40.0㎝の板状の厚みのある石を傾斜面に貼り付けている。ここではテラス面にも、大きいもので 30.0 ～ 40.0㎝、小さいものでは 10.0㎝内外の石を葺いている。貼石というより傾斜面に沿って石を積む状況である。それより北に下って、第２段傾斜面肩部になると、今度は 10.0 ～ 15.0㎝の礫が敷き詰められ、第１段のテラスの石積みを下から支えるような状況である。第１段裾近くでは、40.0 × 50.0㎝、厚さ 10.0 ～ 15.0㎝の板状の石が溝底に横倒しになっており、裾部にかかる断面ではこの石が本来直立していたことを示す抜けの痕跡があり（第６トレンチ北側断面第 108 層）、それより南側にほぼ水平な堆積層（第 107 層）が認められた。したがっておそらく横倒しの板状の石は、盛土の崩れを防ぐため第１段裾に立てられていたのだろう。

墳丘の版築状盛土の傾斜面に施されたこれらの貼石は、直接斜面に貼り付けられるのではなく暗褐色の粘質土を裏込めのように塗りつけてから貼っている。既に述べた第７トレンチ西側断面第 37 層の褐色土も墳頂で同じように施された土であったろう。

貼石として使用されている石は板状の川原石が主体であるが、東側墳丘第３段と北側第２段テラス面では榛原石の板石がそれぞれ１枚用いられているのが確認された。

３．外部施設（第 52 ～ 54 図）

外部施設としては墳丘裾を取り巻く周溝が墳丘の四周を巡る。南側では墳丘裾に取り付く平坦部と前面テラス状施設があり、周溝はその間を通る。

（1）周溝

周溝の幅は北側で 8.0 m、南側で 5.5 m、西側で 8.5 m、東側では後世の出水により損なわれて明確ではないが、ほぼ現里道付近までを考え 9.5 m程度と見られる。溝底面は北側（第６トレンチ北側）で T.P.119.8 mを測り、これは墳丘第１段の上面テラスと同一の高さである。東側（第７トレンチ東側）では T.P.119.0 mを測り、西側では第７トレンチ西側で T.P.117.4 m、第 24 トレンチでは T.P.117.0 m、第 23 トレンチでは T.P.116.9 m、南側では T.P.117.0 mで、急峻な背後の尾根から深く断ち切られた北側を除けば、概ね T.P.117.0 m前後に揃えられている。

溝底面には暗い色合いの粘質土や粘土または砂質土が堆積している。第７トレンチ東側断面図の第 58 層、同トレンチ西側断面図の第 64・65 層、第６トレンチ北側断面図の第 103 層、同トレンチ南側の第 296 層、第 23 トレンチ断面図第 16・18 層、第 24 トレンチの断面図第 6・8 層、南側の第６トレンチ第 296 層である。

以上の堆積土からわずかながら遺物が出土した。西側の周溝にあたる第24トレンチの第8層で須恵器杯身・蓋・壷（第67図38～43）、南側の周溝にあたる第23トレンチの第16層では漆塗籠棺の細片2点が出土している。同じく南側周溝東半部にあたる第8トレンチ東側の第43層では須恵器の破片（第67図20・22・23）がまとまって出土した（第55図）。

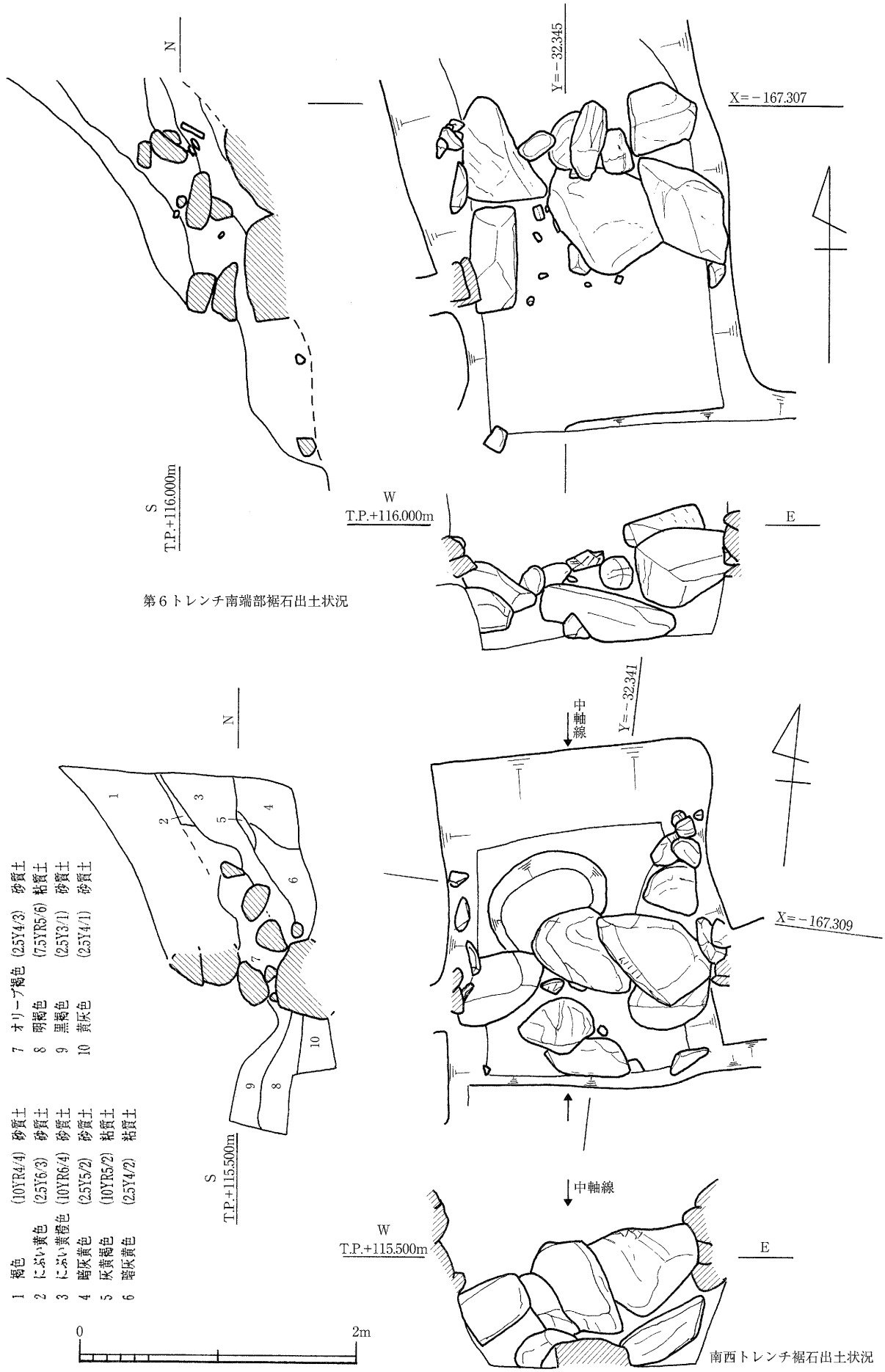
これらの土層より上位の堆積土は中世耕作土とみられ、どの周溝からも土師器・須恵器に加えて瓦器・土師器皿などの破片が混入する。特に墳丘北側にあたる第6トレンチ北側では、現地表面より深さ3.0mにおよぶ周溝を埋めて耕作土として利用していった状況が明らかである。堆積土は土質から見て大きく砂質土・微砂・細砂・粗砂と粘質土・粘土に分けられる。周溝底面の古墳築造に伴う敷石上に堆積した砂質土（第103層）以後、砂層が覆い、その後また粘質土・粘土が堆積する。これを粘土質と砂質の組み合わせで見ると、T.P.119.8mからT.P.122.3mまで大きく4回程度の似たような堆積土の組み合わせ（Ⅰ～Ⅳ）が観察される。そして、ⅠとⅡの間に北側（山手）から小規模な流土があり、同じことはⅢとⅣの間にも認められる。Ⅳより上位には現代の耕作土の基盤となる粘質土とそれが床土化した土が堆積する。遺物はⅣの土層群で、瓦器椀、土師器小皿、土師質土釜など中世土器に加えて若干の須恵器片（甕体部）が出土している。これによってⅣの土層群はすでに中世の耕作土として利用されていたようである。また周溝が完全に埋没して、現在見る平坦面となるのは中世以後のことと推定される。

（2）平坦面と前面テラス状施設　（第53図）

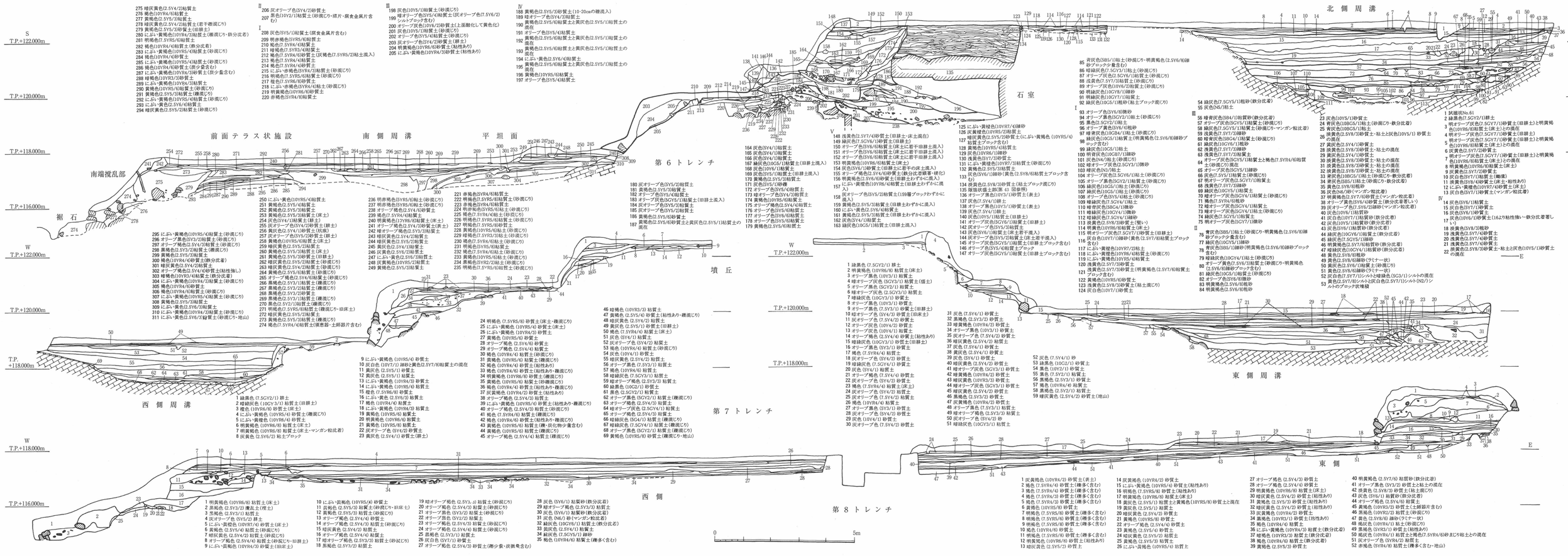
墳丘第1段裾部の下T.P.117.6m付近で確認された北から南に傾斜する地山面（第311層上面）には、一連の斜面堆積層（第300～307層）がある。このような堆積は、次節の第3調査区の棚田造成の断面観察の際に認められた流土の斜面堆積と同様な状況であり、平坦面はこれらの堆積層の上面（第302層上面）を利用したと考えられる。一方、前面テラス状施設は周溝を介して、第6トレンチ南端断面にみられるように、一連の粘質土や砂質土（第282～295層）をほぼ水平に積み上げて、墳丘裾部の高さまで嵩上げしている。またこの嵩上げの状況は第3調査区東壁南北断面でも観察される。

（3）前面テラス状施設裾石列（第52・53図）

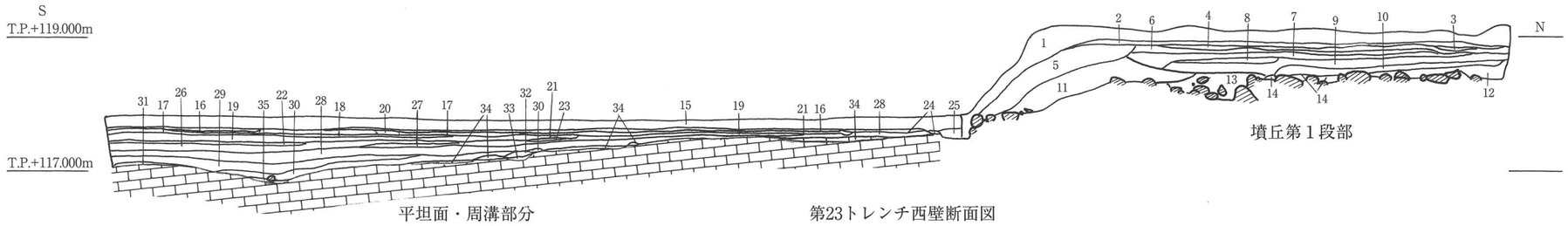
テラス状施設の構築土とその南側裾の大石の列石までの間は、後世の開墾によって削られ（第6トレンチ南端部断面）、本来のテラス幅の南北3.0mほどの区間が断ち切られた状態となっている。テラス盛土上面と列石の下場高さ（T.P.115.2m）とでは、比高差は2.2mある。そこでは地山面に0.70～1.0m大の大石が据えられていたが、これはテラス法面を擁護し、また古墳の外域を画する南辺の石列とも考えられる。この石列の位置や比高、それから想定される法面を考慮すると、テラスの南北幅は5.0m程度であったとみられる。石室中軸線と裾部が交わる個所に設定した南西トレンチでも、やはり同様の裾石の存在が確かめられている。これら検出された裾石の東西ラインを東に辿ると、現在の石垣の基礎石がコンクリートで固めて据えられていると同じような規模の石に行き当たる。これらの石も本来はこの古墳築造に伴って施工された石の

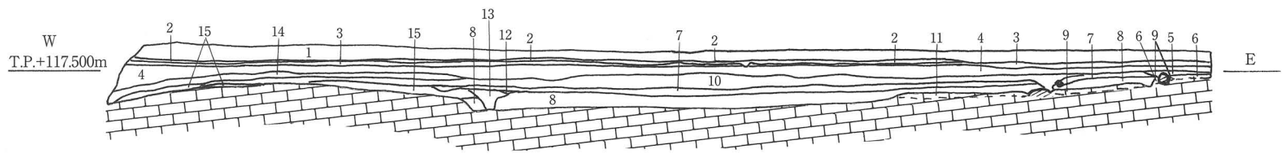


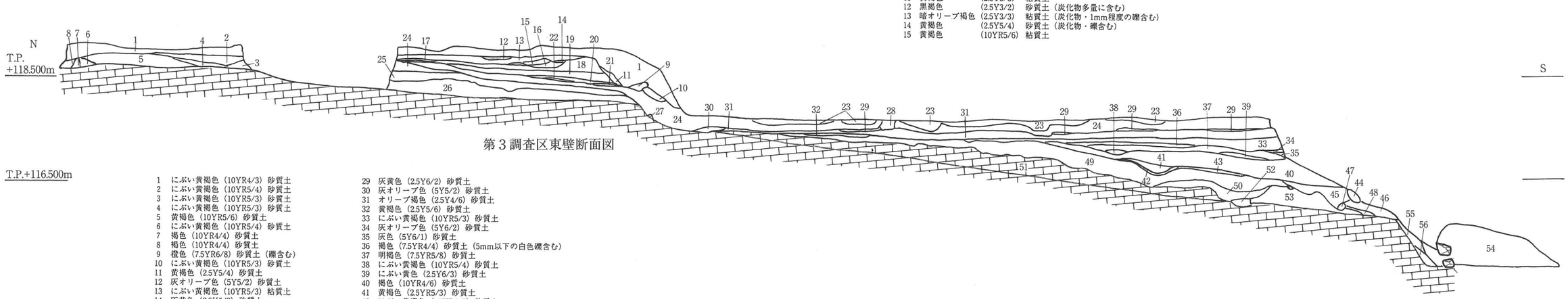
第52図　前面テラス状施設下裾石出土状況平面図・断面図（1/40）



第53図　第８トレンチ石列および遺物出土状況平面図・断面図（1/80）





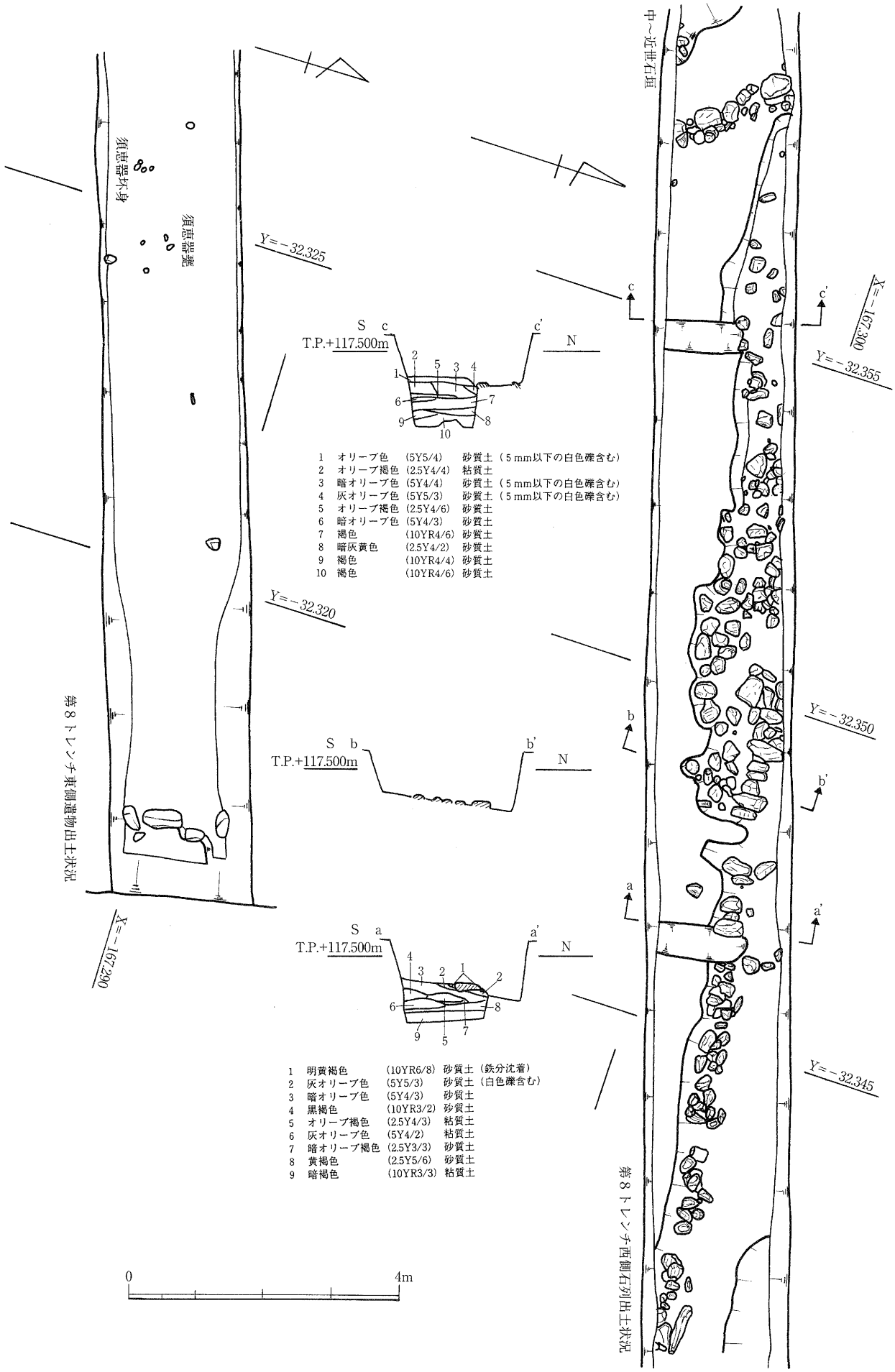


1 緑黒色 (7.5GY6/1) 粘質土（現耕土）
2 黒色 (10Y2/1) 砂質土
3 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂質土
4 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土
5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土（礫多く含む）
6 褐色 (10YR4/4) 砂質土
7 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土
8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
9 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
10 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
11 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土
12 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土（粘性あり）
13 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土（粘性あり）
14 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土（粘性あり）
15 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土（耕土）
16 明黄褐色 (10YR6/8) 砂質土（床土）
17 にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質土（床土）
18 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土（粘性あり）
19 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土（砂混じり）
20 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土（鉄分少量沈着）
21 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土（鉄分沈着）
22 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土（砂混じり）
23 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土
24 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土
25 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
26 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土（炭少量・礫含む）
27 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土（やや粘性・炭（多）・礫含む）
28 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土（鉄分わずかに沈着・礫含む）
29 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土（やや粘性あり・礫含む）
30 オリーブ黒色 (5Y2/2) 砂質土（漆塗籠植細片出土）
31 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土（粘性あり）
32 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土（炭含む）
33 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土
34 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘質土
35 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土（礫含む）

1 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土（現耕土）
2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土（耕土）
3 明黄褐色 (10YR6/8) 砂質土（床土）
4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土（炭化物少量・礫含む）
5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土（礫含む）
6 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土（礫含む）
7 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土
8 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘質土（礫含む）
9 褐色 (10YR4/4) 粘質土（礫含む）
10 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土（炭化物・礫含む）
11 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土
12 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土（炭化物多量に含む）
13 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土（炭化物・1mm程度の礫含む）
14 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土（炭化物・礫含む）
15 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土

1 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
2 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
3 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
4 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
5 黄褐色（10YR5/6）砂質土
6 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
7 褐色（10YR4/4）砂質土
8 褐色（10YR4/4）砂質土
9 橙色（7.5YR6/8）砂質土（礫含む）
10 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
11 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
12 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土
13 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
14 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
15 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土
16 にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土
17 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
18 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
19 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
20 灰黄褐色（10YR5/2）砂質土
21 黄褐色（10YR5/6）砂質土
22 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
23 にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土
24 黄灰色（2.5Y5/1）砂質土
25 褐色（10YR4/4）粘質土
26 暗褐色（10YR3/4）粘質土
27 オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質土（粘性あり）
28 にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土
29 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
30 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土
31 オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土
32 黄褐色（2.5Y5/6）砂質土
33 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
34 灰オリーブ色（5Y6/2）砂質土
35 灰色（5Y6/1）砂質土
36 褐色（7.5YR4/4）砂質土（5mm以下の白色礫含む）
37 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
38 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
39 にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土
40 褐色（10YR4/6）砂質土
41 黄褐色（2.5YR5/3）砂質土
42 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
43 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
44 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土
45 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
46 黄褐色（2.5Y5/3）砂質土
47 オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質土
48 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
49 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（3cm以下の白色礫含む）
50 褐色（10YR4/6）砂質土（5mm以下の白色礫含む）
51 褐色（7.5YR4/4）砂質土
52 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
53 褐色（10YR4/4）砂質土（礫含む）
54 黒褐色（2.5Y3/2）粘質土
55 オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土（やや粘性あり）
56 黄褐色（10YR5/6）粘質土

第54図　第23・24トレンチおよび第３調査区東壁断面図（1/80）



第55図　第６～第８トレンチ断面図（1/80）

名残ではないかと思われる。

4．埋葬施設（第56～59図）

（1）石室

切石積横穴式石室で、横口式石槨を奥室とする形状である。石室は、奥壁が墳丘の中心に置かれ、全体としては南に張り出す。T.P.119.0 mあたりに側壁・奥壁に使用されている石の下面がくるので、段築第1段の上面から1.0 m下がった位置に石室が据えられ、墳丘第2段から3段によってこの石室が覆われる。石室は奥室、前室、羨道からなり、全長は約12.0 mである。石室の中軸線と磁北との振れは、N－2°50′－Wであり、ほぼ真南に開口する。計測値は細部で異なるが、奥室は右側壁で長さ2.47 m、左側壁で長さ2.46 m、幅は天井石では1.09～1.12 m、中程の垂直壁面で1.10～1.13 m、検出最下面で1.20～1.22 mである。前室は右側壁で長さ2.80 m、左側壁で2.90 m、幅は天井石で1.36 m、中程垂直壁面では1.41 m、検出最下面では1.46 mである。奥室・前室ともに撹乱が激しいため実際の床面は損なわれて、明確な高さは押さえがたい。この前室の南に凝灰岩仕切石によって前室と画される南北長0.74～0.94 mの礫敷部分がある。礫敷部分の幅は前室幅のそれとほぼ同じく1.46～1.50 mを測る。

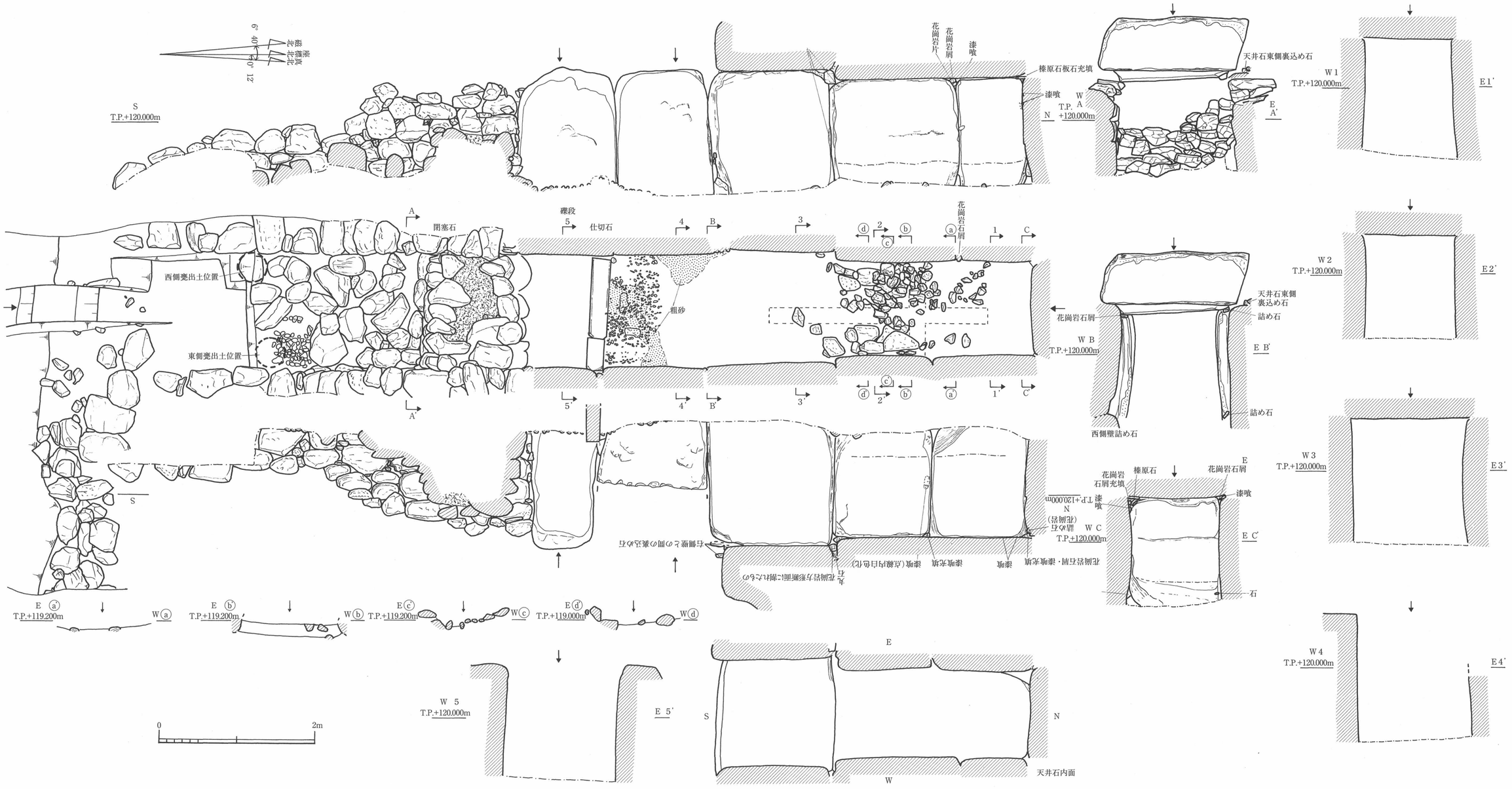
仕切石を前室と羨道の区切りとみるか、仕切石を前室の中のなんらかの区切りとして、側壁の切石第1石とそれより南の川原石積み側壁との境を前室と羨道との境とみるか、であるが、便宜的にここでは後者の捉え方で記述していきたい。

（2）壁面

奥室、前室すべて花崗岩切石を使用している。奥壁は1枚で高さ1.32～1.40 m、幅1.08～1.14 m。奥室右側壁は第1石が高さ1.32～1.36 m、幅1.62～1.64 mと第2石が高さ1.39～1.40 m、幅0.82～0.88 m、左側壁は第1石が高さ1.30～1.38 m、幅1.24～1.26 mと第2石が高さ1.44 m、幅1.23 mで、縦長のものと横長のものを使用し、左右両側で寸法の違う2枚を組み合わせ、ほぼ垂直に立てて構築している。奥室の左右第1石目の小口上部には扉受けの抉りがある。下部は石材の幅が狭く下窄まりになり、扉受けの抉り込みが認められるのは、天井石から下0.9 mのところまでである。

石室入り口の右側壁の第1石は高さ1.55 m、幅1.20～1.27 m、第2石は高さ1.62 m、幅1.20～1.23 m、第3石は高さ1.55 m、幅1.43～1.54 mである。前室左側壁第1石は高さ1.52 m、幅0.78～0.85 m、第2石は上半部が欠失し、残存高は0.85 m、幅1.41 mを測る。左側壁の第3石は高さ1.62 m、幅1.58 mである。

上半部欠失の第2石の切断面には浅い半円形の鑿痕が9カ所に残る。径は5.0～10.0㎝、長さが5.0～6.0㎝で、鑿で石材を取るために水平に割り取っている。矢跡の大きさからみて江戸～明治くらいの仕業と考えられる。この側壁はその他の側壁に比べて表面の風化も少なく硬質であること、天井石を外し閉塞石の一部を外して持ち出しやすいこと、下半部が残ったのは既にその高さまで石室内に流入土が溜まって埋没していたことなどから再利用のためこのように割取



第56図　石室～羨道部平面図・立面図（1/40）

られたと考えられる。左右両側壁の第１石は、ともに縦長の石材で、ほかの２石に比べてやや丈高である。

側壁・奥壁・天井石の三者が組み合う部分にも特徴がみられる。天井石を載せる際、側壁上面の凹凸を整えるために鋭利な刃物によって削った調整痕が、ほとんどの側壁上面にも認められ、削り屑の細粒が側壁と天井石の間に詰まっていた。それが間隙を塞ぎ、結果として天井石の安定が保たれている。側石はどれも側辺が丸みをもって窄まる座布団状であるので、側辺と側辺に間隙が生じている。奥壁と側壁と天井石の合う隅角は特に空隙が大きい。そのような間隙には、石が充填されている。前室右側壁の第２石と第３石の下部空隙には１辺20.0㎝の方形の凝灰岩片、第３石と奥室第１石の上部の、前室と奥室の天井石の境の空隙には15.0㎝の花崗岩片、奥室第１石と第２石の上部の空隙には厚さ5.0㎝の花崗岩片、第２石と奥壁の上部空隙には厚さ2.5㎝の板石（榛原石）片が詰められている。また前室左側壁では第１石と第２石の下部空隙に長さ25.0㎝、幅10.0㎝以上の川原礫が詰められていた。第３石上部では割り取られた第２石との空隙に詰め、しかも裏込めとした長さ20.0㎝ほどの川原石が数点認められた。第３石と奥室第１石の上部の、前室と奥室の天井石の境の空隙には１辺10.0㎝の断面方形の花崗岩割石、長さ10.0～20.0㎝の川原礫数点、第２石と奥壁との上部空隙には10.0㎝大の花崗岩片の充填が認められた。これらの石とともに多くの場合やはり花崗岩の石屑が多量に詰められている。

（3）漆喰

詰め石とともに見られたのは、漆喰である。右側壁では奥室の第１石と第２石と天井石の間に漆喰の充填、第２石と奥壁の接合部上方で20.0㎝の範囲にわたって斑状の漆喰の痕跡が認められた。また、奥室左側壁では第１石と第２石と天井石との空隙に20.0㎝にわたって漆喰の詰め込みが、またその下の第２石中程の側片付近にも30.0㎝範囲にわたって斑状の漆喰の痕跡が認められた。同様に第３石の奥壁寄りで天井石との空隙には2.0～5.0㎝の漆喰の塊が残り、また奥壁との上部空隙は花崗岩屑と漆喰を詰め込んで塞いでいた。詰め石は前室と奥室の壁面の隙間のあるところには上部下部を問わず行われているが、漆喰が使用されるのは奥室に限られ、天井石との空隙に塗りつけて塊となっているばかりでなく、下方では天井より0.8～0.9ｍ下がった側壁と側壁の接合部を中心に塗布され、それより下には認められない。このことは側壁が天井より1.1～1.2ｍでやや下窄みになり、平坦な内法面ではなくなっていることと合致する。これは撹乱以前の本来の床面高さを捉える根拠のひとつでもあろう。

（4）側壁・奥壁の石

石室の側壁・奥壁に用いられた石は表面が風化のため剥落する部分が目立つ。特に端部、隅角の剥落は激しい。また土に埋まった側壁下部の表面は土を取り除くだけでも石の表面が土に付着して剥がれる状態であった。したがって、顕著な加工痕を認めがたいが、図中に示した奥室の側壁・奥壁の下方の稜線以下は粗い叩きではないかと思われる。前室左側壁第２石の上半部の割取られた石には幅10.0㎝単位の縦位の削り痕がある。この石の場合、既に述べたようにほかに

比べて硬質であり、その分加工痕もよく留められているのであろうか。それほどではないが、前室右側壁第２石にも同様の加工の痕跡が上半部にかすかに認められる。右側壁第１石では中央に抉られたような陥没があり、これも加工の際の強い叩きの痕かも知れない。奥壁表面には横位の筋目を挟んで中央は腹を張るように軽く盛り上がり、下方は天井より 1.07m のところで極端に厚みを減じる。この石の場合はほとんど自然石をそのまま利用している。

以上、前後両石室を構成する石は、天井石が１石抜き取られて２石、側壁各５石、奥壁１石であった。扉石は扉受けがあるので、仮に石であれば、盗掘の際破壊されたと思われる。石室内に溜まった盗掘撹乱土に紛れて面をなす凝灰岩の破片や石粒が出土しているので、あるいはそれらが扉石の材であった可能性も否定できない。

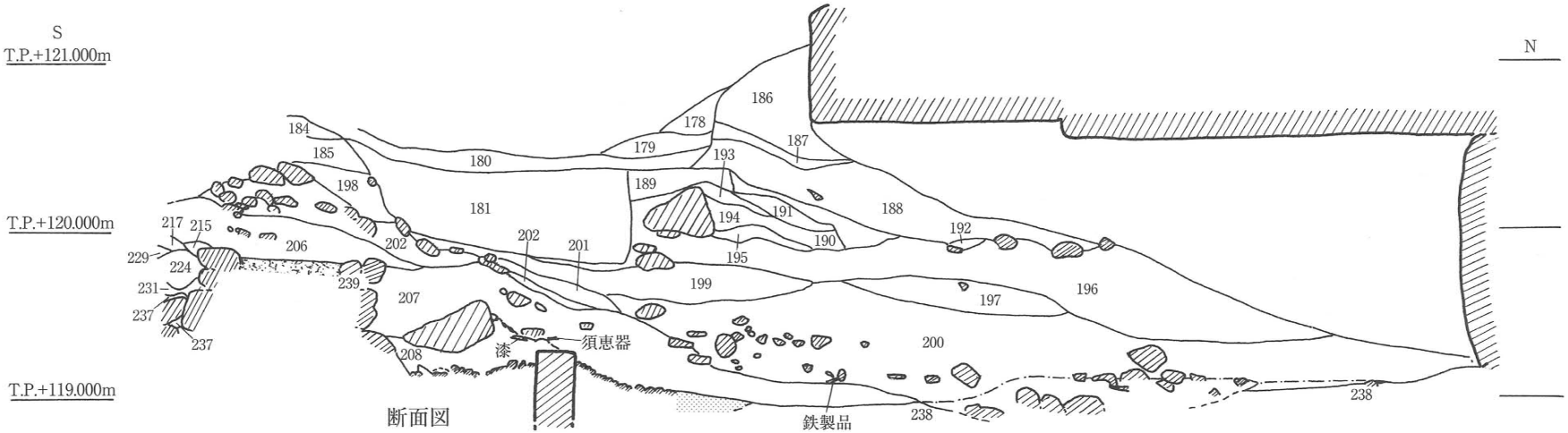
（５）床石

奥室床面に石が敷き詰められていたかどうか、これも敷かれた原位置を保つ石は全く認められなかったから事実としては指摘できない。天井より 1.4m 下った面で平面の検出を終えることとしたが、前室から奥室にかけて最終的に幅 0.2 m、長さ 2.8 mの小トレンチを掘り下げ、撹乱の及んでいる深さを確かめた。しかし奥室で最終確認面より深さ 0.15 ～ 0.2 mに達してもまだ瓦器片を含む混礫土であり、床石があったにしても、少なくとも中世に相当掘り返されて取り去られたらしい。最終的に掘り下げた面ではもはや奥室側壁の石の下縁が一部露呈したことからすると、仮に床石があるとしても床石の上に側壁が載るのではなく、両側壁で挟む形であったろう。

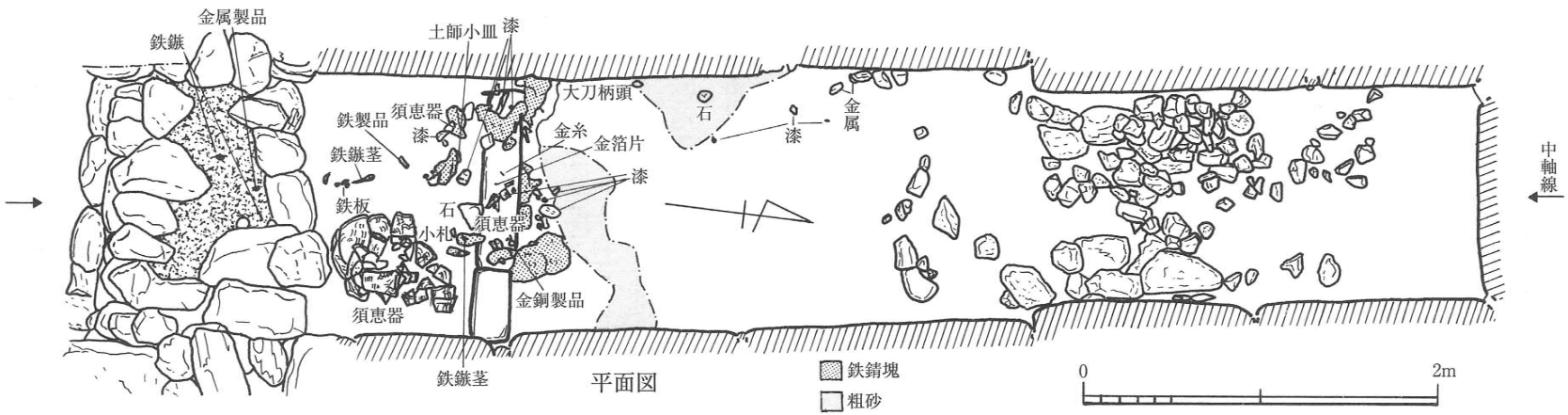
奥室から前室にかけて散乱した 5.0 ～ 45.0㎝の石は、中世の撹乱で当初の位置が乱されているとはいえ、本来は床下の施設に用いられたと考えることもできよう。また、石室内に堆積したⅡ層〔(10)「石室内堆積土」参照〕や、既に試掘時点で確認した盗掘坑の埋め戻し土から流紋岩の板石片が出土している。その中には端面や平面を加工した形跡のある破片もあり、隅角をつけている破片もあるので、奥室の敷石や側壁と床石、あるいは段差部分の詰め石などに用いられた可能性は高い。

（６）天井石

天井石は２石を残すのみであるが、奥室１石、前室は２石の計３石（前室第１石が左右両側壁ともやや高く、この部分だけ庇のような天井石を考えると４石）であったと思われる。残った２枚の天井石の内法面はきわめて平滑である。前室の天井石は長さ 1.62 m、幅 1.36 m以上、検出した最大の厚さは 0.8 m。前端面は垂直に立ち上がり、非常に平坦に仕上げられ、内法面との角度は直角で、稜角は丸みをつけている。端面の高さは、0.45 ～ 0.53 mである。正面から見た場合、内法面はやや西に傾斜する。奥室の天井石は長さ 2.47 m以上で、小口は前室天井石より 0.1 m低くしつらえ、その分だけ垂直で平坦な端面をなす。両天井石の中央の間隙から見た限りにおいては、奥室天井石は内端部より北上がりの傾斜面となり、そこに前室天井石の逆傾斜面が載るが、左側壁上では両者の間に、試掘調査の段階で確認していた幅 3.0㎝ほどの隙間が認められた。



178　オリーブ色（5Y5/6）粘質土
179　黄褐色（2.5Y5/6）粘質土
180　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
181　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
184　灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土
185　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
186　黄褐色（2.5Y5/6）土
187　黄褐色（2.5Y5/6）と黄灰色（2.5Y5/1）土の混在（若干の粘質有り）
188　黄褐色（2.5Y5/3）土（10～20cmの石混じる）
189　暗オリーブ色（5Y4/3）土
190　黄褐色（2.5Y5/6）土と黄灰色（2.5Y5/1）土の混在（若干の粘質有り）
191　オリーブ色（5Y5/4）土
192　黄褐色（2.5Y5/6）土と黄灰色（2.5Y5/1）土の混在（若干の粘質有り）
193　黄褐色（2.5Y5/6）土と黄灰色（2.5Y5/1）土の混在（若干の粘質有り）
194　にぶい黄色（2.5Y6/4）土
195　黄褐色（2.5Y5/6）土と黄灰色（2.5Y5/1）土の混在（若干の粘質有り）
196　黄褐色（10YR5/6）土
197　オリーブ色（5Y5/4）土
198　灰色（10Y5/1）粘質土（砂混じり）
199　暗オリーブ色（5Y4/4）（若干の粘質有り）（灰オリーブ色　（7.5YR6/2）シルトブロック含む）
200　オリーブ灰色（10Y6/2）砂質土（上面酸化して黄色化）
201　灰色（10Y5/1）粘質土（砂混じり）
202　オリーブ色（5Y5/4）粘質土（砂混じり）
206　灰オリーブ色（5Y4/2）砂質土
207　黒色（10Y2/1）粘質土（砂混じり）（漆片・金属製品の破片含む）
208　灰色（5Y5/1）粘質土（腐蝕鉄片含む）
215　にぶい赤褐色（5YR4/3）粘質土（砂混じり）
217　橙色（7.5YR6/8）砂質土
224　明赤褐色（5YR5/6）粘土（砂混じり）
229　暗褐色（7.5YR3/3）粘土（砂混じり）
231　明赤褐色（5YR5/8）粘質土
237　明赤褐色（5YR5/6）粘土（砂混じり）
238　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土
239　褐色（7.5YR4/4）粘質土



第57図　石室内堆積土第207・208層遺物出土状況平面図・断面図（1/40）

(7) 仕切石

前室の南側に設置された凝灰岩板石2石の側辺を上にして、前室を東西に横断する形で立て並べた石である。東側のものは幅0.20 m、長さ0.40 m、西側のものは幅0.20～0.22 m、長さ1.02 mである。高さは遺構損壊のおそれがあったため、0.42 mまでしか確認できなかった。したがって少なくとも0.42 m以上の立ち上がりがあると思われる。つまり、この仕切石は厚さ0.20 m、幅0.42 m以上、長さ0.40 mと1.00 mの直方体の石材を長側辺を上にして立て並べているのである。後章の石材鑑定から使用された凝灰岩は二上山牡丹洞産（東側石材）と鹿谷寺産（西側石材）とされている。

(8) 砂とバラス

仕切石の北側は砂とその表面を覆うバラス（径5.0㎝以内の小礫）が敷かれ、バラスは仕切石より奥室側0.6mに及び、特に東半部に残っていた。その下の砂は仕切石より奥室側1.1m、つまり前室のほぼ中央付近まで認められ、ここから南の仕切石に向かって下方に傾斜する形で堆積し、それより北側には及んでいない。この砂とバラスの上面は奥室側に向かって緩やかな傾斜面をなしていた。しかし閉塞石上部から北側石室内に流れ込む盗掘の撹乱土（Ⅱ層）を除去して現れたことからみて、これは撹乱によるものと思われ、本来は平坦な面であったろう。したがって仕切石は北側に盛られた砂の崩れを防ぐための役目も果たしていたのではないかと考えられる。砂の使用については排水の便が考えられるが、地下を掘り下げて明確な施設を検出するに至らなかった。

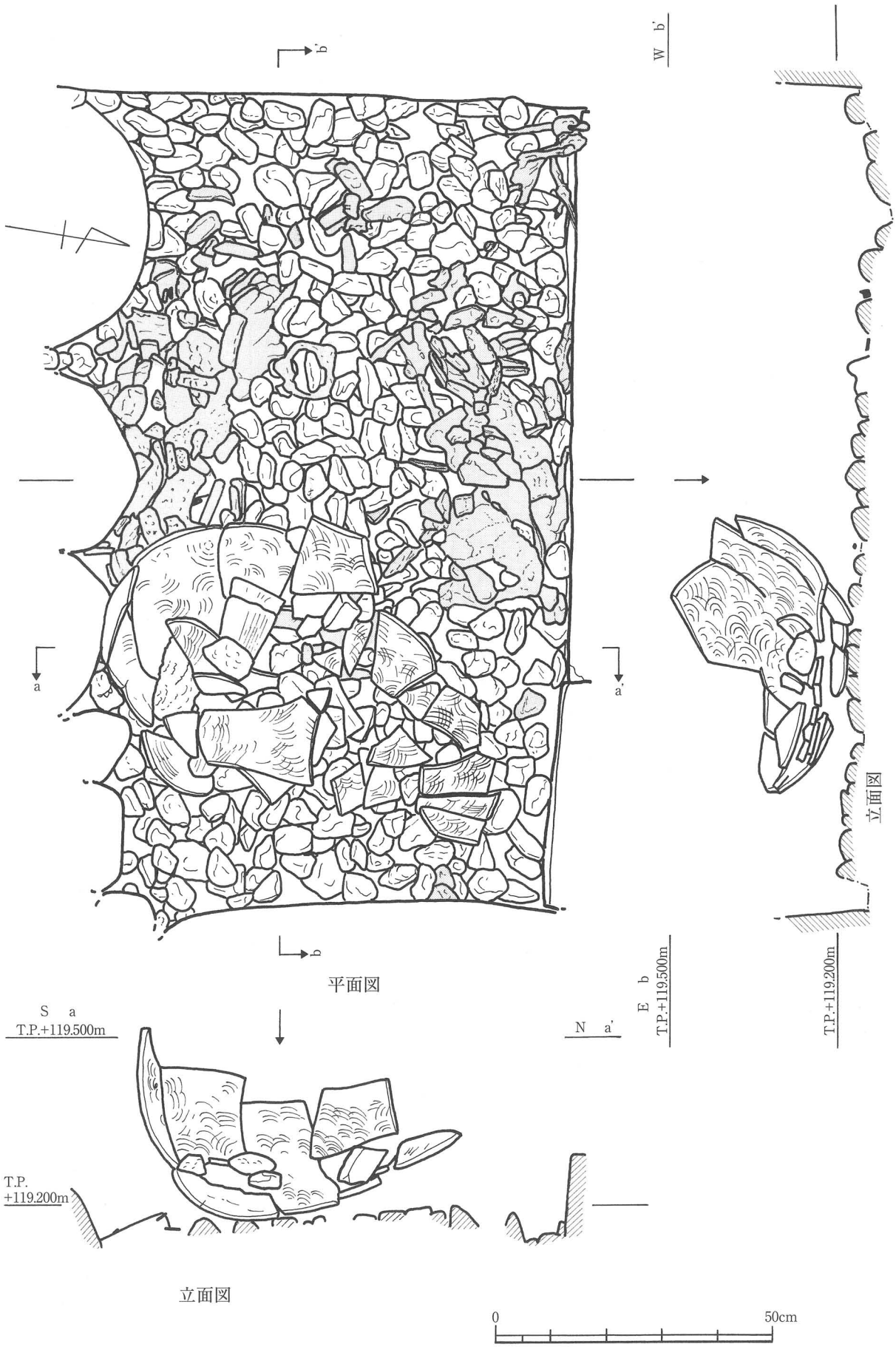
(9) 礫敷

仕切石の南側、閉塞石北面までの間0.8mの空間は長さ10.0㎝以上の白っぽい川原礫をびっしりと敷き詰めた礫敷となっている。礫敷上面高さは仕切石上面から5.0㎝ほど低い。この面の東壁際で須恵器四耳壷（第64図）が出土したが、底部以外は盗掘時の落下と思われる閉塞石の一部(長さ0.54m、厚さ0.2 m)により圧し潰されていた。またその西側では挂甲小札、素環鏡板、鉄鏃などが出土し、一部は仕切石上面にも及んでいた。これらの鉄製品は礫敷や仕切石に錆着しているものも多く、礫とともに取り上げざるを得ない場合もあった。このような出土状態からみて須恵器壷・鉄製品類は葬送の時点で礫敷の上に置かれたものと考えられる。

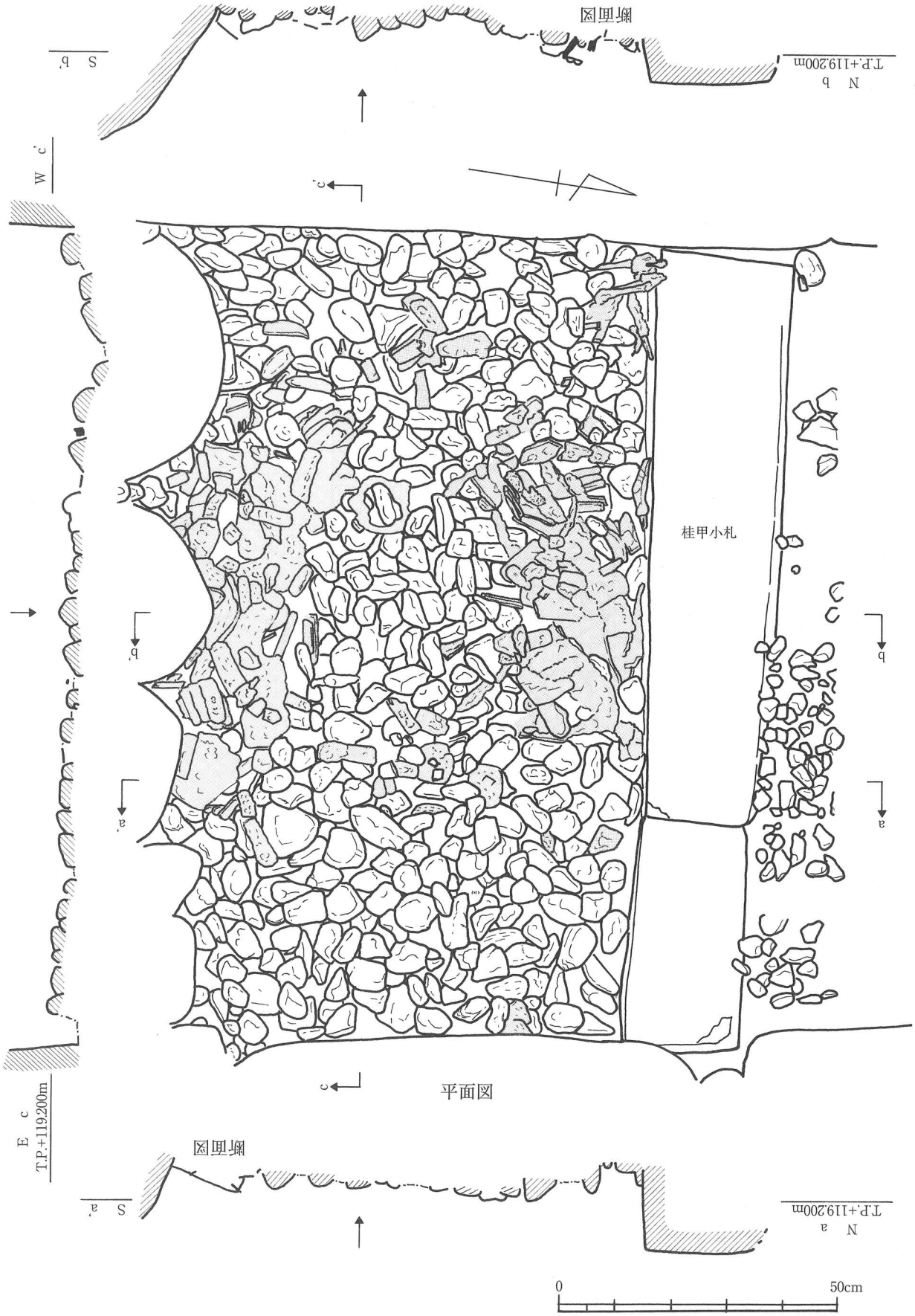
(10) 石室内堆積土

石室内には盗掘による撹乱土や流土が閉塞石上方から石室奥に流れ込むように堆積している。最終的な石室内堆積土の上面は天井石内法前端（T.P.120.6 m）から奥壁下部（T.P.119.2 m）にかけて傾斜面をなしている。最終的な検出面を掘り下げたT.P.119.0 mの面より下にはまだ撹乱層が存在したが、それはもはや側壁の下端部に達して危険なため一部中央に南北の小トレンチを設けて確認したものである。石室内の堆積土は大きくみてⅠ～Ⅳの4層に分けられ、その上に近世～近代の撹乱や埋め戻しと思われるⅤ層が堆積している。

Ⅰ層は石室に最初に溜まった、礫敷上面にのみ見られる土である。この土に覆われる形で須恵



第58図　礫敷上須恵器壷出土状況平面図・断面図（1/10）



第59図　礫敷上挂甲小札・鉄鏃・鏡板出土状況平面図・断面図（1/10）

器壷や挂甲小札、鉄鏃など、土器・鉄製品が出土し、しかもそれらの遺物はすべて礫敷に密着し、これより上位の堆積層にみられるような中世遺物は含まない。また閉塞石の一部が盗掘の際に須恵器大形壷の上に落下したままになったことも幸いして、当初の副葬品の配置状況の一端がこのように比較的良好に留められることになったと考えられる。

Ⅱ層は、閉塞石を跨いで前室後方に流れ込む形で堆積する黒色を呈する比較的粘性のある土であり、仕切石を越えて北側では砂・バラス上面を覆う。この土からは漆塗籠棺、亀甲繋文銀嵌大刀柄頭、金銅装馬具や飾り金具、銀製帯金具、金糸、ガラス玉、須恵器、流紋岩質溶結凝灰岩板石などの破片が、中世瓦器碗や土師器小皿とともに出土した。遺物の大半が出土した土層である。Ⅲ層は、5層に細分される。Ⅱ層の上に堆積する土層（第198～200層）では、南のT.P.120.4m付近より前室を経て、奥室前半に流れ込む形で大小の礫が多量に出土した。前室と奥室の境付近では、この礫の混在する撹乱土が検出面より下にまだ深く及んでいる。奥室と前室の検出面の下に設け、下層確認のための小トレンチ（T.P.119.0～119.1 m）で、その構成土のひとつである第200層から、礫に混じって瓦器片が出土している。Ⅳ層は最終的に石室を塞いでしまう土で、12層程度に分層される。黄色系の色調で混入する礫はⅢ層に比べて少なく、またⅢ層では礫が南から北に傾斜するように流れ込む形をとっていたのに対して、この土層ではほぼ水平に近い状態で出土する。Ⅲ・Ⅳ層では古墳に伴った遺物の出土はみられなかった。調査後、石室内の土（Ⅰ～Ⅳ層）は、すべて水洗作業を行った。それによって漆塗籠棺、凝灰岩、花崗岩などの細片や屑が採取されている。しかしその大半はⅡ層を中心とするもので、この点では現地での作業結果と矛盾しない。

以上の石室内堆積土を最終的に覆うのがⅤ層である。35層ほどに細分されるこの一連の堆積土は、T.P.122.4 mで耕土の下に数層を挟んで、版築状盛土を北から南へ削った斜面に盛り上げられた堆積状況を示している。T.P.120.5 mから120.8 mにかけては5.0～30.0㎝の礫を多量に含む土（第171層）がみられ、それらの礫と混在して近世の磁器碗（第63図1）が出土している。また試掘調査ではこの撹乱盛土中から板石（榛原石）の破片が出土している。

このようにⅠ層は最初の盗掘の影響を受けてはいるが、葬送時の副葬品配置の位置関係の一面を比較的よくとどめた土層といえよう。それより上位に堆積する各層には、中世土器の細片に加えて、近世の磁器碗や近代のガラス片、アルミ製リベットなどが混入する。したがって中世の盗掘で荒らされて以降近代に至るまで、完全に埋まりきることなく開口状態が続き、それに伴う盗掘のみならず農作業や開墾に伴う人の出入りがあった可能性がある。

5．閉塞施設（第60図）

仕切石南辺より南へ0.76 mに築かれている。石室側壁第1石の南に、南北の下場幅1.4～1.5 m、上場幅1.1～1.2 mにわたって積み上げられている。残存高は0.8 mである。これは外された天井石の高さを考えると、その半分弱の高さにすぎない4～5段が残った状態である。おそらくは6段程度はあったと思われる。そのうち盗掘の際に6段目は完全に取り外され、さら

に西側では4段目まで取り外されたようである。閉塞石北面は側壁第1石と羨道との境に合わせている。積み上げた石の大きさは一定しているわけではないが、長さ0.35～0.55 m、幅0.25～0.40 mの長手の自然石を中心に石室側と羨道入口側の両側から積み上げている。

最下段の基礎となる東西の列石は、北面の石室側についてみると長さ0.3～0.5 mの石をほぼ西半に横長に並べ、残った東壁との空間には同じ0.5 mの石を今度は縦長に並べ、さらにそれらとの間に残った空間は0.3 m程度の石を縦に充填しておさまりを調整している。さらに2段目には西半に長さ0.9 m、高さ0.3～0.4 mの横長の石を載せている。その結果東側の2段目の石との間に約10㎝ほどの高低差が生じるが、その差は3段目に至って小振りの石を用いて解消している。それより上位は外されて不明だが、東壁沿いには2段の石積みが残っていて、そのひとつがこれまた長さ0.6 m以上の横長の石を用いている。つまり、基礎の石の上第2段以上の石組みはこのように横長の石とそれによって生じる左右の空隙を0.3～0.4 mほどの石で詰めて積み上げていく形をとっているようである。

閉塞施設南面は羨道の埋め石を外すことはしなかったので、基底の石まで詳細に観察できなかったが、ほぼ同様の積み上げであった。これを南北方向の断面でみれば、基底は南北幅約1.5 m、それより上は幅約0.5～0.6 mの立ち上がりとなって、南北に裾拡がりの安定した形をとっている。

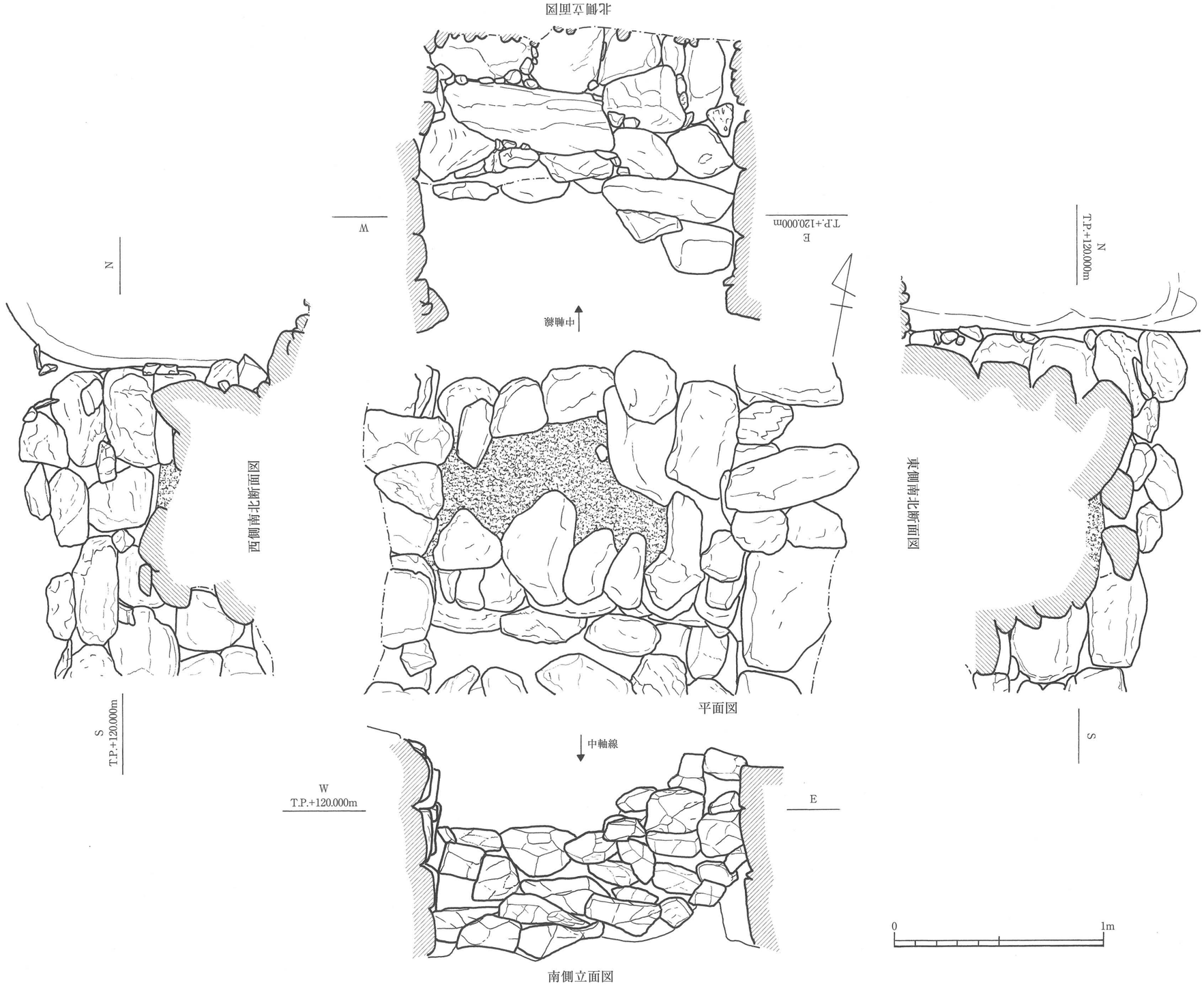
閉塞は石積みだけでなく、以上の北面と南面からの石積みの間に褐色の粘土を段毎に詰め（第239層）、そのうえ石積みの空隙に主に5.0～10.0㎝の小礫を充填し、石室を厳重に密封した状況が窺われる。このように積み上げられた閉塞の一部（長さ0.60 m大の石）が、盗掘によって先ほども述べた北側の礫敷上に置かれた須恵器壷の上に落下したのである。

6．羨道（第61・62図）

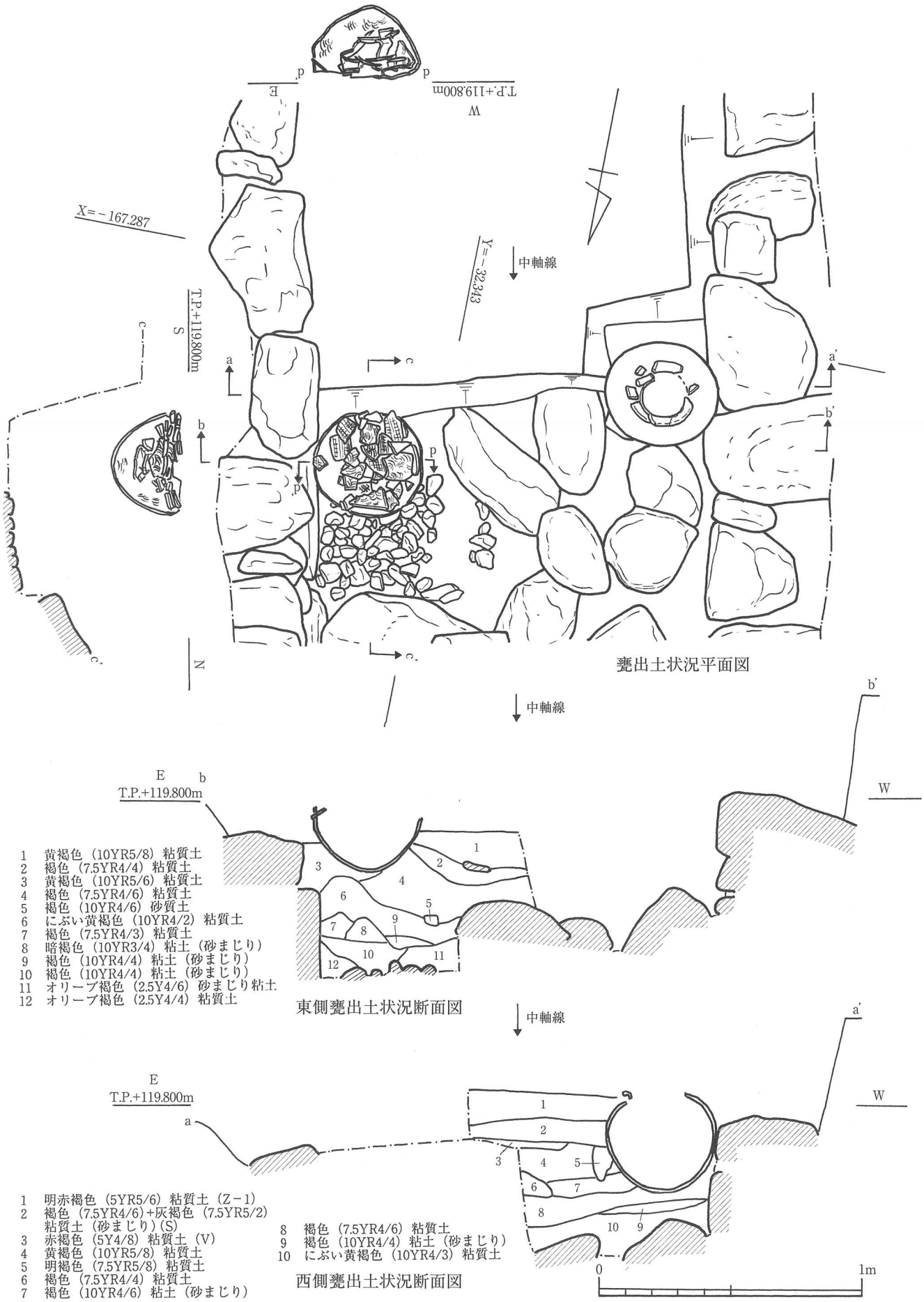
羨道を仕切石からとると約6.0 m、仕切石南の礫敷の切れる位置、すなわち側壁第1石南縁から測れば約5.0 mとなる。羨道幅は北端で1.5 m、入り口付近ではやや拡がり1.6 mを測る。羨道部側壁の壁面は、石室側壁第1石より南3.5 mにかけて小口積みとしている。その幅は0.35～0.55 m、長さ0.25～0.35 mと0.60 m以上の二様の石を長辺を羨道の南北辺に直行する形で用いて積み上げている。入り口付近では、石の長辺を羨道の南北辺に平行する形に積んでいるものがある。壁面は垂直に立ち上がるが、第2段テラスに当たる閉塞石部分両側の最も高く積み上げてあるところでは、最上段の石が壁面より5.0～10.0㎝内側に迫り出している。

石積みは、閉塞石両側の第2段テラスに当たる部分で6～7段、閉塞石南面より1.2 m以南の第1テラスに当たる部分では3～4段で、それより南の入り口に向かっては1～2段と考えられる。前室天井内法面の高さを考慮すると、第2段テラスに当たる部分の羨道壁面の石積み上面は数石外されてしまっているものの、6～7段であったと思われる。

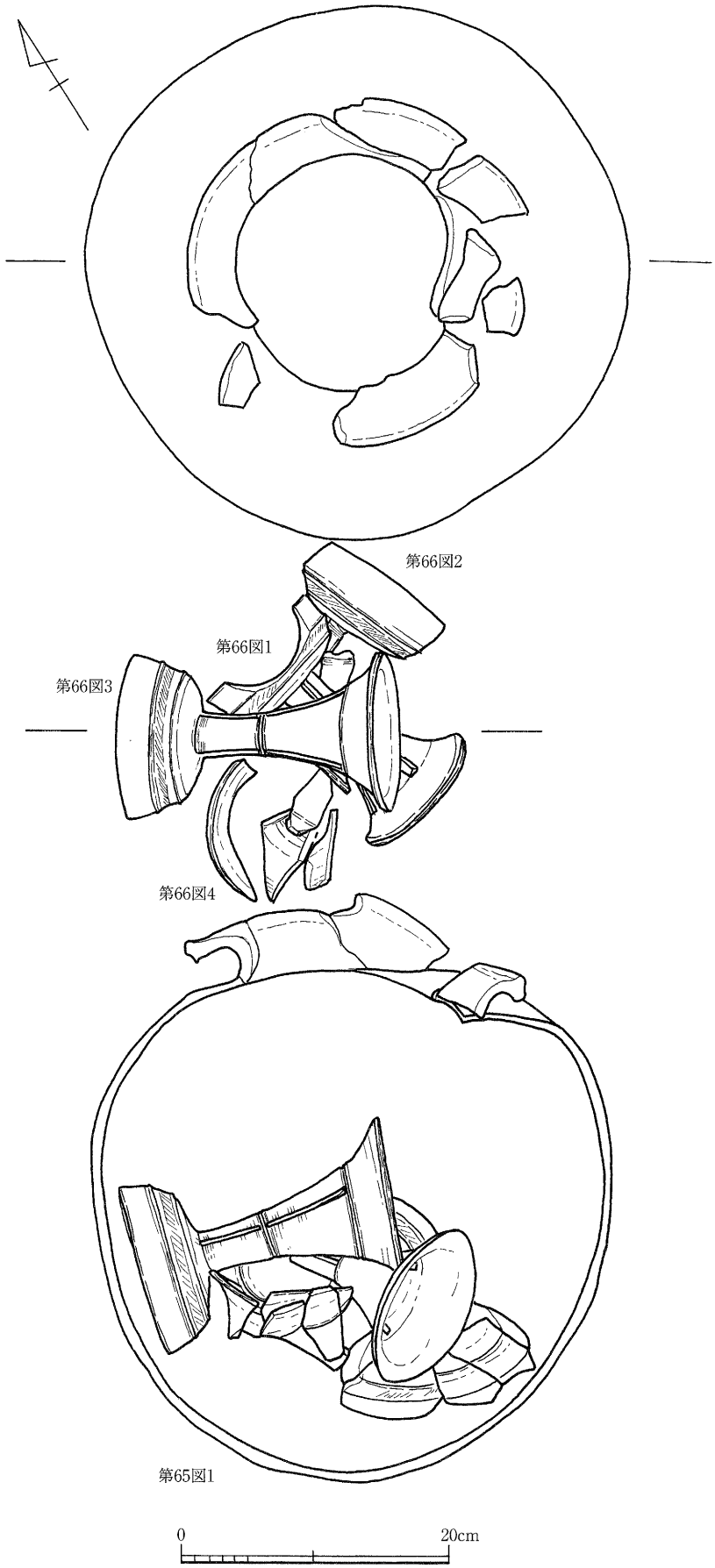
羨道側壁は側面では、石室側壁第1石南面から2.3 mのところに墳丘第1段テラスから第2段に立ち上がる傾斜変換点がくる。傾斜角は14°程度である。それより南入り口に向かう2.5 m



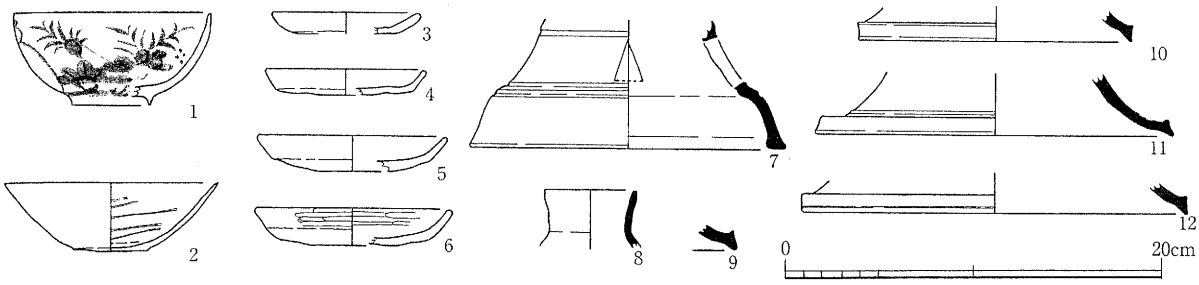
第60図　閉塞施設平面図・立面図（1/20）



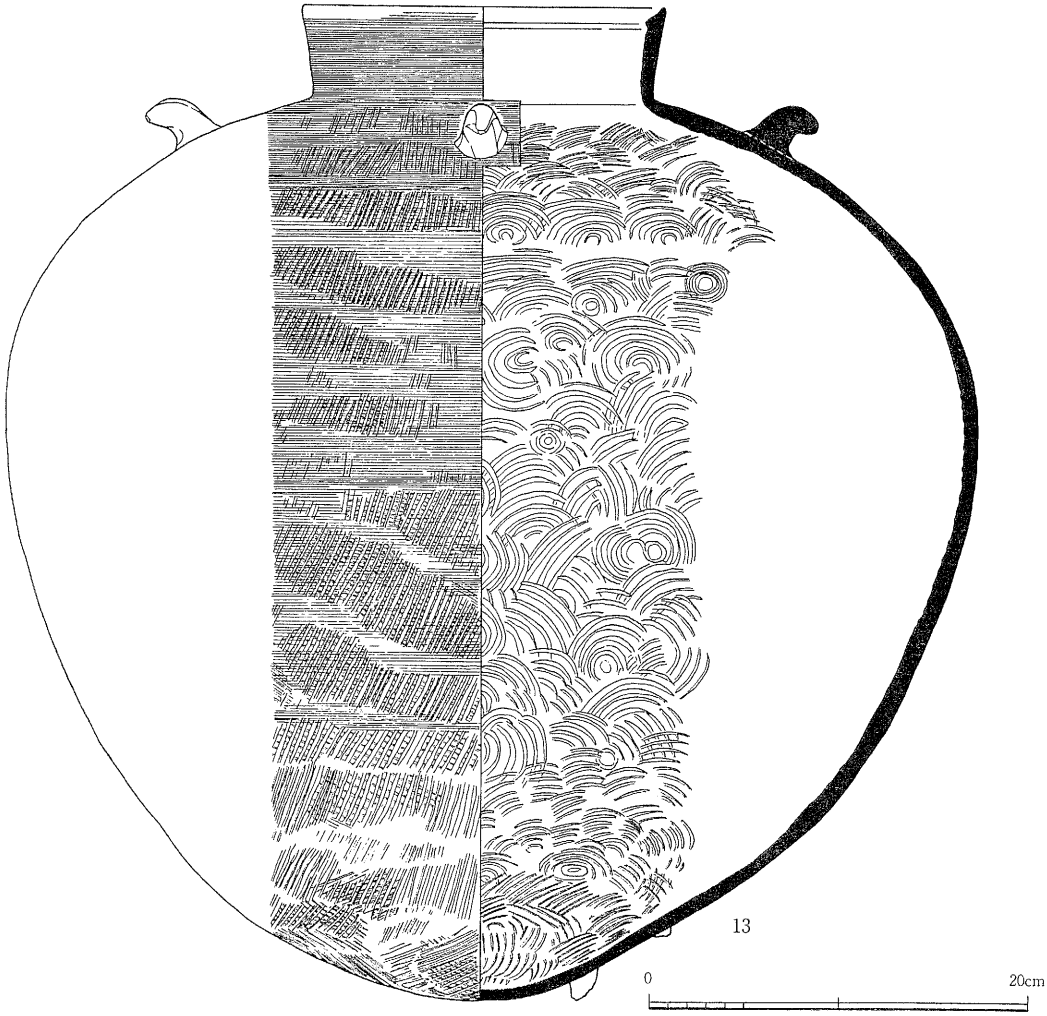
第61図　羨道埋甕出土状況平面図・断面図（1/20）



第62図　羨道西側埋甕内須恵器高杯発見状況平面図・断面図（1/50）



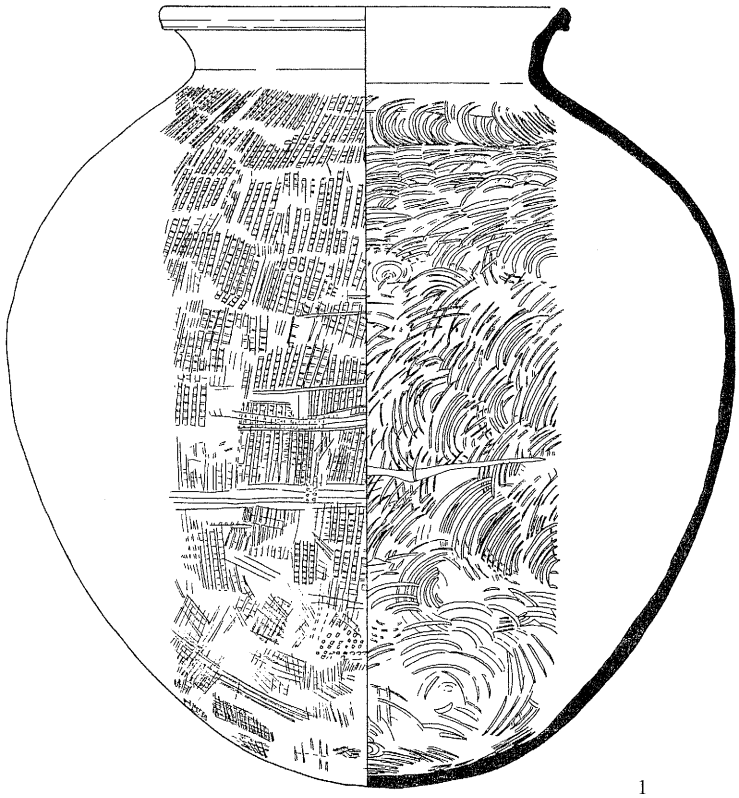
第63図　石室内および墳丘撹乱土出土土器実測図（1/4）



第64図　礫敷上出土須恵器四耳壺実測図（1/4）

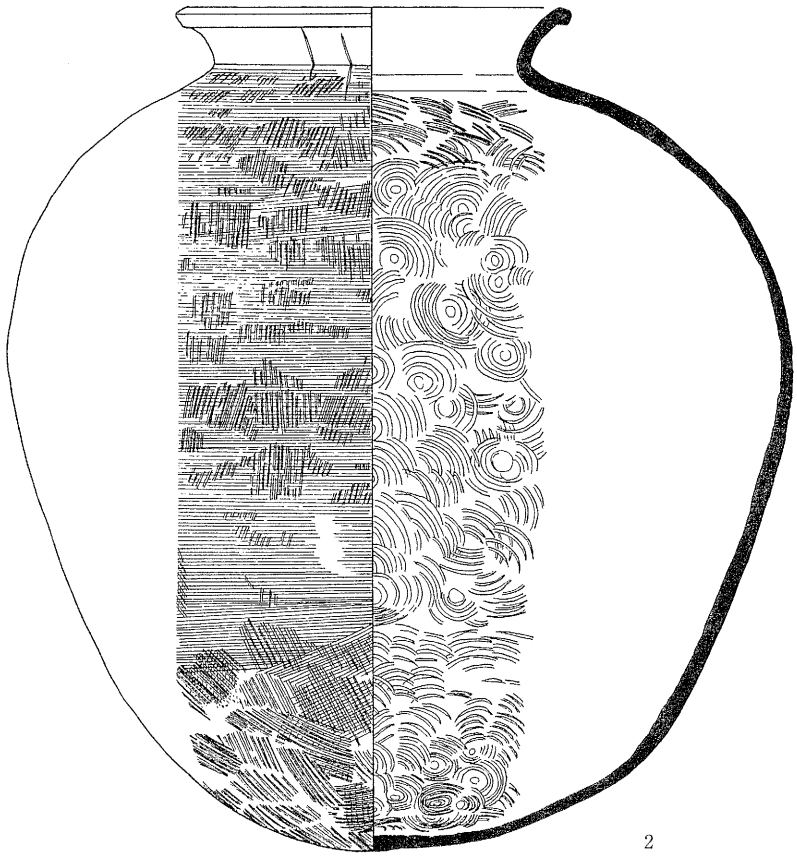
が第１段テラスとなるが、変換点から 1.0 mくらいのところも南に向かって５～6°の傾斜がみられる。

閉塞石より南は羨道入り口にかけて現耕土直下に褐色系の粘質土が全体に堆積していた。閉塞石を覆う盗掘に伴う攪乱土（第 206 層）を除くとこれらの埋積土が露呈し、南北 1.7 mにわたって掘り下げた範囲で第 209 層から第 237 層を区別した。この埋積土の下では羨道壁面や閉塞石にもみられた長辺 0.30 ～ 0.50 m中心とする礫がほぼ全体にわたって出土した。羨道部をまずこれらの石で埋め、さらにその上から上記の 29 層におよぶ粘質土を積み、羨道部を入り口ま



1

西側甕



2

東側甕

0　　20cm

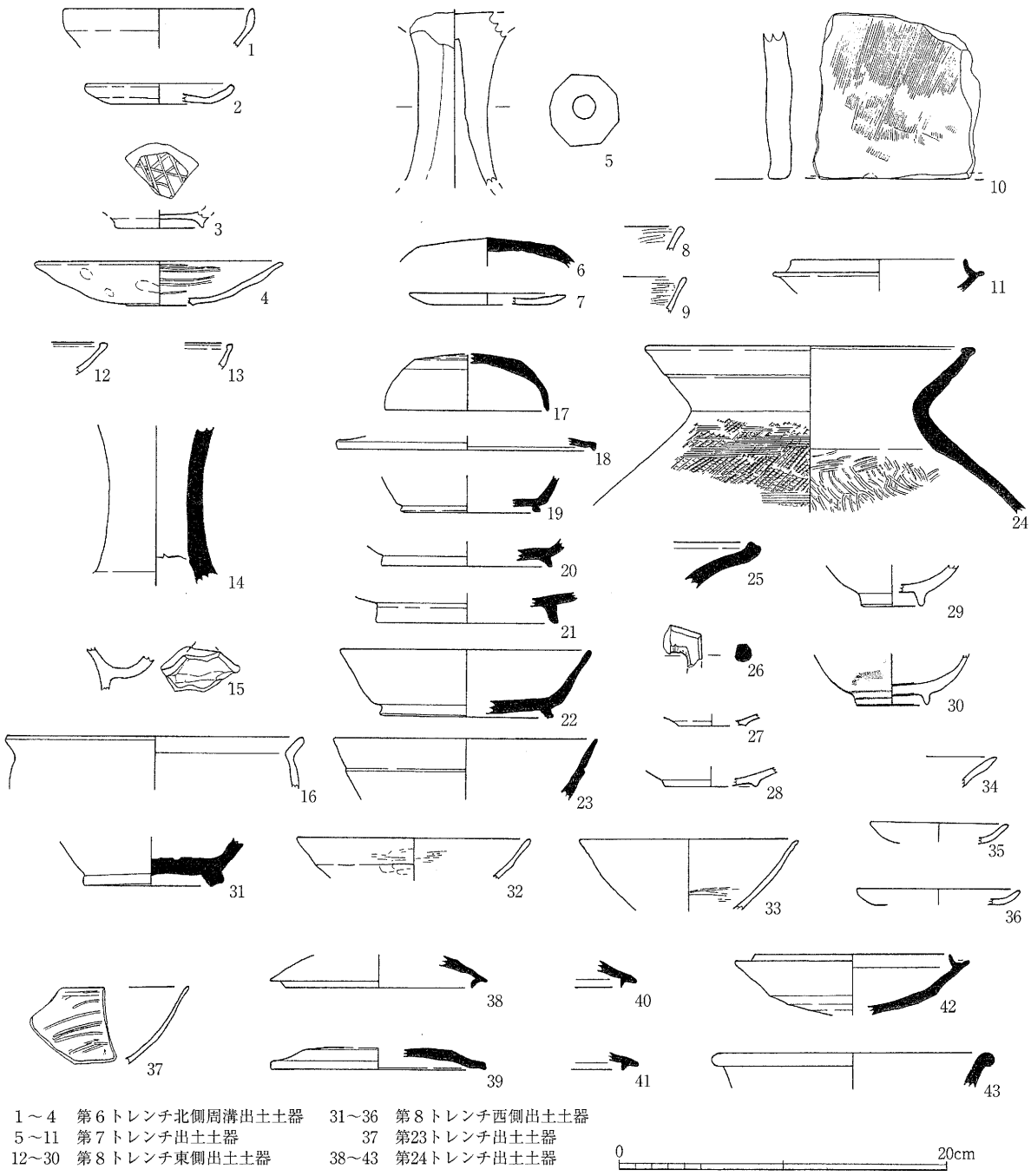
第65図　羨道出土須恵器甕実測図（1/4）

第66図　羨道出土西側埋甕内発見須恵器無蓋高杯実測図（1/4）

で完全に塞いだようである。しかし第１段テラス部に相当する羨道の東半部には、これらの石がみられない0.5 m四方の空間が認められ、代わってここには5.0 ～ 15.0㎝の礫を敷き詰めていた。この礫敷の上面の高さはT.P.119.1 mである。

礫面より0.4 m上では礫面の空間のやや南寄りの東壁際で須恵器甕体部上半が土圧で圧し潰れた状態で検出された。さらにこの甕の西側の壁際でも同様の甕が完形でやはり埋め置かれた状態で出土した。いずれの甕も穴を掘ってそこに埋めるというものではなく、羨道を埋めていく過程で立て置かれた状態であった。東側の甕の底面高さはT.P.121.5 m、西側のそれはT.P.121.46 mである。それに相対する西側石の上面と比べて低く、また西側の甕の口縁部上端が後世の耕作土下面にあたっていたが、西側ではそれよりさらに深く耕作土が及んでいた。これらの甕の残存状態とその高さからみて、西側甕口縁部上端とこの甕が接する羨道部西側壁上面がほぼ同一の高さであり、かつその西側壁上面が墳丘第１段のテラス面とも高さが等しいから、検出された石積み上面の高さが当初の高さを保ち、同時にテラス面の高さでもあったであろう。

西側の甕には高杯４個体が横重ねで納められていた。甕の底面から上に向かって高杯４→高杯２→高杯１→高杯３（第66図）と重ね、口縁部に打ち欠きある高杯（同図１・２）をそうでない高杯（同図３・４）で上下からはさむ形をとり、脚部でかさなるように積み重ねられている。



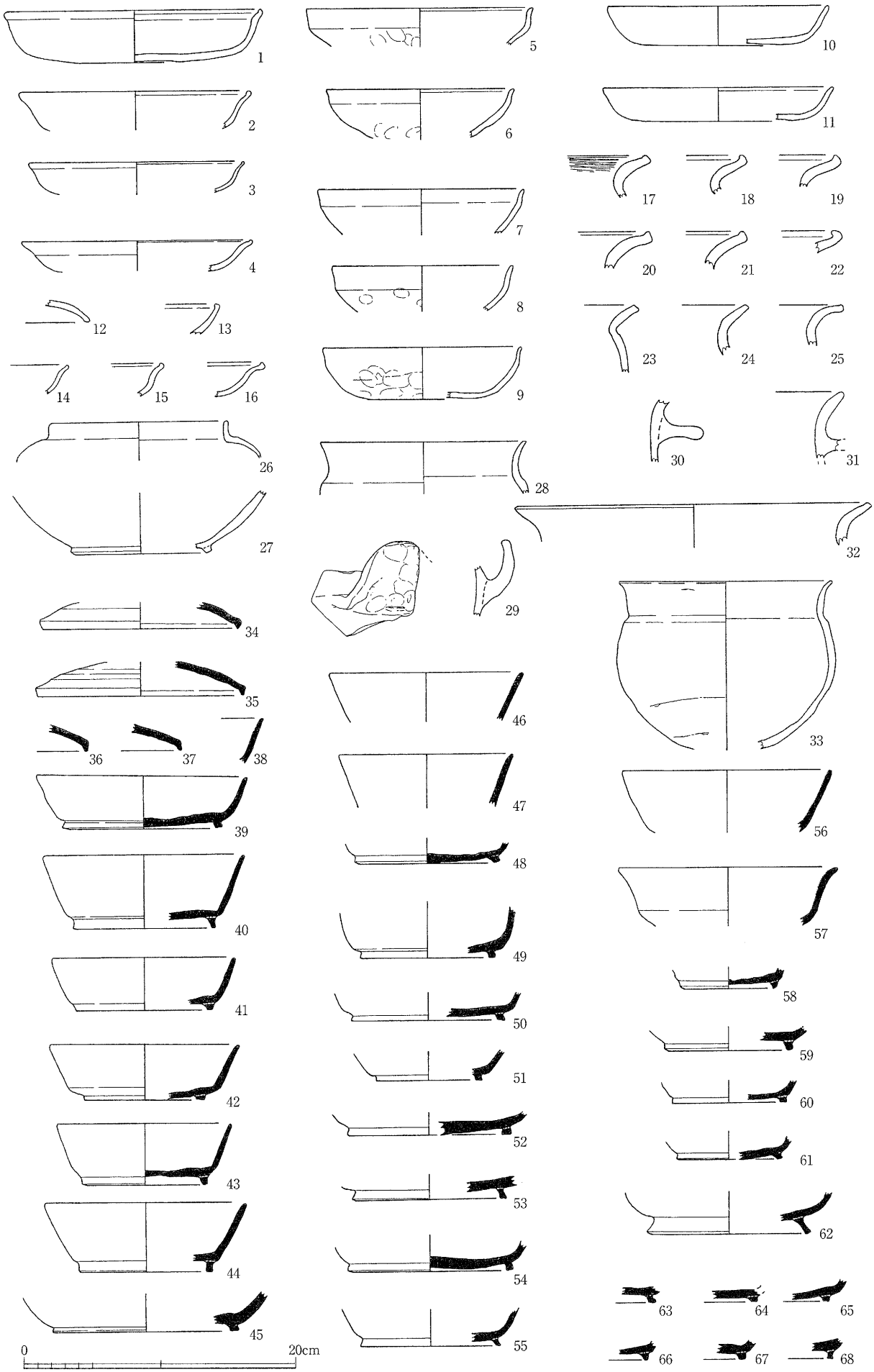
第67図　第６～８・23・24トレンチ出土土器実測図（1/4）

甕の内部全体に黄色土が充満していた。

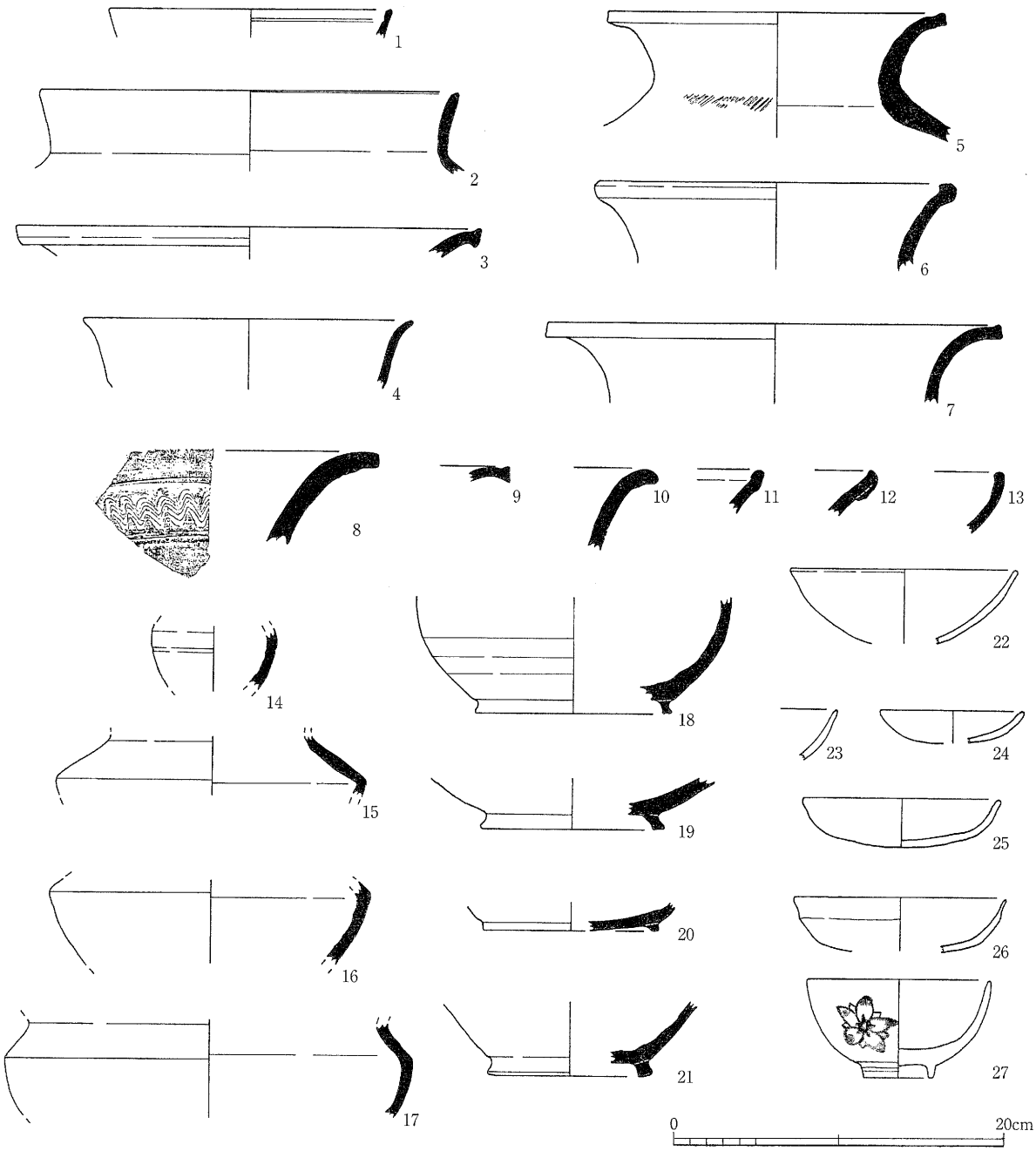
７．出土遺物

シシヨツカ古墳からの出土遺物は、盗掘により撹乱され破砕された断片となっているが、葬送儀礼に伴って配置された状態を比較的乱されることがないまま残ったものも若干あり、それ以外には周溝の埋積土より出土した遺物がわずかにある。

土器類では須恵器四耳壷、羨道部の須恵器甕、須恵器高杯などがあり、装身具ではガラス玉、金糸、垂飾部品、銀製帯金具、指環、武器では大（小）刀、刀子、鉄鏃、刀装具では大刀象嵌柄頭、同鞘尻金具、責金具、柄巻など、武具では挂甲小札類、馬具では鞍金具、轡、鐙、杏葉、雲



第68図　第６トレンチ南端撹乱部出土土器実測図（１）（1/4）



第69図　第６トレンチ南端攪乱部出土土器実測図（２）（1/4）

珠・辻金具、その他の金属製品、容器では漆塗籠棺がある。また埋葬施設の材として特徴的に利用された流紋岩質溶結凝灰岩（榛原石）がある。

（1）土器（第 63 ～ 69 図・表 6 ～ 11）

土器は、閉塞石から前室にかけて堆積した攪乱土（第 198 ～ 207 層）出土の中世土器、須恵器、前室礫敷上面出土須恵器壷、羨道に埋められた須恵器甕とその 1 点に納められた高杯がある。その中で礫敷の壷、羨道の甕そして甕の中に納められた高杯などは出土状態から、この古墳の葬送礼に伴って用いられた土器である。また、外部では南北トレンチや東西トレンチの周溝堆積土出土土器、石室盗掘坑堆積土出土土器などがある。

表6　シシヨツカ古墳出土土器観察表（1）

挿図番号		器種	出土個所	層位ほか	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
第63図	1	磁器碗	6トレンチ前室上撹乱部	第180・181層	10.4		4.9		樹花文染付碗。畳付無釉。波佐見窯系。	17世紀
	2	瓦器碗	6トレンチ閉塞石北側	第207層	11.2		4.0		小さい底部からやや内彎気味に薄い器壁の口縁部がのびる。端部はわずかに外反し、わずかに内端面をなし細い圏線がめぐる。内底面から口縁部内面にかけて粗いミガキが連弧状に施されている。底部外面の高台をわずかに残す。炭素吸着は全面に及ばない。	大和型Ⅲ-E
	3	瓦器小皿	6トレンチ閉塞石北側	第207層	8.0		1.1		平たい底部から厚みのある口縁部が外斜方にのび、端部を丸く仕上げる。口縁部ヨコナデ。底部外面指オサエ。	13～14世紀
	4	土師器小皿	6トレンチ羨道部	第207層	8.6		1.9		平坦な底部から短く細い口縁部が外反して立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内底面ナデ、底部外面指オサエのまま。	13世紀
	5	土師器小皿	6トレンチ閉塞石北側	第207層	10.2		1.9		丸みのある底部から口縁部がなめらかにのびる。口縁部ヨコナデ。口縁端部に煤痕あり。	13世紀
	6	土師器小皿	6トレンチ閉塞石北側	第207層	10.6		2.0		丸みのある底部からやや内彎気味に口縁部が立ち上がる。口縁部から底部外面に至るまで横方向に密にヘラミガキを重ねる。内底面のみナデ、一部口縁部からのミガキ。口縁端部に煤痕あり。	13世紀
	7	須恵器台付壷裾部	6トレンチ閉塞石北側	第207層	16.8				裾部上方で段をなし、あまい凸帯が巡り、下方は底部に向かってなだらかに下る。底端面は平坦に接地面となる。凸帯より上に浅い沈線が巡る。この沈線とその上にもう1本の浅い沈線があり、この2本の沈線の間に高い二等辺三角形の透かし窓が切ってある。外面回転ナデ。外面暗灰色、内面灰色、断面は内部が赤紫色のサンドイッチ状を呈する。胎土には白色微砂粒を多量に含む。	
	8	須恵器子持ち壷または小壷口縁部	6トレンチ閉塞石北側	第207層	4.8				ゆるやかに斜方にのびる口頸部。回転ナデ。外面暗赤紫色で暗緑色の釉がかかる。内面は暗緑色の釉が全体にかかる。断面は赤紫色。	
	9	須恵器高坏裾部	6トレンチ閉塞石北側	第207層					端部上下に拡張して稜角をなすが、上端は鋭い。内傾する内側はやや凹面となる。外面灰色、断面は赤紫色を呈する。	
	10	須恵器高坏裾部	6トレンチ閉塞石北側	第207層		14.4			端部は上下に拡張し、両端が稜角をなす。端部は外傾して凹面となり、内面も浅い凹面となる。回転ナデ。外面艶のある黒色、内面灰色、断面赤紫色で、胎土には白色微砂粒、黒色粒を含む。	
	11	須恵器高坏裾部	6トレンチ閉塞石北側	第207層		19.0			外下方に拡がる裾部で、端部は上下に拡張し、両端は稜角をなす。外端面は内傾して浅い凹面となる。回転ナデ。外面艶のある黒色、内面灰色、断面は内部が赤紫色となるサンドイッチ状を呈する。白色微砂粒、黒色粒を含む。	
	12	須恵器高坏裾部	6トレンチ閉塞石北側	第207層		20.4			端部は上限に拡張し、両端は鋭い稜角をなし、外端面はやや内傾して浅い凹面となる。回転ナデ。外面灰色で、灰かぶりがある。内面灰色、断面は内部が赤紫色のサンドイッチ状である。白色微砂粒を含む。	
第64図		須恵器四耳壷	6トレンチ閉塞石北側礫敷上面	第280層	19.0		52.4	体部最大径51.40	口頸部はやや外反気味にのび端部にかけてやや肥厚する。端部はわずかに内傾し上下に拡張し、よってその内側には浅い凹状の端面を得る。肩部は内彎して体部に至り、体部はやや突出する丸底の底部に向かってさらに内彎して下る。体部最大径は器高全体の半ばやや上にある。基部の少し下の肩部に先端が下に向く鈎形の把手が付く。把手が残存していたのは2個所であったが、同じ高さのほかの位置で把手が剥離したわずかな痕跡がかろうじて認められ、それを考慮して本来4カ所に取り付けられていたとして復原した。内面は口縁部から基部上端まで回転ナデ、それより下方底部に至るまでは同心円タタキを施す。外面では口縁部は横方向のカキメ、肩部から底部にかけては全面タタキである。上半は平行タタキ、中位以下は格子タタキである。その後頸部から底部の上まで横方向のカキメで、底部にはカキメを施さない。口縁部から外面肩部にかけて灰被りの痕跡がある。底部外面には径11.5～12.0cmの円形の分割圏線の形で焼き台の痕跡が底部中心を巡って3個所にある。底部外面・内面にはこの壷が出土した礫敷きに置かれていた鉄製品（多くは挂甲小札）の破片や錆が錆着している。内面では底部が淡青色、底部より上は灰色、外面では口縁部～肩部が青灰色、肩部から底部上までが暗灰色、底部は淡青灰色。断面は内部が赤紫色となるサンドイッチ状を呈する。	陶邑Ⅱ-4
第65図	1	須恵器甕	6トレンチ羨道部西側	羨道部埋土	20.9		41.4	体部最大径38.40	腰高の張りのある体部に外上方にのびる口頸部がつく。肩の張りが一方に偏し全体としては不均斉な器形である。口縁端部は肥厚し、下端は若干垂れて稜をなし、上端は外側に軽い斜めの端面をなす。肩部は大きく内彎して体部上半をを形作る。体部最大径は器高全体の半ばやや上にくる。その位置からほぼ直線的に底部に下った後、底面より4cm上でやや屈曲する形で丸底の底部に至る。頸部から基部にかけて縦方向の沈線2本からなるヘラ記号がある。口縁部内外面を回転ナデにより仕上げる。内面では頸部下にも及んでいる。外面は基部から底部に至る全面を平行タタキ、先ほどの底部との屈曲部まではタタキの後、横方向のカキメで調整する。内面では頸部下から底部まで同心円タタキを施す。内面は灰色、外面は口縁部～体部下半が暗灰色、肩部～底部が青灰色、断面は灰色である。	陶邑Ⅱ-4・5

表7　シシヨツカ古墳出土土器観察表（2）

挿図番号		器種	出土個所	層位ほか	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
	2	須恵器甕	6トレンチ羨道部東側	羨道部埋土	19.5		46.6	体部最大径49.30	ほぼ球形の体部に直立気味に立ち上がる頸部そして外反する口縁部がつく。口縁端部は肥厚し上下に拡張して、特に下縁は斜め下に突出する稜をなす。口縁部内外面は回転ナデ調整。内面は頸部以下底部まで同心円タタキであるが、底面より10cm上位のあたりから別のタタキ具を用いたためか弧線の間隔が広い同心円となり、施し方も粗い。底面より16.5～17.0cm付近では横方向のナデ調整。外面は頸部以下底部に至るまで格子タタキである。その後頸部から肩部そして体部下半には細い工具による部分的なスリ消し状のナデ、底部にはそれより密に同様のナデが、さらにこれとは別に体部最大径の位置より下半にかけて横方向の板状の工具を用いた強いナデ痕が認められる。上位のものは1～2mmと幅狭、下位のものは3～5mmと幅広である。内面は暗青灰色、外面は全面青灰色であるが、口縁部から体部下半にかけてにぶい赤紫色を呈する。断面は外面にみられたにぶい赤紫色と同様の色調である。	陶邑Ⅱ-4・5
第66図	1	須恵器無蓋長脚高坏	第65図1甕内		12.3	12.6	19.4	脚高14.50	深みのある椀形の坏部に細長い脚が付き、裾拡がりの端部が段をなす。2段3方の透かしがある。坏部外面に2条の凸線が巡る。上下の凸線を整形した後、3本程度の細いヒゴ状の工具の先端で、右上から左下にかけて長さ1.5～2.1cmの斜行線を描く。描き始めは強く山形をなし、左下へ斜めに長く引っ張り、これを相次いで連続させる。工具を器表面から離さず次の単位に続けるため、部分的に重複する部分がある。脚部は上下の透かし窓の間に凹線が2条巡る。下段の透かし窓の下縁に凹線の名残と思われる浅い沈線様のナデ痕が認められる。窓の切り取り幅は4～10mmの範囲で、下段窓の下縁が最も幅広となる。坏部に上縁8.3cm、高さ3.3cmの半円状の焼成後の抉りがある。内面坏部は淡青灰色、脚部は淡灰色、外面淡灰色、断面灰色。坏部から脚部下方にかけて薄い暗緑色の釉がかかる。胎土には白色微砂粒を含む。	陶邑Ⅱ-4
	2	須恵器無蓋長脚高坏	第65図1甕内		13.6	13.0	21.7	脚高16.60	深みのある椀形の坏部に細長い脚が付き、裾拡がりの端部が段をなす。2段3方の透かしがある。坏部外面に2条の凸線が巡る。上下の凸線を整形した後、3本程度の束ねた細ヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて1.5～2.0cmの斜行線を描く。描き始めは強くやや深く押さえて小さい山形をなし、それから斜め左下へ長く引っ張る。これを連続して施す。脚部は上下の透かし窓の間と、下段の透かし窓の下縁の位置に凹線が巡る。透かし窓の切り取り幅は3～10mmで下段下端が最も幅広い。坏部は半円状に2段にわたって抉られている。上段の縁幅はほぼ直径に等しく、下段の幅は10.8cm、高さは5.0cmを測る。内面坏部は淡灰色、脚部は淡灰青色、外面は暗灰色～淡灰色、断面は内部暗灰色、外面灰色のサンドイッチ状である。	陶邑Ⅱ-4
	3	須恵器無蓋長脚高坏	第65図1甕内		12.5	12.0	20.3	脚高15.50	深みのある椀形の坏部に細長い脚が付き、裾拡がりの端部が段をなす。2段3方の透かし窓がある。坏部外面に2条の凸線が巡る。その上下の凸線を整形した後、3本程度束ねた細ヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて長さ1.0～1.6cmの斜行線を連続して描く。ただし描き始めの3本のヒゴの先端の痕跡があきらかな部分と簡略された浅い1本の描き始めの線のみみられる部分がある。また器表面から離さず続き描きするところもある。脚部の上下の透かし窓の間に凹線が2条、下の透かし窓の下縁の位置に1条巡る。窓の切り取り幅は3～6mmで下段下縁が最も幅広である。内面坏部は灰色、脚部は淡灰色、外面は灰色～淡灰色、断面は淡灰色で、全体的に白色微砂粒を含み、2～3mmの礫粒も若干混じる。	陶邑Ⅱ-4
	4	須恵器無蓋長脚高坏	第65図1甕内		12.8	12.8	20.3	脚高16.40	深みのある椀形の坏部に細長い脚が付き、裾拡がりの端部が段をなす。2段3方の透かし窓がある。坏部外面に2条の凸線巡る。上下の凸線を整形した後、3～4本に束ねた細ヒゴ状の工具の先端で、右上から左下にかけて1.5～2.1cmの長さの斜行線を連続して描く。描き始めは強く小さい山形をつくり、左下へ斜めに長く引っ張り、これを相次いで施す。しかし全体としては斜行線は浅く、強く撫でたような印象を受ける。脚部は上下の透かし窓の間に凹線2条、下の透かし窓の下縁やや上に1条巡らせる。窓の切り取り幅は4～9mmで、下の窓の下縁が最も幅広である。内面は淡青灰色、外面は淡赤紫色、断面は暗赤灰色で、坏部より裾部にかけて濃い緑色の釉がかかる。	陶邑Ⅱ-4
第67図	1	土師器小皿	6トレンチ北側周溝	第14～7層	11.6				肥厚する口縁部が直立気味に立ち上がり、深みのある器。	14世紀？
	2	土師器小皿	6トレンチ北側周溝	第63・88・99層	9.2		1.3		口縁部1段ナデ。端部外面ナデにより軽い面をなす。	12世紀後半～13世紀中頃
	3	瓦器碗底部	6トレンチ北側周溝	第63・88・99層		5.4			内底面に格子状暗文。高台は低い三角形断面。	Ⅱ-2～3
	4	瓦器碗	6トレンチ北側周溝	第14～17層	15.2	2.7			浅い器で、底部外面に高台の名残の細い粘土紐の貼り付け。内面に渦巻状の粗いミガキ。	Ⅳ-1～2
	5	土師器高坏脚部	7トレンチ東側	第47層					ヘラケズリにより断面八角形となる太い軸をなす面取り高坏。	平城Ⅲ
	6	須恵器坏蓋	7トレンチ東側	第56層					比較的平たい天井部。回転ヘラケズリ、未調整。	
	7	土師器小皿	7トレンチ東側	第47層	9.7		0.7		口縁部立ち上がりほとんど目立たない円板状の器。	中世
	8	瓦器碗口縁部	7トレンチ東側	第47層					器壁の薄い器。内面は口縁端部に至るまで横方向に密にミガキ。	Ⅲ

表８　シシヨツカ古墳出土土器観察表（３）

挿図番号	器種	出土個所	層位ほか	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
9	瓦器碗口縁部	7トレンチ東側	第47層					器壁の薄い器。内面は口縁端部に至るまで横方向に密にミガキ。	Ⅲ
10	土師器竈裾部	7トレンチ東側	第51層					外面縦方向の細かいハケメ。内面はハケメの後ナデ。底端面はナデ。	8世紀代
11	須恵器坏身	7トレンチ西側	第64層	10.6				口縁端部丸く、立ち上がりは短く内傾する。	陶邑Ⅱ-5
12	土師器坏口縁部	8トレンチ東側	第34層					内傾し上端面をなす器。坏または皿か。調整不明。	平城Ⅱ～Ⅲ
13	土師器坏口縁部	8トレンチ東側	第43層					内傾し上端面をなす器。坏または皿か。調整不明。	平城Ⅱ～Ⅲ
14	須恵器長頸壷頸部	8トレンチ東側	第43層					回転ナデ調整	陶邑Ⅲ～Ⅴ
15	土師器鍋把手	8トレンチ東側	第34層					甕Ｂの把手。	7世紀後半～8世紀代
16	土師器甕口縁部	8トレンチ東側	第43層	18.0				くの字形に短く斜方にのびる口縁部をなす。調整不明。	
17	須恵器坏蓋	8トレンチ東側	第43層	9.8		3.5		天井部丸みがあり、端部は内側に面をなす。天井部はヘラキリのまま。	陶邑Ⅱ-6
18	須恵器坏蓋	8トレンチ東側	第34層	15.8				端部がやや内側へ屈曲する	陶邑Ⅳ-2
19	須恵器坏身底部	8トレンチ東側	第43層		8.8			底部端やや中心寄りに低い高台がつく	陶邑Ⅳ-3～4
20	須恵器坏身底部	8トレンチ東側	第43層		10.4			底部端に中央寄りの高台がつく	陶邑Ⅳ-2～3
21	須恵器坏身	8トレンチ東側	第43層		11.0			底部端から中心寄りに高い高台がつく	陶邑Ⅲ-3～Ⅳ-2
22	須恵器坏身	8トレンチ東側	第43層	15.1		4.05～4.15		口縁端部丸く仕上げ、やや中央寄りにハの字形の高台がつく。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅳ-2～3
23	須恵器無蓋高坏口縁部	8トレンチ東側	第43層	16.0				無蓋高坏。体部外面に文様なく１条の突線巡る。	陶邑Ⅱ-2～5
24	須恵器甕	8トレンチ東側	第43層	19.8				ゆるやかに外反する口縁部、端部は内側に稜、また上端面をなす。体部外面平行叩き、部分的に櫛目調整。体部内面円弧叩き後ナデ。	陶邑Ⅲ-2～Ⅳ-2
25	須恵器甕口縁部	8トレンチ東側	第43層					ゆるやかに外反する口縁部で、端部が内側に巻き込み、外端面をなす。	陶邑Ⅲ～Ⅳ-1
26	須恵器平瓶把手	8トレンチ東側	第34層					断面は四角形に面取り。	陶邑Ⅲ～Ⅳ
27	瓦器碗底部	8トレンチ東側	第34層		4.0			わずかに高台をとどめる器壁の薄い器。調整不明。	13世紀後半～14世紀初
28	瓦器碗底部	8トレンチ東側	第25層		5.4			わずかに高台をとどめる器壁の薄い器。調整不明。	13世紀後半～14世紀初
29	磁器碗	8トレンチ東側	第34層		3.4			青磁碗。波佐見窯系。	18世紀
30	磁器碗	8トレンチ東側	第34層		4.2			染付碗。波佐見窯系。	18世紀
31	須恵器壷底部	8トレンチ西側	第31層		7.6			幅広の高台がハの字形につく。内端面が接地面となる。	陶邑Ⅳ～Ⅴ
32	瓦器碗口縁部	8トレンチ西側	第31層	8.2				外面口縁部のヨコナデ範囲広く、口縁部以下は指オサエのまま。内面粗く疎らにミガキ。	Ⅲ-3～Ⅳ-3
33	瓦器碗口縁部	8トレンチ西側	第31層	13.2				内底面に粗いミガキ。	Ⅲ-3～Ⅳ-3
34	土師器小皿口縁部	8トレンチ西側	第31層					やや肥厚する口縁部をなす、いわゆる「へそ皿」にみられるもの。	15世紀
35	土師器小皿	8トレンチ西側	第30層		8.2	1.3		口縁部は底部からゆるやかに外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	13世紀
36	土師器小皿	8トレンチ西側	第31層		9.9	1.0		口縁部は底部からゆるやかに外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	13世紀
37	瓦器碗口縁部	23トレンチ	第5～10層					内面に太く粗いミガキ。	Ⅲ-3～Ⅳ-3
38	須恵器坏蓋	24トレンチ	第８層	11.4				内面のかえりは口縁端部より下方に張り出す。	陶邑Ⅲ-1
39	須恵器坏蓋	24トレンチ	第８層	13.3				天井部平らに近く、端部の屈曲はゆるやか。	陶邑Ⅳ-3
40	須恵器坏蓋	24トレンチ	第８層					内面の小さいかえりが口縁端部より下方に出る。	陶邑Ⅲ-1～2
41	須恵器坏蓋	24トレンチ	第８層					内面の小さいかえりが口縁端部より下方に出る。	陶邑Ⅲ-1～2
42	須恵器坏身	24トレンチ	第８層	11.8				体部丸みをもつがやや扁平気味。内傾する短い立ち上がりをもつ。底部外面はヘラケズリ	陶邑Ⅱ-5
43	須恵器壷口縁部	24トレンチ	第８層	16.3				外反する口縁端部が肥厚し下方に短く伸びる。	

表9　シシヨツカ古墳出土土器観察表（4）

挿図番号		器種	出土個所	層位ほか	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
第68図	1	土師器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	17.1		3.9		口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる坏A。端部は軽く巻き込み、内側に沈線が巡る。底部外面はヘラケズリ。口縁部以下底部までヨコナデ。口縁部内面に斜放射状暗文。	平城Ⅱ～Ⅲ
	2	土師器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	17.0				口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる坏A。調整不明。	平城Ⅱ～Ⅴ
	3	土師器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	15.8				口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる坏A。調整不明。	平城Ⅱ～Ⅴ
	4	土師器Ⅲ	6トレンチ南端	第270～276層	17.0				口縁部が底部から丸みのもって斜上方に立ち上がる坏A。口縁端部の肥厚小さく目立たず。内外面ヨコナデ。	平城Ⅲ～Ⅴ
	5	土師器碗	6トレンチ南端	第273層	16.8				内彎する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下は指オサエ。	平城Ⅲ～Ⅴ
	6	土師器椀	6トレンチ南端	第270～276層	13.8				内彎する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下は指オサエ。	平城Ⅲ～Ⅴ
	7	土師器椀	6トレンチ南端	第270～276層	15.2				内彎する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。調整不明。	平城Ⅲ～Ⅴ
	8	土師器椀	6トレンチ南端	第273層	20.0				内彎する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下はヘラケズリ。	平城Ⅲ～Ⅴ
	9	土師器椀	6トレンチ南端	第270～276層	14.6		3.8		内彎する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下は指オサエ。	平城Ⅲ～Ⅴ
	10	土師器Ⅲ	6トレンチ南端	第270～276層	16.2		3.0		ゆるやかに外反し端部をやや内傾気味に丸く仕上げるⅢA。調整不明。	平城Ⅲ～Ⅴ
	11	土師器Ⅲ	6トレンチ南端	第270～276層	17.0		2.5		ゆるやかに外反し端部をやや内傾気味に丸く仕上げるⅢA。調整不明。	平城Ⅲ～Ⅴ
	12	土師器坏蓋	6トレンチ南端	第273層					天井部から滑らかに下る端部を丸く仕上げる坏Bの蓋。	平城Ⅱ～Ⅴ
	13	土師器Ⅲ口縁部	6トレンチ南端	第273層					内彎して立ち上がる口縁端部をもつⅢAか。端部は内傾し、外端面をなす。内外面ヨコナデ。	平城Ⅳ～Ⅴ
	14	土師器坏またはⅢ口縁部	6トレンチ南端	第272層					底部から内彎して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、端部内側に丸める坏AまたはⅢA。口縁内面に放射状暗文。	平城Ⅲ～Ⅴ
	15	土師器坏またはⅢ口縁部	6トレンチ南端	第272層					底部から内彎して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、端部内側に丸める坏AまたはⅢA。調整不明。	平城Ⅳ～Ⅴ
	16	土師器坏身口縁部	6トレンチ南端	第272層					底部から内彎して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、端部内側に丸める坏AまたはⅢA。調整不明。	平城Ⅳ～Ⅴ
	17	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第272層					くの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわずかに巻き込み外端面をなす。内面に横方向のハケメ、外面ヨコナデ。	7世紀後半～8世紀前半
	18	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					くの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわずかに巻き込み外端面をなす。内面に横方向のハケメ、外面不明。	7世紀後半～8世紀代
	19	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					くの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわずかに巻き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
	20	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					くの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわずかに巻き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
	21	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					くの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわずかに巻き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
	22	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					くの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部を内へ折り曲げる。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
	23	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第273層					くの字形に外反し、口縁端部の内側への巻き込みが目立たず、小さな外端面をなす。口縁部内外をヨコナデ。	8～9世紀
	24	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					くの字形に外反し、口縁端部の内側への巻き込みが目立たず、小さな外端面をなす。口縁部内外をヨコナデ。	8～9世紀
	25	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第273層					くの字形に外反し、口縁端部の内側への巻き込みが目立たず、小さな外端面をなす。調整不明。	8～9世紀
	26	土師器短頸壺	6トレンチ南端	第273層	13.2				肩の張った体部に直立する短い口縁部がつく壺A。口縁部内外面ヨコナデ。ほか調整不明。	平城Ⅱ
	27	土師器壺底部	6トレンチ南端	第270～276層		10.3			低い高台がつく壺Aの底部。外面に横方向のヘラミガキ残る。	平城Ⅱ
	28	土師器壺口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	15.2				体部から直立気味に立ち上がり口縁端部は外反し、上に軽い端面をなす。口縁部内面ヨコナデ。ほかは調整不明。	7世紀後半～8世紀代
	29	土師器把手	6トレンチ南端	第270～276層					壺または甕（鍋）三角状把手。	8世紀代
	30	土師器羽釜鍔部	6トレンチ南端	第270～276層					口縁部下に水平につく鍔部。	7世紀後半～8世紀中頃
	31	土師器羽釜口縁部	6トレンチ南端	第273層					外反する口縁部下に鍔がつく。	7世紀後半～8世紀中頃
	32	土師器羽釜口縁部	6トレンチ南端	旧耕土・攪乱盛土	26.2				羽釜の外反する口縁部。	7世紀後半～8世紀中頃
	33	土師器甕	6トレンチ南端	第270～276層	15.6				球形の体部から口縁部が直立気味に立ち上がり、端部は軽く外反し小さく丸める。頸部内外面はヨコナデ、体部は指オサエの後、ナデ。	7世紀前半～8世紀代

表10　シシヨツカ古墳出土土器観察表（5）

挿図番号	器種	出土個所	層位ほか	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
34	須恵器坏蓋	6トレンチ南端	第273層	14.4				端部は内方へ屈曲させている。	陶邑Ⅳ-1～2
35	須恵器坏蓋	6トレンチ南端	第270～276層	15.2				端部は内方へ屈曲させている。	陶邑Ⅳ-1～2
36	須恵器坏蓋口縁部	6トレンチ南端	第273層					端部は内方へ屈曲させている。	陶邑Ⅳ-1～2
37	須恵器坏蓋口縁部	6トレンチ南端	第273層					端部は内方へ屈曲させている。	陶邑Ⅳ-1～2
38	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					逆ハの字形に外反する口縁部。	陶邑Ⅲ-3～Ⅳ
39	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273層	15.4	11.0	7.0		ゆるやかにS字形を描いて外反する口縁部。底部端やや内側に幅広の高台がつき、内端面で接地する。底部外面回転ナデの際に工具があたった痕跡あり。	陶邑Ⅳ-3
40	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273層	14.8	10.4	5.3		逆ハの字形に外反する高い口縁部。比較的高く細い高台が底端部付近につく。	陶邑Ⅳ-3～4
41	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273層	13.4	10.0	3.9		やや内彎気味に立ち上がる口縁部。底端部に低い幅広の高台がつく。	陶邑Ⅳ-3
42	須恵器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	13.9	8.8	4.1		逆ハの字形に外反する口縁部。底端部よりやや中心寄りに低い幅広の高台がつく。	陶邑Ⅳ-1～2
43	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273～275層	12.9	4.2	4.5		直線的に外反する口縁部。やや幅の狭い高台が底端部につく。	陶邑Ⅳ-3～4
44	須恵器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	15.0	9.8	5.1		やや内彎気味に外斜方へのびる口縁部。底端部に直立する幅広の高台がつく。外端面が接地面となる。	陶邑Ⅳ-3～4
45	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層		13.8			底端部近くに幅広の低い高台が逆ハの字形につく。接地面はほぼ平坦。	陶邑Ⅳ-3～4
46	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	14.4				逆ハの字形にゆるやかに外反する口縁部。	陶邑Ⅳ
47	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	12.8				逆ハの字形にゆるやかに外反する口縁部。	陶邑Ⅳ
48	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	15.4				内彎気味に立ち上がる口縁部。	陶邑Ⅳ
49	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第271・272・276・289層	11.1	4.2			S字形のカーブを描いて外反する口縁部。	陶邑Ⅲ-2～Ⅳ
50	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		11.8			底端部に低い幅広の高台が逆ハの字形につく。内端面が接地面となる。	陶邑Ⅳ-3～4
51	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		10.0			直立気味に立ち上がる体部。底端部やや中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平坦面をなす。	陶邑Ⅳ-2～3
52	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層		11.4			底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平坦面をなす。	陶邑Ⅳ-2～3
53	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		7.8			底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平坦面をなす。	陶邑Ⅳ-2～3
54	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		12.0			底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平坦面をなす。	陶邑Ⅳ-2～3
55	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		11.4			ハの字形に開く細く高い高台が底端部より中心寄りにつく。	陶邑Ⅳ-1～2
56	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		12.3			やや内彎気味に立ち上がる口縁部。底端部に低い幅広の高台がつく。	陶邑Ⅳ-3
57	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		10.4			ハの字形に開く細い高台が底端部付近につく。	陶邑Ⅳ-3～4
58	須恵器小型壷底部	6トレンチ南端	第270～276層		7.0			底端部に低い高台がつく。	陶邑Ⅳ
59	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		9.4			底端部に幅広でやや高い高台がハの字形につく。内端面が接地面となる。	陶邑Ⅳ-3～4
60	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層		8.4			底端部に低い高台がつく。戦地面は平坦面をなす。	陶邑Ⅳ-3
61	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		7.8			底端部に低い高台がつく。接地面は平坦面をなす。	陶邑Ⅳ-3
62	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層		12.0			ハの字形に開く細くて高い高台が底端部よりやや中心寄りにつく。	陶邑Ⅳ-1～2
63	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層					ハの字形の細く低い高台。接地面平坦。	陶邑Ⅳ-3～4
64	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層					低く幅広の高台が底端部につく。	陶邑Ⅳ-4
65	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層					底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。	陶邑Ⅳ-2～3
66	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層					高台が底端部につく。	陶邑Ⅳ-3～4
67	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層					底端部に低い幅広の高台がつく。	陶邑Ⅳ-3

表11　シシヨツカ古墳出土土器観察表（6）

挿番	図号	器種	出土個所	層位ほか	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
	68	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層					細い高台が底端部付近直立するようにつく。	陶邑Ⅳ-3～4
第69図	1	須恵器壷口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	17.2				口縁端部上に面をなす短頸壷か。内面に沈線が巡る。	
	2	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第273層	25.4				短く外反して立ち上がる口縁部。端部内側に面をなす。直口壷の可能性もあり。	陶邑Ⅱ～Ⅳ
	3	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第259・268・269層	28.2				外反する口縁部で端部が肥厚し、外端面をなす。	陶邑Ⅳ
	4	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第273層	20.0				ゆるやかに外反する口縁部。鉢の可能性もあり。	陶邑Ⅳ
	5	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	20.5				外反する口縁部で端部が肥厚し、外傾する面をなす。体部外面平行叩き。	陶邑Ⅳ
	6	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	22.0				ゆるやかに外反する口縁部で、端部がわずかに肥厚して内側に稜をなす。	陶邑Ⅲ
	7	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	26.0				外反する口縁部で端部が肥厚し、外傾する面をなす。	陶邑Ⅳ
	8	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第273層					ゆるやかに外反する頸部から外端面をなす口縁部にいたる。外面に鈍い凸線状の上下の条線に挟まれて波状文の文様帯がある。	陶邑Ⅰ-4・5～Ⅱ
	9	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					外反する口縁部で端部が肥厚し、外傾する面をなす。	陶邑Ⅳ
	10	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					ゆるやかに外反し、端部丸く仕上げる。	
	11	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					外反する口縁部の端部が直立して立ち上がり丸く仕上げる。	
	12	須恵器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					口縁端部が肥厚し、内傾して上端稜をなす。	
	13	須恵器鉢口縁部	6トレンチ南端	第270～276層					内彎する口縁部で、端部は丸い。	陶邑Ⅳ-1～3
	14	須恵器小型壷体部	6トレンチ南端	第270～276層				体部最大径7.7	やや肩の張る小型の長頸壷の体部。外面に沈線巡る。	陶邑Ⅳ
	15	須恵器壷肩部	6トレンチ南端	第270～276層				体部最大径19.0	肩の張る体部。広口壷か。	陶邑Ⅲ-3～Ⅳ-3
	16	須恵器壷体部	6トレンチ南端	第270～276層				体部最大径19.4	肩の張る体部。	陶邑Ⅲ-3～Ⅳ-3
	17	須恵器壷体部	6トレンチ南端	第270～276層				体部最大径24.0	肩の張る体部。広口壷か。	陶邑Ⅲ-3～Ⅳ-3
	18	須恵器壷底部	6トレンチ南端	第270～276層		11.8			幅の狭い低い高台がハの字形につく。接地面は平坦である。	陶邑Ⅲ-2・3～Ⅳ
	19	須恵器壷底部	6トレンチ南端	第270～276層		11.2			比較的高い幅広の高台がハの字形につく。接地面は平坦である。	陶邑Ⅲ-2・3～Ⅳ
	20	須恵器壷底部	6トレンチ南端	第273層		10.0			低く小さい高台がハの字形につく。外端部が接地面となる。	陶邑Ⅲ-2・3～Ⅳ
	21	須恵器壷底部	6トレンチ南端	第273層		10.6			幅広の高い高台がハの字形につく。内端部が接地面となる。	陶邑Ⅲ-2・3～Ⅳ
	22	瓦器椀	6トレンチ南端	第273層	13.8				薄い器壁。椀の丸みの形態をとどめる。内外面の調整は不明。	Ⅲ－1～2
	23	瓦器椀口縁部	6トレンチ南端	第273層					薄い器壁。椀の丸みの形態をとどめる。内外面の調整は不明。	
	24	土師器小皿	6トレンチ南端	第270～276層	8.8		2.0		丸みのある底部から内彎気味にのびる口縁部。端部は丸く仕上げる。調整不明。	
	25	土師器小皿	6トレンチ南端	第273層	11.1		3.0		深みのある皿。口縁部ヨコナデ。	13世紀
	26	土師器小皿	6トレンチ南端	第270～276層	12.9		3.3		深みのある皿。口縁部強いヨコナデにより外反し端部細く丸める。	13世紀
	27	磁器碗	6トレンチ南端	第273層	11.1	4.2	6.0		五弁花文碗。畳付無釉で使用時に畳付をすり減らし。波佐見窯系。	18世紀

撹乱土出土土器（第63図1～12）　墳丘南斜面の撹乱部分から出土した染付磁器碗（1）以外の土器類は、すべて石室内の撹乱土（第207層）より出土している。この土層では13～14世紀の土器（2～6）が、葬送の儀礼に用いられた須恵器の破片（7～12）とともに出土している。

石室礫敷面出土土器（第64図）　閉塞石の北側の礫敷に接地し、ほぼ1個体が腰高の均斉の取れた器で6世紀後半と考えられる。

羨道部出土土器（第45・46図）　羨道入口から2.0～2.2 mで、羨道両側壁際に接して正立状態で埋められた甕と、西側の甕に納められていた高杯である。これらの土器は、出土状態からみて葬送の最終的な段階で、一括して埋置されたものである。高杯は脚部が全高に占める割合が、74.7％（1）、76.6％（2）、76.3％（3）、80.7％（4）といずれも長脚化のピークを示している。また透かし窓の切り取りの際についた杯部底面の金属製工具による鋭い刃先の痕跡や砂粒の目立たない精良な胎土、端部や稜のシャープさと均斉のとれた器形は、製作後ほかに用いられることなく古墳に納められたものと思われる。これらの土器を一括して6世紀後半～末とみたい。

周溝出土土器（第67図）　周溝内出土の土器はほとんどが中世の耕作土の堆積層から出土しているが、周溝の底面で出土した土器もある。撹乱のため残存状態はよくなかったが、墳丘東側第1段テラス面の名残と思われる窪みに堆積した、黒褐色砂質土（第7トレンチ東側断面第53図第56層）出土の須恵器杯蓋（6）、西側周溝底面の褐色粘質土（第7トレンチ西側断面第53図第64層）出土の須恵器杯身（11）、同24トレンチの褐色粘質土（第54図第8層）出土の須恵器（38～43）、南側周溝の黒色土（第8トレンチ東側第53図第43層）出土の土師器（13・14）、須恵器（17・19～25）がある。これらのうち西側周溝の須恵器杯身（11）は他に混入する遺物はなく、古墳の時期の一端を示す6世紀後半と考えられる。一方、第8トレンチの須恵器は第6トレンチの古墳周溝堆積土（第278層）に連続する土質であり、それは周溝の埋没を示すもので、時期的には7世紀末～8世紀と思われる。24トレンチもまた同様の須恵器を含んでいる。その他の土器類は以上の土層より上位の堆積土より出土しており、8世紀以降中世～近世に至る耕作土に混入したものである。

前面テラス状施設削平盛土出土土器（第68・69図）　第6トレンチ南端部テラスを削った後の盛土中から出土した土師器・須恵器・瓦器などである。

シシヨツカ古墳の南北縦断面を観察するトレンチとして設定した第6トレンチでは厚さ0.4～0.5 mの新旧耕土・床土を除くと、シシヨツカ古墳の墳丘第1段裾より南へ16.0 m付近のT.P.117.4 mから、前面テラス状施設裾の22.0 m付近のT.P.115.6 mに至る6.0 m間に後世の棚田の拡張状況を示す堆積土が観察される。これら一連の盛土は古墳の前面テラス状施設の盛土を北から南にかけて斜めに断ち切る形で堆積する。堆積土は黄褐色系の砂質土・粘質土で、10.0～50.0㎝大の石を多量に含んでいる。棚田造成の際の石積みが4段ほど北側斜面に認められる（第276層の南斜面に積み上げられた石積み）。また、その後南へと継ぎ足して棚田の拡張が行われ（第272～275層）、それが最終的に現在の石積みとなっている。これらの堆積

土からはコンテナ4杯分の奈良時代の土師器・須恵器、中世の瓦器、近世の磁器碗、縄文時代サヌカイト製石鏃などが、第272～275層を中心に出土した。土器は、7世紀後半から18世紀に及ぶ土器類で、量的には8世紀代の土師器・須恵器が圧倒的に多い。しかし13世紀代の瓦器や、18世紀の磁器碗が少量ながら出土しているので、この部分の一連の盛土は最終的に近世の開墾によるものと考えられる。

埋葬施設内出土遺物

第57図に示した石室内堆積土層の第207・208層より出土した遺物である。これらの土層は、奥室・前室ともに徹底的に撹乱され、盗掘坑下まで掻き出されて溜まったものである。当然のことながら、本来の副葬位置、共伴状態を保つ遺物ではない。破片の多くは上記の土壌を慎重に水洗いして採取した。その中で仕切石と閉塞石の間の礫敷に銹着した鏡板、挂甲小札、鉄鏃などの金属製品は、四耳壺とともに当初の位置を辛うじて保ったと考えられる。

装身具（第70図）

銀製空玉（1）は厚さ0.25㎜の薄板を用い、径5～6㎜の球体を形づくった製品が半割れ状態となったその破片である。内面に半球体2つを接合した痕跡が認められる。

瓔珞鎖（2～7）は直径0.92～1.69㎜の銅線を2本合わせ、撚って径1.38～2.16㎜の鎖としている。一端に3.5～4.0㎜の環を得ている破片がある。

金銅製小環（8）は径1.0㎜の銅線を用いて、径4.0～5.0㎜の環としている。銅線両端の重なりの状態から撚りが欠けていることが分かる。垂飾に用いられたものと考えられる。

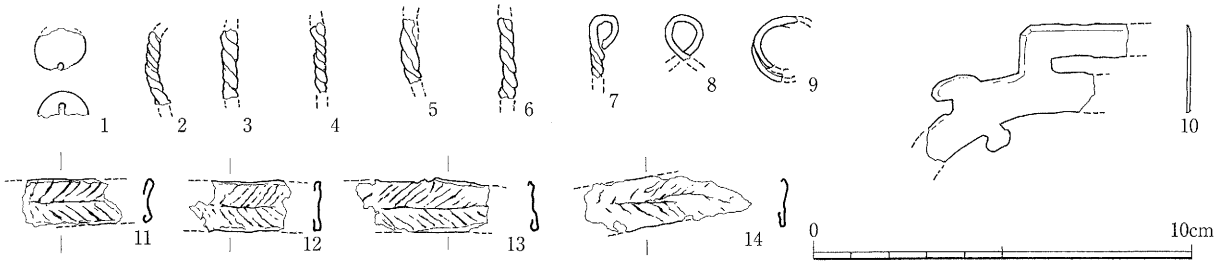
銀製環（9）は径0.65㎜の銀製を螺旋状に巻いて径7.0㎜の環としたものの破片である。これも垂飾の一部と思われる。

銀製帯飾（10）は、銙板に付ける垂飾金具で、ハート形垂飾の円弧をなす肩部から幅5.0㎜の帯状の懸垂部の破片である。肩部には下向する短い髭がまた内側には滴状の飾りが付く。懸垂部上辺からハート形部の下辺までは1.15㎝を測る。他に細破片があるが接合できるものはない。

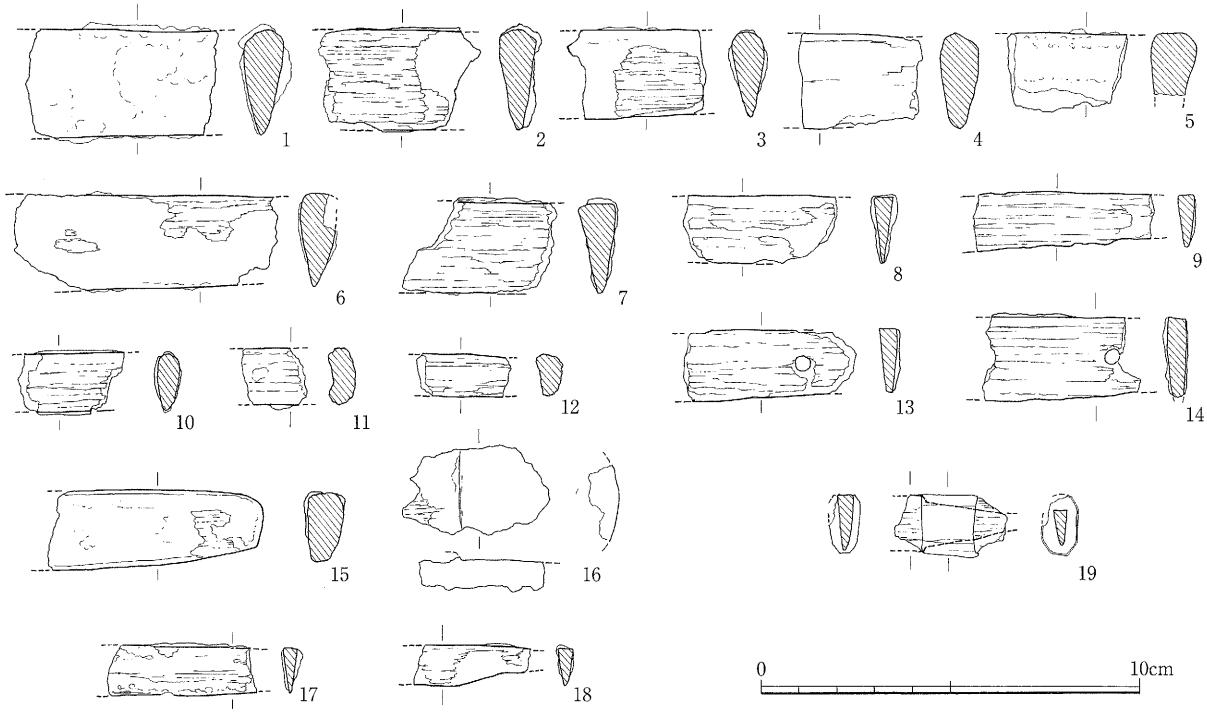
金銅製指環（11～14）は、幅8.0～9.0㎜の金薄板を両端から内側に1回程度折り曲げて基盤の銅の薄板に固定させている。表面には5本/5.0㎜の綾杉文を打ち出している。残存長は2.4㎝、1.3㎝、1.1㎝、1.8㎝を測る。

金糸（図版115）は金の薄板を幅1.0㎜ほどに裁断した截金を螺旋状に巻いている。幅は太いもので5.0㎜あるが、その半分くらいのものもある。また同じものでも幅狭となる部分もある。最長15.0㎝に達する破片がみられる。

ガラス玉（図版108）は、扁平な円形のいわゆる粟玉と円筒形の管玉があるが、前者が圧倒的に多い。濃紺色のものは909点（うち完形でないもの53点を含む）と最多で、径2.00～2.84㎜・厚さ1.45～1.95㎜と小形の玉である。緑色は61点あり、径2.40㎜・厚さ0.9㎜の小形、径2.67～2.97㎜・厚さ1.82～2.7㎜の中形、径3.95㎜・厚さ2.22㎜の大形がある。黄色は46点で、径2.54・厚さ1.19㎜の小形、径2.67㎜・厚さ1.68㎜の中形、径3.69㎜・厚さ2.48



第70図　装身具類実測図（1/1）



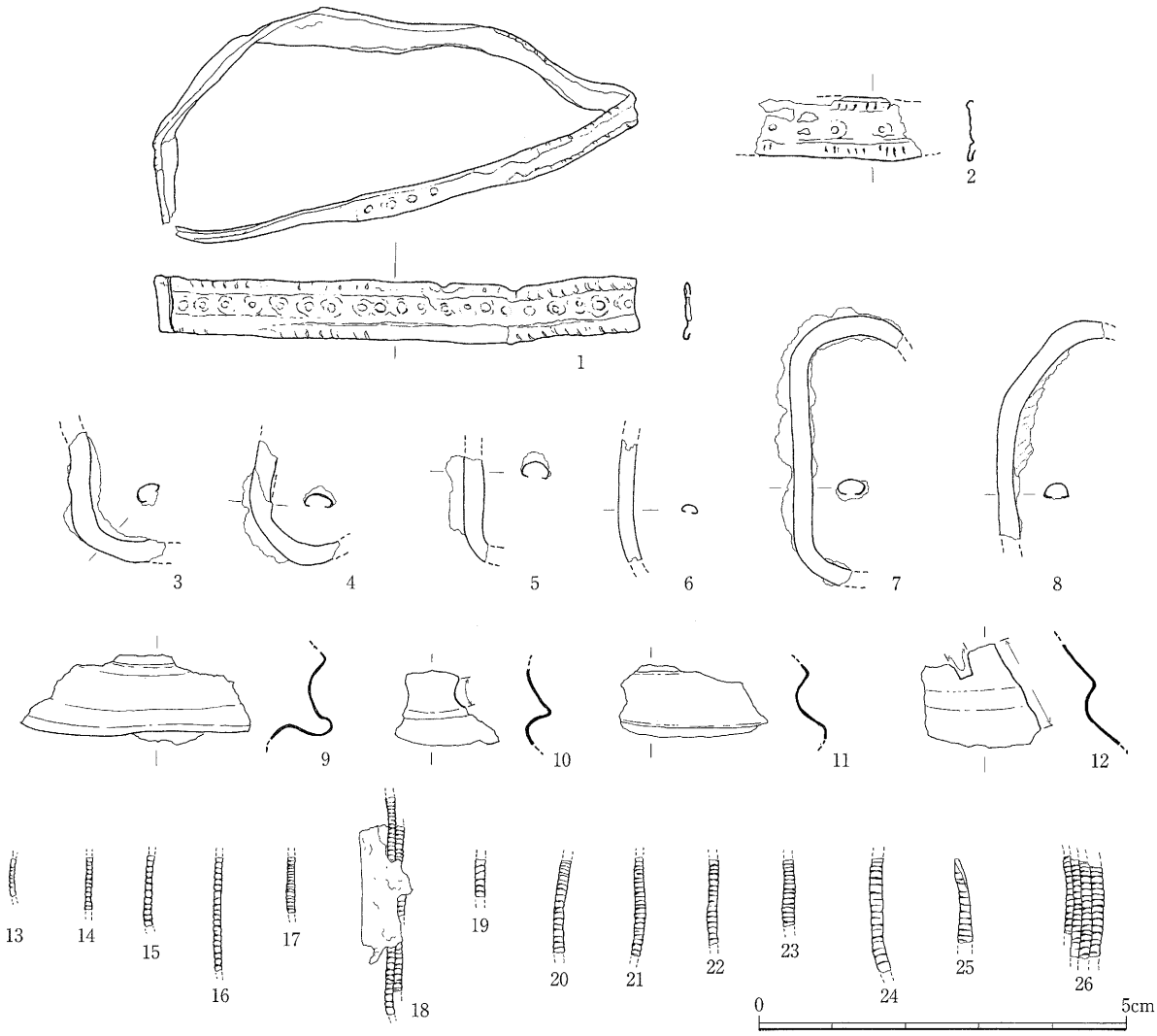
第71図　鉄刀・刀子類実測図（1/2）

㎜の大形がある。青色は35点あり、径2.66㎜・厚さ1.18㎜の小形、径2.86㎜・厚さ1.79㎜の中形、径4.66～5.61㎜・厚さ2.73～3.29㎜の大形がある。黄緑色は16点を数え、径3.17～3.24㎜・厚さ1.53～1.66㎜の小形と径4.23～4.65㎜・厚さ2.15～3.48㎜の大形がある。それらの総計は1067点となる。このほかに、長さ2.26～2.50㎜・径1.95～1.99㎜・孔径0.80㎜前後の濃紺色の管玉3点がある。

武器類　鉄刀・刀子・刀装具・鉄鏃などがある。

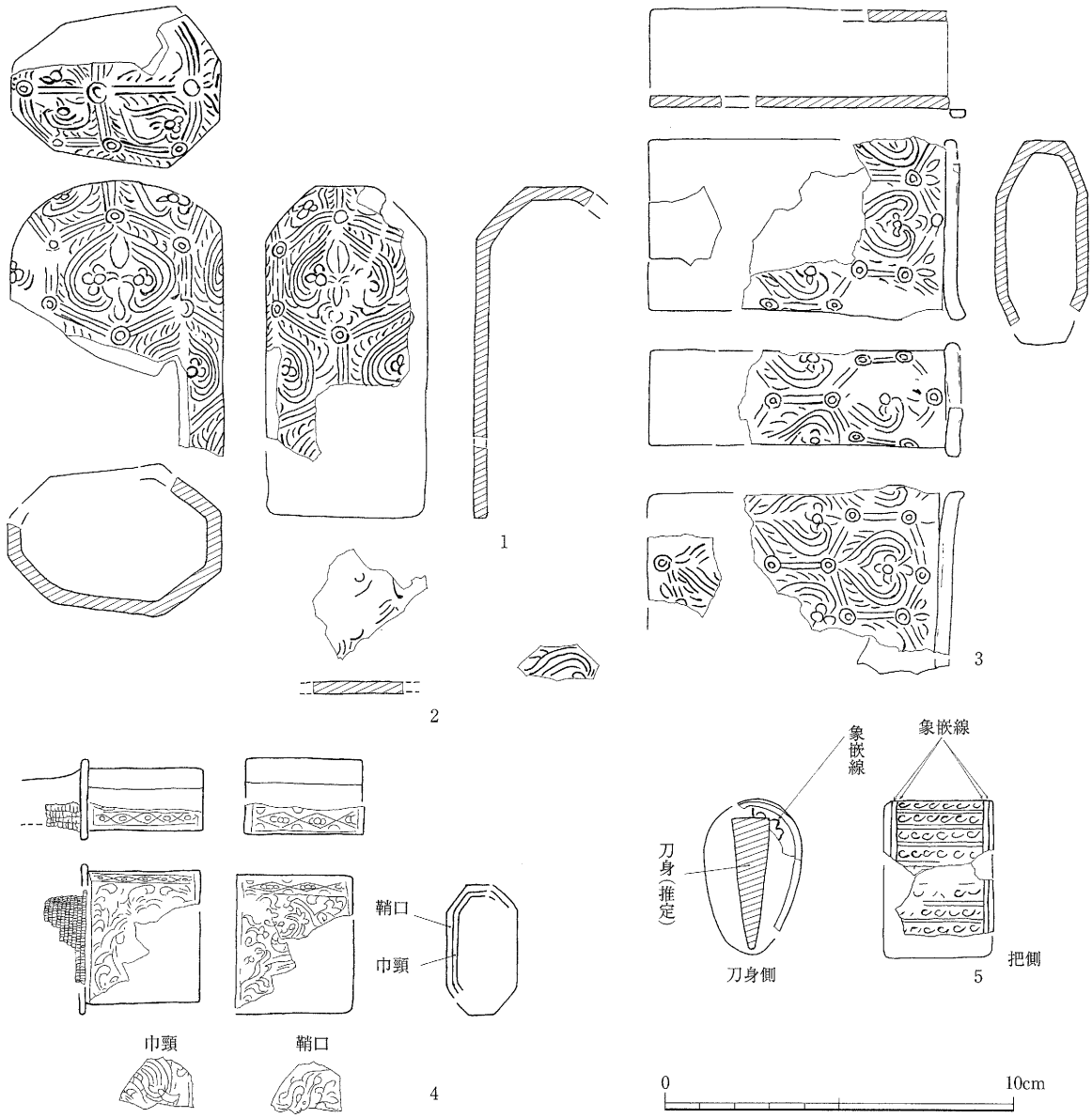
鉄刀（第71図）

刀身や茎の破片が出土している。(1) は残存長5.0㎝、最大幅2.9㎝、背幅1.0㎝で全体に木質が残る。背は上に丸みをもつ。錆膨れしているが、破面に1.0㎝前後の薄い鉄板を数枚重ねて半身の鉄板とし、これを2枚合わせて刀身を成している状態がうかがえる。(2) は残存長4.2㎝、



第72図　刀装具類実測図（1/1）

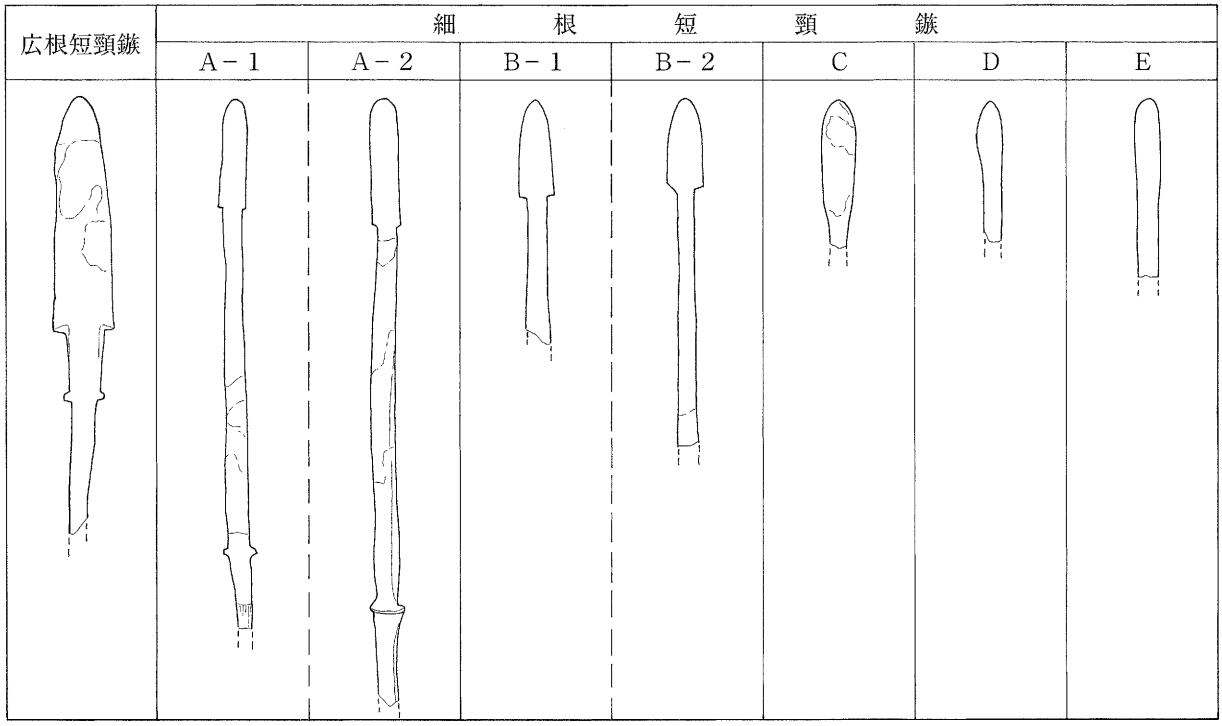
最大幅2.7㎝、背は上に丸みをもつ。破面には2枚の鉄板を張り合わせて、刀身をなしている様子がうかがえるが、半身をなす薄い鉄板の枚数は分からない。全体に木質を残す。(3)は残存長3.5㎝、最大幅2.3㎝、背幅0.8㎝、背は上に丸みをもつ。破面に鉄板を合わせ刀身をなしている状態がかろうじてうかがえる。木質が全体に残る。(4)は残存長3.2㎝、最大幅2.5㎝、背幅0.9㎝、背は上に丸みをもつ。背表面の木質の剥がれたところには鉄板を重ねた合わせ目がかろうじてうかがえる。(5)は残存長3.1㎝、残存最大幅1.9㎝、背幅1.3㎝、刃部を欠く。背は上面が平坦である。(6)は残存長6.9㎝、最大幅2.6㎝、背が欠けているが、背幅1.0㎝程度と思われる。破面に鉄板の剥がれた亀裂がみえ、図の反対側には、鉄板の剥がれた痕跡がある。全体に木質残す。(7)は残存長4.0㎝、最大幅2.5㎝、背幅1.0㎝。断面は、逆三角形をなし背上面は平坦である。(8)は残存長4.0㎝、最大幅1.8㎝、背幅0.5㎝、断面逆三角形である。刀子または小刀の刀身と思われる。全体に木質を残す。(9)は残存長4.85㎝、最大幅1.5㎝、背幅0.4㎝、断面は逆三角形をなす。やはり刀子または小刀ではないかと思われる。(10)は残存長2.7㎝、最大幅1.5㎝、



第73図　象嵌刀装具類実測図（西山要一原図）（1/2）

背幅0.5㎝、全体に木質を残す。茎部の破片かと思われる。（11）は残存長1.8㎝、最大幅1.5㎝、（12）は残存長2.4㎝、最大幅1.1㎝、いずれも茎の破片かと思われる。（13）は残存長4.4㎝、最大幅1.9㎝、背幅0.4㎝の茎の破片である。背上面は平坦である。端部近くに径0.4㎝の目釘孔がある。（14）は茎の破片で残存長4.2㎝、最大幅2.3㎝、背幅0.5㎝で、0.5㎝の目釘孔がある。（15）は残存長5.7㎝、最大幅2.1㎝、背幅0.8㎝の茎端の破片である。茎が尻側に向ってやや細くなり、曲線をなす。図の反対側は鉄板の剥がれた痕跡がある。（16）は鞘木片で責金具の銅板が剥がれた緑青の痕跡がある。

刀子（第71図17～19）（17・18）は、いずれも刀子の茎部の破片と思われる。（17）は残存長3.9㎝、最大幅1.3㎝で、背幅0.4㎝の断面長三角形をなす。（18）は茎端部の破片であり、残存長3.1㎝、最大幅1.0㎝で、尻側に至っては0.5㎝程度にしぼむ。（19）は茎から刃部へ移行する部分の破片で、茎尻へ向ってしぼんでいる。関は背、刃ともに軽い角度をもって移行する。背は刃、茎ともに平造りで、整った長三角形の断面をなしている。刃部幅は2.0㎝、茎中央で0.5㎝、端部で0.25㎝となる。背幅は刃部で0.4㎝、茎部で0.3㎝である。これを包む柄木の木質



第74図　鉄鏃形式模式図

の上から銀製の鎹を施している。鎹の長さは 1.4㎝、幅 1.7㎝、厚み 0.9㎝で断面は整った八角形をなす。

刀装具（第 72 図）　（1）は鞘の装飾を兼ねた責金具で、厚さ 0.08㎝、幅 0.7 ～ 0.8㎝の金銅製環の縁帯両側に幅 0.2㎝の刻文を、その内側に径 0.4㎝の魚子文を打ち出す。縁帯は、裏側へ約 0.1㎝折り返しているが、これは厚さ 0.1㎝程度の銅板に固定するためのものである。裏面には銅板の緑青が残っている。この金の薄板の延長は約 15㎝を測る。この寸法は第 73 図 3 の亀甲繋鳳凰文銀象嵌鞘尻金具の断面によって復原される外周の寸法に合う。（2）は残りは悪いが 1 と同じく責金具の破片と思われる。厚さは 0.1㎝とやや厚みがある。（3 ～ 8）は 0.4 ～ 0.5㎝幅の銀製薄板による責金具で、厚みは 0.2 ～ 0.25㎝あり、内側に巻き込んで鉄芯に被せる。（4）に鉄芯が残り、（8）には内側に木質が残る。（8）は先の銀象嵌鞘尻金具の八角形断面に合うかのような屈曲をとどめる。（9 ～ 12）は銀製刀装具と思われる破片である。接合できず全形を知りえない。厚さ 0.25 ～ 0.5㎝の薄い銀板を曲げて強く突出する稜や角をつける。（10）の上半両側は切り込み面であり、（12）の上半の中央には逆台形の小さい切込みがあり、また右側全体も切り込み面となっている。いずれも透かしの痕跡である。全体に灰色に変色している。（13 ～ 26）は柄間銀線葛巻の破片である。幅 0.9 ～ 2.0㎝前後と広狭があり、断面は扁平な蒲鉾形（24・25）がみられれるが、大半が三角形である。鏨による刻みをつけ山形の浮彫りをなす。刻みは 5 ～ 6 刻み /5 の粗いものから 14 ～ 15 刻み /5 の非常に細かいものまである。しかし接合して残った破片（26）からみると必ずしも幅や刻みが揃っている訳ではないようである。銀はすべてやや暗い灰色に変色している。

表12　シシヨツカ古墳出土鉄鏃計測表

広根鏃　　単位cm　( )内残存寸法

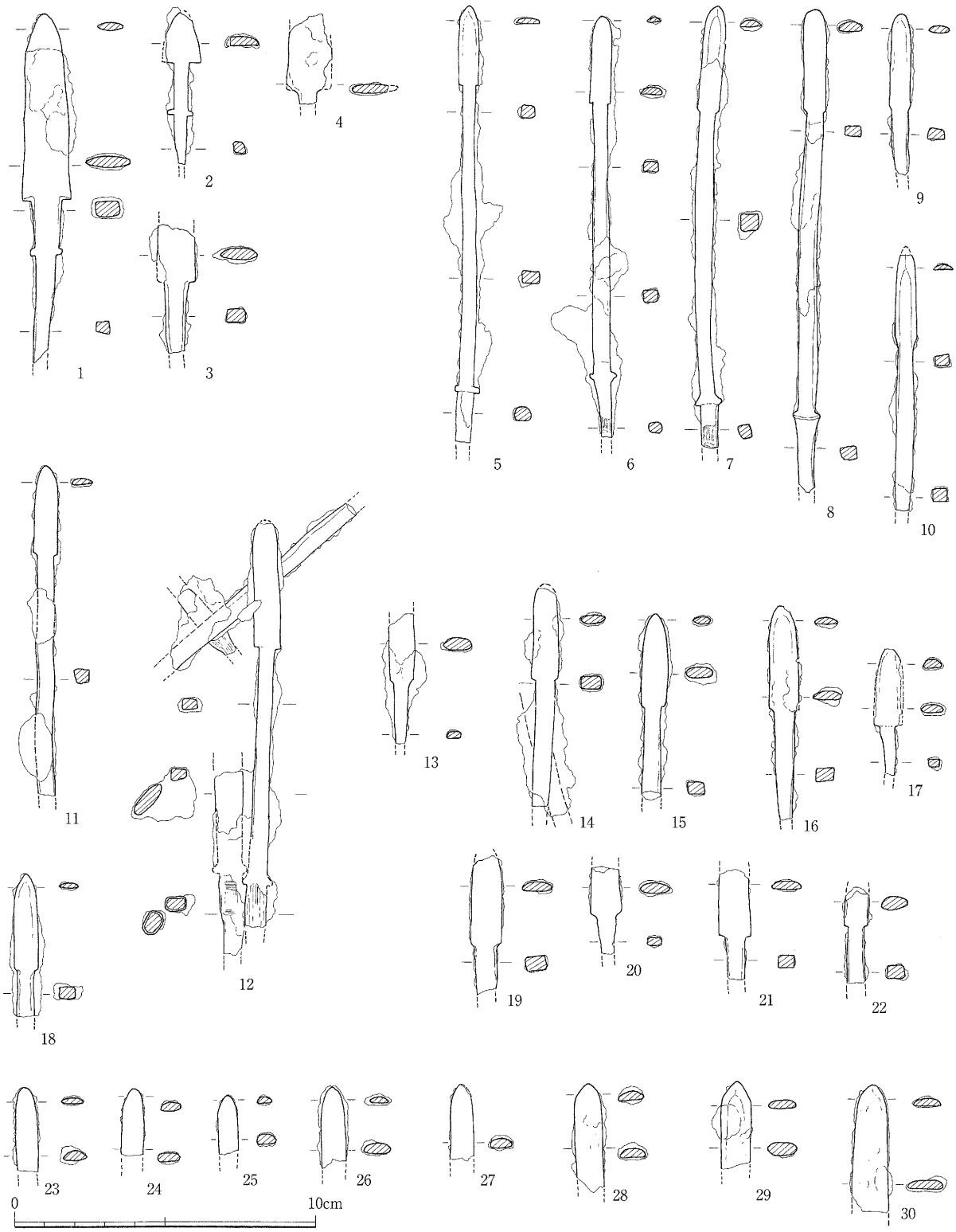
挿図番号		全長	鏃長	鏃幅	刃厚	頸長	茎長	棘幅
第75図	1	(4.2)	6.2	1.6	0.4	1.7	(3.6)	1.1
	2	(5.0)	(1.7)	(1.1)	0.3	1.6	(1.7)	0.7
	3	(4.3)	(1.8)	1.2	0.4	(2.2)		
	4	(3.0)	(2.4)	1.5	0.3	(0.4)		

細根長頸鏃

形式	挿図番号		全長	鏃長	鏃幅	刃厚	頸長	茎長	棘幅
A-1	第75図	5	(14.6)	2.6	0.7	0.2	10.1	(1.7)	0.8
		6	(14.1)	2.9	0.7	0.2	9.1	(2.0)	0.9
A-2		7	(14.7)	3.4	0.7	0.2	9.8	(1.5)	0.9
		8	(16.1)	3.4	0.7	0.3	10.1	2.5	0.9
		9	(5.4)	3.1	0.7	0.2	(2.2)		
		10	(8.6)	2.9	0.7	0.2	(5.5)		
		11	(11.0)	2.9	0.8	0.2	(7.9)		
		18	(4.8)	3.2	0.8	0.2	(1.6)		
		12	(13.4)	4.1	0.8	0.3	7.8	(1.4)	
		14	(7.3)	(3.0)	0.8	0.3	(4.2)		
		15	(6.2)	3.1	0.8	0.3	(3.1)		
		13	(4.3)	(2.2)	0.8	0.3	(2.1)		
		17	(4.2)	2.6	0.9	0.3	(1.6)		
		16	(7.1)	3.3	0.9	0.2	(3.7)		
		19	(4.6)	(3.0)	1.0	0.3	(1.6)		
		20	(2.9)	(1.5)	1.0	0.4	(1.3)		
		21	(3.7)	(2.2)	1.0	0.3	(1.4)		
		22	(3.2)	(1.3)	0.7	0.2	(1.9)		
A		23	(2.8)	(2.8)	0.7	0.2			
		24	(2.2)	(2.2)	0.7	0.3			
		25	(2.0)	(2.0)	0.7	0.2			
		26	(2.8)	(2.8)	0.8	0.3			
		27	(2.5)	(2.5)	0.8	0.2			
		28	(5.2)	(5.2)	0.9	0.3			
		29	(2.9)	(2.9)	1.0	0.3			
		30	(4.3)	(4.3)	1.1	0.3			
B-1	第76図	1	(6.5)	2.6	0.9	0.2	(3.8)		
		2	(4.2)	3.3	0.9	0.2	(0.8)		
		3	(17.2)	2.8	1.0	0.3	10.9	(3.4)	
		4	(6.9)	3.0	1.0	0.3	(3.7)		
		5	(3.9)	3.3	1.0	0.2	(0.6)		
		6	(3.8)	3.4	1.0	0.3	(0.4)		
		7	(5.1)	3.1	1.1	0.3	(2.0)		
B-2		8	(9.2)	2.3	0.9	0.3	(6.7)		
		9	(5.7)	(1.3)	0.9	0.3	(3.9)		
		10	(14.8)	2.5	1.0	0.3	9.4	(2.7)	
		11	(5.4)	(1.6)	1.1	0.3	(3.8)		
		17	(13.4)	(1.7)	1.0	0.3	10.3	(1.1)	1.0
C		12	(5.2)	1.6	0.7	0.3	(3.4)		
		13	(7.7)	(1.9)	0.7	0.3	(5.8)		
		14	(3.5)	1.8	0.8	0.3	(1.1)		
		15	(3.9)	2.7	0.9	0.2	(0.7)		
		16	(5.2)	1.9	0.9	0.2	(3.0)		
D		19	(3.7)	1.3	0.7	0.2	(2.1)		
		18	(4.6)	1.2	0.9	0.3	(3.2)		
E		20	(4.7)	2.2	0.7	0.2	(2.5)		
		21	(2.8)	(2.5)	0.7	0.3	(0.5)		
		22	(3.1)	(2.5)	0.7	0.2	(0.6)		

象嵌刀装具（第73図）　亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀柄頭（1～2）、同鞘尻金具（3）、雲龍文象嵌鞘口金具（4）、勾玉文巾頸（5）が前室から礫敷にかけての撹乱堆積土中（第57図第207層）より出土している。現地で出土状態を確認できたのは鞘尻金具のみで（第57図、図版36）、その他は同層の土を水洗して取り上げた破片である。詳細は、第2部第1章第4節の「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭柄頭」、「亀甲繋鳳凰文象嵌鞘尻金具」、「勾玉文象嵌巾頸」を参照されたい。

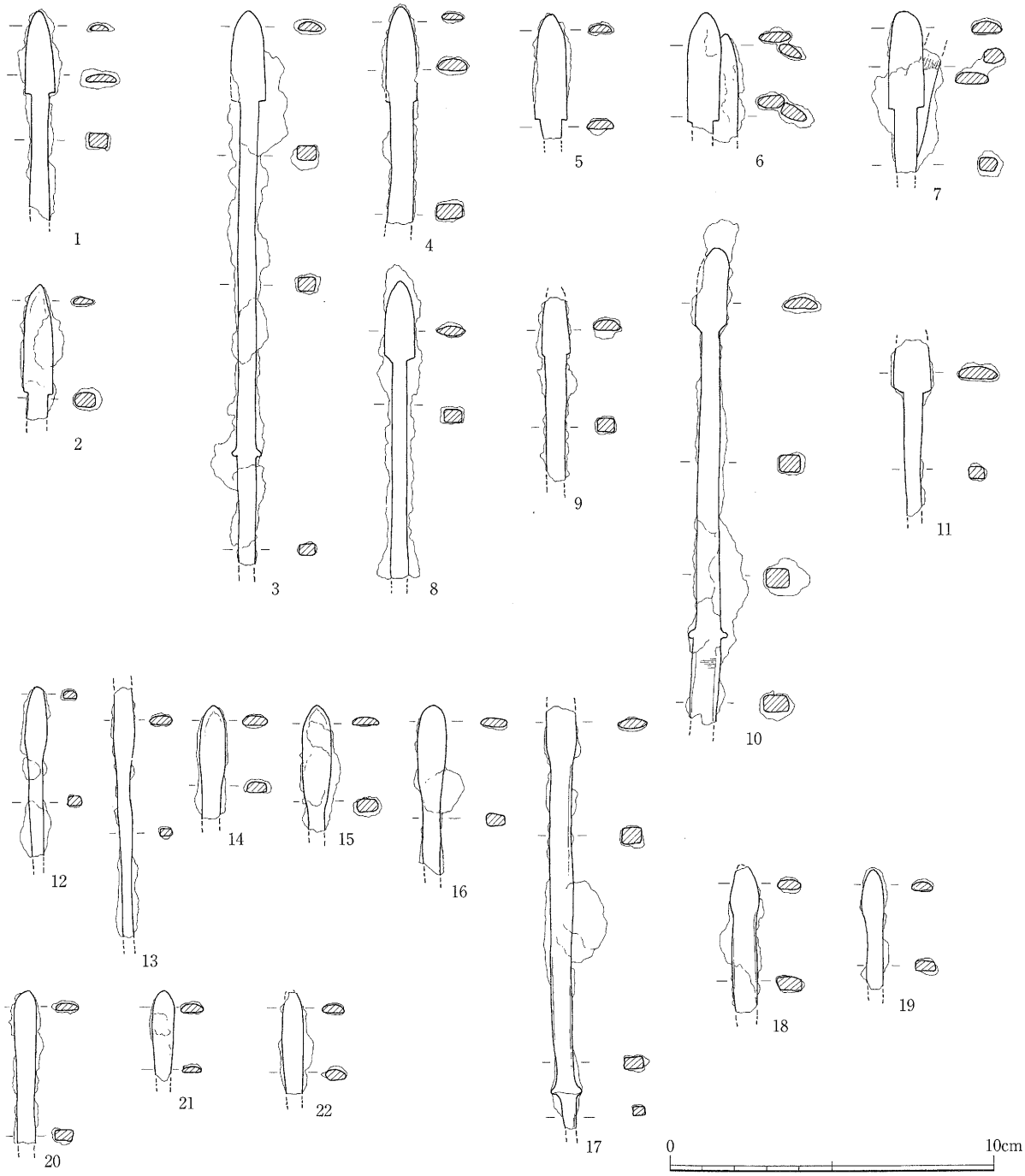
鉄鏃　仕切石や礫敷の礫に銹着した状態で出土した鉄鏃は、厚い錆に覆われて細部を観察できる個体は少ない。鏃身以外の頸部や茎以下の破片は多いが、刃部と接合できたものはわずかであった。刃部の鎬や厚さなどについても腐食による膨張のため不明なものが多い。レントゲン写真と現物を照らし合せて輪郭を捉え得た鏃身を残すものを中心として観察した結果、いくつかの形状を把握できた（第74図）。広根短頸鏃は、鏃長6cm以上、鏃幅1.6cmの長三角形を呈する鏃で、茎までの頸部の長さは1.6～1.7cmと短い（第75図1）。頸部の長さが同じで



第75図　鉄鏃類実測図（1）（1/2）

鏃身の幅がやや狭い破片があるが、詳細は分からない（第75図2～4）。出土した鏃のほとんどが細根長頸鏃であるが、形状から5つのタイプが認められる（第75・76図、表12）。

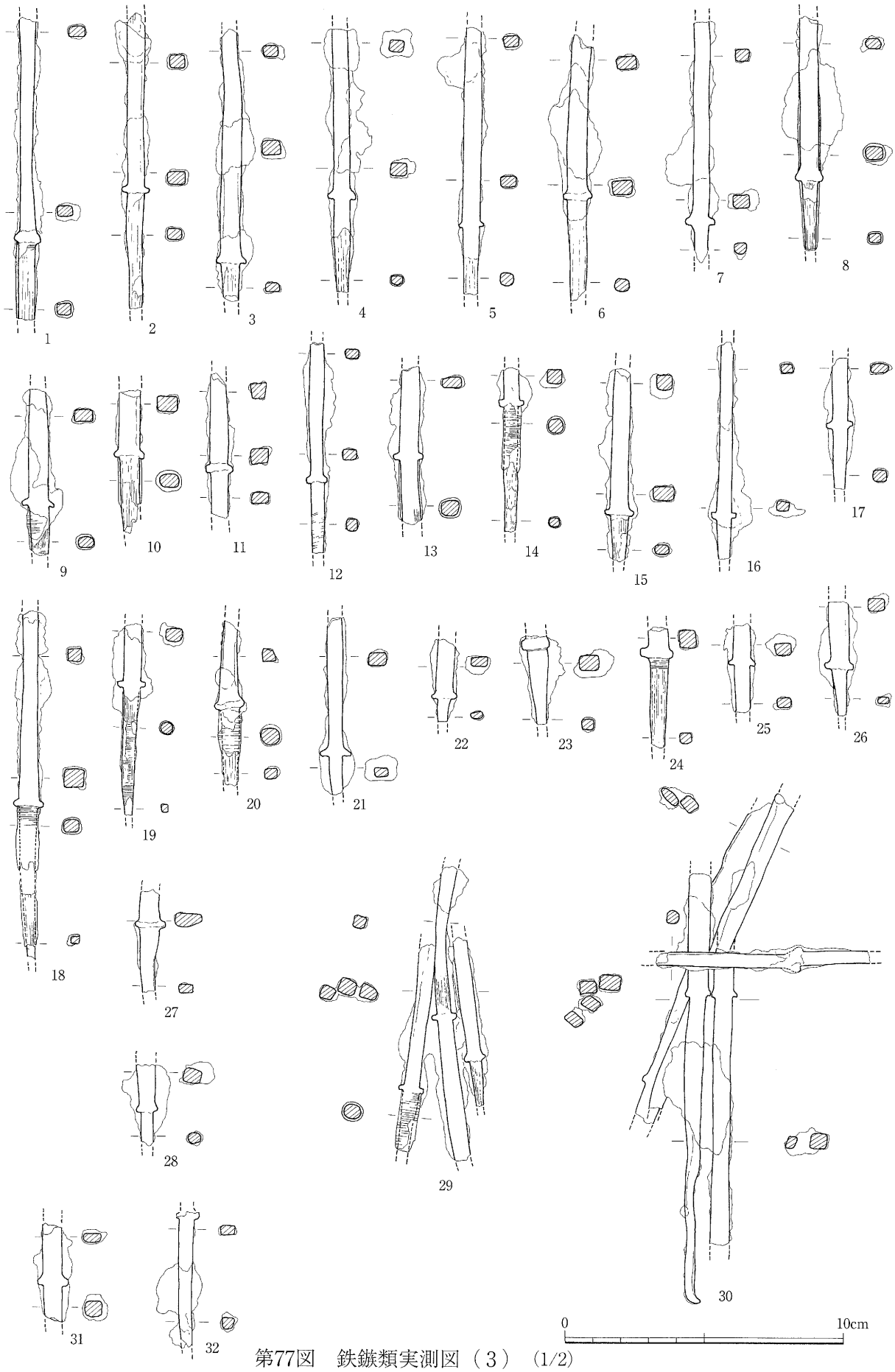
A類：長三角形の鏃で、刃部長は2.6～3.1㎝、関部は直角でそれに続く頸部は9.1～10.1㎝を残すものが確認できる。刃部幅は0.7～1.1㎝まで確認できるが、0.7～0.9㎝が主体で



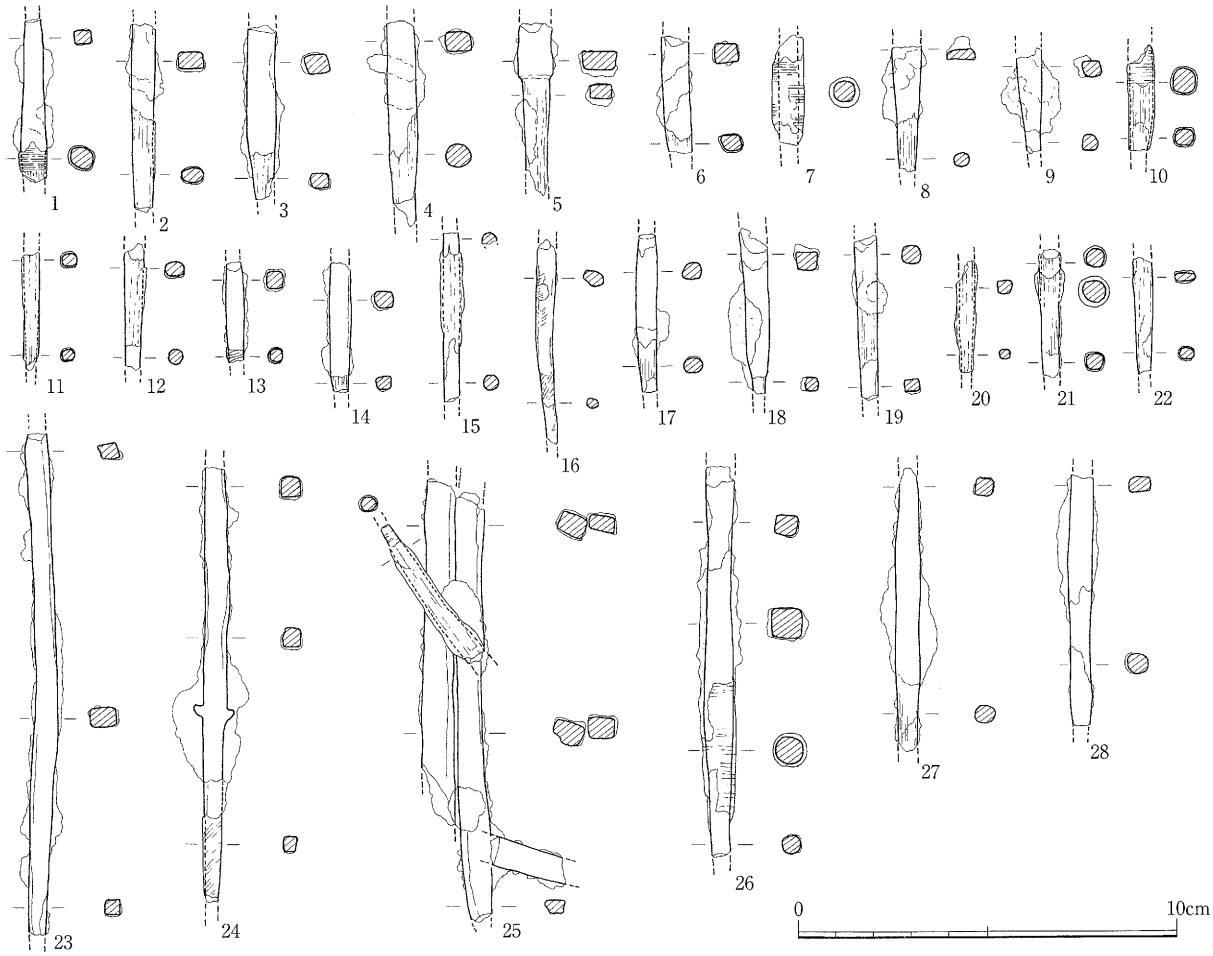
第76図　鉄鏃類実測図（２）（1/2）

ある。茎部に至るにつれて裾広がりになるものや小突起状になるものがある。関部が直角をなすもの（A - 1）と弱い角をなすもの（A - 2）とに分かれる。

B類：A類に比べて鏃身の短い三角形をとる鏃で、刃部長2.5cmに達するものはない。また刃部幅は0.9～1.1cmの範囲で、A類のそれより一定した幅をとる。頸部は茎に向って裾広がりになる個体が認められる。関部は、直角をなすもの（B - 1）と弱い角をなすもの（B - 2）とに分かれる。



第77図　鉄鏃類実測図（３）（1/2）



第78図　鉄鏃類実測図（４）（1/2）

C 類：長三角形の関部を欠いて、頸部から膨らみのある刃部へと滑らかに移行する結果、長楕円形とでもいうべき形状をなす。刃部を上半に求めている。刃部幅は、長三角形鏃と変わりなく、0.7 ～ 0.9㎝の範囲におさまる。頸部以下の分かる個体はない。

D 類：C 類に比して刃部がさらに短く、短三角形ともいうべき形態をなす。刃部がさらに先端へと求められるが、三角形状はまだとどめ、0.7 ～ 0.9㎝の刃部幅も長三角形のそれに等しい。

E 類：三角の形状は認められず、頸部をなす軸の延長上の先端に刃部をつけるとでもいうべき鏃で、鑿形に近い形態をえている。刃部幅は 0.7㎝のものが確認できる。

本墳出土の鉄鏃は有関長三角形鏃から無関三角形鏃を経て鑿形鏃への移り変わりを見て取ることができるが、量的には A 類長三角形鏃を主体とし、B 類がこれに次ぐ。鏃身の全形をとどめない破片でも A 類が多い。また茎以下に木質や皮巻きを残す断片もみられる（第 77 ～ 78 図）。

以上のように、刃部から頸部あるいは茎部にかけての破片は茎部以下の破片に比べて少なく、撹乱で相当数が失われてしまっているとみられる。このため、本来の本数を知ることは難しい。大きい破片が比較的集中して出土したのは、礫敷を覆う第 207 層（第 57 層）が仕切石に西端にかかる部分で、一部は仕切石に密着していた。また礫敷上で出土した多くの小札の中に鉄鏃の

破片も含まれているから、本来は武具とともに礫敷の西北隅に置かれた可能性が高いと思われる。

武具

本墳の横口式石槨羨道部の礫敷からは、小札甲（挂甲）と附属具に使用されたとみられる大小様々な小札が出土した。このうち、復元が可能な資料は約250点以上あるが、出土状況の悪さなどからほとんどの小札が重なりあった状態で出土しておらず、縅・綴に使用される革や組紐などの有機質素材も腐蝕により確認が困難を極めたため、小札甲全体を復元することは困難である。

以下では、復元可能な資料を小札形状、縅・綴孔配列註1、小札の大きさから、大きく5つに分類する。これらの分類から小札甲本体4領、肩甲、手甲、篠状鉄札を使用した附属具（籠手か臑当？）、不明鉄器（大型札）が復元できる。

表13　シシヨツカ古墳出土小札型式別数一覧

	縅・綴孔	小札大きさ	使用箇所	最小枚数			図版番号
				ほぼ完形	上部	下部	
小札甲A	Ⅰ類	a	胴部・草摺	24	0	0	1～2
		b		20	1	5	3～16
		c		11	0	6	17～26
		d		5	2	7	27～36
	Ⅱ類		胴部	6	1	0	37～39
	Ⅲ類	a	腰部	1	4	3	40～46
		b		0	3	2	47～51
	Ⅳ類	a	草摺裾	3	4	0	52～53
		b		0	0	1	54
	型式不明（分類不明片を含む）			0	19	13	
計				141			
小札甲B	Ⅰ類	a	胴部・草摺	26	33	0	55～81
		b		13	0	0	82～92
	Ⅱ類		草摺裾？	6	0	3	111～118
	Ⅲ類		腰部	5	1	3	119～127
	型式不明（分類不明片を含む）			11	11	30	93～110
計				142			
小札甲C	Ⅰ類	a	腰部・草摺	5	0	0	128～132
		b		3	2	2	133～137
		c		4	1	3	138～141
	Ⅱ類	a	腰部	0	4	1	142～146
	型式不明（分類不明片を含む）			5	28	0	147～160
計				58			
附属具	Ⅰ類		附属具	38	11	18	161～195
	Ⅱ－1類	a		56	11	5	196～262
		b		3	0	0	263～265
	Ⅱ－2類			6	2	0	266～271
	Ⅲ類			3	0	0	272～273
	Ⅳ類			0	4	2	274～278
	Ⅴ－1類			2	0	0	279～280
	Ⅴ-2類			4	0	0	281～283
計				165			
その他（大型札）	Ⅰ類	a	不明	6	4	2	284～294
		b		0	1	0	295
	型式不明（分類不明片を含む）			3	10	10	296～305
計				36			
総計				566			

※最小枚数は綴合わされた個体も小札枚数で算出

小札甲と附属具、不明鉄器に使用されたとみられる小札は総数で560点以上が確認された。ただし、その多くが破片であり、小札の特徴的な部分（頭部・底部形状、縅・綴孔配列など）がみられない資料も含めていることから、分類が困難な資料も多い。個々の出土量は表13のとお

りである。

小札甲Ａ　（第79～81図1～54）

小札　　頭部形状が半円形を呈する縅孔２列の小札群で、下搦孔・覆輪孔は３孔である。下端は隅切を施すが、丸みを帯びる資料もある。小札は大きさと孔の配列から４類９種に分類することが可能である。

Ⅰ類札は第３縅孔をもたない平札で、札の大きさから４種に細分できる。ａ～ｄ種は、長さ6.0～7.5㎝、幅2.0～3.2㎝の大きさの幅をもつ小札であり、ほぼ完形での出土数はどれも10点ほどであるが、ａ種札は塊の状態で出土している。小札塊はａ種札が３段に縅された状態のものと、２段のものがあり、一部に縅素材の組紐や布の一部が確認できる（第79図1・2）。組紐はｂ種札の裏面でも確認できる。

Ⅱ類は中間部に第３縅孔を穿つ平札で、長さ7.0㎝、幅2.3㎝程度であり、左上、右上重ねの資料が一点ずつと頭部がわかるものの３点が出土している。

Ⅲ類札は腰部に用いられた断面がΩ字に内湾したΩ字型腰札である。完形の資料はないが、小札幅と孔配置から２種の腰札の存在が想定できる。ａ種は復元すれば、長さ15.0㎝、幅2.2㎝程度の大きさの腰札であろう。ｂ種の長さは不明だが、ａ種よりも長く、幅2.8～3.0㎝程度の腰札である。

Ⅳ類札は草摺最下段に使用される裾札で、緩やかではあるが中間部がΩ字に内湾する。腰札同様小札の大きさから２種が確認でき、ａ種は長さ7.0㎝、幅2.4㎝程度である。ｂ種は完形資料がないため全長は不明だが幅は3.0㎝程度である。

縅・綴技法／下搦・覆輪　　現存状況の悪さから、縅・綴技法の確認は困難であるが、縅素材には組紐の使用が確認できる（第79図16、第81図53）。下搦技法は平札や裾札に革紐による革包覆輪（第二技法）が確認できる（第80図24、第81図53）。また、織物や革と思われるものが付着した資料もある（第80図24、第81図52）。

以上のことから、縅孔２列の小札甲Ａの小札群には札の大きさが異なる平札・腰札・裾札が２種類存在することから２領の小札甲が存在した可能性が考えられる。ただし、腰札、裾札などの特徴的な小札は分類できたとしても、平札を分類することは困難である。また、小札の出土点数が破片を含めても100点程度であることから、小札甲を構成する枚数としてはかなり少なく、１領分にも満たない。

小札甲Ｂ（第83～84図55～127）

小札　　頭部形状が偏円形を呈する縅孔１列の小札群で、下搦・覆輪孔は２孔であり、下端は隅切が施されている。小札は大きさと孔配列から３類４種に分類することができる。

Ⅰ類札は第３縅孔を穿つ、綴孔２孔×４箇所の平札で、小札の大きさから２種に細分でき、長さ7.5～8.5㎝、幅2.0㎝程度である。一般的な縅孔１列の小札にみられるような、第３縅孔が小札中間部に穿たれたものではなく、第２縅孔から間隔をおかずに穿たれているのが特徴である。

Ⅱ類札は、第３縅孔をもたない綴孔２孔×４箇所の平札で、下搦孔が２列２孔、合計４孔穿たれている。長さ8.0㎝、幅2.0㎝程度で、一部はⅠ類札や小札甲Ａの平札が付着したものがある（第84図114・118）。

Ⅲ類は断面が逆くの字状に曲がる外反腰札で、長さ12.5㎝、幅1.8㎝程度である。綴孔が３孔×４箇所のいわゆる３綴孔をもつのが特徴であり、附属具札が付着したものもある（第84図124）。他にも１点のみ出土している小札があり、第３縅孔が小札中間部に穿たれているものや、小札頭部が折り曲げられているもの、縅孔が３孔×２列あるもの、下部に無数に穿孔されているものなど、型式不明の小札がある（第83図105～110）。

縅・綴技法／下搦・覆輪　縅・綴技法や下搦・覆輪技法などは現存状況の悪さから確認することはできないが、縅孔に僅かな組紐の痕跡が認められる。

小札甲Ｃ（第85～86図128～160）

小札　頭部形状が偏円形を呈する縅孔１列の小札群で、下搦・覆輪孔は２孔であり、小札甲Ｂの小札と比べ札幅が広い。下端は隅切が施されたものと、丸みを帯びたものがある。小札は大きさと孔配列から２類４種に分類することができる。Ⅰ類札は第３縅孔を穿つ、綴孔２孔×４箇所の平札で、札の大きさと孔の配置から３種に細分が可能である。ａ～ｃ種まで札幅の大きさがあまり変わらない一方で、長さは7.2～10.1㎝と大きなひらきがある。

Ⅱ類札は断面がΩ字を呈する腰札であるが、稜線はあまり明瞭ではなく、内湾幅も小さい。復元長は16㎝程度で、幅は中央部ですぼまる形状を示し、頭部や下部の最大値は3.0㎝だが、中間部では2.5㎝程度である。綴孔は３孔×４箇所の３綴孔をもつ腰札である。

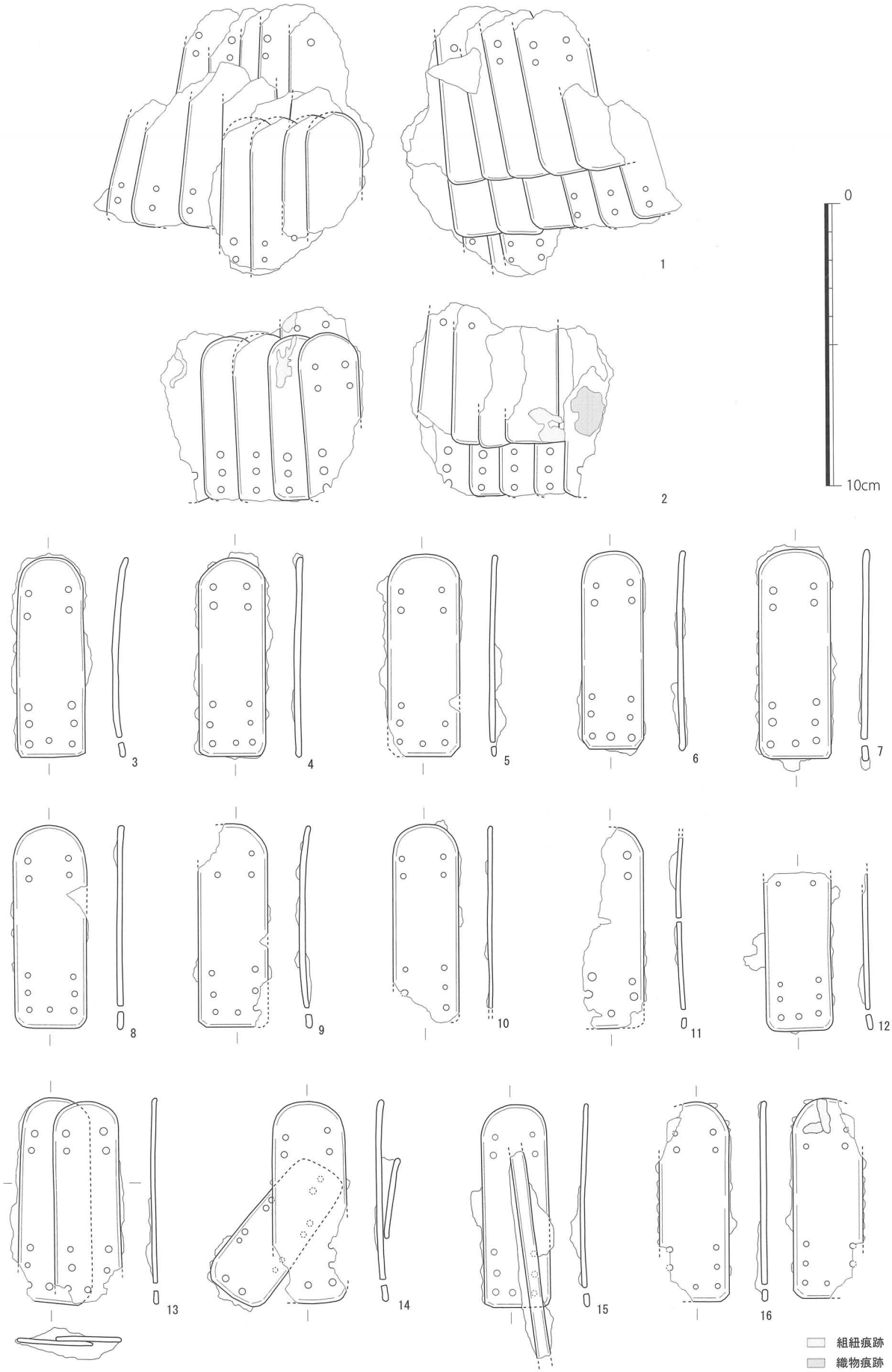
他にも縅・綴孔の位置がⅠ類札と異なるものや、小札下部に下搦・覆輪孔とみられる多数の穿孔（6、4、3孔）が施された資料がある（第86図152～158）。

縅・綴技法／下搦・覆輪　縅・綴技法や下搦・覆輪技法などは小札甲Ｂ同様、良好な資料は見当たらないが縅孔に僅かな組紐の痕跡が認められる。

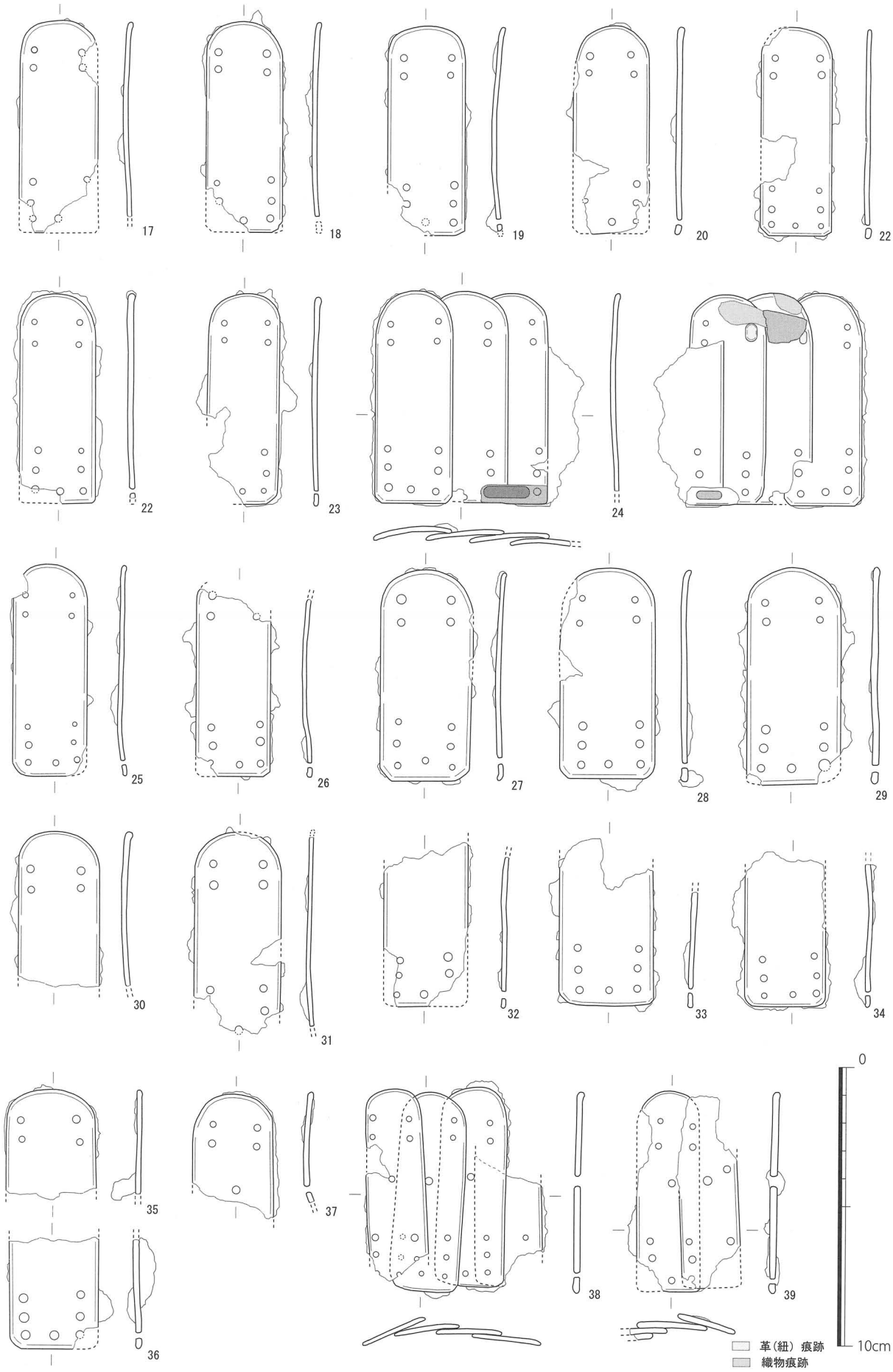
附属具札（第87～91図161～294）

小札　小札甲以外を構成すると考えられる小型札が多数出土している。札形状や縅・綴孔の配列から６類７種に分類することができる。Ⅰ類札（第87図161～195）は頭部が半円形の縅孔２列の平札で、小札下端は隅切が施されており、下搦孔は２孔である。長さは5.0㎝、幅1.8㎝程度である。資料数は破片を含めて50点程度と、他の小札に比べて出土数が多い。縅素材には組紐が確認できるが、縅・綴技法、下搦・覆輪技法などは不明である。

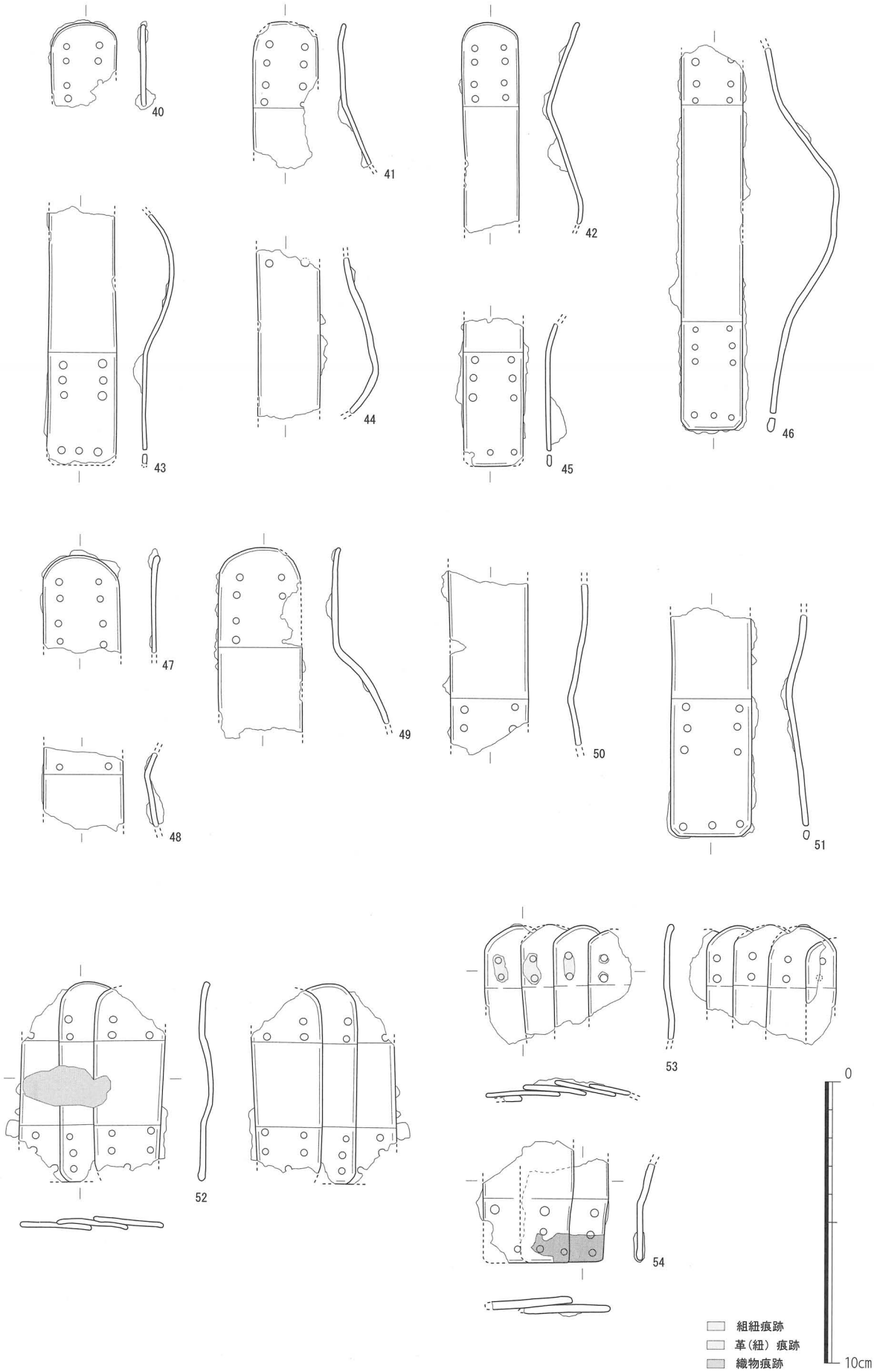
Ⅱ類札（第88～89図196～271）は頭部が偏円形の縅孔１列の平札で、上幅が広く、下部ですぼまる形状をしめす「上広形」の小札であり、主に肩甲に使用されたと考えられている。小札下端は隅切が施されており、頭部縁を裏側に少し折り返す「キメダシ」や、底部を表側へ折り返す「打ち返し」がみられる。縅孔の配列から２類に、下部の形状からⅡ－１類札を２種に細分できる。Ⅱ－１類札は長さ5.2㎝、幅2.1㎝程度であり、孔配置は縅孔３孔×１列、綴孔は



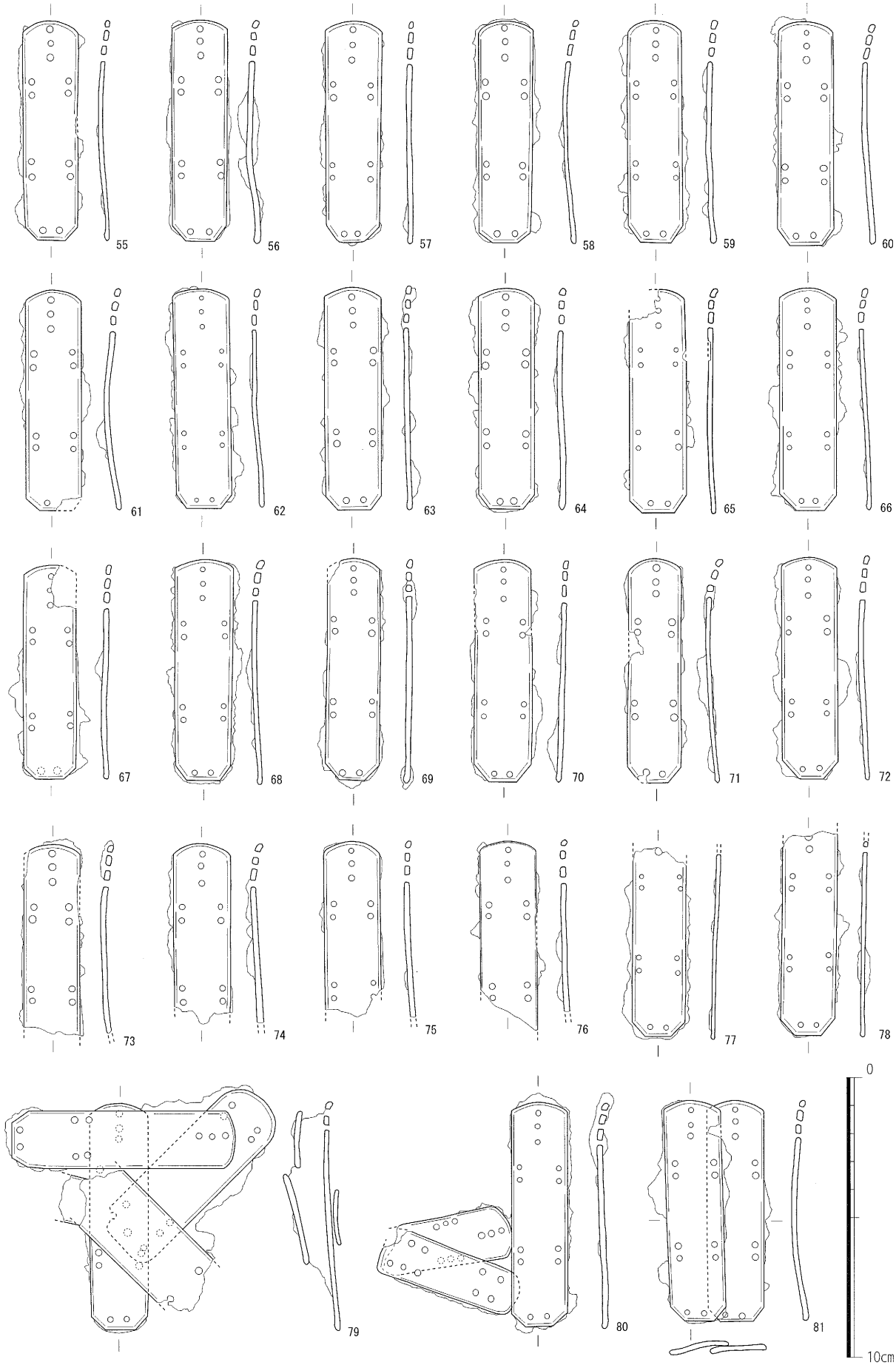
第79図　小札類実測図（1）（1/2）



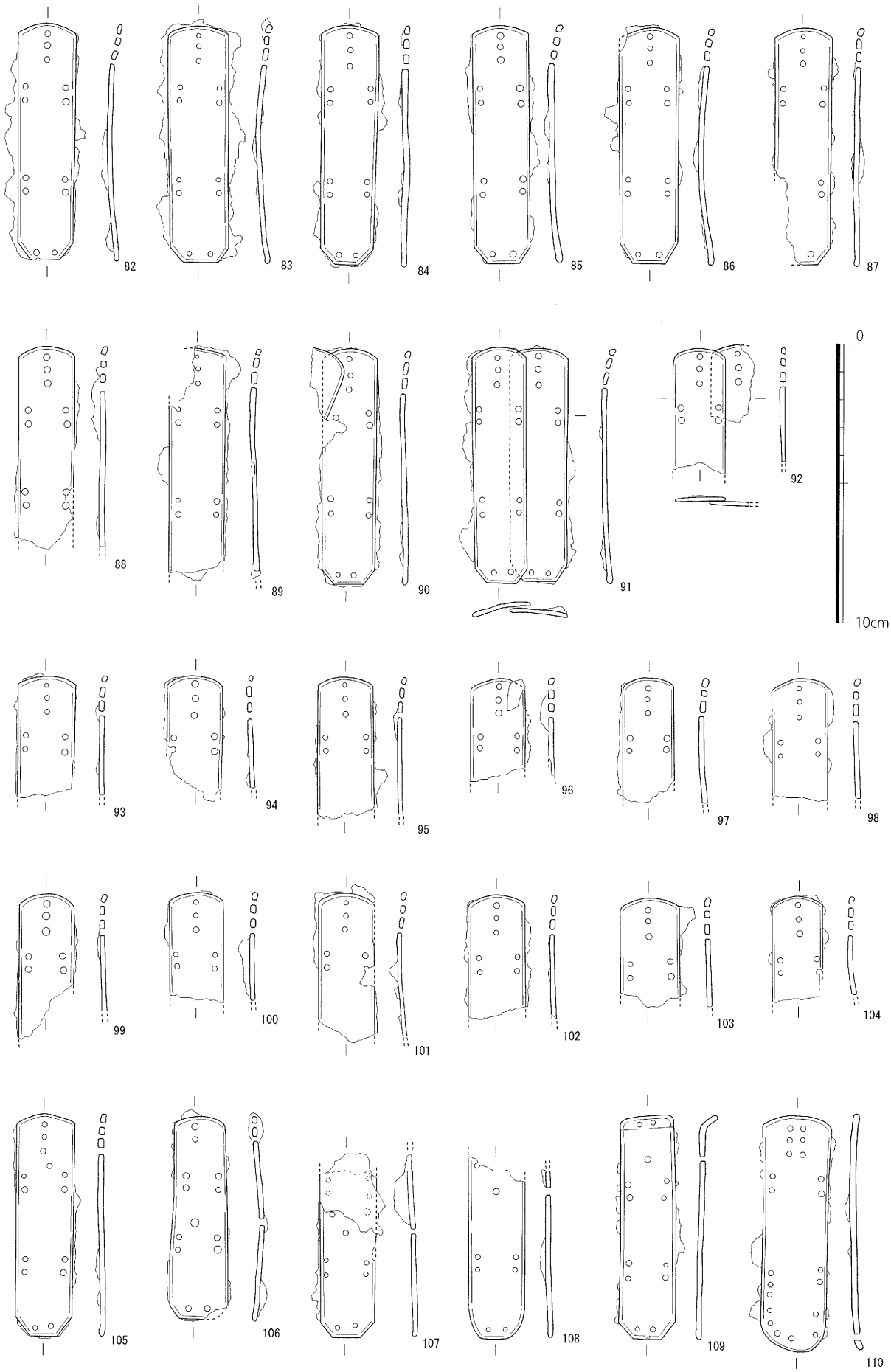
第80図　小札類実測図（２）（1/2）



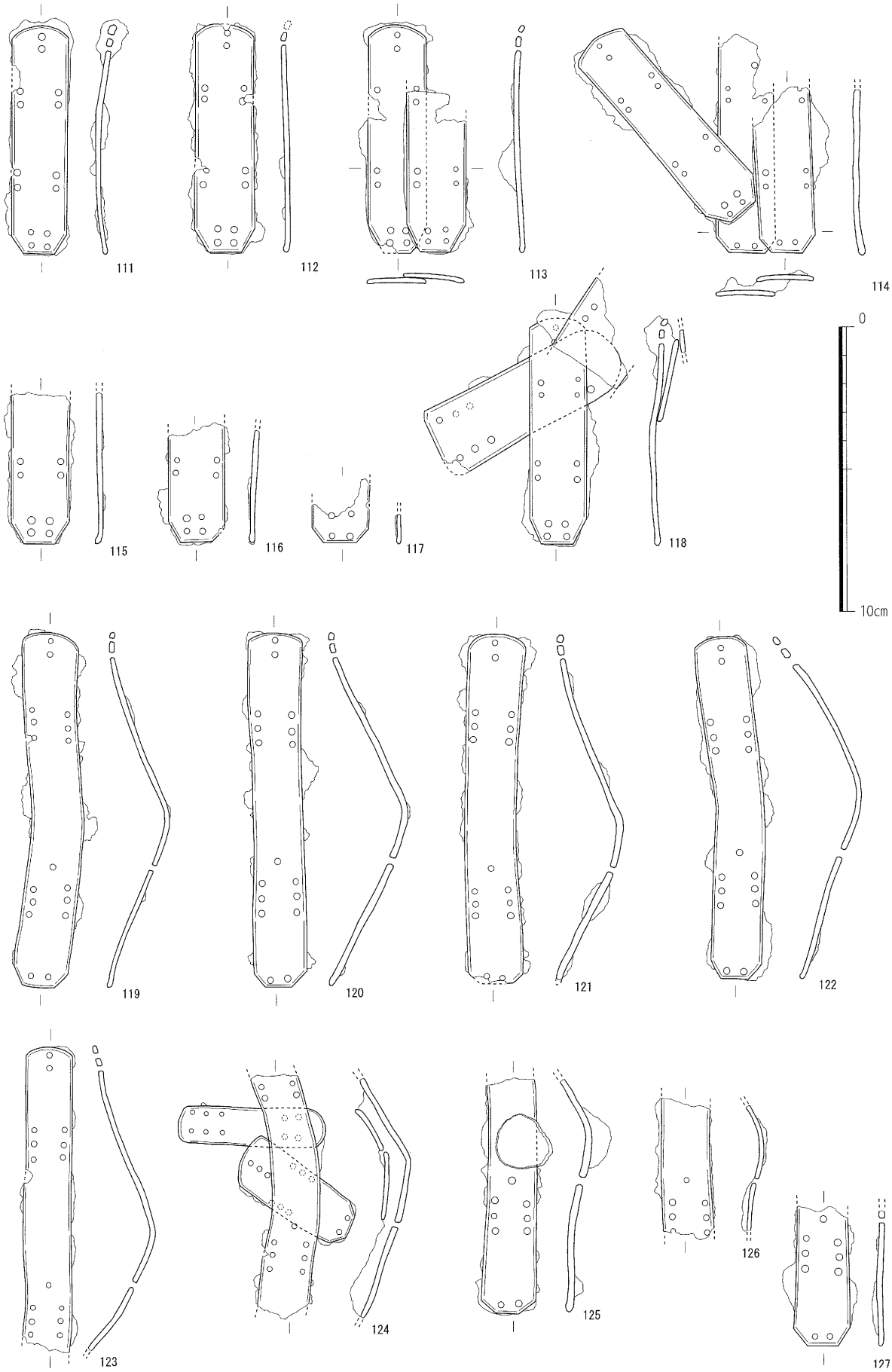
第81図　小札類実測図（３）（1/2）



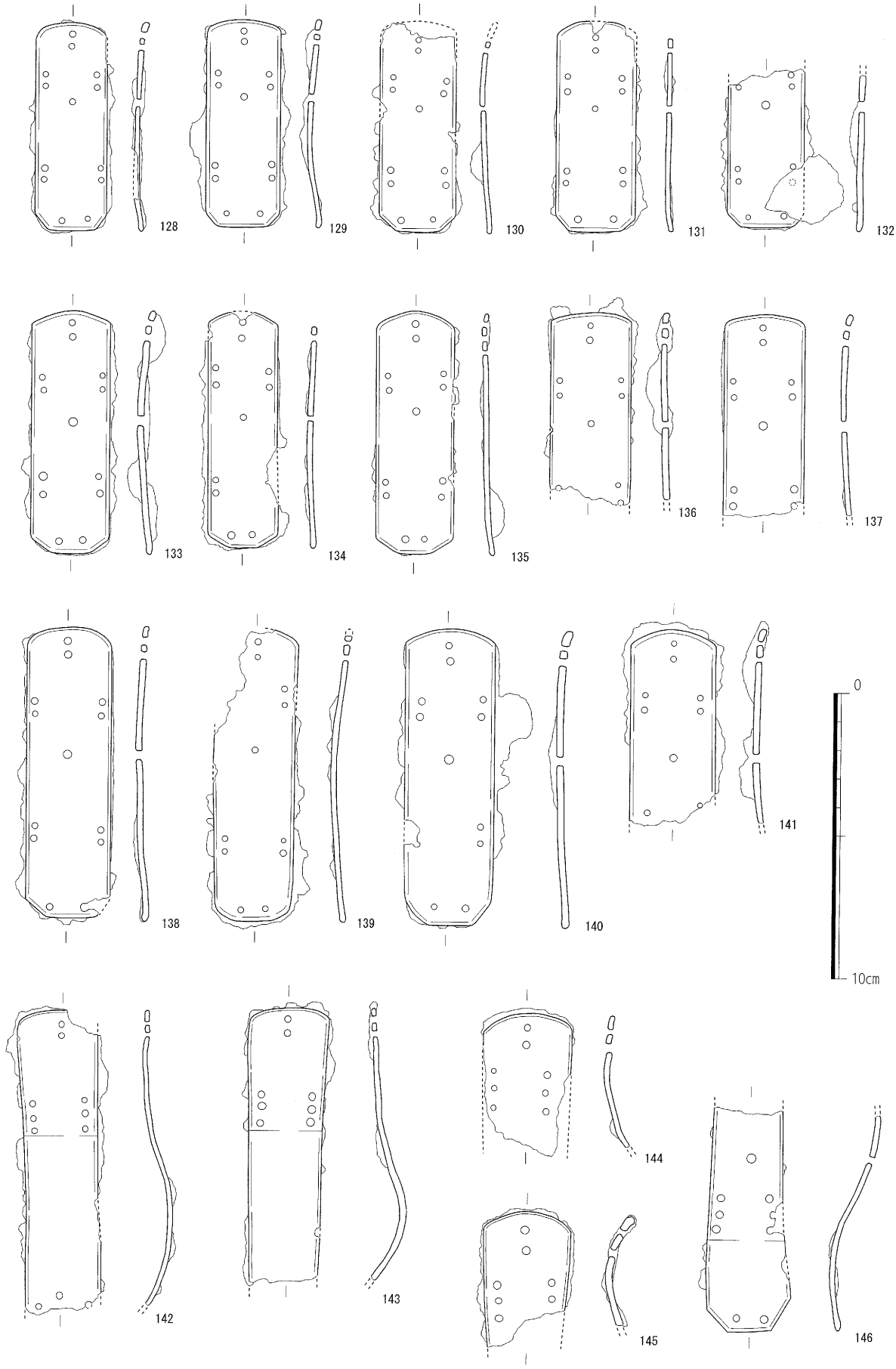
第82図　小札類実測図（４）（1/2）



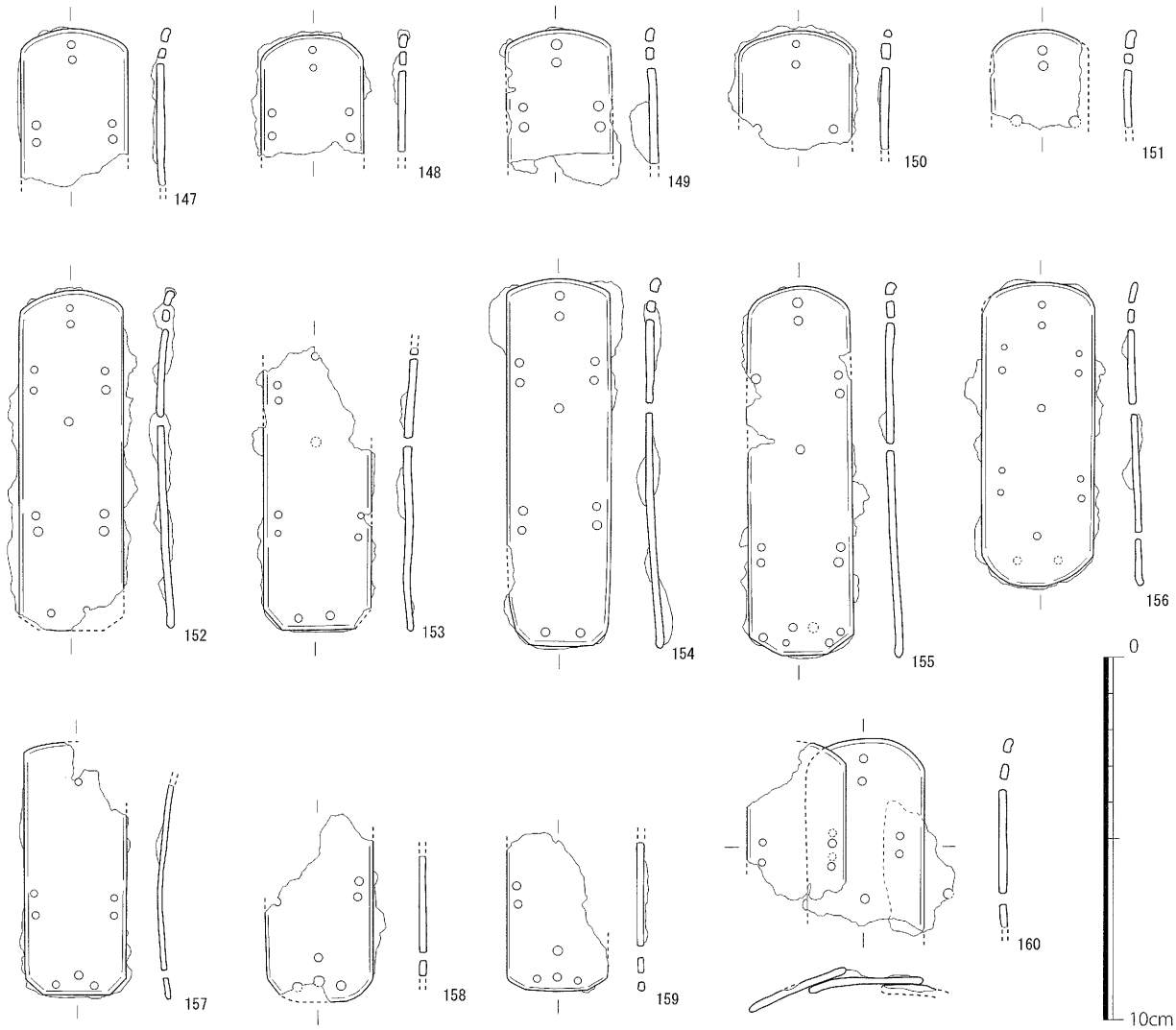
第83図　小札類実測図（５）（1/2）



第84図　小札類実測図（6）（1/2）



第85図　小札類実測図（７）（1/2）



第86図　小札類実測図（８）（1/2）

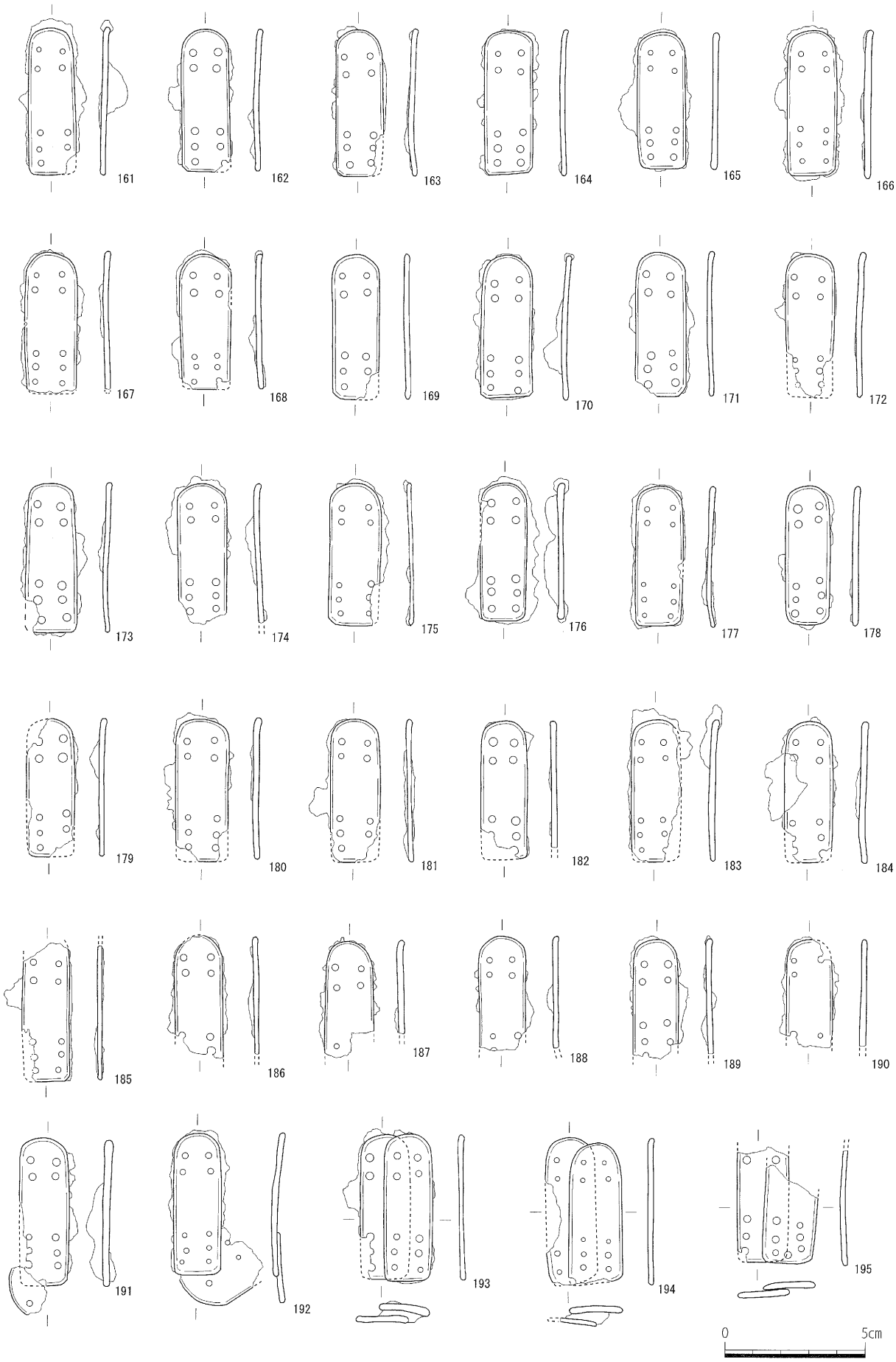
３孔×２箇所穿たれており、形の分かる資料だけでも70点以上確認でき、小札群中で出土数が最も多い小札である。ｂ種は、ａ種と同じ孔配置であるが、下部が右斜めに裁断されており隅切がみられない。

Ⅱ－２類札は小札頭部に縅孔とみられる孔が５孔穿たれており、綴孔は３孔×２箇所が穿たれている。

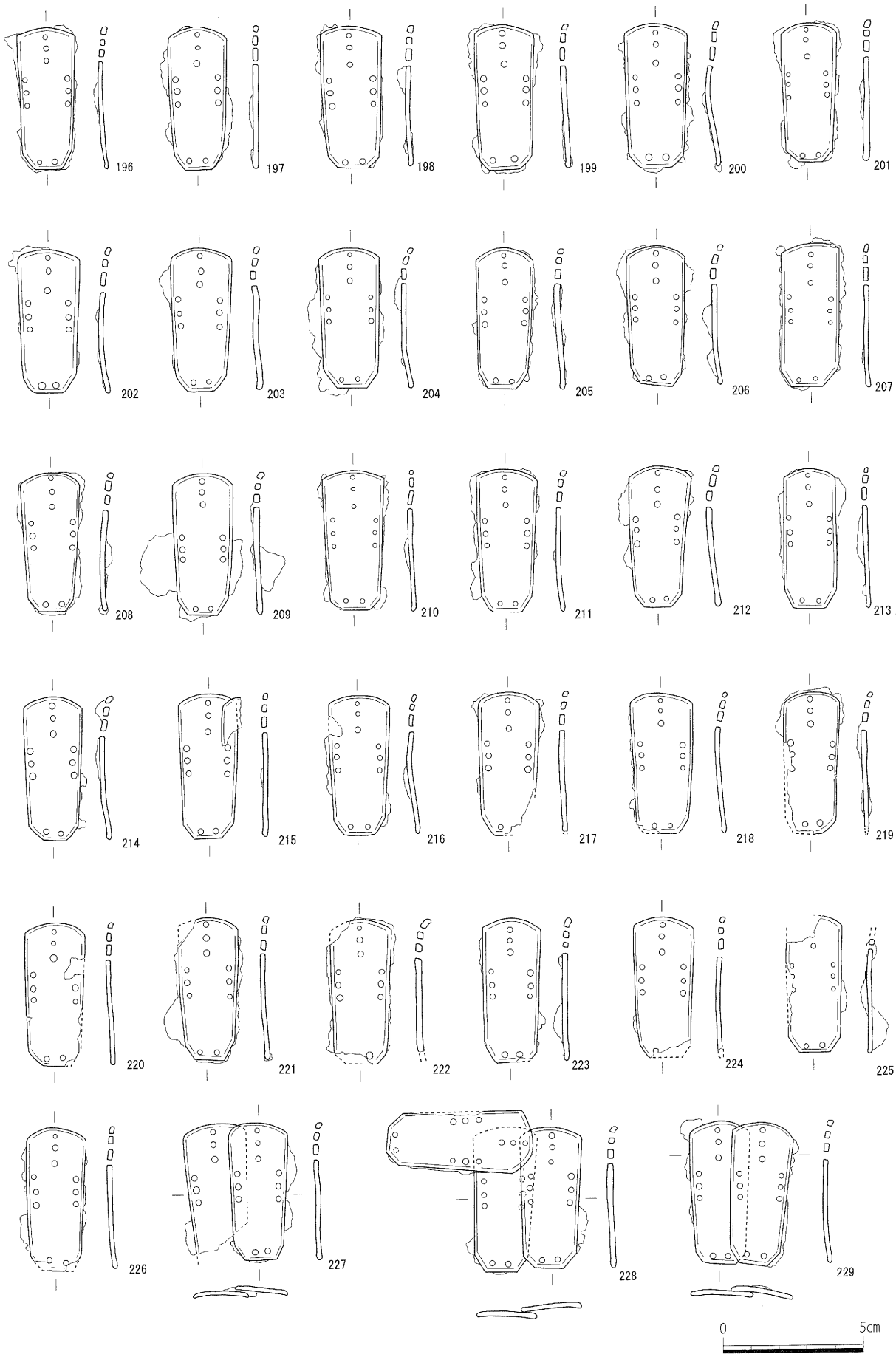
Ⅲ類札（第90図272～273）は頭部が偏円形の縅孔１列の小札で、小札群中で一番小さい。札の長さは3.2㎝、幅1.7㎝程度で、下部は隅切が施されている。孔は縅孔１列３孔、綴孔２孔×２箇所が穿たれている。縅素材などは確認できない。

Ⅳ類札（第90図274～278）は頭部が偏円形の縅孔１列の小札である。完形での出土例がないため、全長は不明だが幅は1.6㎝程度と、小札甲Ｂに使用されるⅢ類札と同様に、縅孔３孔×１列、３綴孔を穿つなど共通する要素がみとめられるが、下部に穿たれた縅孔の配置が異なることや、札幅が狭いことから、別個体と考えられる。

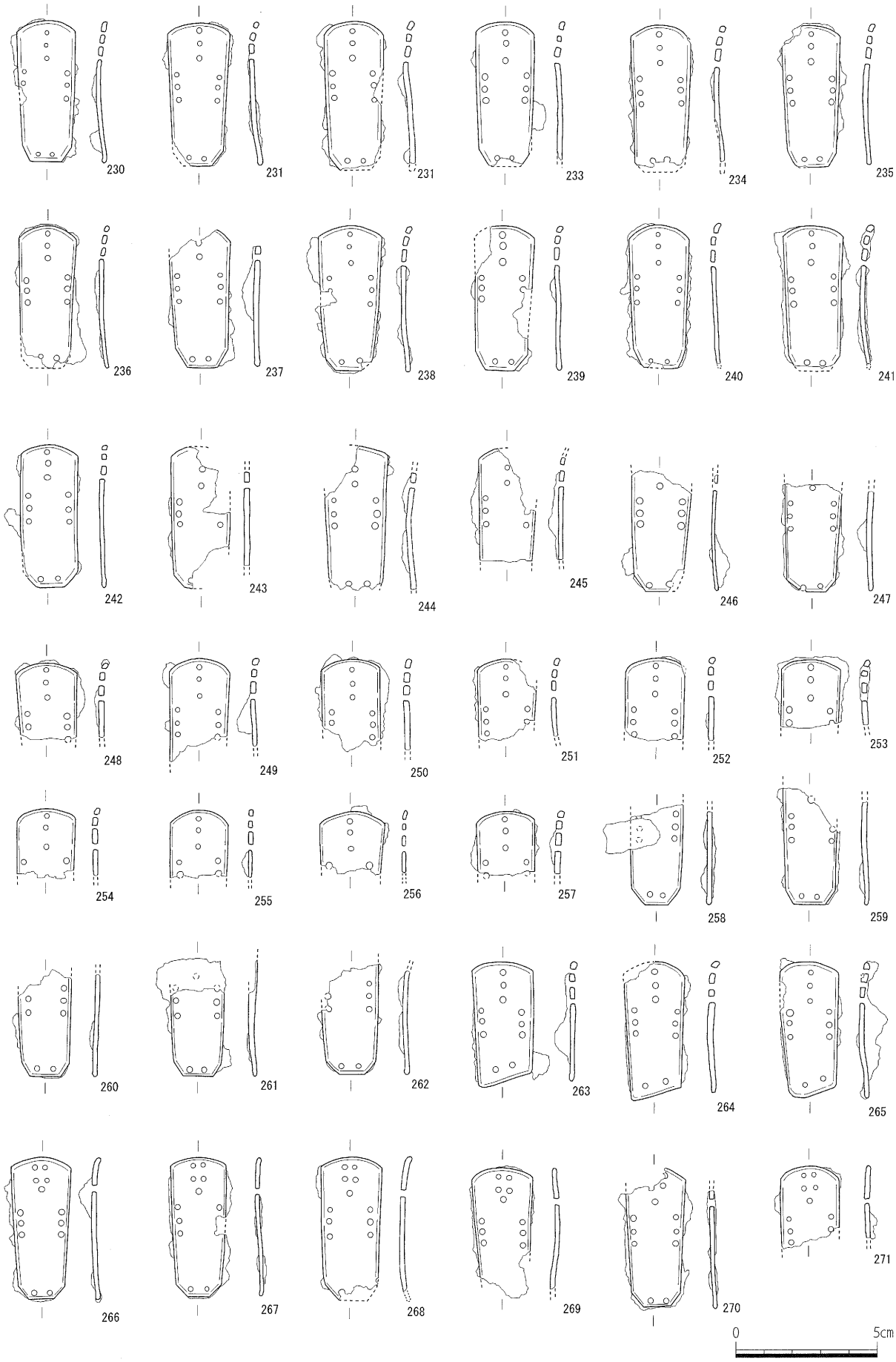
Ⅴ類札（第90図279～283）は頭部が偏円形の縅孔１列の小札で、札形状がⅡ類札とは逆に頭部が狭く、下部が広い「下広形」の小札である。第３縅孔の有無で２類に分類できる。札



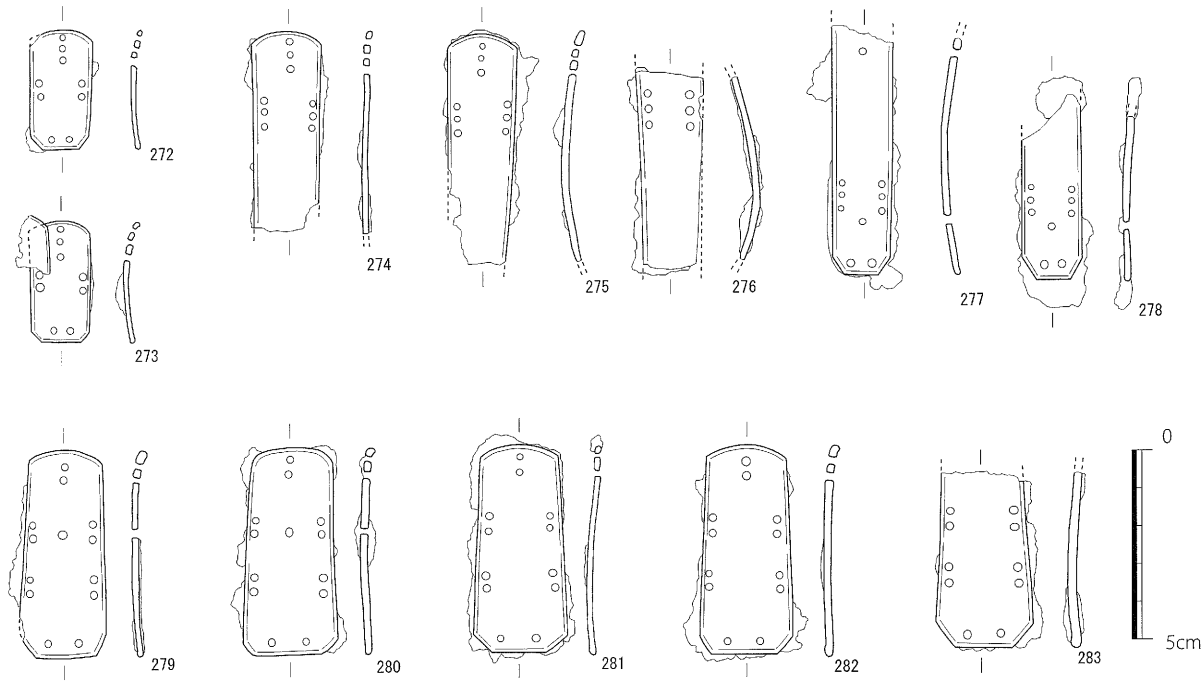
第87図　小札類実測図（９）（1/2）



第88図　小札類実測図（10）（1/2）



第89図　小札類実測図（11）（1/2）



第90図　小札類実測図（12）（1/2）

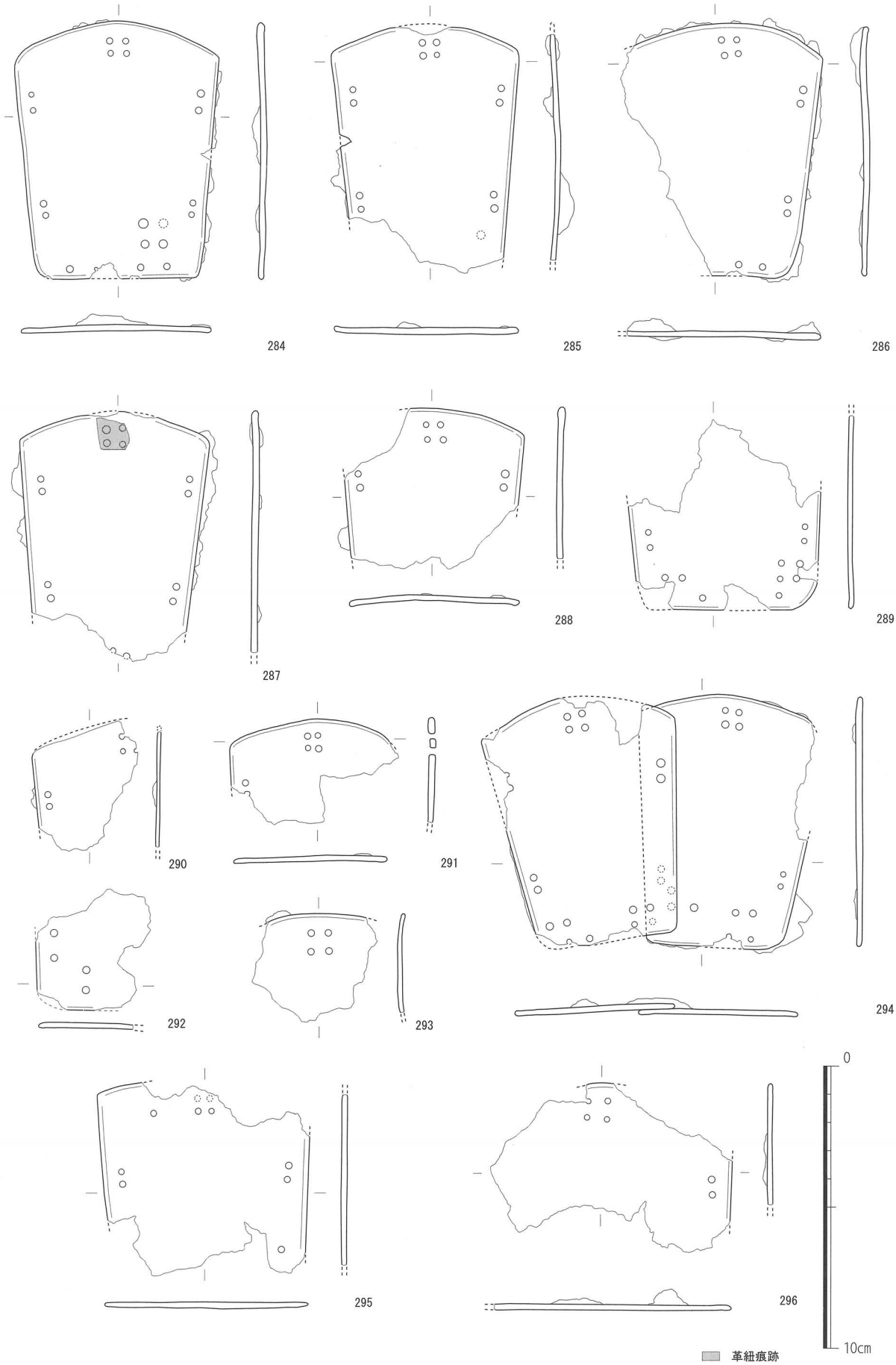
の長さは5.5㎝、頭部幅2.0㎝、下部幅2.4㎝程度で、下部は隅切が施されている。綴孔は2孔×4箇所穿たれている。一部の資料は小札甲Aの小札や大型札と付着したものがある（第79図14、第92図305）。縅素材などは確認できない。

縅・綴技法／下搦・覆輪　　上記のⅠ～Ⅴ類札では、縅技法などの連結方法は、確認することはできないが、一部の資料では縅素材に組紐が確認できる。

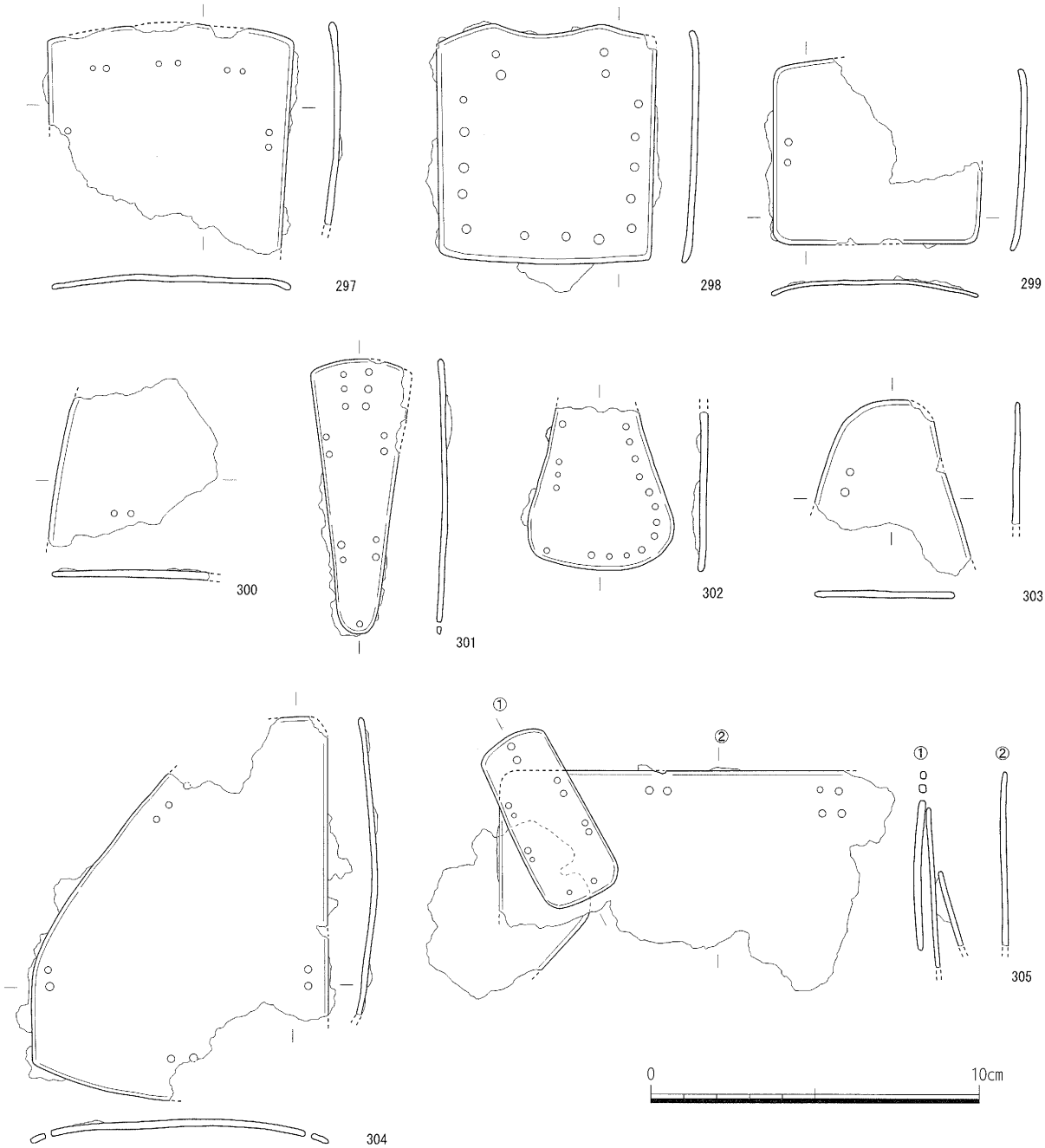
不明鉄器（大型札）（第91図284～305）

小札甲、附属具札以外にも大型札が出土している。完形に近い資料からの分類を試みたため、分類では2種類を提示するにとどまるが、他にも型式不明の札が1点づつではあるが出土している。また、帰属不明な断片資料が多数存在することから他の大型札が存在した可能性が考えられる。Ⅰ類札は頭部が偏円形で札全体の形状が扇形になり、下部にいくほどすぼまる。a種は、出土している大型札のほぼ半数以上を占めており、大きさ最大長9.0㎝、最大幅7.2㎝、下端幅が5.6㎝である。頭部中央に2孔×2列、4孔が穿たれており縅孔の可能性が高く、両端には左右2孔×4箇所の綴孔が、下端には4孔が穿たれており覆輪・下搦孔であると考えられる。また、一部の資料には下部の綴孔付近に2孔×2列、4孔が穿たれている（第91図284・289・294）。b種はa種に比べて一回り大きい資料と考えられるが、頭部の一部しか残存していないため詳細は不明である。縅・綴技法や下搦・覆輪技法は不明であるが、縅孔とみられる孔付近で組紐の痕跡が残る（第91図287）。

他にも用途不明な札が多数存在する。断片資料であるため詳細不明だが、298は最大長7.0㎝、最大幅6.5㎝程度のほぼ正方形に近い札であるが、頭部形状が偏円形であるが中央が緩く内湾する形状を呈している。孔配置は頭部に2孔×1列が2箇所、両端にほぼ均等に5孔×1列、



第91図　小札類実測図（13）（1/2）



第92図　小札類実測図（14）（1/2）

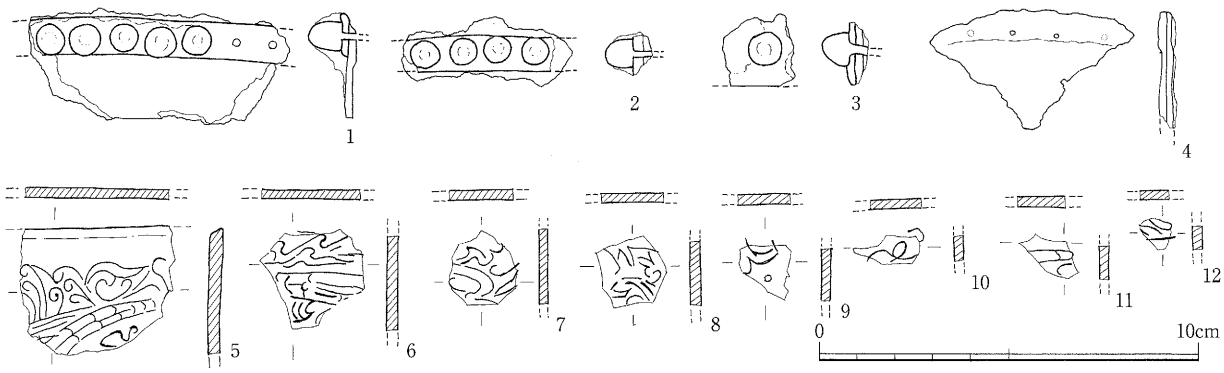
2箇所が穿たれ、下端に3孔穿たれている。断面は平坦であり、出土点数も完形1点のみである。

301は頭部偏円形で下端にいくほどすぼまる形状を呈し、下端は丸みを帯びる。最大長8.3㎝、最大幅3.1㎝を示す。孔配置は、頭部に縅孔とみられる孔が3孔×1列穿たれており、綴孔2孔×4箇所、下端には1孔が穿たれている。

302は断片資料であり、現存長4.8㎝、最大幅4.4㎝、上部にかけてすぼまる形状を呈す。孔配置は縁に沿うように無数に小孔が穿たれている。

304は最大長12.0㎝、最大幅9.0㎝程度の札で、大型札の中で最大である。形状は台形状を呈しており断面も緩やかに内湾する。孔は縁にそって穿たれているが縅孔か綴孔かは不明である。

縅・綴技法／下搦・覆輪　　縅・綴技法や下搦・覆輪技法を留める資料がないことから、詳細は



第93図　鞍金具類実測図（象嵌金具西山要一原図）（1/2）

不明であるが、Ⅰ類札の縅孔とみられる孔付近で組紐の痕跡が残る資料がある（第92図287）。

註1　小札甲の各用語については、内山敏行（1992「挂甲と付属具について」『観音塚古墳調査報告書』）、清水和明（1993「5　挂甲と附属具」『斑鳩藤ノ木古墳第一次発掘調査報告書』）による。（森川）

馬具　　鞍金具、杏葉、雲珠、辻金具、鏡板などの破片がみられるが、ほとんどが遊離している。

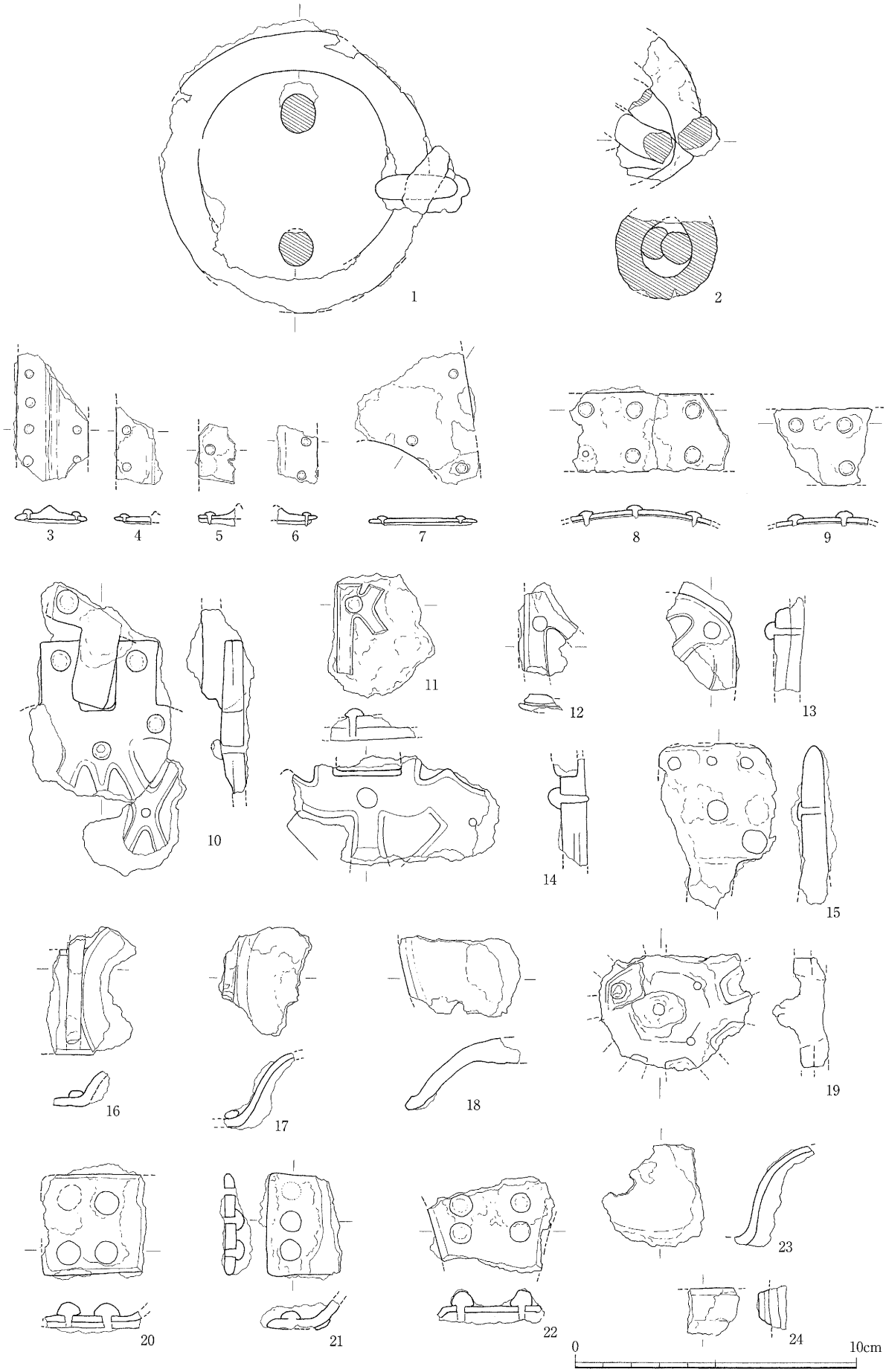
鞍金具（第93図）

（1～4）は鉄地金銅張りの磯金具周縁の鉄帯の断片である。厚さ0.2～0.3㎝の鉄板に同様の鉄板を重ねて鋲留している。鋲は、（1）が径0.8㎝、高さ0.9㎝、軸径0.15～0.2㎝、（2）が径0.7㎝、高さ0.7㎝、軸径0.1㎝、（3）が径0.9㎝、高さ0.7㎝、軸径0.2～0.3㎝である。（1）は他の2点に比べて高く突出し、鋲留は0.9㎝間隔に繁打されている。いずれの鋲にも金張りが残る。（4）は鋲孔のみを残すが、重ねられていた鉄板の剥がれた円弧状の痕跡が認められる。（5～12）は鞍橋金具の海部に金象嵌を施した破片である。龍文と雲文で飾っている。詳細は第2部第1章第4節の「鞍橋金具」を参照されたい。

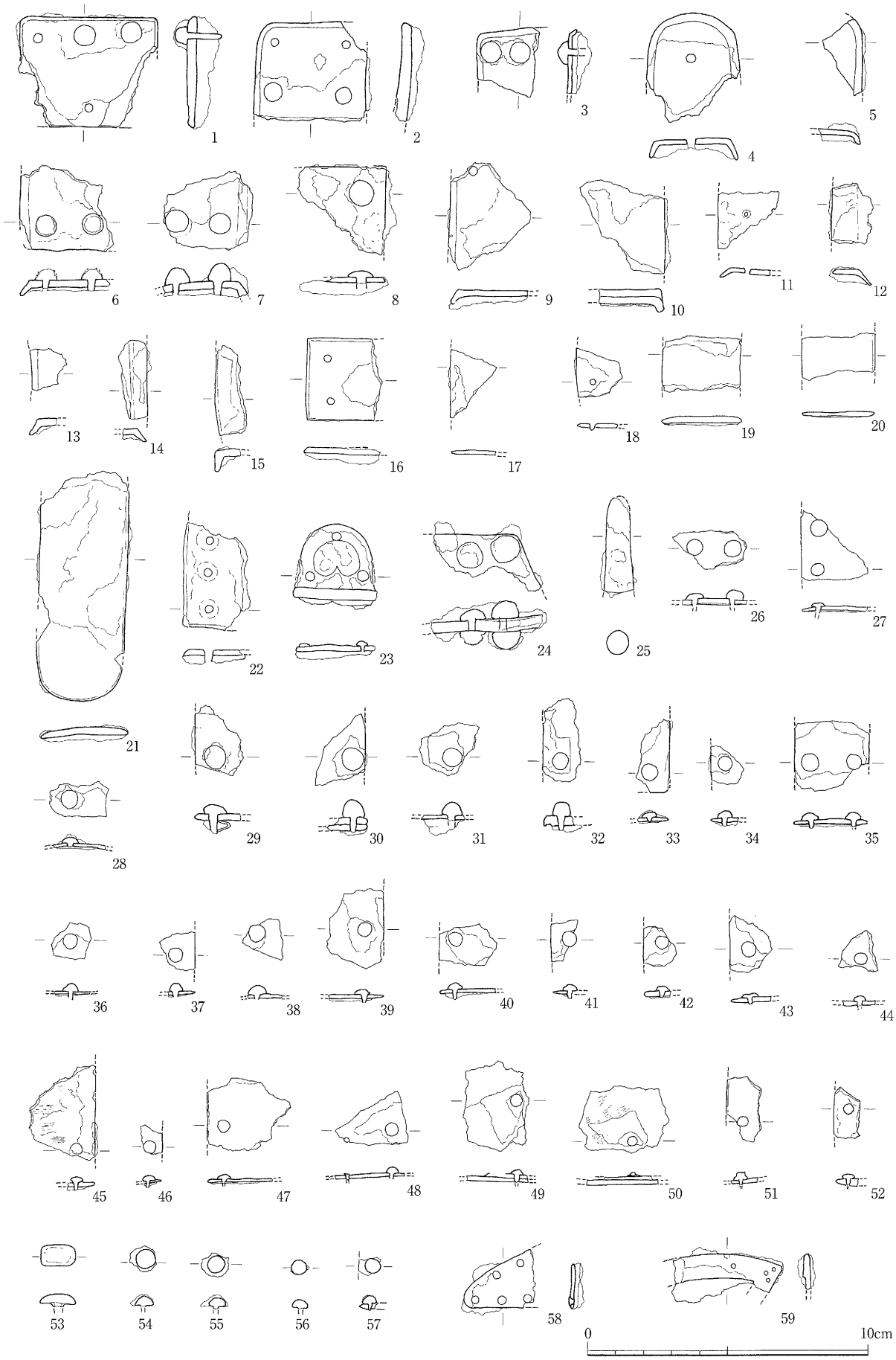
その他馬具類（第94図）

（1）は、径1.2㎝の鉄棒を曲げて径9.5～10.0㎝の円環にした素環鏡板である。立聞はなく径0.9㎝の鉄棒で得られた正円の環径3.0㎝の銜の端環と引手の環とを直接連結している。（2）も鉄芯径1.0㎝の引手と鏡板を銜により連結する形式と思われる素環鏡板で、芯径0.9㎝の鉄棒で得た環径3.5㎝の引手の環と銜の環が絡んだ断片である。

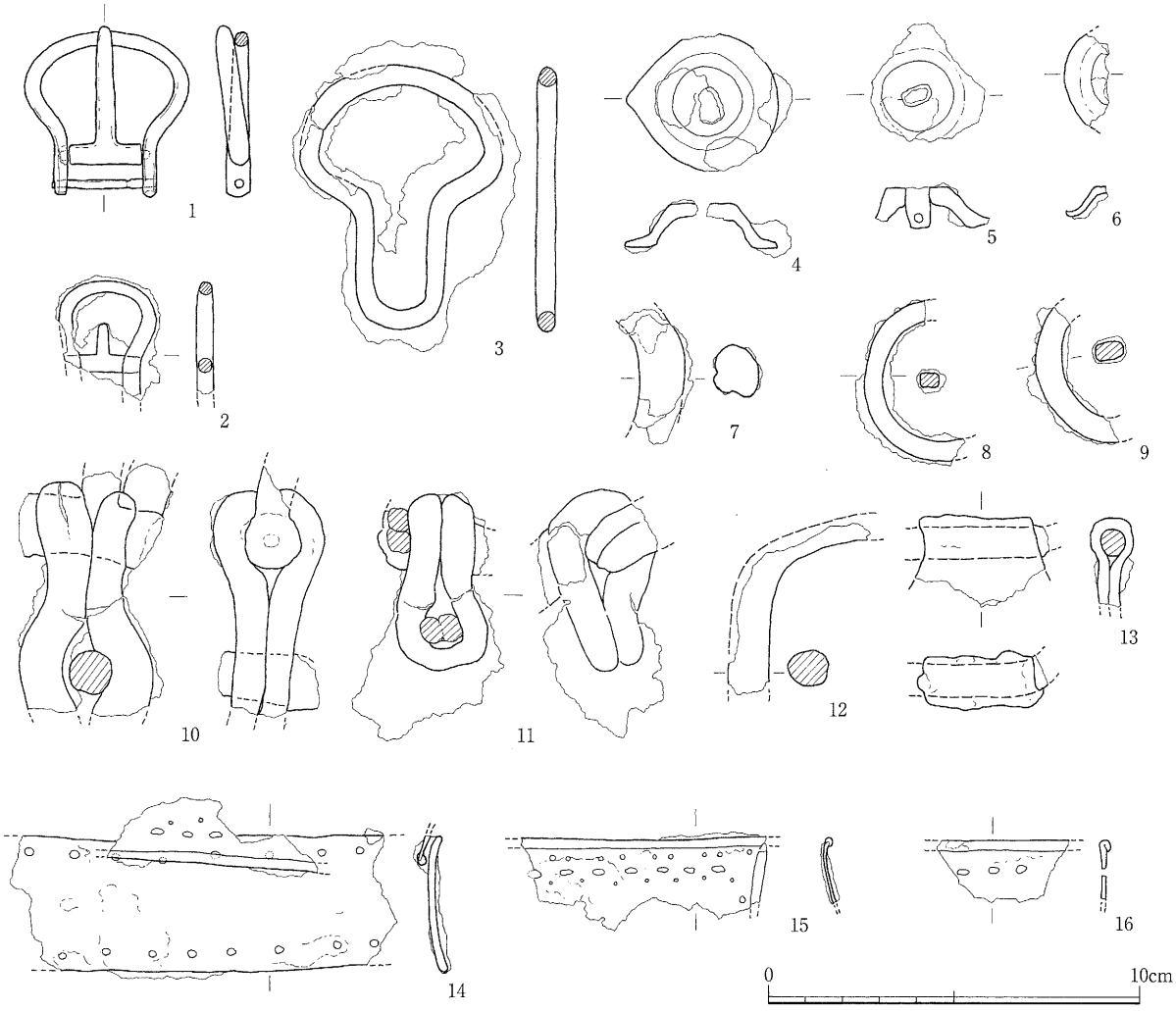
（3～9）は鉄地金銅張りの壷鐙の破片である。（3～6）は、幅2.6㎝の表面に鍍金を残す鳩胸金具の破片で、いずれも、裏面に木質を残すので、木心鉄装とみられる。中央が断面三角形で5立ち上がって隆起し、両端に向って薄く2㎜ほどの厚みとなる。縁端より4～4.5㎜のところに径3～3.5㎜の鋲を1.0㎝間隔で留め木心に固定している。裏面では、両端より内側3～4㎜のところで凹みをつけ、そこに木心が装着される。（5）の破片では厚さ1.0㎜の鉄板の下に2.0㎜の板を重ね、その下に木質が残り、これらを鋲留している。（7）は鐙に足を入れる壷の口縁部で、図左下のカーブするところがその内側、右側面の直線ラインが外側となる。端部から内側4～5.0㎜のところの縁に沿って、厚さ1.5㎜の鉄板を径3～4㎜、長さ3～4㎜の鋲でその下の木心に



第94図　馬具類他実測図（1/2）



第95図　飾金具類他実測図（1/2）



第96図　鉸具・鎖類他実測図（1/2）

第97図　金製品実測図（1/1）

留めている。（8・9）は壷鐙の踏込み部の側版である。厚さ 1.5㎜、幅 2.7㎝の緩やかにカーブする鉄板を径 5 ～ 5.5㎜、長さ 6㎜以上の鋲で本体に 1.7 ～ 2.0㎝間隔、側辺から内側 5㎜のところで留めている。裏面には布目の痕跡が認められる。

（10 ～ 14）は鉄地金銅張りの杏葉で、（14）以外は鐘形、（14）は棘葉形の破片と思われる。腐食のため細部は分からないが、鐘形杏葉はどの破片でも、厚さ 4㎜程度の基盤の鉄板に 3㎜ほどの透かしのある別の鉄板を重ね、その上に金銅板を被せ、これを径 5 ～ 6㎜、長さ 1.2㎝以上の鋲で留めている。斜格子の交差するところは必ず鋲留である。立聞の鋲は径 8㎜と大きい。上辺 4.0㎝、高さ 2.2㎝、内側の方孔の幅 1.3㎝の立聞には方形の吊金具の鉤の部分が銹着してい

る。そこに残る鋲も立聞のそれと同じく大きい。(14) の棘葉形杏葉は七棘系にみられる肩の張りに類似し、幅 3.7㎝の立聞の裾から左右に肩が延びる部分の破片と考えられる。肩はいったん隆起して下降する形をとる。鐘形杏葉と同じく文様の交差部には径 8㎜、長さ 1.4㎝以上の鋲を留め、厚さ 4.5㎜の鉄板とさらに厚さ 2㎜の鉄板 2 枚を固定している。立聞きの幅は 3.8㎝、内側の方孔幅は 2.4㎝を測る。

(15) は鉄地金銅張りの吊鉤で本体と鉤とが一体造りである。一辺 4.0㎝の方形の釣手板金具から鉤形金具が延びるが、その付け根部分だけを残して以下は欠けている。鋲留は各辺 3 個と中央に施されるが、中央と隅角に残る鉄鋲の径は径 7.0㎜と大きい。鉄板を重ねて鋲で固定していると思われるが、腐食のため見えない。

(16 ～ 24) は雲珠もしくは辻金具の破片である。いずれも鉄地金銅張りである。(16) は辻金具と思われる。径 6.5㎝の伏鉢部に幅 3.6㎝の脚が付くもので、その付け根を幅 5.0 ～ 6.0㎜の責金具で留めている。(17) も辻金具の断片であり、伏鉢部の径は 5.5㎝程度になる。脚部付け根に、幅 4.0㎜の責金具の破片が残る。(18) は辻金具の伏鉢部の破片であり、弧状の一部を裾に留めている。伏鉢の径が 8.0㎝程度の大型品と思われる。(19) は径 4.0㎝程度の伏鉢の裾から 8 脚が延びる雲珠の破片である。座金は六角形をなしていたらしくその一角に鋲留があり、他の 2 箇所の角にも鋲留孔がある。伏鉢部分は圧し潰れている。中央には径 5.0㎜前後の鋲留の痕跡があり、装飾付きの雲珠であった可能性がある。錆が激しいが少なくとも 2 枚の鉄板を重ねているのがうかがえる。(20 ～ 22) は雲珠の脚部断片である。(20) は幅・長さ共に 3.5㎝で、厚さ 2.0㎜の鉄板を 2 枚重ねて径 8.0㎜の鋲を用い 4 箇所で革帯に留める。(21) は厚さ 4.0㎜・幅 3.8㎝、長さ 2.5㎝の鉄板で、前側辺に沿って径 7.0 ～ 8.0㎜の鋲で革帯に留める。脚部付け根の表面には責金具の外れた痕跡が、裏面には責金具の一部が銹着している。(22) は付け根側では幅 4.5㎝、先端側では幅 3.5㎝を測る脚部の断片である。厚さ 2.0㎜の鉄板の両側を斜め下に曲げ、径 8.0㎜の頭の大きい鋲で革帯にかしめている。(23) は伏鉢の破片で立ち上がりは大きい、(24) は雲珠の脚部の破片で、厚さ 2.0㎜の金張りを残す鉄板 2 枚とその下に基盤となる 3.0㎜の鉄板 2 枚を重ねる。上の 2 枚の鉄板の断面が上辺幅 0.9㎝、下辺幅 1.3㎝の台形となる。(19) の雲珠の脚部に当るものかと思われる。

飾金具類ほか (第 95 図)

原形を復し難い断片であるので飾金具として説明する。(1 ～ 15) は鉄地金銅張り革帯当金具の破片である。(1) は厚さ 3.0㎜、3.9 × 4.8㎝の長方形で、側辺端面はすべて斜辺となり、長辺に沿って 1.6㎝間隔で径 8.0㎜、軸長 1.7㎝の鋲を 3 箇所で留めている。表面に鍍金が残る。(2) は幅 4.0㎝、厚さ 4.0㎜の鉄板を用いた帯先当金具で、先端両角は丸みを帯びる。側辺より内側 6.0㎜に径 5.5 ～ 6.0㎜の鋲を 4 箇所で留める。表面は凹面となる。(3) も方形の帯先当金具で、側辺から内側 8.0㎜のところで、厚さ 2.0㎜の鉄板 2 枚を径 7.5㎜の鋲を用い 1.0㎝間隔で留めている。(4・5) は先端円形となる帯先当金具で、(4) には厚さ 2.0㎜の鉄板の中

央に径3.0㎜の鋲留孔を残す。側縁は斜め下方に6.0㎜曲げている。(7) は鋲頭の径が0.9㎝・高さ7.0㎜と大きく高い。(6・7) には裏面に革の痕跡がある。(10) は2.0㎜と3.0㎜の鉄板を2枚重ねている。

(16) は厚さ2.0㎜の鉄板の側辺端面を斜めにカットし、(17～20) は、丸みをつけて仕上げている。(17・18・20) は厚さ1.0㎜と薄い。(17) には裏面に木質を残す。(21) は一端が弧状となる幅3.1㎝、最大厚2.8㎜の鉄地金銅張りで、表面全体に鍍金が残る。鋲留孔はない。裏面に有機質の付着が見られる。(22) は厚さ2.0㎜の鉄板の側辺端面を斜めにカットするもので、径3.0㎜の鋲留孔が側辺に沿って1.1～1.3㎝の間隔で穿たれている。鋲頭の径は痕跡から8.0㎜。(23) は内側にハート形透かしの銅製薄板を厚さ1.5㎜の鉄板に重ね、これを径3.0㎜の銅製鋲を用いて3箇所でかしめた革帯先端金具で、幅4.0㎜の銅製責金具が付く。裏面に皮革の痕跡を認める。帯先金具あるいは雲珠・辻金具類の脚部の可能性もある。(24) は、金具の端部片で、表裏から鋲留めする金銅製品である。(25) は鉄地金銅張りの歩揺の芯頭である。最大径1.0㎝、頂部は球形をなす。底面は剥離痕がある。(26～57) は、大小各種の鋲留の例である。(53) は他の鋲と異なり、短辺7.5㎜・長辺13.0㎜の長方形、高さ3.5㎜の断面蒲鉾形の鋲で、銀張りである。(58)は厚さ1.0～1.5㎜の鉄板の下に布地と木質を重ね、これを径3.0㎜前後の鋲で留めるが鋲頭は扁平である。(59) は幅8.5～9.0㎜・厚さ1.0㎜の弧状の鉄板を厚さ2.5㎜の基盤となる鉄板に重ね鋲留している。鋲留孔は弧状帯が直線帯に屈曲する角にある。

鉸具・鎖類ほか（第96図）

(1～3) は鉸具である。(1) は長さ4.5㎝・幅4.5㎝の帯先の金銅製鉸具である。刺金基軸径は5.0㎜で、先端は細くなる。革帯飾金具を取り付ける基軸は、長さ3.7㎝・径2.0㎜である。輪金の断面は円形であるが、基部に至って側辺面取りをなす。(2)は鉄製で、残存長3.1㎝・幅2.6㎝、輪金の径は先端で3.0㎜・基部で5.0㎜弱、刺金軸の長さは2.0㎝・径は4.0㎜。(3) は地金鉄製で長さ7.1㎝・輪金幅5.5㎝、基部幅2.5㎝・径5.0㎜で、鞍に取り付く鞍か。このほかに全長6.3㎝、輪金幅5.8㎝、軸径5.0㎜の銙具がある。指金基軸は金銅製で、幅2.1㎝、径4.0㎜である（図版114）。

(4～6) は鉄地金銅張りの座金である。(4) は幅3.7㎝のハート形に、裾回り径2.6㎝・隆起部径1.8㎝・高さ1.1㎝の座金で、吊環通し孔がある。(5) もほぼ同様の座金であるが、径2.0～2.5㎜の孔をもち、幅5.0～6.0㎜・厚さ0.5㎜の吊環の銅製留具（残存長1.1㎝）が残っている。(6) は、裾回りの径3.7㎝・隆起部の径2.3㎝・高さ1.0㎝の座金片で、鍍金は剥離している。

(7～13) は、鎖類である。(7) は径5.0～7.0㎜の鉄芯を3本合わせて鍛造し、径1.4㎝前後の鉄棒とし、これを曲げて径9.0～10.0㎝の鉄環としている。素環鏡板の破片か。(8・9) はいずれも断面長方形の鉄棒を用いて径4.8～5.0㎝の鉄環としている。(8)の断面は4.0×5.0㎜、(9) のそれは5.0×8.0㎜と後者が太い。雲珠の可能性も考えられるが皮革の痕跡はない。

（10・11）は兵庫鎖である。（10）は、径0.8～1.0㎝・長さ26.0～28.0㎝の鉄棒を二つ折りにして両端に別の鉄棒を通す径1.4㎝の環を拵え、その両端以外は接合させた後、さらにその中央で二つ折りにし、先の両端の環を合わせ、一方、中央で折り曲げた部分にも環を作る。このようにして全長6.5㎝の二重の鉄棒の両端に、互いに直交する環を得ている。（11）は素材としての鉄棒の径が0.6㎝前後で（10）に比べて細く、全長も18.0㎝程度と短い。いずれも鐙靼と思われる。（12）は径1.1～1.2㎝の鉄棒をU字形に曲げたもので、鐙靼の鎖の頂部逆U字形となる吊金具で、この下に兵庫鎖を吊り下げると考えられる。（13）は厚さ0.2～0.3㎝で、幅は一端が3.0㎝、他端が3.5㎝の鉄板の、その短辺側で折り曲げて、径0.7㎝・残存長3.5㎝の鉄棒を通している。通された鉄棒の一端は緩やかに曲げている。用途は不明である。

（14～16）は薄い鉄板の側辺に小孔を連ねている。（14）は幅3.5～3.6㎝・厚さ2.0㎜前後の凹みのある鉄板で、端部は丸みをつけ、その端部から内側に3.0～4.0㎜のところで側辺沿いに径2.0～3.0㎜の孔を1.0～1.5㎝間隔で穿っている。（15・16）は厚さ1.0㎜に満たない薄い鉄板の側縁を外側に曲げたもので、その側辺から内側8.0㎜のところに長さ3.0㎜の楕円形の孔を4.0㎜間隔で穿っている。（15）にはこの孔の列の上下にさらに径1.0㎜の小孔の列がある。これらの孔は鋲留孔ではなく、なんらかの材質の異なるものを紐通しによってこの金属板に固定するために穿たれている。とすると、用途しては障泥の縁金のようなものが考えられる。（15・16）の側縁の折り曲げ部分に鍍金の残るところがある。

金製品・鋲（第97図）

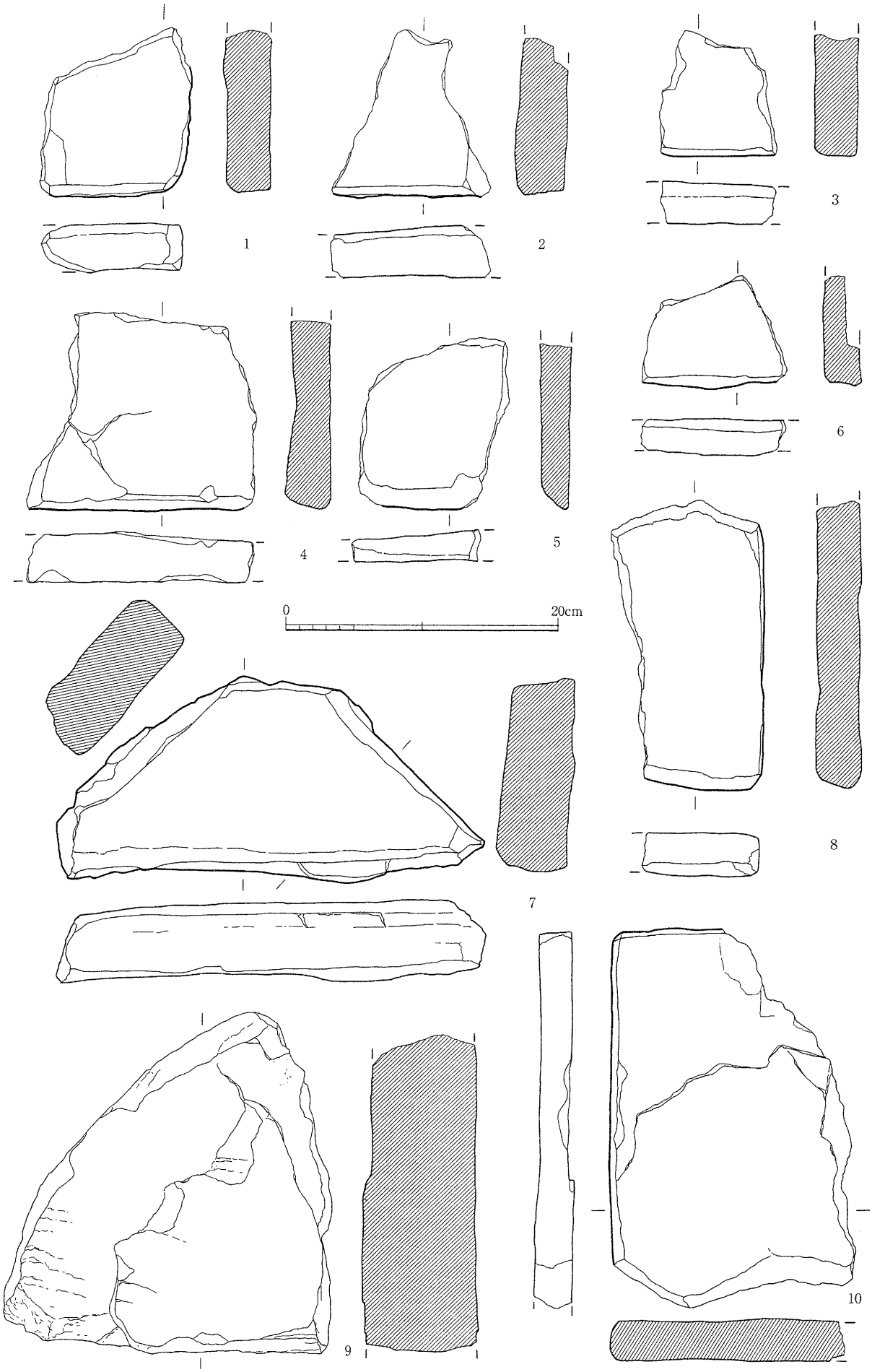
（1）は厚さ0.09㎜、（2）は厚さ0.07㎜、（3・4）は厚さ0.1㎜の薄い金板である。（1）は1.0×0.9㎝、（2）は1.2×1.1㎝の方形、（3）は底辺1.8㎝・高さ5.0㎜の三角形で、両斜辺は端部を切り取らずに残している。（4）は幅2.4㎝・高さ1.2㎝の木の葉形に切っている。いずれにも孔はみられない。

（5）は鉄製の鋲で、鋲頭径2.0㎜弱・軸径0.5㎜・軸長6.0㎜である。（6～10）は金製鋲で、鋲頭径1.3～1.47㎜・軸厚0.7～0.9㎜で下方に窄まり、いずれも断面は下半あたりから多角形となる。全長は5.0～5.6㎜で、鋲頭高0.7～0.8㎜でその頂部は平坦もしくは凹んでいる。

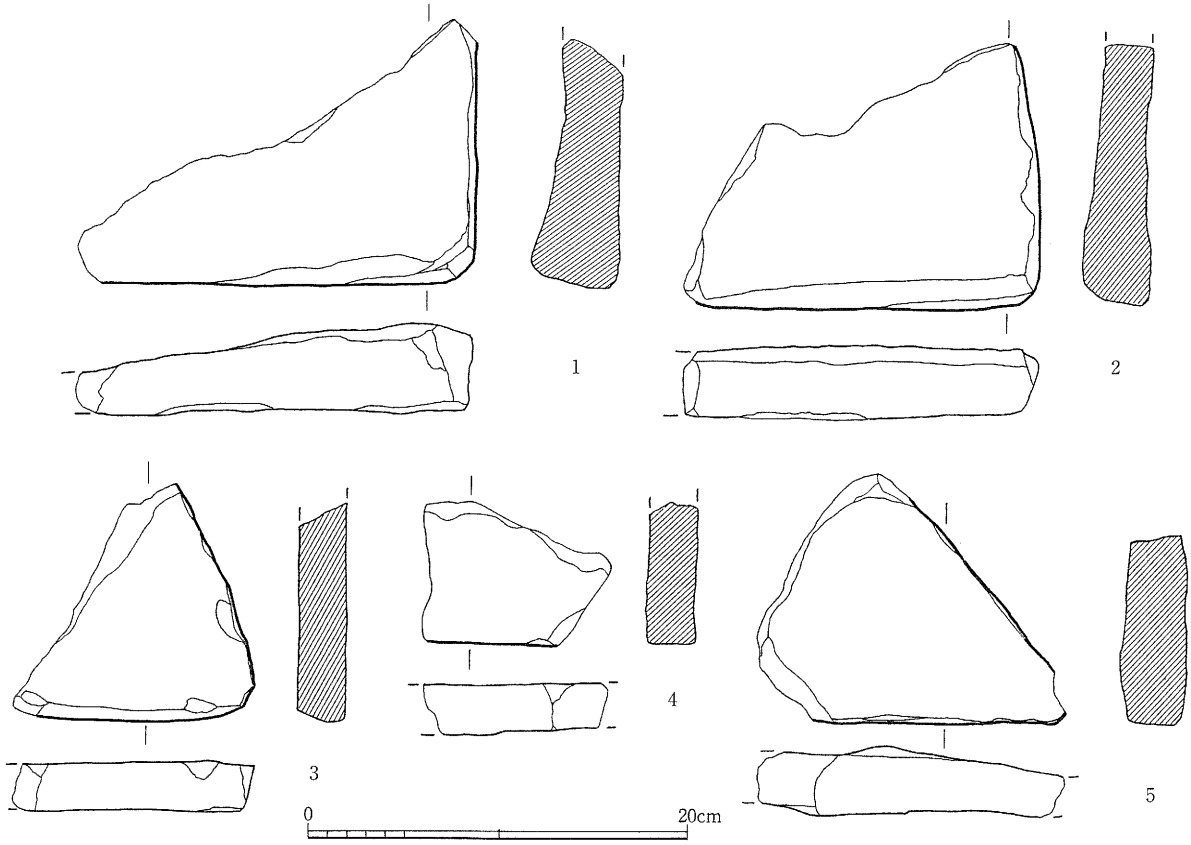
石材（第98～100図・図版146）

奈良県室生郡一帯に分布する流紋岩質熔結凝灰岩（室生安山岩）、いわゆる「榛原石」の破片が石室、羨道、第6トレンチ南端の後世の撹乱土より出土している。出土層は石室内堆積土（第186～207層）、削られた墳頂南斜面の現在の耕土下の一連の盛土（第6トレンチ南北断面第53図第157～172層）、さらに、周辺では前面テラス状施設南端の撹乱盛土（第6トレンチ南北断面南端第53図第271～276・289層）から、小片も含め100数点採取された。その中には接合可能な破片が10数点あり、石室内の堆積土から出土した破片が、前面テラス状施設の南端撹乱土の破片と接合できるものも含まれている。

破片には、側辺の端面や稜角、一部平坦面を削っている痕跡が認められるものがある（第99



第98図　石室内撹乱土出土榛原石・アプライト片実測図（1/4）

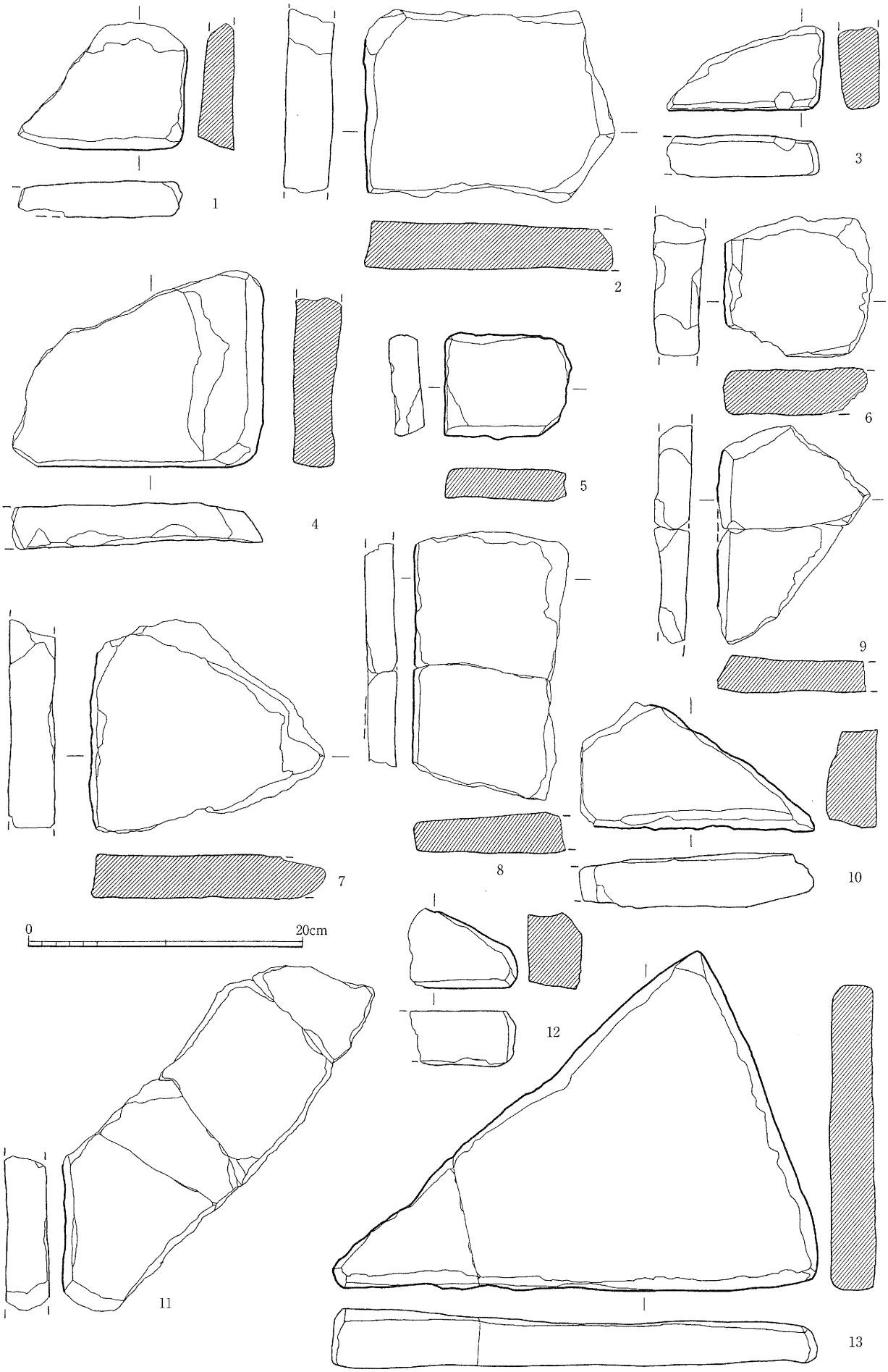


第99図　羨道部撹乱土出土榛原石片実測図（1/4）

図1・2、第100図8)。また全周に加工を施す例もある（第98図8、第100図7)。平面的には三角形（第98図7、第99図3・5、第100図10・13）のものや方形であったと思われるもの（第98図10、第99図1・2、第100図1・3・4）の破片が見られる。厚さは1.0～6.0㎝にわたっているが、2.5～4.5㎝が多い。現地調査の時点で採取された破片以外に、室内洗浄の過程でも小破片が見つかっている。その他の石材としては、板状のアプライト片が石室内堆積土より1点出土しているほか、仕切石に用いられた例を別として、細片・細粒となった凝灰岩がコンテナ（57×33×13㎝）にして4箱分を採取している。一部に面をなすものも認められるが、具体的な形状は不明である。破片の中には撹乱土の堆積過程で漆塗籠棺片の朱漆が付着した破片や、土圧によって土混じりの凝灰岩の屑に籠の編目そのものの痕跡がとどめられた例もある（図版118)。

漆塗籠棺（図版116、145）

すべて破片状態で、大は10.0～13.0㎝四方の破片から屑粒のものまで、総量は遺物コンテナにして8箱程度出土した。石室内堆積土のみならず、外部の周溝埋土、棚田造成に伴う撹乱土からも出土している。第23トレンチでは、周溝の底面に土が溜まり始める頃の堆積土である第30層からその細片2点が出土した。同様の土層は第8トレンチでも確認され、そこから須恵器杯身、甕の破片（第67図22、24）が出土している。このことは埋葬施設の盗掘または破壊が少なくとも8世紀中頃までには行われたとみられる。全形は知りえないが容器の口縁部、体部または底部、コーナー部分、底部から体部にかけての破片がある。その破片を全て面積計算し



第100図　第６トレンチ南端攪乱部出土榛原石片実測図（1/4）

たところ、全体で1.0㎡足らずであった。

これらの破片について復原研究した結果が第2部第2章第5節に掲載されている。

第2節　駕田古墳

この調査区は平成13年度第20トレンチの東端にあたる。その際の調査ではここには南北溝が検出されていた。しかしトレンチ南側のコンクリート擁壁(高さ3.5m)が、圃場整備事業によって取り去られることとなったため、事前に取り外しを行なったところ、その壁面に東西16.0m余にわたって古墳の石室正面、墳丘盛土、堀割、石室構築土などが露呈し、その結果新たに古墳1基が発見されるに至り、約450.0㎡の範囲で調査を実施した。ただし平成14年度の調査では埋葬施設の内部調査は行なわず、古墳の規模・形状・残存状況を確認するにとどめ、古墳は圃場整備事業では盛土を行なって保存されることになった（第101図)。

1．位置

平成13年度に調査したシシヨツカ古墳の北東約50.0mに張り出す尾根の南端にあたり、シシヨツカ古墳に非常に接近している。地籍図には「駕田」とあるので、「駕田(かごた)古墳」と命名した。背後には、シシヨツカ古墳の場合と同じく、標高238.9 mの「一の禿」から派生する主尾根に連なる標高186.6 mの山頂が迫り、背後にこの山を意識して築かれたことは明白である。

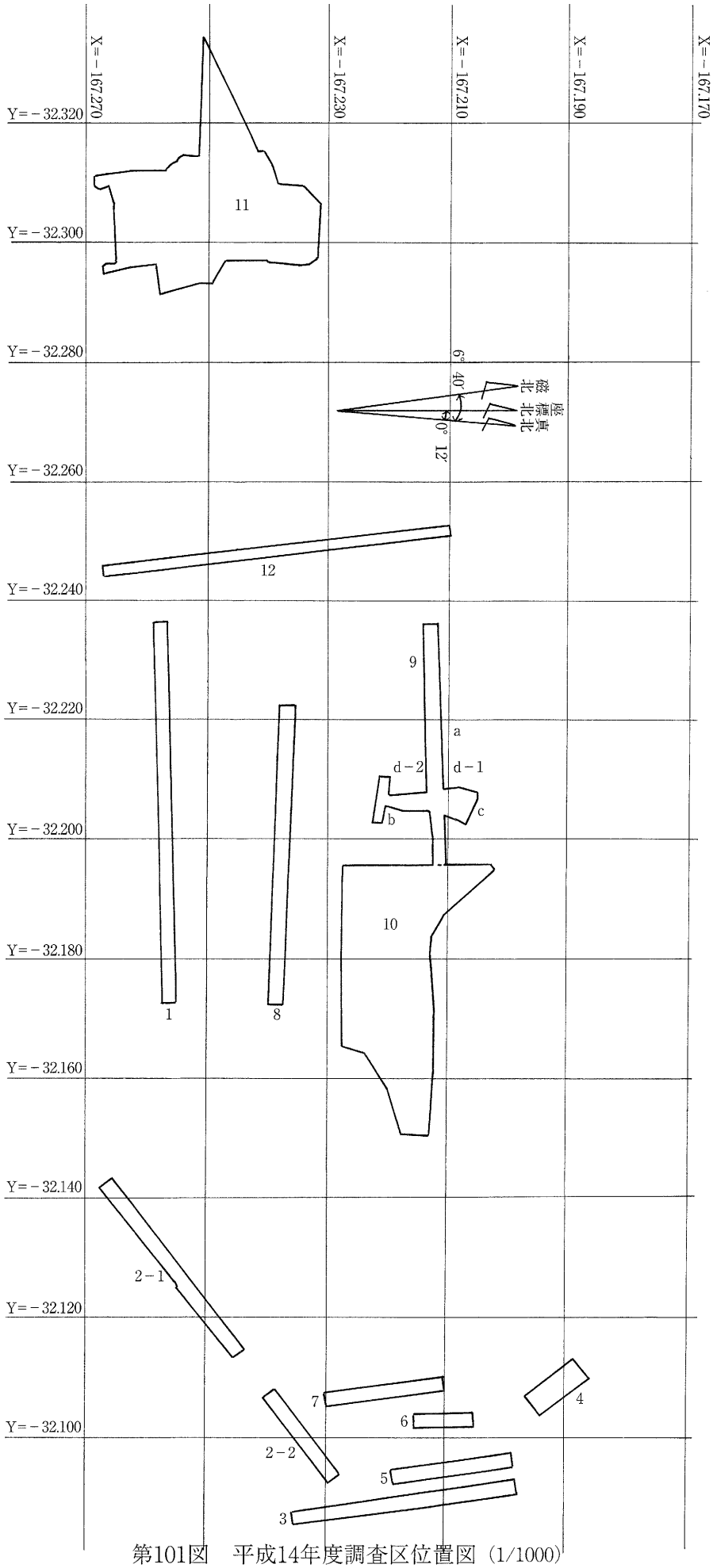
2．墳丘（第102～108図)

後世の棚田造成により削られて全形をとどめていないが、西側は墳丘から堀割の肩までが確認できる。墳丘盛土は削られているが高さ2.0 m程度が残り、石室の天井石が一部露呈した状態である。捉えられた墳丘の北西コーナーと石室前面との位置関係から、平面形態は東西15.0～16.0 m、南北9.0～10.0 mの長方形となる方墳で、周囲には北西から下る尾根の先端を南西～北東方向に断ち切って掘り込まれた、幅6.0 m程度の掘り割が墳丘の西側そして北側をめぐる。東側は損なわれて原状をとどめていないが、地形からみて、尾根の西側と北側の二方を大きく逆L字形に切って堀割とし、その南側に墳丘を築いている。

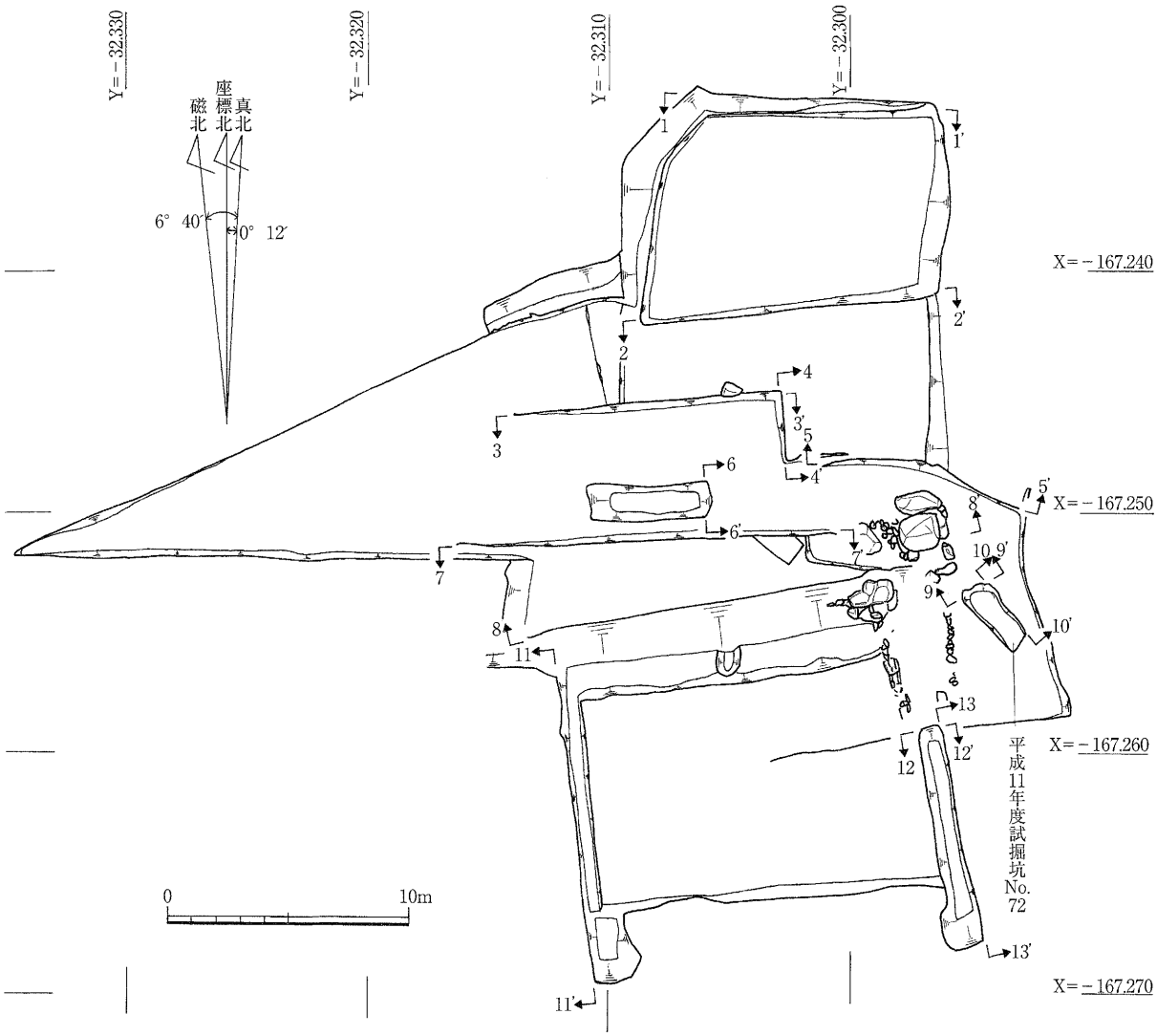
墳丘の盛土はコンクリート擁壁を取り除いて露呈した古墳前面の南側の東西断面（第19図8－8')と撹乱された墳丘東北部の断面（同図5－5')によって観察した。東西断面では北西から南東にのびる尾根の先端を北東～南西に断ち切ってある程度の平坦面を確保した後、この平坦面に石室構築の基盤を築く盛土を行なっている（第19図8－8'断面図第198～272層)。また石室周囲では側石を据えた後、その下半を固定させ（173～178層)、上半は何層も薄く土を盛り上げている（第139～172層)。墳丘北半部の撹乱部分の断面では層厚2～3㎝の粘質土と砂質土を概ね交互に積み上げる版築状盛土を観察できた。

3．埋葬施設（第107図)

本墳は1つの墳丘に石室を2つ同時に並列して築く双室の形態をとっている。規模、主軸、構造ともに同じ企画のもとに築かれ、墳丘の南北中心軸を挟んで東西に対称的な位置関係をとっ



第101図　平成14年度調査区位置図（1/1000）

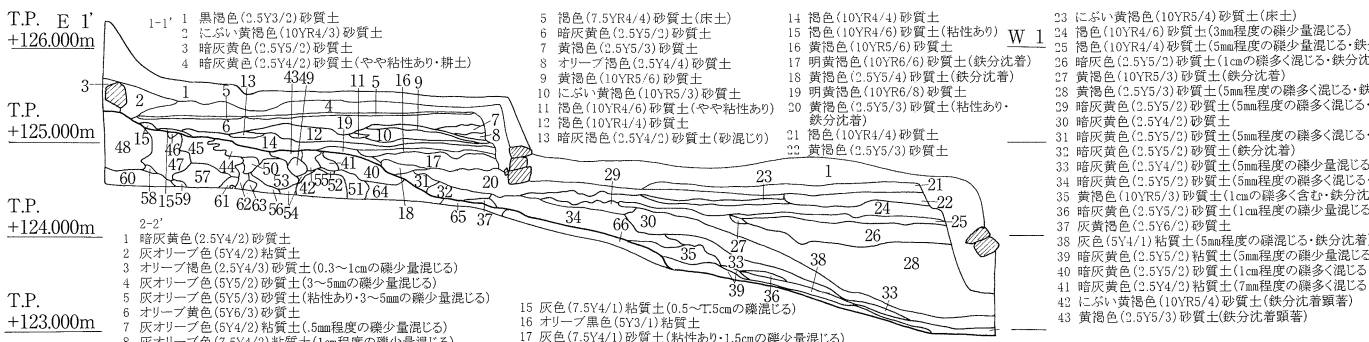


第102図　第11調査区平面図（1/300）

ている。石室の前面にはそれぞれ排水暗渠が設けられている。

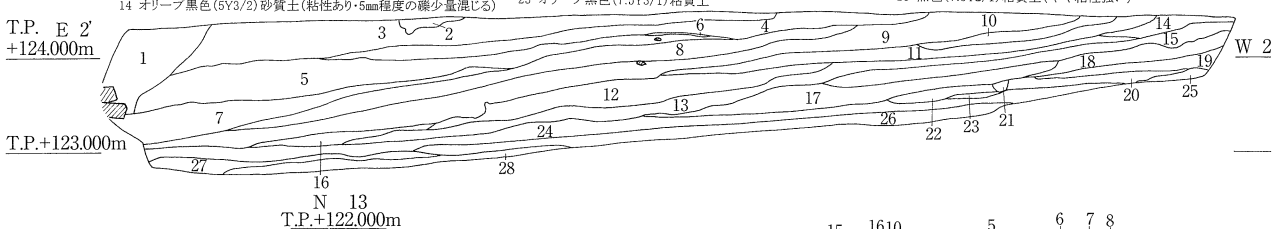
東石室は損壊が激しく、入口天井石とその側石が既に取り外されて、側石抜き取り穴だけがその痕跡をとどめ、また２枚目の天井石は東端がそれを支持する側石の内側に落ち込んだ状態であった。さらにその天井石の西側には盗掘の痕跡と思われる礫溜りがあり、北西側斜め上から盗掘坑を入れて東石室に侵入したことがあったようである。礫に紛れて近世磁器椀（105・106）が出土しているので、18 世紀前半にはこの盗掘が行なわれたとみられる。

東石室内は天井まで泥土が溜っていたが、筆者が現場に不在の間に、手違いで現場作業員がこの天井石の下の泥土を床面より 15.0㎝の高さまで掻き出してしまっていた。入り口の両側石の抜き取り穴の間には板状の凝灰岩の一部が露呈していたが、これが床石の一部であるかどうかはわからない。全体が露出した南から２枚目の天井石の大きさは 1.7 m四方・厚さ 0.8 mの自然石であった。厚みが減じる西端の下では、長さ 30.0㎝・厚み 14.0㎝の板状の川原石を側石の上に置いて内法の高さを整えている。床面の状態を確認するため 10.0㎝四方を掘り込むと、床面直上 1.0 ～ 2.0㎝の間には赤色顔料が付着し、その上に 2.0㎝ほどの微砂混じりの粘土が堆



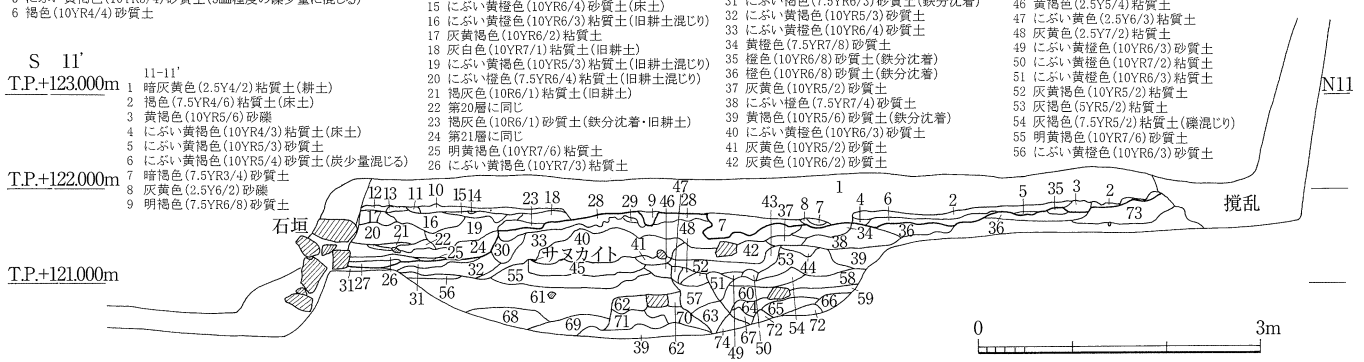
1-1'
1 黒褐色(2.5Y3/2)砂質土
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
3 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
4 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(やや粘性あり・耕土)
5 褐色(7.5YR4/4)砂質土(床土)
6 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
7 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
8 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土
9 黄褐色(10YR5/6)砂質土
10 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
11 褐色(10YR4/6)砂質土(やや粘性あり)
12 褐色(10YR4/4)砂質土
13 暗灰褐色(2.5Y4/2)砂質土(砂混じり)
14 褐色(10YR4/4)砂質土
15 褐色(10YR4/6)砂質土(粘性あり)
16 黄褐色(10YR5/6)砂質土
17 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
18 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(鉄分沈着)
19 明黄褐色(10YR6/8)砂質土
20 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
21 褐色(10YR4/4)砂質土
22 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
23 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(床土)
24 褐色(10YR4/6)砂質土(3mm程度の礫少量混じる)
25 褐色(10YR4/4)砂質土(5mm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
26 暗灰色(2.5Y5/2)砂質土(1cmの礫多く混じる・鉄分沈着)
27 黄褐色(10YR5/3)砂質土(鉄分沈着)
28 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(5mm程度の礫多く混じる・鉄分沈着)
29 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(5mm程度の礫多く混じる・鉄分沈着)
30 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
31 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(5mm程度の礫多く混じる・鉄分沈着)
32 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(鉄分沈着)
33 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(5mm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
34 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(5mm程度の礫多く混じる・鉄分沈着)
35 黄褐色(10YR5/3)砂質土(1cmの礫多く含む・鉄分沈着)
36 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(1cm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
37 灰黄褐色(2.5Y6/2)砂質土
38 灰色(5Y4/1)粘質土(5mm程度の礫混じる・鉄分沈着)
39 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(5mm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
40 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(1cm程度の礫多く混じる・鉄分沈着顆著)
41 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(7mm程度の礫多く混じる・鉄分沈着顆著)
42 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(鉄分沈着顆著)
43 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(鉄分沈着顆著)
44 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(0.5～1cmの礫少量混じる・鉄分沈着)
45 褐色(10YR4/4)砂質土(0.5～1cmの礫少量混じる・鉄分沈着顆著)
46 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(鉄分沈着)
47 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粘性あり・0.5～1cmの礫少量混じる・鉄分沈着)
48 褐色(10YR4/4)砂質土(3mm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
49 暗褐色(10YR3/4)粘質土(1cm程度の礫少量混じる・鉄分沈着顆著)
50 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(1cm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
51 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(やや粘性あり・鉄分沈着顆著)
52 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(鉄分沈着顆著)
53 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(5mm程度の礫多く混じる・鉄分沈着顆著)
54 褐色(10YR4/6)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
55 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(鉄分沈着顆著)
56 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(3mm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
57 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土(0.3～1cmの礫混じる・鉄分沈着顆著)
58 褐色(10YR4/6)砂質土(粘性あり)
59 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粘性あり・鉄分沈着顆著)
60 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(粘性あり・0.3～1cmの礫少量混じる・鉄分沈着)
61 褐色(10YR4/6)粘質土(1cm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
62 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
63 褐色(10YR4/6)砂質土(鉄分沈着顆著)
64 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(鉄分沈着顆著)
65 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(鉄分沈着)
66 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(0.3cm程度の礫混じる・鉄分沈着顆著)

2-2'
1 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
2 灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土
3 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土(0.3～1cmの礫少量混じる)
4 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(3～5mmの礫少量混じる)
5 灰オリーブ色(5Y5/3)砂質土(粘性あり・3～5mmの礫少量混じる)
6 オリーブ黄色(5Y6/3)砂質土
7 灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土(.5mm程度の礫少量混じる)
8 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘質土(1cm程度の礫少量混じる)
9 灰色(7.5Y4/1)粘質土(粘性強い)
10 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘質土(5mm程度の礫少量混じる)
11 灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土(粘性あり・5mm程度の礫少量混じる)
12 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土(5mm程度の礫やや多く混じる)
13 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(粘性あり・0.5～1cmの礫混じる)
14 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土(粘性あり・5mm程度の礫少量混じる)
15 灰色(7.5Y4/1)粘質土(0.5～1.5cmの礫混じる)
16 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土
17 灰色(7.5Y4/1)砂質土(粘性あり・1.5cmの礫少量混じる)
18 灰色(10Y4/1)粘質土(粘性強い・1cmの礫やや多く混じる)
19 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂質土(粘性あり・1cmの礫少量混じる)
20 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土(粘性強い・1cmの礫少量混じる)
21 灰色(10Y4/1)粘質土
22 灰色(5Y4/1)砂質土(1.5cmの礫少量混じる)
23 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土
24 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土(0.5～1cmの礫少量混じる)
25 オリーブ灰色(10Y4/2)砂質土(粘性あり)
26 黒色(5Y2/1)砂質土(粘性あり)
27 黒褐色(2.5Y3/2)砂質土(粘性あり)
28 黒色(7.5Y2/1)粘質土(やや粘性強い)

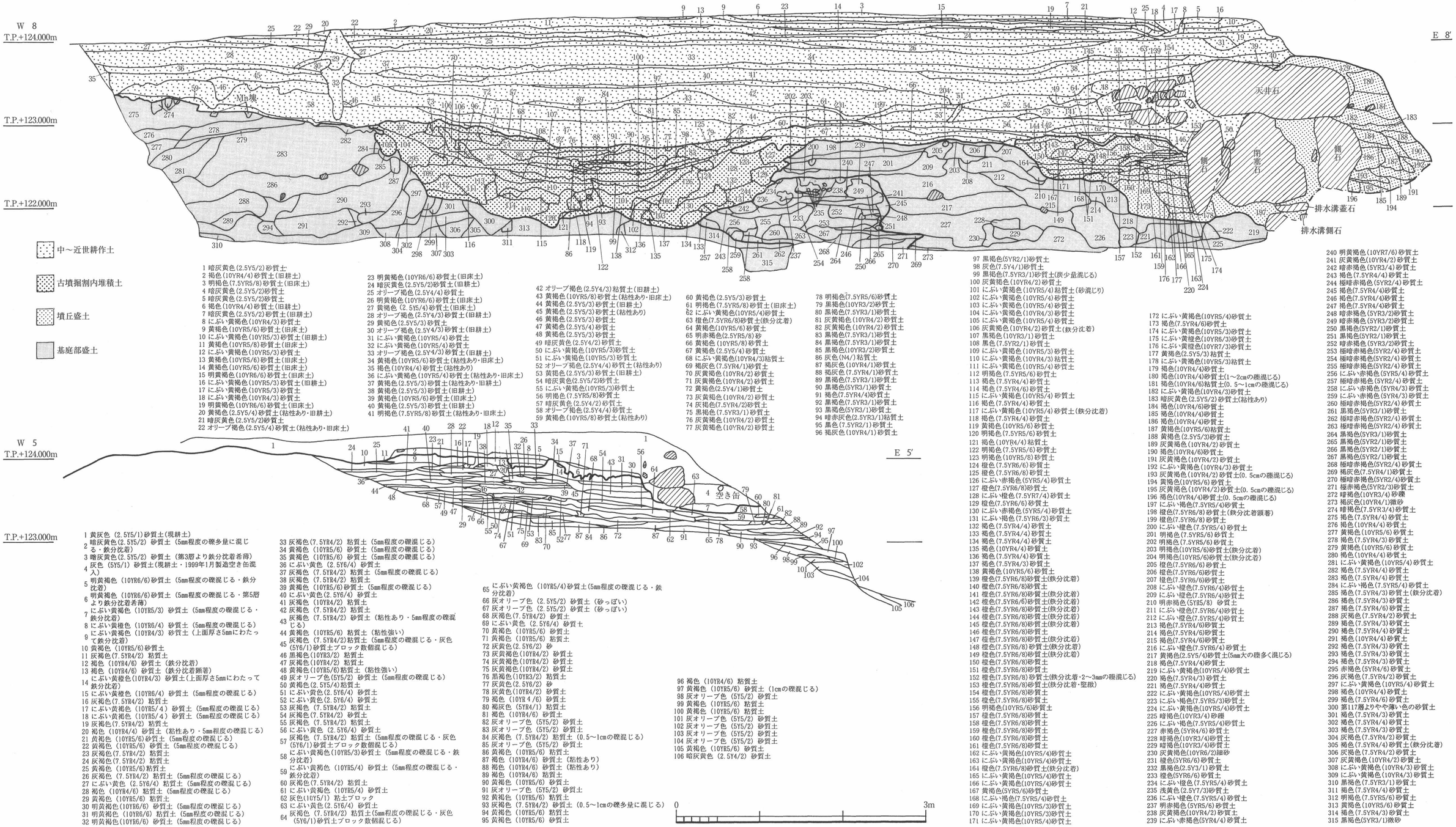


13-13'
1 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土(2001年度21トレンチ埋戻し土)
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(表土)
3 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(耕土)
4 黄褐色(10YR5/6)砂質土(床土)
5 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(耕土)
6 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(耕土・床土混じり)
7 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(耕土・床土混じり)
8 黄褐色(10YR5/8)砂質土(床土)
9 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(旧耕土・炭混じり)
10 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(床土)
11 にぶい黄褐色(2.5Y6/4)砂質土(1cm程度の礫わずかに混じる)
12 黒褐色(10YR3/1)粘質土(0.5～1.5cmの礫混じる)
13 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(5mm程度の礫少量混じる)
14 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(5mm程度の礫少量混じる)
15 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
16 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
17 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
18 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(1cm程度の礫混じり)
19 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(耕土)
20 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(1cmの礫多量に混じる)
21 暗褐色(10YR3/3)砂質土(わずかに鉄分沈着)
22 褐色(10YR4/4)砂質土(5mm程度の礫少量混じる・鉄分沈着)
23 黄褐色(10YR5/6)砂質土(1cmの礫多量に混じる)
24 暗褐色(10YR3/4)砂質土(8mmの礫わずかに混じる)
25 褐色(10YR4/4)砂質土(1.5cmの礫混じる)
26 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土(極細粒でさらさらした感触)
27 褐色(10YR4/6)砂質土(5mm程度の礫・炭混じり)
28 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(5mm程度の礫少量混じる)
29 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(1～2cmの礫多量に混じる)
30 褐色(10YR4/4)砂質土(0.5～1cmの礫多量に混じる)
31 褐色(10YR4/6)砂質土(3mmの礫混じる)
32 褐色(10YR4/6)砂質土(2～5mmの礫混じる)
33 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(1cmの礫少量混じる)
34 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(0.5cmの礫多量に混じる)
35 褐色(10YR4/4)砂質土
36 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土(極細粒でさらさらした感触)
37 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(部分的に粘性あり)
38 褐色(10YR4/4)砂(極細粒砂)
39 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
40 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂(極細粒砂・2～5mmの礫混じり)

12-12'
1 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(1cmの礫多量に混じる)
2 黄褐色(10YR5/6)砂質土(1cmの礫多量に混じる)
3 暗褐色(10YR3/4)砂質土(8mmの礫わずかに混じる)
4 褐色(10YR4/6)砂質土(2～5mmの礫混じる)
5 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(5mm程度の礫少量に混じる)
6 褐色(10YR4/4)砂質土
10 明黄褐色(10YR6/8)砂質土(床土)
11 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(鉄分沈着)
12 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土
13 第11層に耕土ブロック混じる
14 旧耕土
15 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土(床土)
16 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘質土(旧耕土混じり)
17 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土
18 灰白色(10YR7/1)粘質土(旧耕土)
19 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(旧耕土混じり)
20 にぶい橙色(7.5YR6/4)粘質土(旧耕土混じり)
21 褐灰色(10R6/1)粘質土(旧耕土)
22 第20層に同じ
25 明黄褐色(10YR7/6)粘質土
26 にぶい黄褐色(10YR7/3)粘質土
27 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土(旧耕土)
28 明黄褐色(10YR7/6)砂質土(鉄分沈着顆著)
29 第9層に同じ
30 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
31 にぶい褐色(7.5YR6/3)砂質土(鉄分沈着)
32 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
33 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
34 黄橙色(7.5YR7/8)砂質土
35 橙色(10YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
36 橙色(10YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
37 灰黄色(10YR5/2)砂質土
38 にぶい橙色(7.5YR7/4)砂質土
39 黄褐色(10YR5/6)砂質土(鉄分沈着)
40 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
41 灰黄色(10YR5/2)砂質土
42 灰黄色(10YR6/2)砂質土
43 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
44 褐灰色(10YR6/1)砂質土
45 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
46 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土
47 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土
48 灰黄色(2.5Y7/2)粘質土
49 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
50 にぶい黄橙色(10YR7/2)粘質土
51 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘質土
52 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
53 灰褐色(5YR5/2)粘質土
54 灰褐色(7.5YR5/2)粘質土(礫混じり)
55 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
56 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土



11-11'
1 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(耕土)
2 褐色(7.5YR4/6)粘質土(床土)
3 黄褐色(10YR5/6)砂礫
4 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(床土)
5 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(炭少量混じる)
7 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土
8 灰黄色(2.5Y6/2)砂礫
9 明褐色(7.5YR6/8)砂質土
57 灰褐色(7.5YR6/2)砂質土
58 褐灰色(7.5YR5/1)砂質土(礫混じり)
59 褐灰色(10YR6/1)粘質土
60 第58層に同じ
61 にぶい褐色(7.5YR6/3)砂質土
62 にぶい褐色(7.5YR6/3)砂質土
63 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土
64 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
65 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
66 褐灰色(10YR5/1)粘質土
67 褐灰色(7.5YR6/1)粘質土
68 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
69 褐灰色(10YR6/1)粘質土
70 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土
71 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
72 褐灰色(10YR5/1)粘質土
73 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
74 褐灰色(10YR5/1)粘質土

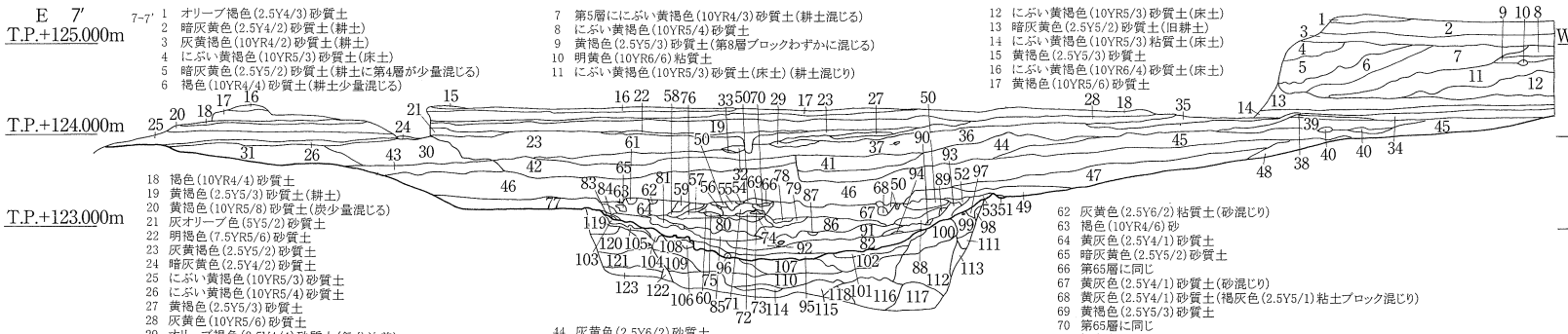


1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
2 褐色 (10YR4/4) 砂質土(旧耕土)
3 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質土(旧床土)
4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
5 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
6 褐色 (10YR4/4) 砂質土(旧耕土)
7 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土(旧耕土)
8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
9 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土(旧床土)
10 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土(旧耕土)
11 黄褐色 (10YR5/8) 砂質土(旧床土)
12 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
13 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土(旧床土)
14 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土(旧床土)
15 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土(旧床土)
16 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土(旧耕土)
17 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
18 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
19 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土(旧床土)
20 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土(粘性あり・旧耕土)
21 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
22 オリーブ褐色 (2.5Y5/4) 砂質土(粘性あり・旧床土)
23 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土(旧床土)
24 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土(旧耕土)
25 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土
26 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土(旧床土)
27 黄褐色 (2. 5Y5/4) 砂質土(旧床土)
28 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土(旧耕土)
29 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
30 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土(旧耕土)
31 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
32 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
33 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土(旧耕土)
34 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土(粘性あり・旧床土)
35 褐色 (10YR4/4) 砂質土(粘性あり)
36 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土(粘性あり・旧床土)
37 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土(粘性あり・旧耕土)
38 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土(旧耕土)
39 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土(旧床土)
40 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土(旧耕土)
41 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質土(粘性あり・旧床土)
42 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土(旧耕土)
43 黄褐色 (10YR5/8) 砂質土(粘性あり・旧床土)
44 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土(旧耕土)
45 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土(粘性あり)
46 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
47 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土
48 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
49 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土
50 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
51 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
52 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土(粘性あり)
53 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土(旧耕土)
54 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
55 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
56 明褐色 (7.5YR5/8)砂質土
57 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土
58 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土
59 黄褐色 (10YR5/8) 砂質土(粘性あり)
60 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
61 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質土(旧床土)
62 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
63 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
64 黄褐色(10YR5/6) 砂質土
65 明赤褐色(2.5YR5/8) 砂
66 黄褐色 (10YR5/8) 砂質土
67 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土
68 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
69 褐灰色 (7.5YR4/1)砂質土
70 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
71 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
72 黄褐色(2.5Y4/1)砂質土
73 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
74 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土
75 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質土
76 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
77 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
78 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
79 黒褐色(10YR3/2)砂質土
80 黒褐色(7.5YR3/1)砂質土
81 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
82 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
83 黒褐色(7.5YR3/1)砂質土
84 黒褐色(7.5YR3/1)砂質土
85 黒褐色(10YR3/2)砂質土
86 灰色(N4/)粘質土
87 褐灰色(10YR4/1)砂質土
88 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土
89 黒褐色(7.5YR3/1)砂質土
90 黒褐色(5YR3/1)砂質土
91 褐色(7.5YR4/4)砂質土
92 黒褐色(7.5YR3/1)砂質土
93 黒褐色(5YR3/1)砂質土
94 暗赤灰色(2.5YR3/1)粘質土
95 黒色 (7.5YR2/1) 砂質土
96 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土
97 黒褐色(5YR2/1)砂質土
98 灰色(7.5Y4/1)砂質土
99 黒褐色(7.5YR3/1)砂質土(炭少量混じる)
100 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
101 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土(砂混じり)
102 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
103 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
104 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
105 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
106 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土(鉄分沈着)
107 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土
108 黒色 (7.5YR2/1) 砂質土
109 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
110 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
111 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
112 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
113 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
114 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土
115 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
116 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
117 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土(鉄分沈着)
118 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
119 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
120 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
121 褐色 (10YR4/4) 粘質土
122 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
123 明褐色 (10YR5/8) 砂質土
124 橙色 (7.5YR6/6) 砂質土
125 橙色 (7.5YR6/8) 砂質土
126 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 砂質土
127 橙色(7.5YR6/8)砂質土
128 にぶい橙色 (7.5YR7/4) 砂質土
129 橙色(7.5YR6/6)砂質土
130 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 砂質土
131 にぶい褐色 (7.5YR6/3) 砂質土
132 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
133 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
134 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
135 褐色 (10YR4/4) 砂質土
136 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
137 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
138 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
139 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
140 橙色(7.5YR6/8)砂質土
141 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
142 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
143 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
144 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
145 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
146 橙色(7.5YR6/8)砂質土
147 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
148 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
149 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
150 橙色(7.5YR6/8)砂質土
151 橙色(7.5YR6/8)砂質土
152 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着・2～3mmの礫混じる)
153 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着・堅穀)
154 橙色(7.5YR6/8)砂質土
155 橙色(7.5YR6/8)砂質土
156 明褐色(10YR5/6)砂質土
157 橙色(7.5YR6/8)砂質土
158 橙色(7.5YR6/8)砂質土
159 橙色(7.5YR6/8)砂質土
160 橙色(7.5YR6/8)砂質土
161 橙色(7.5YR6/8)砂質土
162 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
163 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
164 橙色(7.5YR6/8)砂質土(鉄分沈着)
165 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
166 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
167 黄褐色(5YR5/6)砂質土
168 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土
169 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
170 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
171 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
172 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
173 褐色(7.5YR4/6)砂質土
174 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
175 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
176 にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土
177 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
178 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
179 褐色(10YR4/4)砂質土
180 褐色(10YR4/4)砂質土(1～2cmの礫混じる)
181 褐色(10YR4/6)粘質土(0. 5～1cmの礫混じる)
182 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
183 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土(粘性あり)
184 褐色(10YR4/6)砂質土
185 褐色(10YR4/4)砂質土
186 褐色(10YR4/4)砂質土
187 黄褐色(10YR5/6)粘質土
188 黄褐色 (2.5Y5/3)砂質土
189 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
190 褐色(10YR4/6)砂質土
191 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
192 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
193 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土(0. 5cmの礫混じる)
194 黄褐色(10YR5/6) 砂質土
195 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(0. 5cmの礫混じる)
196 褐色(10YR4/4)砂質土(0. 5cmの礫混じる)
197 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土
198 橙色(7.5YR6/8) 砂質土(鉄分沈着顕著)
199 橙色(7.5YR6/8) 砂質土
200 にぶい橙色 (7.5YR5/4) 砂質土
201 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
202 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
203 明褐色(10YR5/6)砂質土(鉄分沈着)
204 明褐色(10YR5/6)砂質土(鉄分沈着)
205 橙色(7.5YR6/6) 砂質土
206 橙色(7.5YR6/6)砂質土
207 橙色(7.5YR6/6)砂質土
208 にぶい橙色(7.5YR6/4)砂質土
209 にぶい橙色(7.5YR6/4)砂質土
210 明赤褐色 (5YR5/8) 砂質土
211 にぶい橙色(7.5YR6/4)砂質土
212 にぶい橙色(7.5YR5/4)砂質土
213 褐色(7.5YR4/6)砂質土
214 褐色(7.5YR4/6)砂質土
215 褐色(7.5YR4/6)砂質土
216 にぶい橙色(7.5YR6/4)砂質土
217 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(5mm大の礫多く混じる)
218 褐色(7.5YR4/4)砂質土
219 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
220 褐色(7.5YR4/3)砂質土
221 褐色(7.5YR4/4)砂質土
222 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
223 にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土
224 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
225 暗褐色(10YR3/4)砂礫
226 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土
227 赤褐色(5YR4/6)砂質土
228 暗褐色(10YR3/4)砂質土
229 暗褐色(10YR3/4)砂質土
230 灰黄褐色(10YR6/2)細砂
231 橙色(5YR6/6)砂質土
232 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土
233 橙色(5YR6/6)砂質土
234 にぶい橙色 (7.5YR5/4) 砂質土
235 浅黄色 (2.5Y7/3)砂質土
236 にぶい橙色 (7.5YR5/4) 砂質土
237 明赤褐色 (5YR5/6) 砂質土
238 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
239 にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土
240 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土
241 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
242 暗赤褐色 (5YR3/4) 砂質土
243 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
244 極暗赤褐色 (5YR2/4) 砂質土
245 褐色(7.5YR4/4)砂質土
246 褐色(7.5YR4/4)砂質土
247 褐色(7.5YR4/4)砂質土
248 暗赤褐色 (5YR3/2)砂質土
249 暗赤褐色 (5YR3/2)砂質土
250 黒褐色(5YR2/1)砂質土
251 黒褐色(5YR2/1)砂質土
252 暗赤褐色 (5YR3/2)砂質土
253 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
254 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
255 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
256 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 砂質土
257 極暗赤褐色 (5YR2/4) 砂質土
258 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土
259 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土
260 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
261 黒褐色(5YR3/1)砂質土
262 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
263 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
264 黒褐色(5YR3/1)砂質土
265 黒褐色(5YR2/1)砂質土
266 黒褐色(5YR2/1)砂質土
267 黒褐色(5YR2/1)砂質土
268 極暗赤褐色(5YR2/4) 砂質土
269 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土
270 極暗赤褐色(5YR2/4)砂質土
271 極赤褐色(5YR2/3)砂質土
272 暗褐色(10YR3/4) 砂礫
273 褐灰色(10YR4/1)微砂
274 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土
275 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
276 褐色 (10YR4/4) 砂質土
277 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
278 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
279 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
280 褐色 (10YR4/4) 砂質土
281 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
282 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
283 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
284 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土
285 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土(鉄分沈着)
286 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
287 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土
288 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
289 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
290 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
291 褐色 (10YR4/4) 砂質土
292 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
293 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
294 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
295 赤褐色 (5YR4/6) 砂質土
296 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
297 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
298 褐色 (10YR4/4) 砂質土
299 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土
300 第11層よりやや薄い色の砂質土
301 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
302 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
303 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
304 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
305 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土(鉄分沈着)
306 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
307 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
308 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
309 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
310 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質土
311 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
312 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
313 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
314 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土
315 黒褐色(5YR3/1)微砂

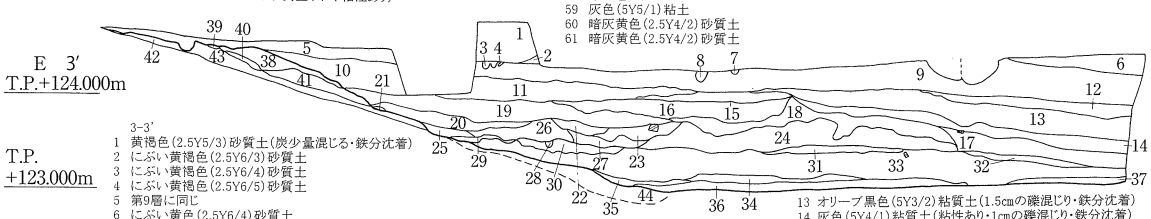
1 黄灰色 (2. 5Y5/1) 砂質土(現耕土)
2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土 (5mm程度の礫多量に混じる・鉄分沈着)
3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土 (第3層より鉄分沈着希薄)
4 灰色 (5Y5/1) 砂質土(現耕土・1999年1月製造空き缶混入)
5 明黄褐色 (10YR6/6)砂質土 (5mm程度の礫混じる・鉄分沈着)
6 明黄褐色 (10YR6/6)砂質土 (5mm程度の礫混じる・第5層より鉄分沈着希薄)
7 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 (5mm程度の礫混じる・鉄分沈着)
8 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 (上面厚さ5mmにわたって鉄分沈着)
10 黄褐色 (10YR5/6)砂質土
11 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土
12 褐色 (10YR4/6) 砂質土 (鉄分沈着)
13 褐色 (10YR4/6) 砂質土 (鉄分沈着顕著)
14 にぶい黄橙色(10YR4/3) 砂質土(上面厚さ5mmにわたって鉄分沈着)
15 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
16 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土
17 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
18 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
19 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土
20 褐色 (10YR4/4) 砂質土 (粘性あり・5mm程度の礫混じる)
21 黄褐色 (10YR5/6)砂質土 (5mm程度の礫混じる)
22 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
23 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土
24 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土
25 黄褐色 (10YR5/6)粘質土
26 灰褐色 (7. 5YR4/2) 粘質土 (5mm程度の礫混じる)
27 にぶい黄色 (2. 5Y6/4) 粘質土 (5mm程度の礫混じる)
28 褐色 (10YR4/6) 粘質土 (5mm程度の礫混じる)
29 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
30 明黄褐色(10YR6/6) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
31 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 (5mm程度の礫混じる)
32 明黄褐色(10YR6/6) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
33 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土 (5mm程度の礫混じる)
34 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
35 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
36 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土
37 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 (5mm程度の礫混じる)
38 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
39 黄褐色 (10YR5/6)砂質土 (5mm程度の礫混じる)
40 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土
41 灰褐色 (10YR4/2) 粘質土
42 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
43 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (粘性あり・5mm程度の礫混じる)
44 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 (粘性強い)
45 灰褐色 (7.5YR4/2)粘質土 (5mm程度の礫混じる・灰色(5Y6/1)砂質土ブロック数個混じる)
46 黒褐色(10YR3/2) 粘質土
47 灰褐色(10YR4/2) 粘質土
48 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (粘性強い)
49 灰オリーブ色(5Y5/2) 砂質土 (5mm程度の礫混じる)
50 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土
51 にぶい黄色(2.5Y6/4) 砂質土
52 にぶい黄色(2.5Y6/4) 砂質土
53 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
54 灰褐色(7.5YR4/2) 砂質土
55 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
56 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土
57 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 (5mm程度の礫混じる・灰色(5Y6/1)砂質土ブロック数個混じる)
58 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 (5mm程度の礫混じる・鉄分沈着)
59 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 (5mm程度の礫混じる・鉄分沈着)
60 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土
61 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
62 灰色(10Y5/1) 粘土ブロック
63 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土
64 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土(5mm程度の礫混じる・灰色(5Y6/1)砂質土ブロック数個混じる)
65 にぶい黄褐色 (10YR5/4)砂質土(5mm程度の礫混じる・鉄分沈着)
66 灰オリーブ色 (2. 5Y5/2) 砂質土 (砂っぽい)
67 灰オリーブ色 (2. 5Y5/2) 砂質土 (砂っぽい)
68 灰褐色(7.5YR4/2) 砂質土
69 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土
70 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
71 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
72 灰黄色(2.5Y6/2) 砂
73 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
74 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
75 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土
76 黒褐色(10YR3/2) 粘質土
77 灰黄色(2.5Y6/2) 砂
78 灰黄色(10YR4/2) 砂質土
79 褐色 (10YR 4/6) 砂質土
80 褐灰色 (5YR4/1) 粘質土
81 褐色 (10YR4/6) 砂質土
82 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
83 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
84 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 (0.5～1cmの礫混じる)
85 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
86 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
87 褐色 (10YR4/6) 砂質土 (粘性あり)
88 褐色 (10YR4/6) 砂質土 (粘性あり)
89 褐色 (10YR4/6) 粘質土
90 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
91 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
92 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
93 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (0.5～1cmの礫多量に混じる)
94 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
95 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
96 褐色 (10YR4/6) 粘質土
97 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (1cmの礫混じる)
98 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
99 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
100 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
101 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
102 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
103 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
104 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
105 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土
106 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土

第104図　第11調査区断面図（２）（1/40）

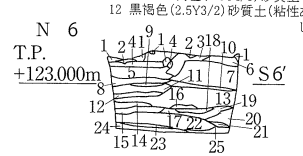
第105図　第11調査区断面図（3）



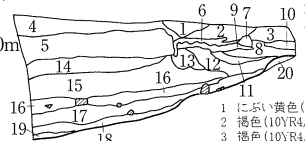
7-7′
1 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土
2 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(耕土)
3 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(耕土)
4 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(床土)
5 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(耕土に第4層が少量混じる)
6 褐色(10YR4/4)砂質土(耕土少量混じる)
7 第5層ににぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(耕土混じる)
8 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
9 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(第8層ブロックわずかに混じる)
10 明黄色(10YR6/6)粘質土
11 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(床土)(耕土混じり)
12 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(床土)
13 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(旧耕土)
14 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(床土)
15 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
16 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土(床土)
17 黄褐色(10YR5/6)砂質土
18 褐色(10YR4/4)砂質土
19 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(耕土)
20 黄褐色(10YR5/8)砂質土(炭少量混じる)
21 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土
22 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
23 灰黄褐色(2.5Y5/2)砂質土
24 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
25 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
26 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
27 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
28 灰黄色(10YR5/6)砂質土
29 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土(鉄分沈着)
30 黄褐色(2.5Y5/6)砂質土(鉄分わずかに沈着)
31 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(鉄分わずかに沈着)
32 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土
33 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
34 黄褐色(10YR5/6)砂質土(粘性あり)
35 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(鉄分沈着)
36 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
37 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土
38 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
39 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
40 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂と灰黄褐色(10YR5/2)砂質土の混在
41 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
42 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(やや粘性あり)
43 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(やや粘性あり)
44 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
45 褐色(10YR4/3)砂質土(にぶい黄褐色(10YR5/3)砂混じり)
46 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
47 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
48 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(やや粘性あり)
49 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土
50 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土と黒褐色(10YR3/2)砂質土の混在
51 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
52 灰黄色(10YR5/2)砂質土
53 黒褐色(10YR3/1)砂質土
54 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
55 灰色(5Y4/1)粘質土(砂混じり)
56 第59層に同じ
57 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(鉄分沈着)
58 第65層に同じ
59 灰色(5Y5/1)粘土
60 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
61 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
62 灰黄色(2.5Y6/2)粘質土(砂混じり)
63 褐色(10YR4/6)砂
64 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
65 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
66 第65層に同じ
67 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(砂混じり)
68 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(褐灰色(2.5Y5/1)粘土ブロック混じり)
69 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
70 第65層に同じ
71 褐色(10YR4/4)砂質土
72 第59層に同じ
73 黄褐色(2.5Y5/3)砂
74 黒褐色(10YR3/1)砂質土
75 褐灰色(10YR4/1)砂質土(粘土混じり・やや粘性あり)
76 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
77 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(やや粘性あり)
78 黄褐色(10YR5/6)砂質土
79 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土(砂混じり)
80 黒褐色(10YR3/1)砂質土(砂混じり)
81 灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土
82 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
83 褐灰色(10YR4/1)粘土
84 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(砂混じり)
85 灰オリーブ黒色(5Y3/2)粘質土
86 黒褐色(10YR3/1)砂質土(砂多く混じる)
87 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
88 灰色(5Y4/1)粘質土(砂混じり)
89 黒色(N1.5/0)砂質土(鉄分沈着)
90 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂
91 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土
92 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土
93 黒色(N1.5/0)砂質土
94 黒色(7.5Y2/1)粘質土(砂混じり)
95 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土(砂混じり)
96 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(砂混じり)
97 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
98 明褐色(7.5YR5/8)砂質土(鉄分沈着)
99 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(やや粘性あり)
100 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(砂混じり)
101 黄褐色(2.5Y4/1)粘質土(砂混じり)
102 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(砂混じり)
103 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(砂混じり)
104 灰色(5Y4/1)粘質土(砂混じり)
105 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土(鉄分沈着)
106 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(砂混じり)
107 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(砂混じり)
108 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(砂混じり)
109 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
110 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
111 第98層に同じ
112 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(砂混じり)
113 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(砂混じり)
114 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(砂混じり)
115 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(砂混じり)
116 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
117 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
118 第117層に同じ
119 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
120 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(やや粘性あり)
121 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
122 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
123 第120層に同じ



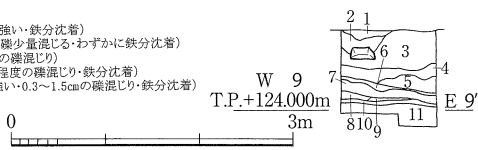
3-3′
1 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(炭少量混じる・鉄分沈着)
2 にぶい黄褐色(2.5Y6/3)砂質土
3 にぶい黄褐色(2.5Y6/4)砂質土
4 にぶい黄褐色(2.5Y6/5)砂質土
5 第9層に同じ
6 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
7 灰色(10YR5/1)砂質土
8 第7層に同じ
9 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(粘性あり・1～2cmの礫混じり・鉄分沈着)
10 第11層に同じ
11 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土(0.5～1cmの礫混じり)
12 黒褐色(2.5Y3/2)砂質土(粘性あり・1cmの礫混じり・鉄分沈着)
13 オリーブ黒色(5Y3/2)粘質土(1.5cmの礫混じり・鉄分沈着)
14 灰色(5Y4/1)粘質土(粘性あり・1cmの礫混じり・鉄分沈着)
15 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(1cm程度の礫混じり・鉄分沈着)
16 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(1.5cm程度の礫混じり・鉄分沈着)
17 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土(粘性強い・1cmの礫混じり・鉄分沈着)
18 灰色(5Y4/1)粘質土(0.5～1cmの礫混じり・鉄分沈着)
19 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(やや粘性強い・鉄分沈着)
20 灰色(7.5Y4/1)砂質土
21 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土(粘性あり)
22 灰色(7.5Y4/1)粘質土(粘性あり)
23 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
24 黒色(5Y2/1)粘質土(やや粘性強い・1～3cmの礫混じり)
25 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土(やや粘性強い)
26 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(やや粘性あり)
27 黒色(5Y2/1)砂質土(やや粘性あり)
28 褐色(10YR4/6)砂
29 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂
30 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(粘性強い・砂混じり)
31 灰色(10YR4/1)粘質土(粘性やや強い)
32 黒色(7.5Y2/1)粘質土
33 黒色(5Y2/1)粘質土
34 オリーブ黒色(10Y3/1)砂質土(粘性あり)
35 オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂質土(粘性あり)
36 黒色(N2/1)粘質土(粘性強い)
37 黒色(5Y2/1)粘質土
38 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
39 第38層に同じ
40 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
41 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
42 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(鉄分沈着)
43 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(粘性あり)
44 黒色(N2/1)粘質土(粘性強い)



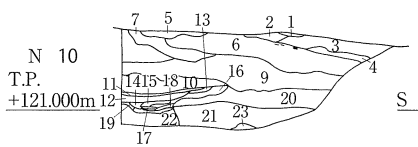
6-6′
1 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
2 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(粘性あり)
3 明黄褐色(5YR5/8)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
4 にぶい黄褐色(2.5Y6/4)砂質土(1cm以下の礫混じる)
5 明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土(1cm以下の礫混じる)
6 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(やや粘性あり)
7 にぶい黄色(10YR4/3)砂質土
8 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粘性あり)
9 明黄褐色(2.5Y6/5)砂質土
10 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
11 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
12 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(粘性あり)
13 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(やや粘性あり)
14 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(砂混じり)
15 褐色(10YR4/4)粘質土(砂混じり)
16 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(砂混じり)
17 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土(砂混じり)
18 褐色(10YR4/4)粘質土(砂混じり)
19 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(砂混じり)
20 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
21 灰色(5Y4/1)砂質土(粘性あり)
22 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(粘性あり)
23 灰色(5Y4/1)砂質土(粘性あり)
24 灰オリーブ色(5Y6/2)砂質土(粘性あり・上面鉄分沈着)
25 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(やや粘性あり)



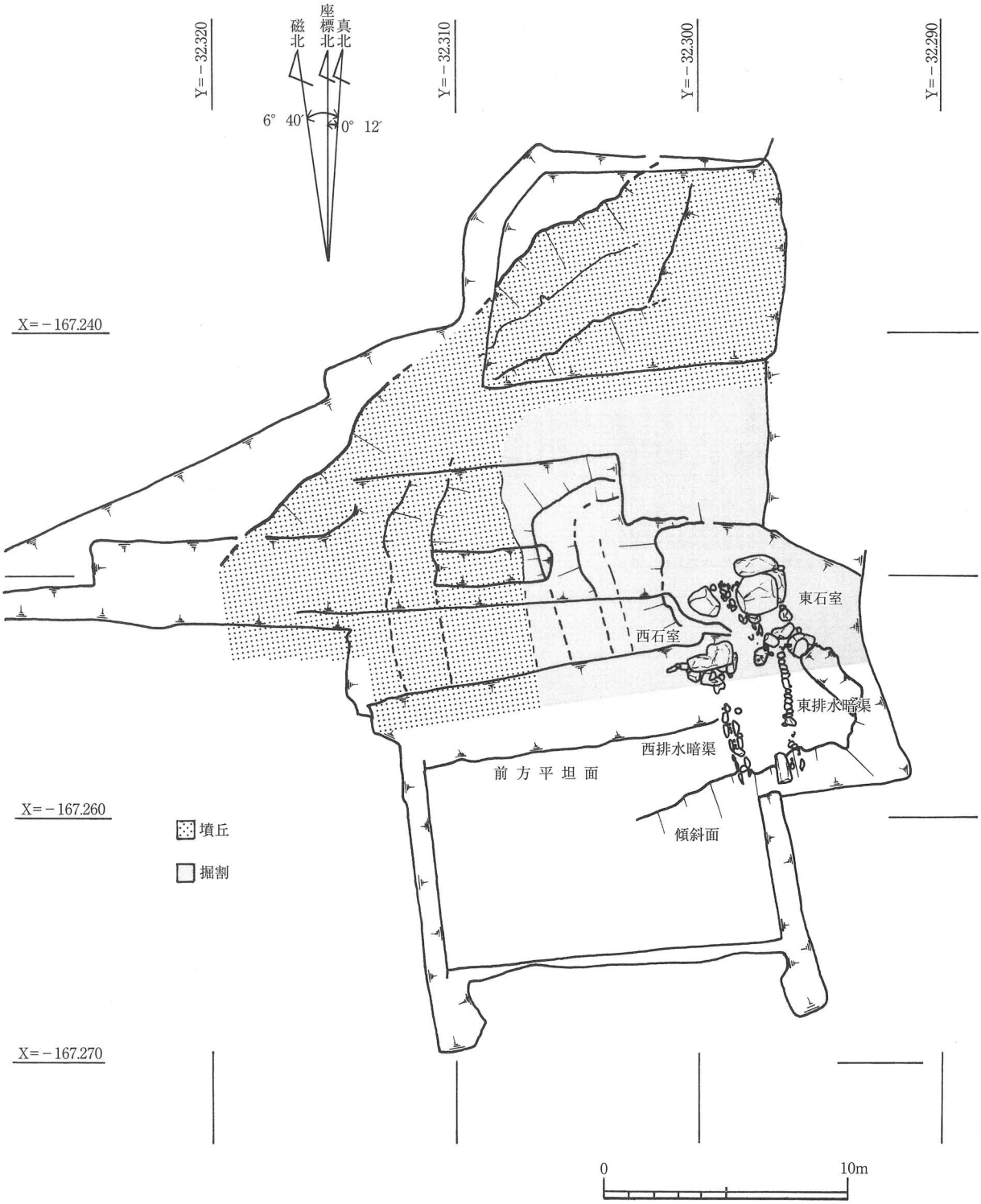
4-4′
1 にぶい黄色(2.5Y6/6)砂質土(鉄分沈着)
2 褐色(10YR4/6)砂質土(粘性あり・5mm程度の礫多量に混じる・鉄分沈着)
3 褐色(10YR4/6)砂質土(粘性あり・5mm程度の礫多量に混じる・鉄分沈着)
4 にぶい黄褐色(2.5Y6/4)砂質土(0.3～1cmの礫混じる)
5 灰色(5Y4/1)粘質土(1cm程度の礫混じる・鉄分沈着)
6 にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂
7 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土(粘性あり・鉄分沈着)
8 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(粘性あり)
9 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土(上面鉄分沈着)
10 褐色(10YR4/4)砂質土
11 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(粘性あり)
12 灰色(5Y4/1)粘質土
13 灰オリーブ色(5Y4/2) 砂質土(粘性やや強い・鉄分沈着)
14 黒褐色(2.5Y3/2)砂質土(粘性あり・1cmの礫少量混じる・わずかに鉄分沈着)
15 オリーブ黒色(5Y3/2)粘質土(0.3～1.5cmの礫混じり)
16 灰色(5Y4/1)粘質土(粘性やや強い・1cm程度の礫混じり・鉄分沈着)
17 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土(粘性やや強い・0.3～1.5cmの礫混じり・鉄分沈着)
18 黒色(7.5Y2/1)粘質土
19 黒色(5Y2/1)粘質土
20 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土(粘性あり)



9-9′
1 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(側壁据石抜き取り穴堆積土)
2 褐色(10YR4/4)砂質土(側壁据石抜き取り穴堆積土)
3 褐色(10YR4/6)砂質土(1.5cm程度の礫多量に混じる)
4 褐色(10YR4/4)砂質土(2mm程度の礫混じり)
5 黄褐色(10YR5/8)砂質土(1cm程度の礫少量混じる)
6 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(暗褐色(10YR3/4)砂質土混じり)
7 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
8 黄褐色(10YR5/6)砂質土
9 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(第5層の土質に類似)
10 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(1～2mmの礫少量混じる)
11 暗褐色(10YR3/4)砂質土(粘性あり)

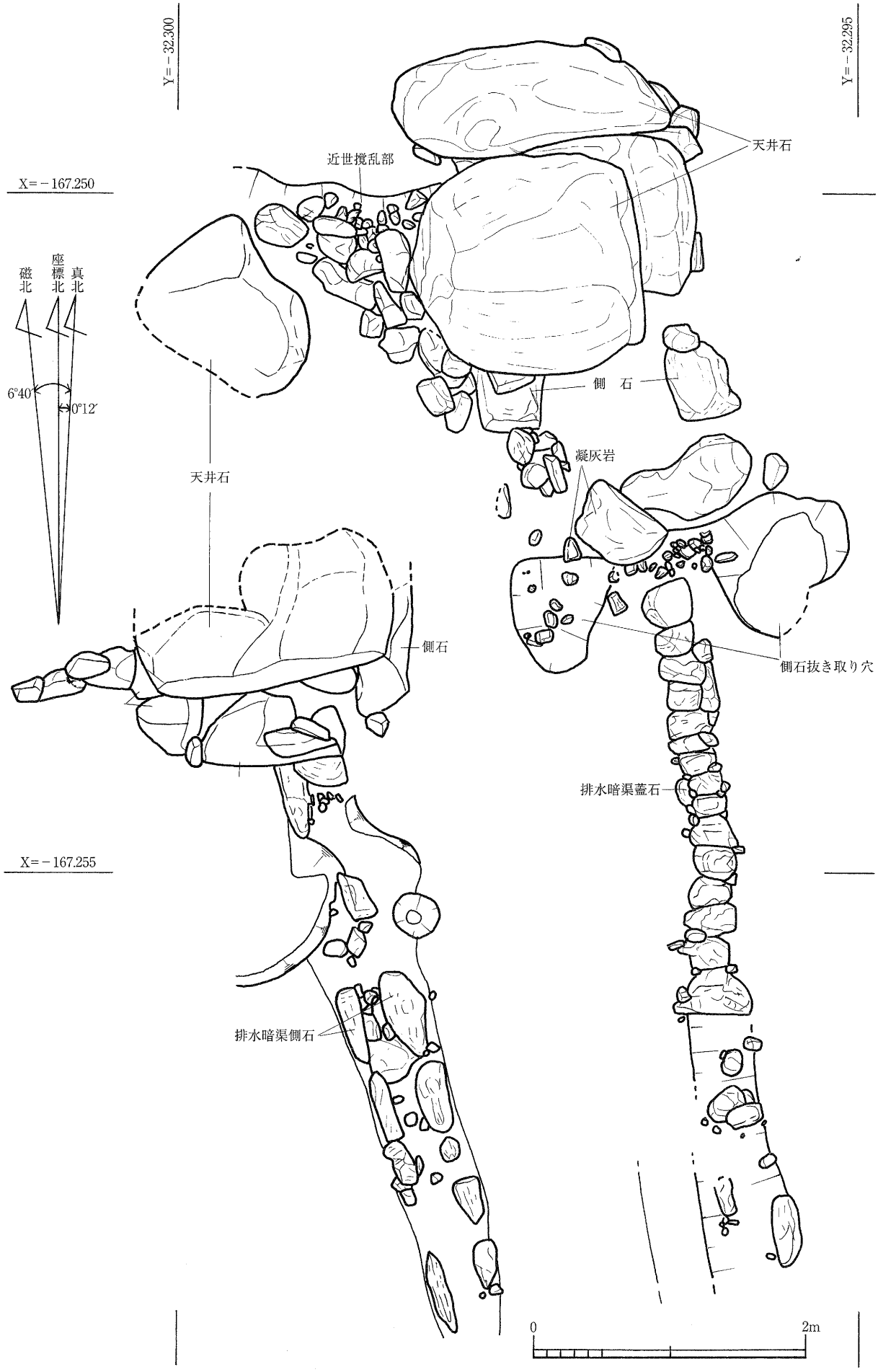


10-10′
1 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(床土)
2 褐色(7.5YR4/6)砂質土(わずかに鉄分沈着))
3 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(5mm程度の礫混じる)
4 褐色(10YR4/4)砂質土(上面鉄分沈着))
5 褐色(7.5YR4/6)砂質土(全体的に鉄分沈着し、塊状を呈し、硬くしまっている)
6 褐色(10YR4/6)砂質土(上面希薄に炭、下面1cmの礫混じり))
7 褐色(7.5YR4/4)砂質土(5mmの礫少量混じり、鉄分沈着))
8 褐色(10YR4/6)砂質土(1.5cm程度の礫多量に混じる))
9 褐色(10YR4/4)砂質土(2mm程度の礫混じり))
10 褐色(7.5YR4/6)砂質土(全体的に鉄分沈着し、塊状を呈し、硬くしまっている)
11 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(暗褐色(105YR3/4)砂質土混じり)
12 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
13 にぶい褐色(10YR5/3)砂質土
14 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂
15 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂
16 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(わずかに炭が混じる)
17 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
18 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(2～4mmの礫混じり)
19 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(1～2mmの礫少量混じる)
20 褐色(10YR4/4)砂質土
21 褐色(10YR4/4)砂質土
22 暗オリーブ色(2.5Y3/3)砂質土(上面礫混じり)
23 暗褐色(10YR3/3)砂質土

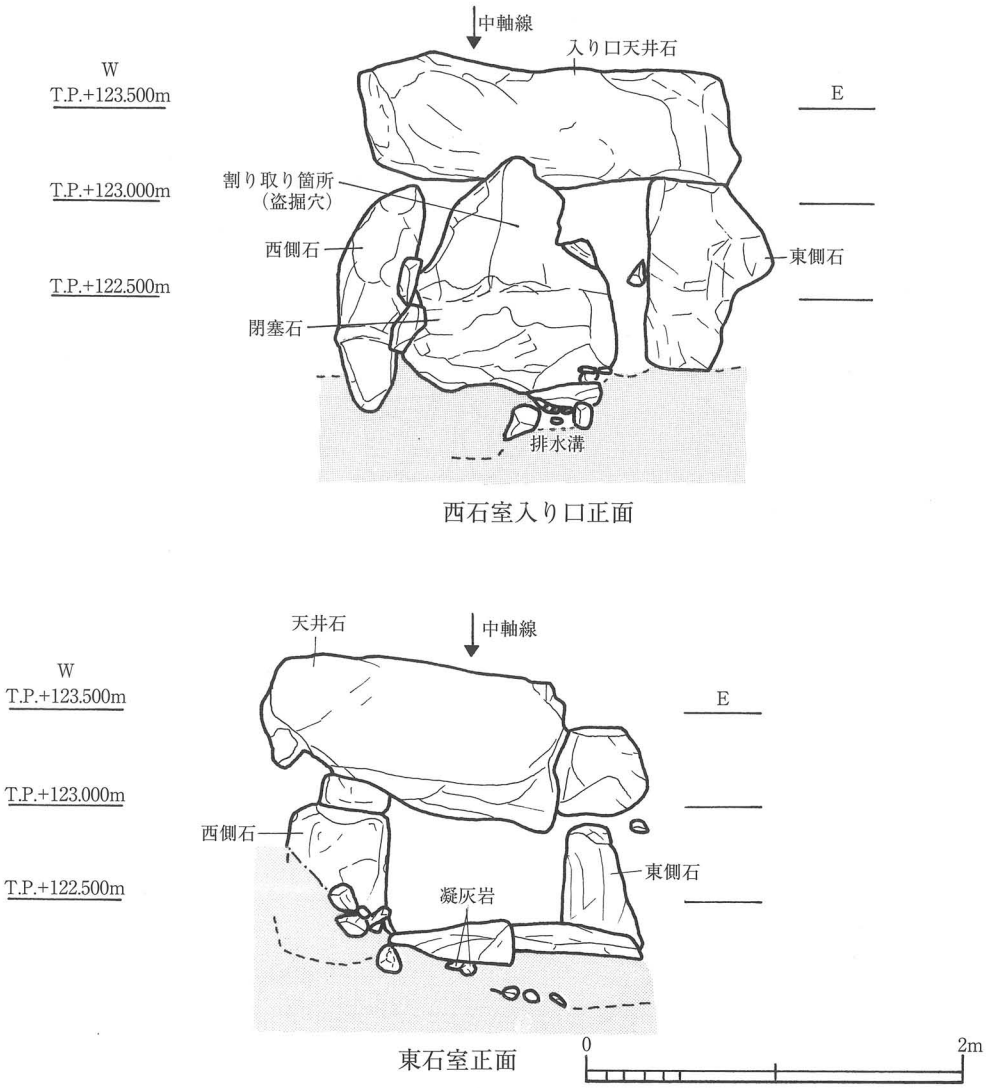


第106図　駕田古墳平面図（1/250）

積し、それより上は上記の粘泥であった。床石を洗うと暗褐色に沈着した鉄分の付着が確認された。おそらく榛原石を使用しているものと思われる。さらに入り口から5cm間隔に奥行き2.9mまで鉄ピンにて床面高を探ると、T.P.122.260～122.277mを計測したので、床面はほぼ平坦であり、床石は完存していることが分かった。なお石室床面上に堆積した微砂混じりの粘土から長さ2.11mm・径1.69mm・重量0.1 g以下の管玉が1点が出土した（図版126）。黒みを帯びた



第107図　駕田古墳埋葬施設平面図（1/40）



第108図　駕田古墳東西石室前面立面図（1/40）

赤色のガラス製で、縦縞がある。石室の奥行きはほぼ2.3 mが残る。入り口での石室幅は0.9 m・高さ0.8 mの石槨状であり、自然石の平坦面を内側にしている。

西石室は、入口天井石とおそらく2枚目の天井石と思われる一部が露出していた。しかし、東石室とは異なり、上部に撹乱の痕跡はなく、入口正面に高さ1.3 m・幅1.2 mの自然石を立てて塞いだ閉塞石が残っていた。右上隅を0.5 m四方に割り取っているので、この部分から盗掘が行われたようである。このように西石室は原形をよくとどめている。天井石幅は約2.0 m・厚さは0.7 mで、入り口の高さは2.0 m、左側石は幅0.6 m・高さ0.95 m、右側石は幅0.4 m・高さ1.2 mで、閉塞石と両側石の隙間には長さ25.0～30.0㎝・厚み10.0～20.0㎝の川原礫を詰めている。また閉塞石の右下にも安定を図るために同様の礫がいくつか詰められていた。石室は奥行き3.0 m程度とみられ、幅・高さともに1.0 m程度で、東石室と同様の石槨状である。磁北と石室の主軸の北での振れは、東石室がN－6°－W、西石室はN－4～5°－Wと推定され、両石室の中軸線は2.6～2.7 mを隔ててほぼ平行している。

4. 排水施設

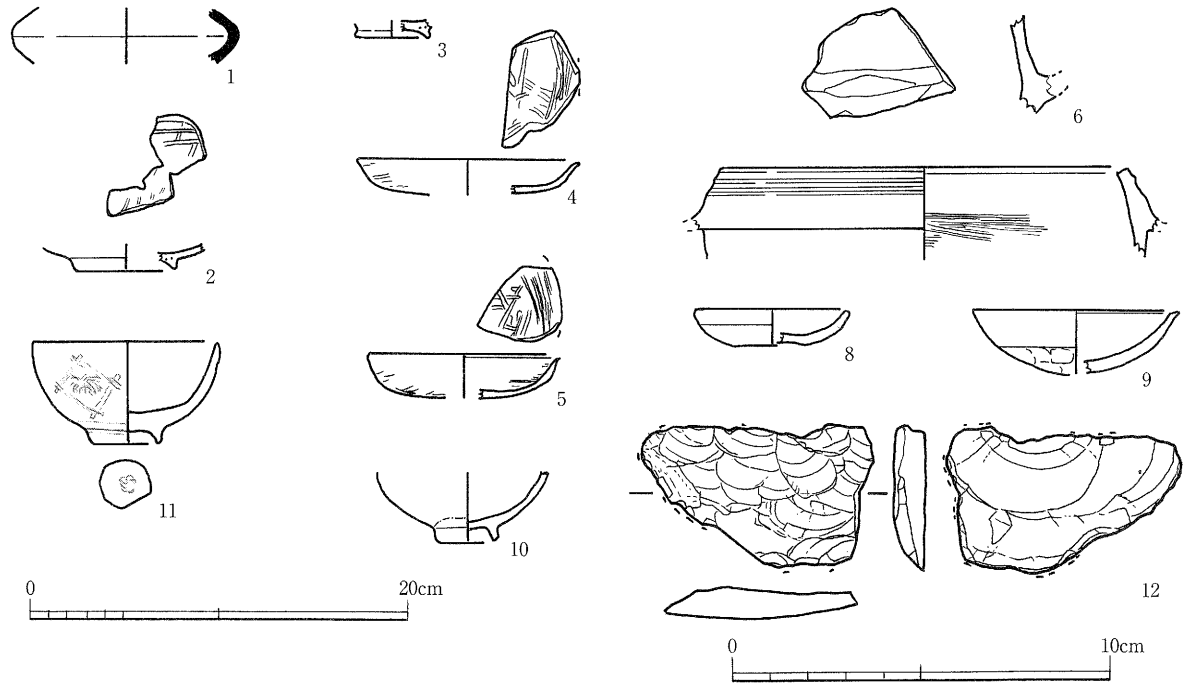
石室前面では耕作土を除去すると直ちに暗渠の蓋石が露出し、排水溝の掘り方上面が現れ、東西両石室の前面に南へ排水暗渠が延びていることが判明した。そして、この暗渠の途切れるところから南側は傾斜面となっている。東側石室から延びる暗渠は、延長約5.0 mで、南端より北へ2.0 mの間には既に蓋石はなく、一部に堀方に据えた側石が残るのみであった。蓋石は長辺25.0 ～ 50.0㎝の川原石を横長に置いているが、15個の石が原状をとどめていた。蓋石のない部分では溝の内法は30.0㎝程度で、掘り方は50.0 ～ 70.0㎝である。深さは20㎝程度である。

西側石室から延びる暗渠は、閉塞石下より南端まで約4.5 m、蓋石の残ることころはなく、幅55.0 ～ 80.0㎝の溝の掘り方内側に35.0 ～ 60.0㎝の長手の川原石を縦長に置き連ねて側石としている。溝の内法は20㎝程度、深さは20㎝程度である。いずれの暗渠も石室の主軸の延長線上に位置するが東のそれは中ほどでやや西に振り、西のそれはやや東に振る傾向が認められる。

堀割　幅6.0 m・深さ約1.0 m程度で、最初に述べたように、墳丘の西と北の二方で画されている。南側断面では、堀割の底面に最初に崩落したブロック状の土塊（第100 ～ 138層）が深さ0.5 ～ 0.6 m堆積した後、基本的にはレンズ状に堆積を繰り返して徐々に埋没する過程が観察された(第69 ～ 99層)。このうち崩落土と思われる第123・128層から土師器・須恵器片が出土した。

5. 出土遺物（第109図）

本調査区の出土遺物のうち古墳に伴うものは東石室床面堆積土より出土した管玉のみである(図版126)。それ以外に堀割の埋没過程で混入した第123・128層出土の土師器・須恵器の破片がある。このうち形態の判明したのは、第123層出土の土師器杯身（104）、堀割の北側底面より出土した須恵器小型壷（96）、排水施設の検出された古墳前面の平坦面に堆積する床土出土の瓦器（97・99・100）、土師器壷または鍋の把手（101）、東側斜面の撹乱堆積土内出土



第109図　第11調査区出土遺物実測図（1/4・1/2）

の瓦質羽釜（102）、そして墳頂部撹乱石溜りの磁器碗（105・106）などがある。

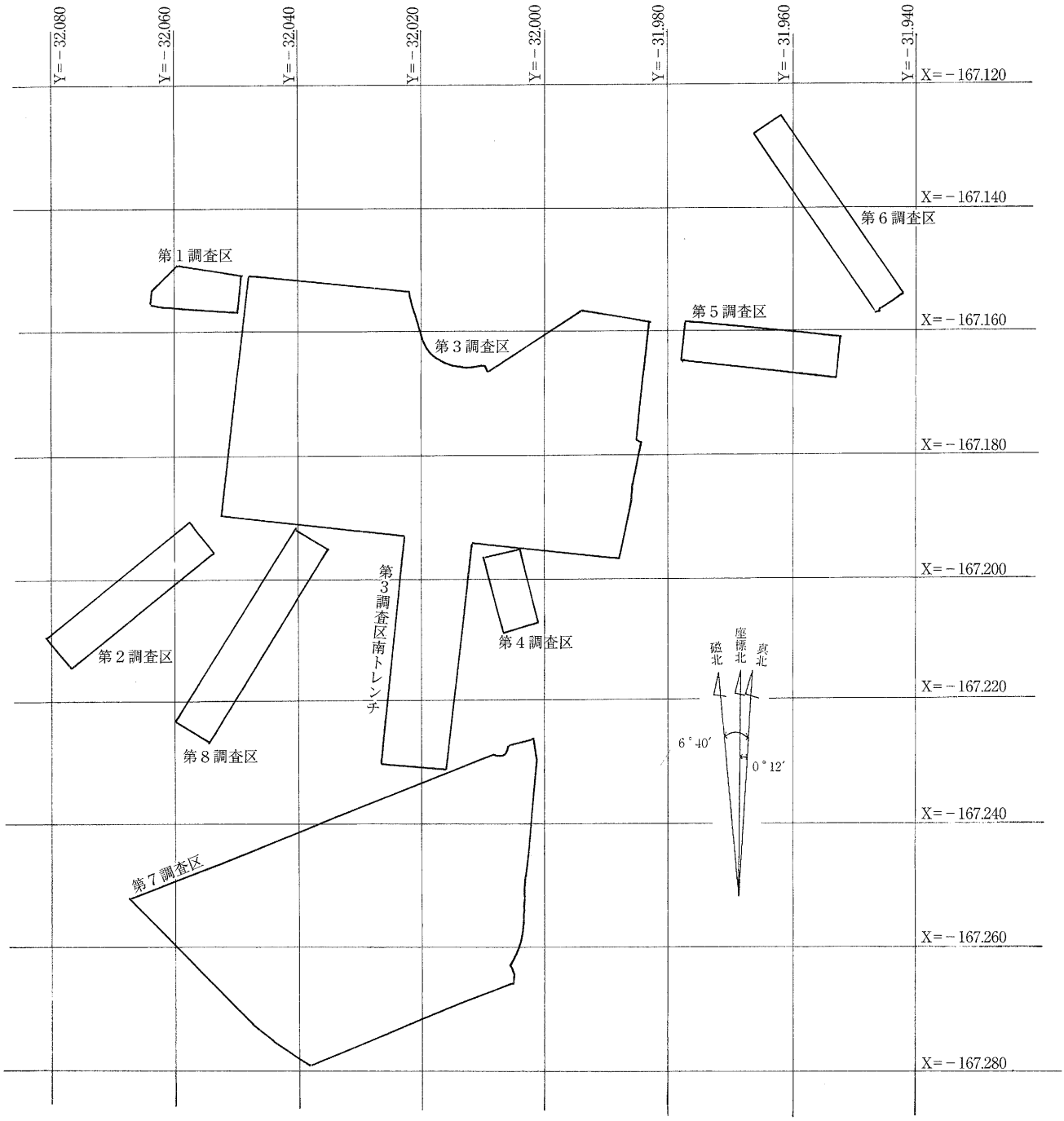
第3節　アカハゲ古墳

1．調査前の地形（第110～112図）

アカハゲ古墳の墳頂南縁に立つと、南西方向に平石谷開口部への展望が拡がる。そしてこの開口部を塞ぐように後方に嶽山が聳え、その前面には石川を挟んで富田林方面の平野部が展開する。一方、平石谷開口部（T.P.102 m）に立って谷の内奥を望むと、このアカハゲ古墳の南西側の輪郭がまず目に飛び込んでくる。仮に、谷伝いに葛城山西麓へ至る古代の往来を想定すると、南に突出する平石谷右岸の数カ所の段丘は、山塊から谷水に下る景観に変化を与え、視覚的効果をもたらす格好の地形を提供している。そこに仰ぎ見るような古墳を築くのは、自然景観を巧みに取り込もうとする造形意識が働けば、自然ななりゆきであろう。アカハゲ古墳はその最も顕著な地点を占めている。

アカハゲ古墳一帯の現状は棚田であり、石室開口部前は疎らに果樹の植え込みがある平坦な畑地である。墳頂はT.P.143.4 mの平坦なコンクリート敷き民有地350㎡で、3×5 mのプレハブ物置2棟、同3×6.5 m 2棟が配置され、その南は墳頂縁辺に沿って栗の木を植えた畑となっている。北側は、府道竹内河南線が南に張り出すカーブにあたる。この府道を越えた北側は、昭和39（1964）年の宅地造成によって破壊され、現在は造成頓挫して放置状態になっているが、本来はT.P.221.2 mの山頂から南西に下る舌状の山塊が屹立していた。墳頂はその先端にあたる。したがってアカハゲ古墳の占地には、平成13年度に調査されたシシヨツカ古墳でみられた山頂から南下する尾根の稜線下降ラインを意識したような造営プランを再確認できた。ここをほぼ中心として、東西両側で谷地に下る軽い脊梁が南に延びている。古墳は、その間約80 mの東西に拡がる空間で尾根の比較的安定した張り出し部を占め、比高差9 m以上、棚田にして5～6段に整えられた斜面に築かれている。平石谷ではこのような安定した小地形は無駄なく棚田として利用されるのが一般的であり、後述するように壇上にさらに3段の墳丘を築いた本墳のような方墳であれば、棚田としての再利用になおさら好都合であったろう。

石室は、閉塞石上に被る表土と一部前端が露出する天井石との間、高さ0.35 m・幅1.20 mをなして開口した状態である。地元の方々によると、1940年代には石室の天井石が露呈していた状況で、それ以後当該地が物置場として利用され始めた頃、府道の高さと合わせるため天井石の上に盛土をしたという。そうであれば現在石室を覆う盛土は必ずしも本来の墳丘を反映するものではない。平面的にみると西辺は比較的直線的に南に突出するのに対し、東辺は北東～南西の不明瞭な斜辺となっているのもそのためである。地籍図では墳丘部にあたる棚田に「赤几（＝禿）」、その南の東西に長い棚田に「塚廻り」の字名がみえ、古墳の範囲をうかがわせる。「アカハゲ」とは墳丘盛土が露呈して、赤土が見えていた状況を指しているとも考えられる。この範囲では棚田の縁に集められた礫の中に、榛原石の破片が混じっている個所があり、それを採取するだけで



第110図　平成15年度調査区位置図（1/1000）

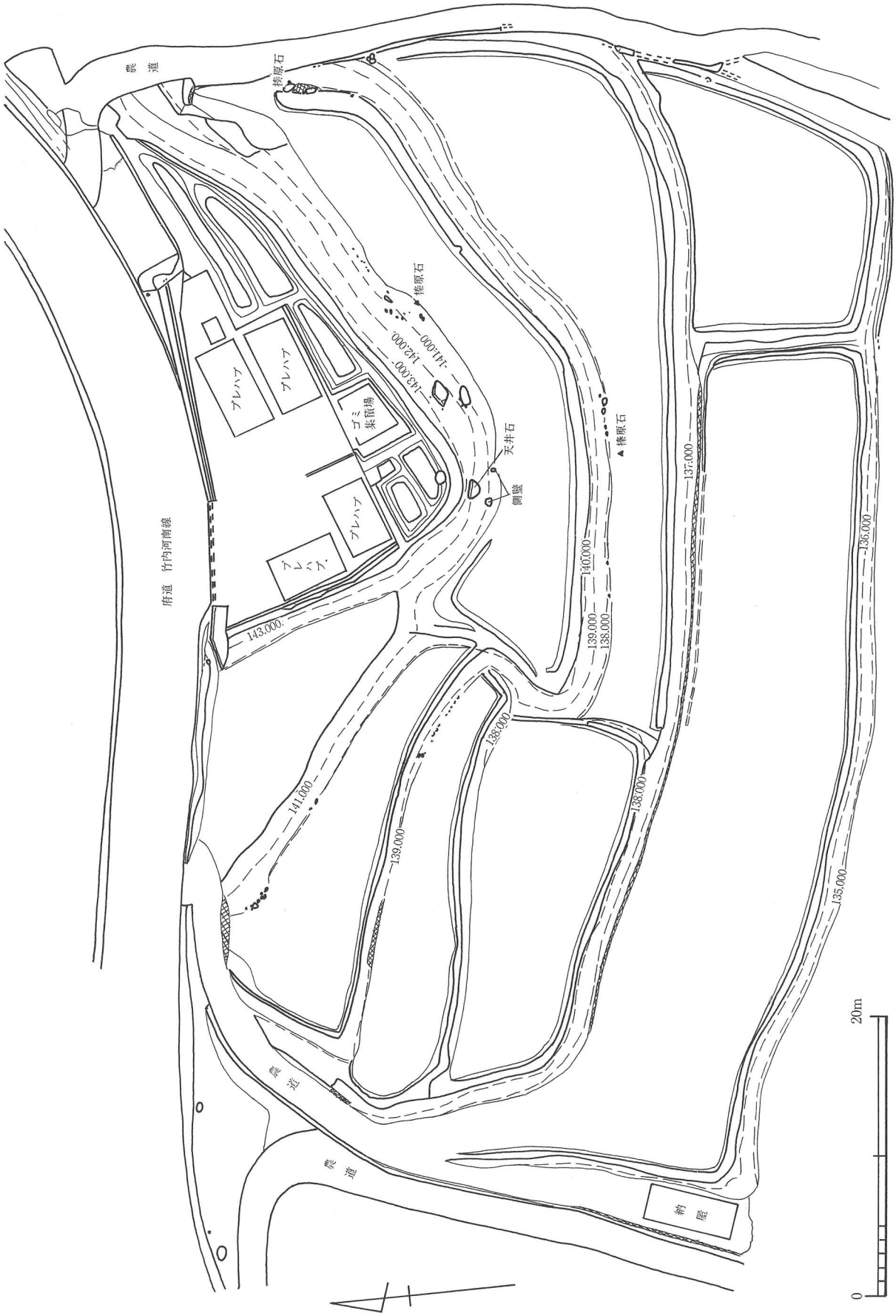
もコンテナ数箱になった。この種の石は平石谷の飛鳥時代の古墳に用いられる特徴的な石材であることが知られている。おそらく、古墳が開墾に伴って撹乱され農作業の妨げになった結果、各所に集められたのであろう。

墳丘の南の古墳の壇に相当する棚田は他の部分に較べて、水はけが悪く、秋の収穫期を迎え用水を流さなくなっても、常に湿地のような状態であった。このことは農業用水には必ずしも関係なく、東西を谷で画されたアカハゲ古墳の範囲の地下水の浸透による可能性が高く、この水仕舞いが古墳築造にあたっても課題のひとつであったにちがいない。

平成 11 年度に実施した平石谷一帯の試掘調査では、アカハゲ古墳周辺に 12 個所の試掘坑を設

第111図　調査区と地籍の位置関係図

定し古墳の形状、範囲、残存状態の把握に努めた。石室開口部の墳丘周辺では傾斜面や石の集中個所を認めたが、それより低い棚田でも一部に石の集中するところがあり、古墳の外部施設の可能性は高まった。ただ墳丘の西辺に設定した試掘坑で南北方向の直線的な地形変換ラインを認め、従来想定されてきた円墳のイメージは薄らいだが、それでも古墳の範囲は、後世の墳丘盛土の形状に目を奪われたことも相俟って、石室開口部のある墳丘を中心とする径10m程度の円墳以上の規模を想定する根拠は得られなかった。調査担当者として、棚田に反映される方形墳の姿を積極的に想定できるようになるのは、やはり平成13年度のシシヨツカ古墳の調査以後のことである。



第112図　アカハゲ古墳調査前の地形図（1/400）

2．墳丘

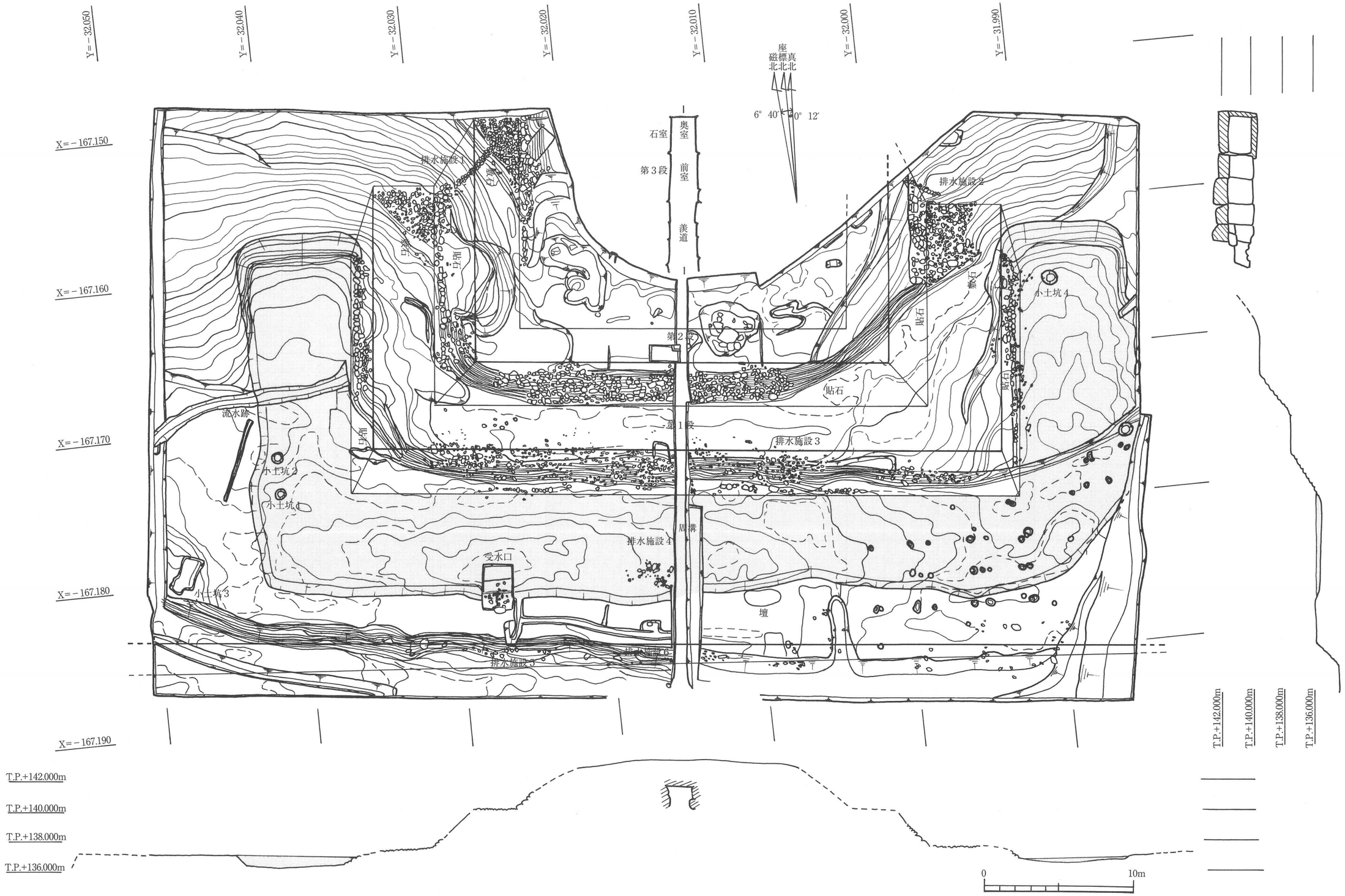
（1）墳丘の形状と規模（第113～118図）

墳丘は3段築成で、形状は横長の方墳を企画している。この墳丘がその南に前もって築かれた壇の上に積み上げられるので、一見すれば4段築成にも見える。壇上面（T.P.135.9～136.3 m）と現状墳頂（T.P.143.4 m）との比高差は7.1～7.5 mを測る。墳丘の撹乱は各所に及び、各段のコーナー部分を中心として、当初の輪郭はかなり損なわれていた。最も損壊が激しいのは、3段目の南側から東側にかけてである。この個所は昭和40年（1965）の調査以後も開墾が行われ、石室構築石材の一部が3×4 m、深さ1.5 m以上の不定形に掘り込まれた穴に、廃材や黒色のビニールゴミ袋の破片と紛れて投棄されていた。しかし、東西・南北の辺を留めるところを結んで辺長は復原でき、そのラインは墳丘に石を貼る際に用いられた黒褐色の粘土の残る部分をたどって得られるラインとも合致した。

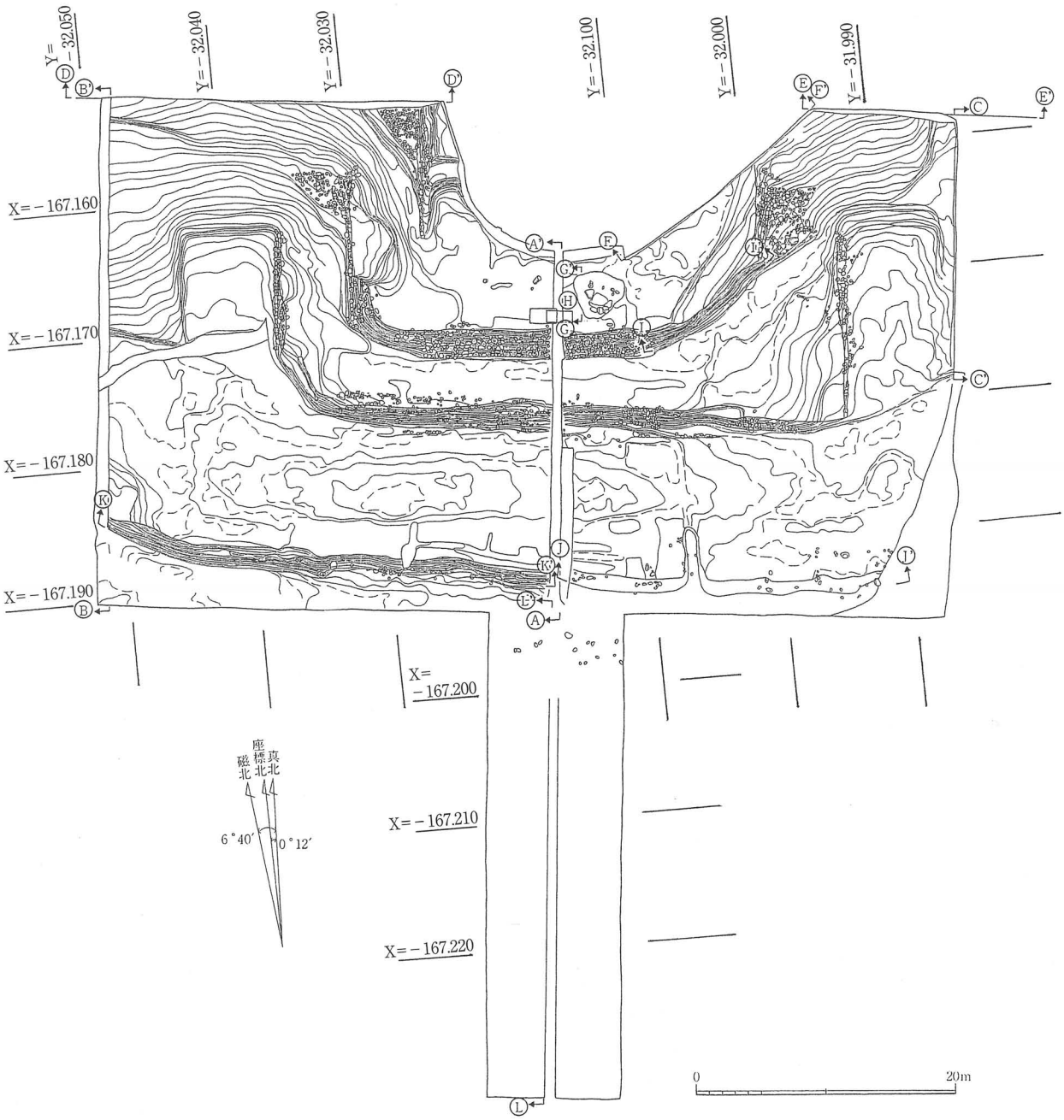
まず、東西辺長をみていくと、第1段上場41.7 m・下場44.4 m、第2段上場27.5 m・下場32.8 m、第3段下場21.7 mを得る。南北辺長は南から北へほぼ水平に延長したラインが尾根の斜面にあたるところで終えており、数値は一定していない。第1段西辺では上場17.5 m・下場16.0 m、東辺では上場16.6 m・下場15.0 m、第2段西辺では上場16.5 m・下場14.6 m、東辺では上場11.6 m・下場13.5 m、第3段西辺では下場14.4 m以上、東辺は調査区内では完全に失われて不明であるが、かろうじて残った土色の変化からすると下場7.0 m以上となる。得られた数値を比較すると、東西辺長では第1段から第3段への縮小率は66～74％である。南北辺長は第1段では東側が長く西側が短く、上場と下場は0.9～1.0 mの差があり、第2段上場下場では1.1 mの差がある。当然、この差は、尾根の張り出し具合が東と西では異なる地形的制約に起因している。しかし、1.0 m内外の差は、その地形を一定のプランに取り込もうとする強い企画性がなくては生じ得ない差と考えたい。第3段は北端が調査区外に及び、下場の長さ14.4 m以上というしかない。

墳丘第1段裾から現状の墳頂までの高さは、南辺中央で7.4 m、東辺中央で6.6 m、西辺中央で6.8 mを測る。各段の高さは、第1段は南辺で1.6 m、東辺で1.1 m、西辺で1.5 m、第2段は南辺で1.8 m、東辺で1.3 m、西辺で1.3 m、第3段は現墳頂から西辺の貼石裾高さとの比高差3.4 mとなり、第3段は第1・2段の2倍程度の高さとなる。東に高く西に低い緩やかな斜面地で東西のバランスをとって墳丘が構築されていることは、東西周溝底面の高さのわずかな比高差0.2～0.3 mにも現れている。段の傾斜角を貼石の残るところでみると、第1段南側では40～42°、東側では43°、西側では35°、第2段南側では32°、東側では44°、西側では42～43°、第3段西側では45°を測る。

各段の上面はテラスとなる。第1段では南側で幅4.0 m、東側と西側では削られてはいるが、段斜面の傾斜角との関連から、それぞれ幅4.8 m・4.3 mとなる。第2段のテラスでは同じように計測すると、南側幅2.3 m・西側幅3.1 mを得る。東側は2.9 mと復原される。



第113図　アカハゲ古墳全体図（1/250）

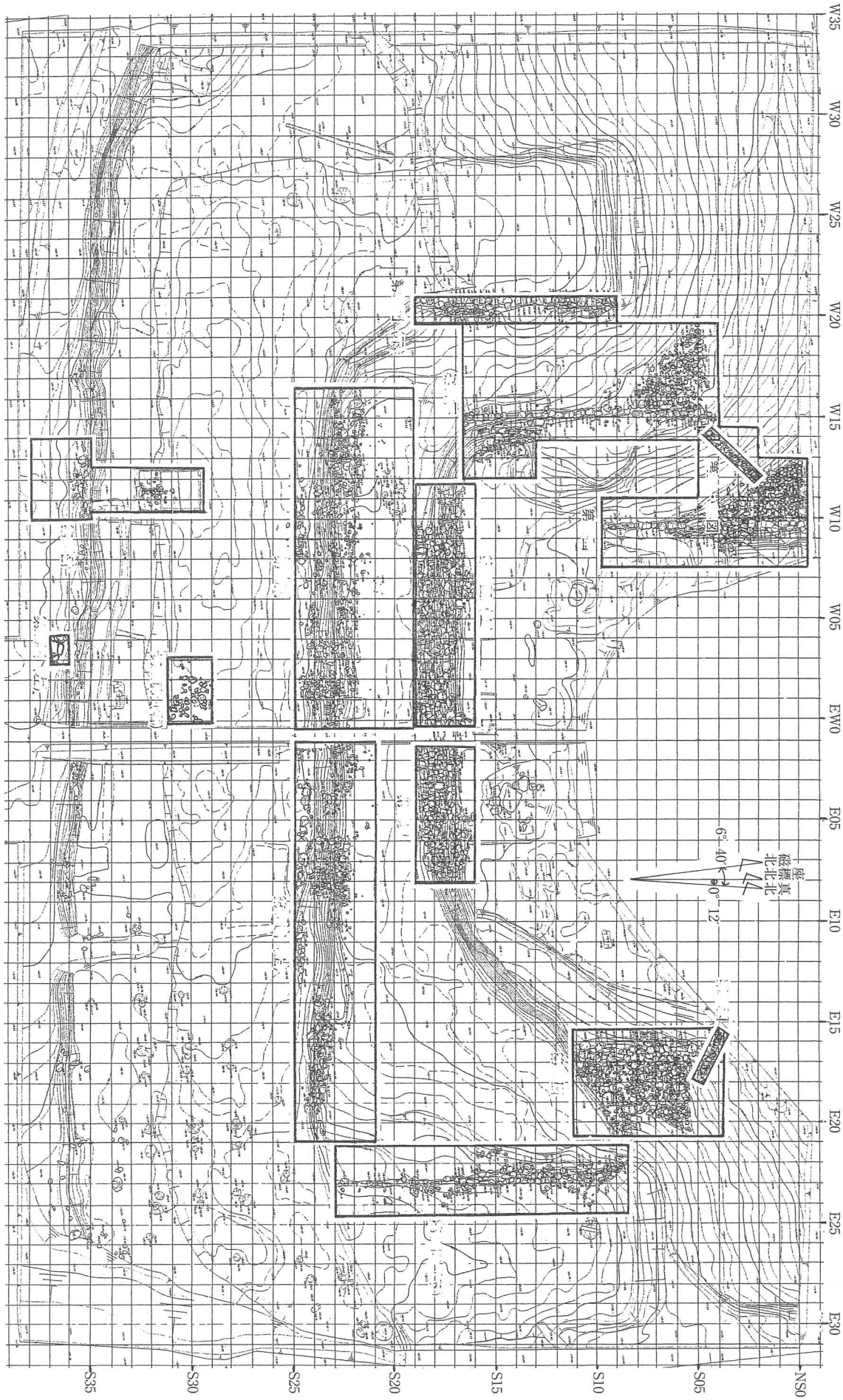


第114図　第３調査区断面図観察位置図（1/500）

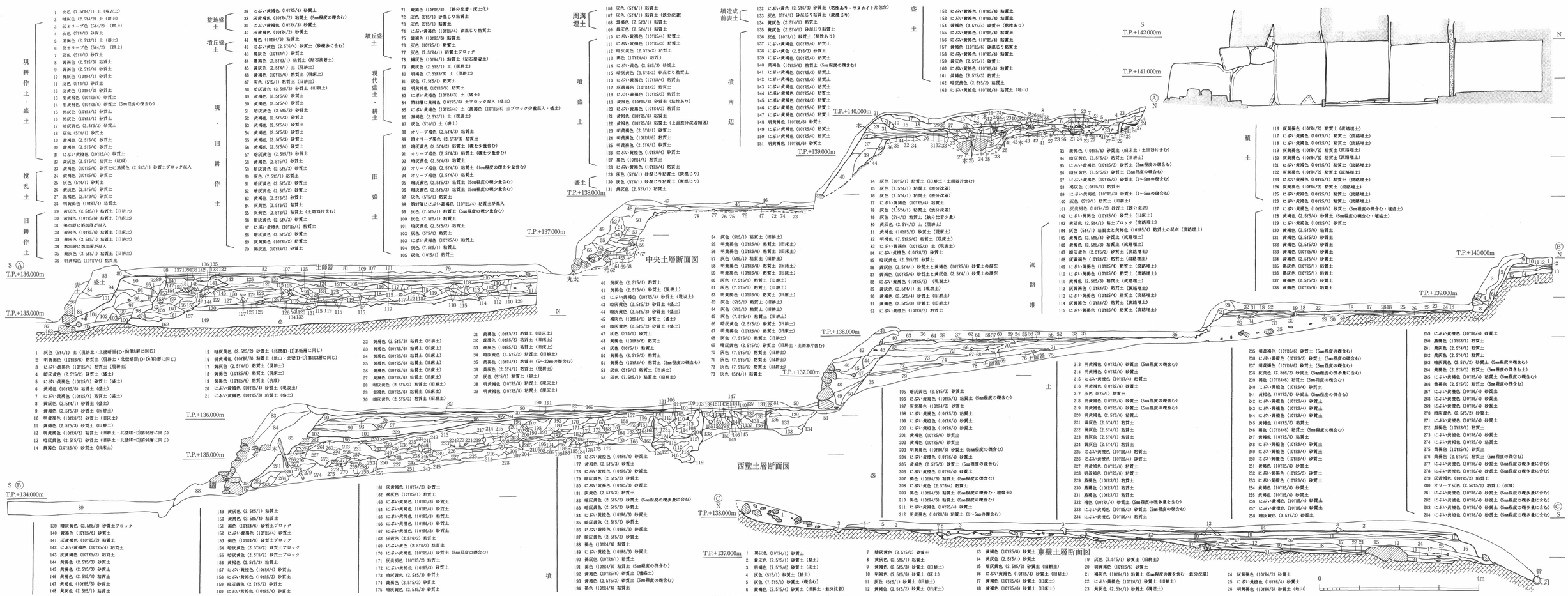
（2）墳丘の構造（第118図）

開墾により損なわれ、貼石下の盛土が露呈した部分や、撹乱坑を利用した最小限度の狭小な補足トレンチを設定して、出来る限り現状を損なわない形で墳丘の構築状況を観察することに努めた。第１段では、大きく削り取られた南東コーナーの斜面を清掃し、また第２段上面テラスでは、石室開口部前の撹乱坑の四面を整えてそれぞれについて断面を観察した。

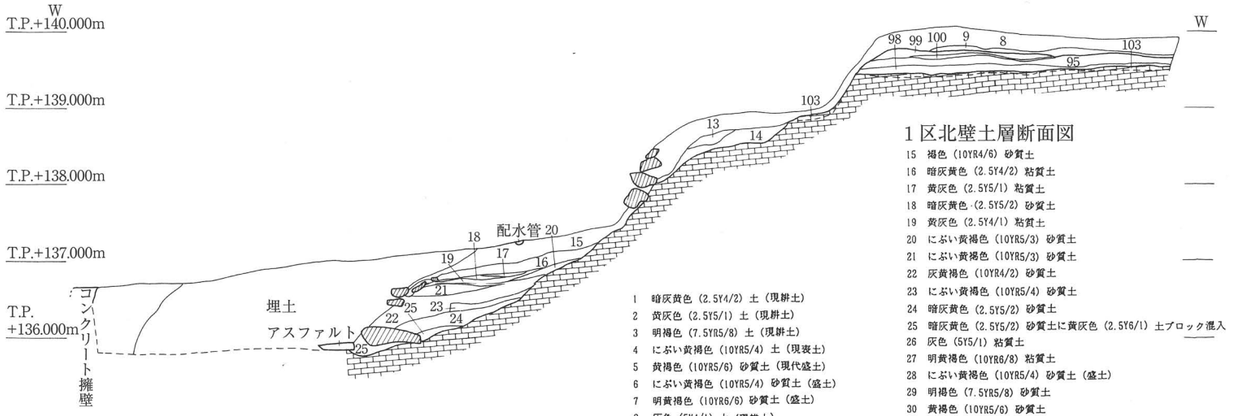
第２段の構築状態の一部を反映すると見られるのは、削り取られたその南東コーナーのE7～20にかかる断面である（I - I′断面）。第１段の盛土の上に高さ1.7 mまで積み上げている部分がみられる（E7にかかる付近）。盛土は、大きいまとまりでみると３次に渡っている。第１次の盛土は、第１段盛土面より上に40～90cmの厚みで積み上げられている。断面位置が墳丘



第115図　アカハゲ古墳詳細図位置関係図



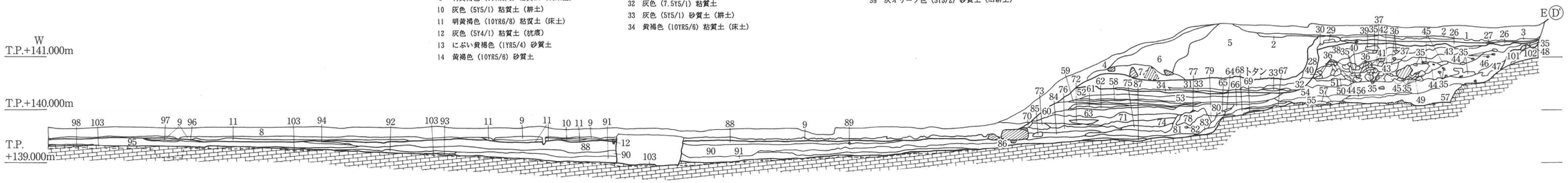
第116図　第３調査区断面図（1/60）



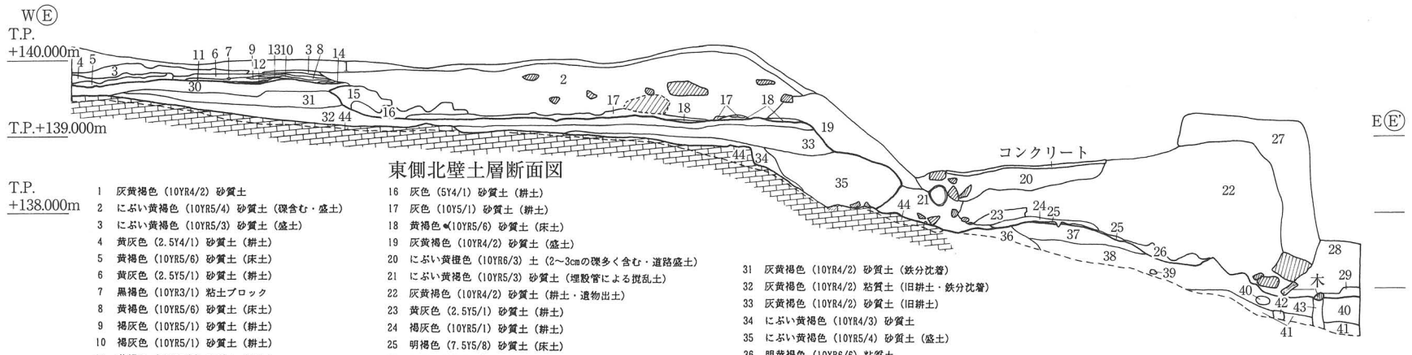
1 暗灰黄色（2.5Y4/2）土（現耕土）
2 黄灰色（2.5Y5/1）土（現耕土）
3 明褐色（7.5YR5/8）土（現耕土）
4 にぶい黄褐色（10YR5/4）土（現表土）
5 黄褐色（10YR5/6）砂質土（現代盛土）
6 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（盛土）
7 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（盛土）
8 灰色（5Y4/1）土（現耕土）
9 明黄褐色（10YR6/6）粘質土（現床土）
10 灰色（5Y5/1）粘質土（耕土）
11 明黄褐色（10YR6/8）粘質土（床土）
12 灰色（5Y4/1）粘質土（抗底）
13 にぶい黄褐色（1YR5/4）砂質土
14 黄褐色（10YR5/6）砂質土

1区北壁土層断面図

15 褐色（10YR4/6）砂質土
16 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
17 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土
18 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
19 黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
20 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
21 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
22 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
23 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
24 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
25 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土に黄灰色（2.5Y6/1）土ブロック混入
26 灰色（5Y5/1）粘質土
27 明黄褐色（10YR6/8）粘質土
28 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（盛土）
29 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
30 黄褐色（10YR5/6）砂質土
31 灰色（10Y4/1）砂質土（耕土）
32 灰色（7.5Y5/1）粘質土
33 灰色（5Y5/1）砂質土（耕土）
34 黄褐色（10YR5/6）粘質土（床土）
35 暗灰色（N3/）粘質土（貼石接着土の剥離したもの）
36 橙色（7.5Y5/4）粘質土ブロック
37 橙色（7.5YR6/6）粘質土
38 灰色（7.5Y5/1）粘質土
39 灰色（7.5Y5/1）粘質土ブロック
40 灰色（10Y5/1）粘質土
41 灰色（10Y5/1）粘質土ブロック
42 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土
43 黄褐色（2.5Y5/3）砂質土に橙色（7.5YR6/8）粘質土と灰色（5Y5/1）粘質土のブロックを多数混入
44 黄褐色（2.5Y5/3）砂質土に橙色（7.5YR6/8）粘質土と灰色（5Y5/1）粘質土のブロックを多数混入
45 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土ブロック
46 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
47 黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
48 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
49 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土ブロック
50 灰色（10Y5/1）粘質土
51 にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質土
52 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
53 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
54 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
55 灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
56 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
57 褐灰色（10YR5/1）粘質土
58 黄褐色（10YR5/6）砂質土（旧耕土）
59 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
60 黄褐色（10YR5/6）砂質土（旧耕土）
61 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
62 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
63 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
64 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
65 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
66 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
67 黄褐色（10YR5/6）粘質土（旧床土）
68 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土（鉄分沈着）
69 黄褐色（10YR5/6）粘質土（旧床土・鉄分沈着）
70 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
71 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
72 灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
73 灰色（5Y4/1）砂質土
74 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
75 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
76 灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
77 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
78 にぶい黄橙色（10YR5/4）粘質土
79 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
80 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
81 黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
82 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
83 黄褐色（10YR5/6）粘質土（旧床土・鉄分沈着）
84 灰色（10Y5/1）粘質土（旧床土・鉄分沈着）
85 オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘質土ブロック
86 オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘質土
87 黄褐色（10YR5/6）粘質土（旧床土・鉄分沈着）
88 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
89 灰色（5Y5/1）粘質土（抗底）
90 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土（旧耕土）
91 灰色（5Y5/1）砂質土（旧耕土）
92 灰色（5Y5/1）砂質土（旧耕土）
93 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
94 明黄褐色（10YR5/6）砂質土
95 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
96 明黄褐色（10YR6/8）粘質土
97 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
98 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土（旧耕土）
99 灰色（5Y5/1）砂質土（旧耕土）
100 黄褐色（10YR5/6）砂質土（旧床土）
101 暗灰色（N3/）粘質土（貼石接着土）
102 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土（墳丘盛土層）
103 明黄褐色（10YR6/6）粘質土（地山）



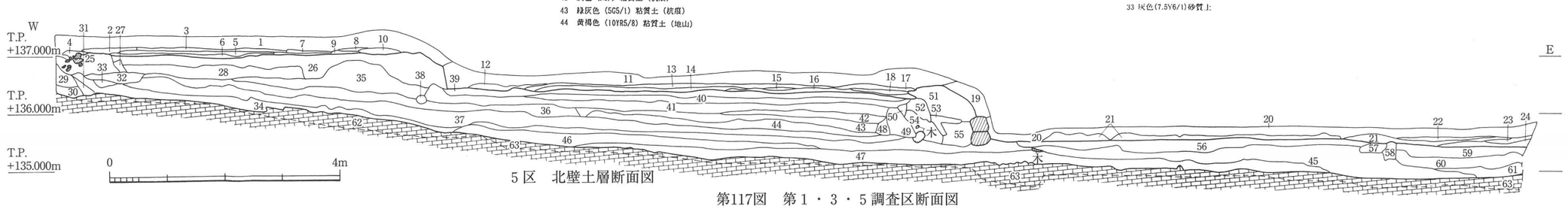
西側北壁土層断面図



東側北壁土層断面図

1 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
2 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（礫含む・盛土）
3 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（盛土）
4 黄灰色（2.5Y4/1）砂質土（耕土）
5 黄褐色（10YR5/6）砂質土（床土）
6 黄灰色（2.5Y5/1）砂質土（耕土）
7 黒褐色（10YR3/1）粘土ブロック
8 黄褐色（10YR5/6）砂質土（床土）
9 褐灰色（10YR5/1）砂質土（耕土）
10 褐灰色（10YR5/1）砂質土（耕土）
11 黄褐色（10YR5/6）砂質土（床土）
12 褐灰色（10YR5/1）砂質土（耕土）
13 黄褐色（10YR5/6）砂質土（床土）
14 黄褐色（10YR5/6）砂質土（床土）
15 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（盛土）
16 灰色（5Y4/1）砂質土（耕土）
17 灰色（10Y5/1）砂質土（耕土）
18 黄褐色（10YR5/6）砂質土（床土）
19 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（盛土）
20 にぶい黄橙色（10YR6/3）土（2～3cmの礫多く含む・道路盛土）
21 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（埋設管による撹乱土）
22 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（耕土・遺物出土）
23 黄灰色（2.5Y5/1）砂質土（耕土）
24 褐灰色（10YR5/1）砂質土（耕土）
25 明褐色（7.5Y5/8）砂質土（床土）
26 にぶい黄褐色（10YR5/6）砂質土（耕土）
27 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（盛土）
28 黄灰色（2.5Y5/1）土（現耕土）
29 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土（耕土）
30 褐灰色（10YR4/1）砂質土（旧耕土・鉄分沈着）
31 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（鉄分沈着）
32 灰黄褐色（10YR4/2）粘質土（旧耕土・鉄分沈着）
33 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（旧耕土）
34 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
35 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（盛土）
36 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
37 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
38 黄褐色（10YR5/6）砂質土
39 褐灰色（10YR5/1）粘土ブロック
40 褐灰色（10YR6/1）粘質土（抗底）
41 黄褐色（10YR5/6）粘質土
42 灰色（N5/）粘質土（抗底）
43 緑灰色（5G5/1）粘質土（抗底）
44 黄褐色（10YR5/8）粘質土（地山）

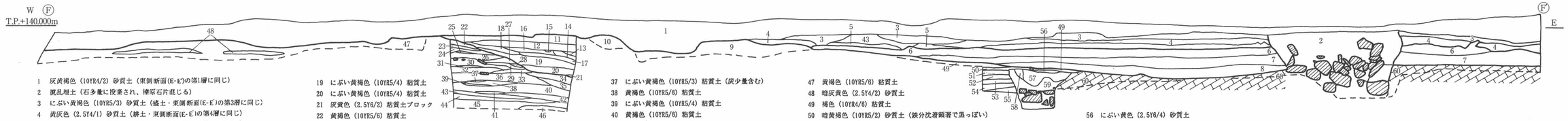
1 黄灰色(2.5Y5/1)土(現耕土)…第3調査区東側北壁断面(E-E')第28層に続く
2 青灰色(5B6/1)砂質土(耕土)
3 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(現床土)
4 黄褐色(10YR5/8)砂質土(床土)
5 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(耕土)
6 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(床土)
7 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(耕土)
8 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(現床土)
9 明黄褐色(10YR6/6)粘質土(床土)
10 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(耕土)
11 黄灰色(2.5Y4/1)土(現耕土)
12 青灰色(5B6/1)砂質土(耕土)
13 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(現床土)
14 灰色(10Y5/1)砂質土(耕土)
15 灰色(10Y5/1)砂質土(耕土)
16 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(床土)
17 明褐色(7.5YR5/6)砂質土(現床土)
18 灰色(10Y5/1)砂質土(耕土)
19 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(現表土)
20 灰色(N4/)土(現耕土)
21 灰色(N4/)土(現耕土)
22 灰色(5Y4/1)砂質土(耕土)
23 褐灰色(10YR5/1)砂質土〔褐色(7.5YR4/6)砂質土が混じり、床土化〕
24 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(床土)
25 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土…第3調査区東側北壁断面(E-E')第29層に続く
26 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
27 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土
28 灰色(7.5Y5/1)砂質土(旧耕土)
29 褐灰色(10YR6/1)粘質土…第3調査区東側北壁断面(E-E')第40層に続く
30 黄褐色(10YR5/8)粘質土…第3調査区東側北壁断面(E-E')第41層に続く
31 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
32 灰白色(5Y7/1)粘質土
33 灰色(7.5Y6/1)砂質土
34 灰色(N4/)粘質土
35 灰色(5Y5/1)砂質土(旧耕土)
36 灰色(7.5Y5/1)砂質土〔鉄分少量沈着〕
37 灰色(10Y5/1)砂質土〔鉄分沈着〕
38 青灰色(10BG5/1)粘質土(抗底)
39 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
40 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(旧耕土)
41 灰色(5Y5/1)砂質土(旧耕土)〔鉄分沈着〕
42 灰色(10Y5/1)砂質土(旧耕土)〔鉄分沈着〕
43 灰色(5Y5/1)砂質土(旧耕土)
44 灰色(5Y5/1)砂質土(旧耕土)
45 青灰色(5Y5/1)粘質土
46 暗青灰色(5B3/1)粘質土
47 青黒色(5B2/1)粘質土〔土器片包含〕
48 青灰色(2.5Y5/1)砂質土
49 青灰色(2.5Y5/1)砂質土
50 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
51 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
52 明褐色(7.5Y5/6)砂質土
53 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
54 黄褐色(10YR5/6)粘質土
55 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
56 暗緑灰色(7.5GY4/1)砂質土
57 暗青灰色(5BG4/1)粘質土
58 緑灰色(10G5/1)粘質土
59 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土〔鉄分沈着〕
60 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土
61 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土
62 オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂質土(地山)
63 緑灰色(7.5GY5/1)砂混じり粘質土(地山)



5区　北壁土層断面図

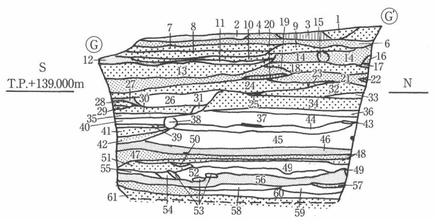
第117図　第1・3・5調査区断面図

第117図　第1・3・5調査区断面図（1/80）



1 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（東側断面(E-E')の第1層に同じ）
2 撹乱埋土（石多量に投棄され、榛原石片混じる）
3 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（盛土・東側断面(E-E')の第3層に同じ）
4 黄灰色（2.5Y4/1）砂質土（耕土・東側断面(E-E')の第4層に同じ）
5 黄褐色（10YR5/8）砂質土（床土・東側断面(E-E')の第5層に同じ）
6 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（旧耕土）
7 褐灰色（10YR4/1）砂質土（旧耕土・鉄分沈着・東側断面(E-E')の第30層に同じ）
8 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（旧耕土）
9 黄褐色（10YR5/6）粘質土
10 暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土
11 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
12 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
13 黄褐色（10YR5/6）粘質土
14 黄褐色（10YR5/6）粘質土
15 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（礫多量に含む）
16 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
17 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
18 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
19 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
20 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
21 灰黄色（2.5Y6/2）粘質土ブロック
22 黄褐色（10YR5/6）粘質土
23 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
24 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
25 灰黄褐色（10YR4/2）粘質土（炭少量含む）
26 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
27 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
28 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土（炭少量含む）
29 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（礫多量に含む）
30 にぶい黄色（2.5Y6/3）粘質土
31 明褐色（7.5Y5/6）粘質土
32 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土
33 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
34 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（粘性強い）
35 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
36 黄褐色（10YR5/6）粘質土
37 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土（炭少量含む）
38 黄褐色（10YR5/6）粘質土
39 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
40 黄褐色（10YR5/6）粘質土
41 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（礫多量に含む）
42 黄褐色（10YR5/6）粘質土
43 黄褐色（10YR5/6）粘質土
44 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（礫多量に含む）
45 黄褐色（10YR5/6）粘質土
46 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（礫多量に含む）
47 黄褐色（10YR5/6）粘質土
48 暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土
49 褐色（10YR4/6）粘質土
50 暗黄褐色（10YR5/2）砂質土（鉄分沈着顕著で黒っぽい）
51 黄褐色（10YR5/6）粘質土
52 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（礫多量に含む）
53 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（細砂質）
54 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（炭混じり）
55 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
56 にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土
57 暗黄褐色（10YR5/2）粘質土（鉄分沈着）
58 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
59 オリーブ褐色（2.5Y5/3）粘質土
60 黄褐色（10YR5/8）砂質土（地山）

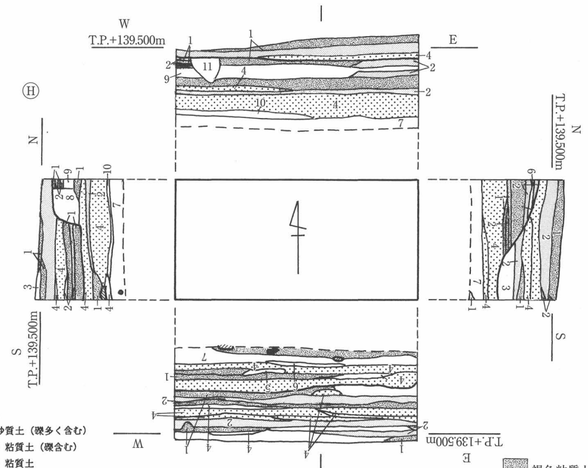
東側北壁土層断面図



石室前撹乱坑西壁南北断面図(墳丘第２段盛土)

1 黄褐色（10YR5/6）粘質土
2 褐色（7.5Y4/3）粘質土
3 褐灰色（10YR4/1）粘質土
4 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
5 黄褐色（10YR5/6）粘質土
6 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
7 黄褐色（10YR5/6）粘質土
8 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
9 黄褐色（10YR5/6）粘質土
10 黄褐色（10YR5/6）粘質土
11 褐色（7.5Y4/3）粘質土
12 褐色（7.5Y4/3）粘質土
13 黄褐色（10YR5/6）粘質土
14 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
15 褐灰色（10YR4/1）粘質土
16 黄褐色（10YR5/6）粘質土
17 褐灰色（10YR4/1）粘質土
18 黄褐色（10YR5/6）粘質土
19 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
20 黄褐色（10YR5/6）粘質土
21 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
22 黄褐色（10YR5/6）粘質土
23 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
24 黄褐色（10YR5/6）粘質土
25 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
26 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土
27 褐色（7.5Y4/3）粘質土
28 黄褐色（10YR5/6）粘質土
29 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
30 黄褐色（10YR5/6）粘質土
31 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
32 黄褐色（10YR5/6）粘質土
33 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
34 黄褐色（10YR5/6）粘質土
35 褐灰色（10YR4/1）粘質土
36 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
37 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土
38 黄褐色（10YR5/6）粘質土
39 黄褐色（10YR5/6）粘質土
40 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
41 黄褐色（10YR5/6）粘質土
42 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
43 褐灰色（10YR4/1）粘質土
44 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
45 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土
46 褐色（7.5Y4/3）粘質土
47 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
48 黄褐色（10YR5/6）粘質土
49 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土（粘土ブロック混じる）
50 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土（粘土ブロック混じる）
51 黄褐色（10YR5/6）粘質土
52 灰黄褐色（10YR5/2）粘質土
53 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土（粘土ブロック混じる）
54 灰黄褐色（10YR5/2）粘質土
55 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土（粘土ブロック混じる）
56 褐色（7.5Y4/3）粘質土
57 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
58 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
59 黄褐色（10YR5/6）粘質土
60 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（5mm程度の礫含む）
61 黄褐色（10YR5/6）粘質土

赤色粘質土
黒色粘質土
赤黒色粘質土
黄色砂質土

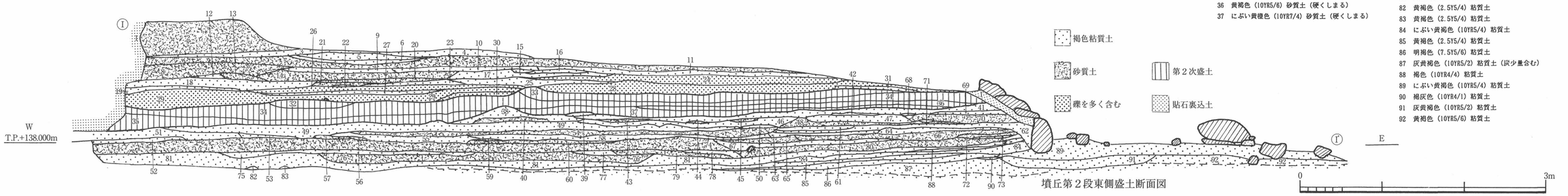


石室前試堀坑東西・南北断面図(墳丘第２段盛土)

1 褐色（7.5YR4/3）粘質土
2 にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土（礫多く含む）
3 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（礫含む）
4 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
5 褐灰色（10YR4/1）粘質土
6 オリーブ灰色（2.5Y4/4）粘質土
7 褐色（10YR4/4）粘質土
8 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
9 黄褐色（10YR5/6）粘質土
10 灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
11 黄褐色（2.5Y5/3）粘質土

褐色粘質土
にぶい黄色砂質土
にぶい黄褐色粘質土

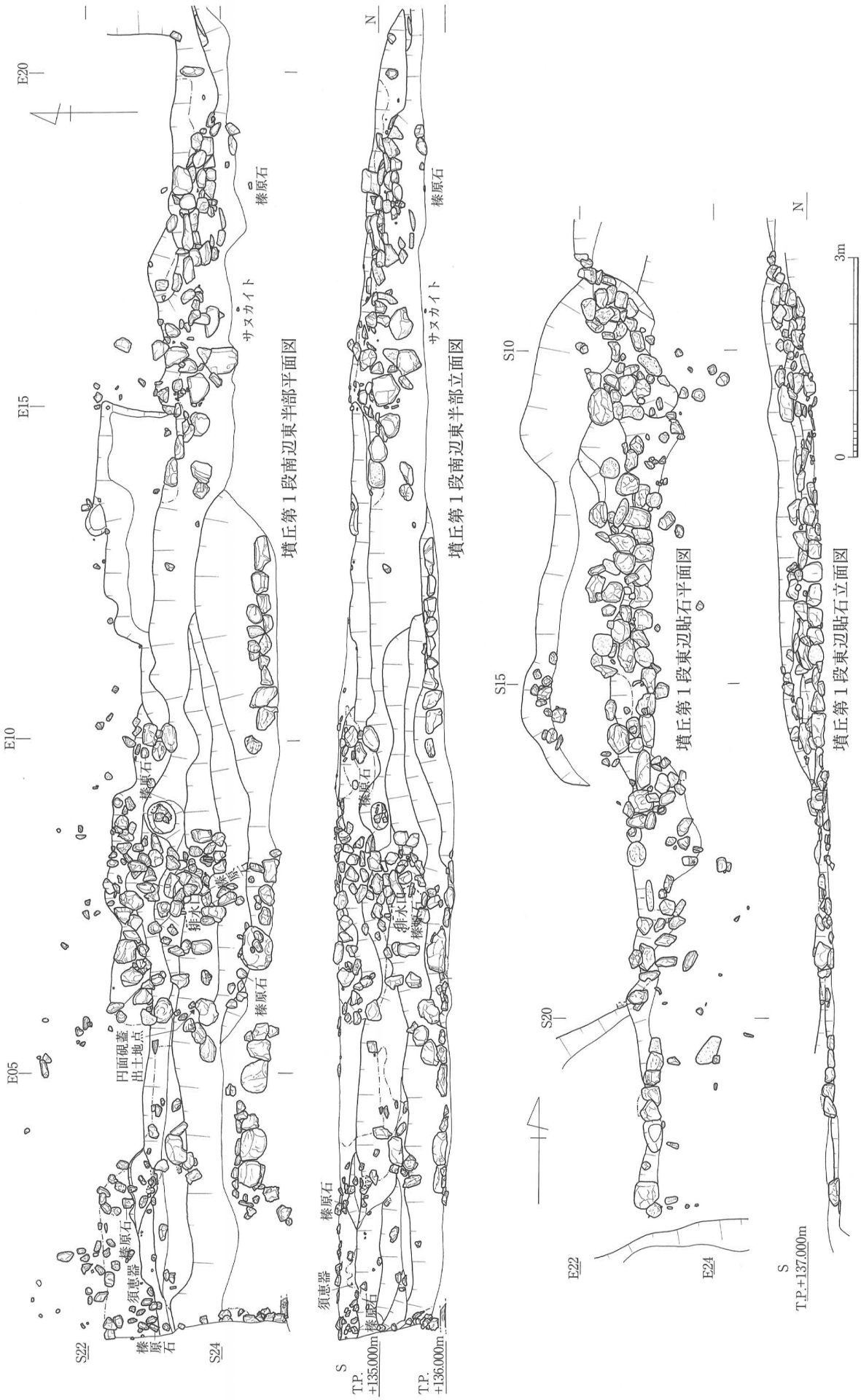
1 暗灰色（N3/）粘質土
2 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
3 褐色（10YR4/6）粘質土
4 褐色（10YR4/6）粘質土
5 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
6 褐色（10YR4/6）粘質土
7 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
8 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（礫少量含む）
9 褐色（7.5YR4/4）粘質土
10 褐色（10YR4/6）粘質土
11 褐色（10YR4/6）粘質土
12 褐色（7.5YR4/4）粘質土
13 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
14 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
15 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
16 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
17 褐色（10YR4/6）粘質土
18 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（礫少量含む）
19 褐色（7.5YR4/4）粘質土
20 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
21 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
22 褐色（10YR4/6）粘質土
23 褐色（10YR4/6）粘質土
24 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
25 黄褐色（10YR5/6）粘質土（礫少量含む）
26 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
27 黄褐色（10YR5/6）粘質土（礫少量含む）
28 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
29 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
30 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
31 褐色（10YR4/6）粘質土
32 黄褐色（10YR5/8）砂質土（硬くしまる）
33 黄褐色（10YR5/6）砂質土（硬くしまる）
34 黄褐色（10YR5/6）砂質土（硬くしまる）
35 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（硬くしまる）
36 黄褐色（10YR5/6）砂質土（硬くしまる）
37 にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土（硬くしまる）
38 褐色（10YR4/6）粘質土（礫少量含む）
39 にぶい黄橙色（10YR6/3）粘質土
40 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
41 にぶい黄橙色（10YR6/3）粘質土（炭少量含む）
42 灰黄色（2.5Y6/1）粘質土
43 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
44 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
45 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
46 灰色（5Y5/1）粘質土
47 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土（礫少量含む）
48 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
49 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
50 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
51 褐色（7.5YR4/4）粘質土
52 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
53 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
54 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
55 灰黄褐色（10YR5/2）粘質土（炭少量含む）
56 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
57 灰褐色（7.5Y4/2）砂質土
58 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
59 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
60 黄褐色（10YR5/6）粘質土（礫少量含む）
61 褐色（10YR4/6）粘質土
62 褐色（10YR4/4）粘質土
63 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
64 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
65 明黄褐色（10YR6/6）砂質土
66 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
67 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
68 褐色（7.5Y4/2）粘質土
69 褐色（7.5Y4/2）粘質土
70 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土（炭少量含む）
71 褐色（7.5Y4/2）粘質土
72 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
73 褐色（10YR4/4）粘質土
74 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（礫多く含む）
75 褐色（10YR4/6）粘質土
76 にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土
77 褐色（10YR4/6）粘質土
78 褐色（7.5YR4/4）粘質土
79 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
80 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
81 褐色（7.5YR4/4）粘質土
82 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土
83 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土
84 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
85 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土
86 明褐色（7.5Y5/6）粘質土
87 灰黄褐色（10YR5/2）粘質土（炭少量含む）
88 褐色（10YR4/4）粘質土
89 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
90 褐灰色（10YR4/1）粘質土
91 灰黄褐色（10YR5/2）粘質土
92 黄褐色（10YR5/6）粘質土



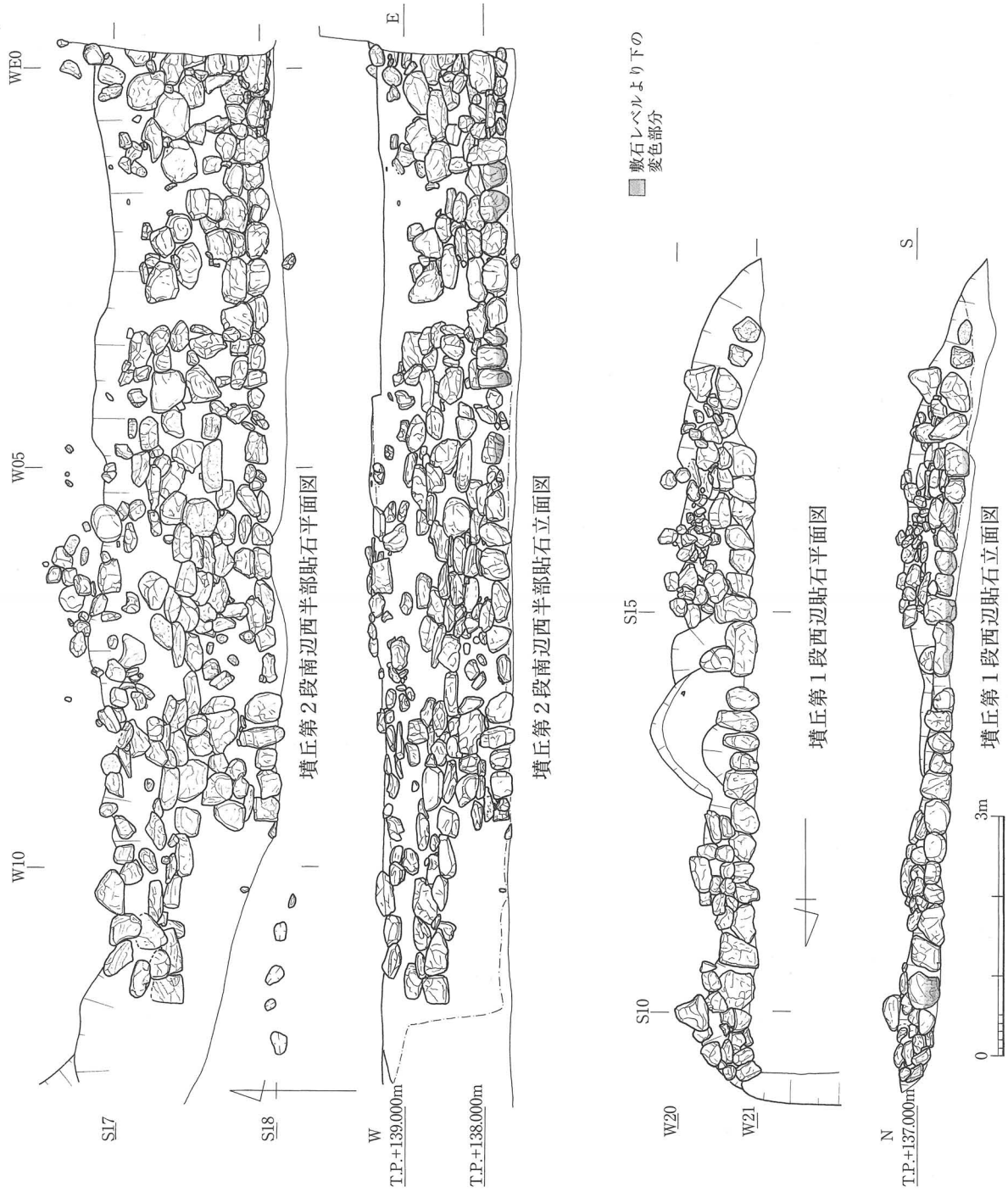
褐色粘質土
砂質土
礫を多く含む
第２次盛土
貼石裏込土

墳丘第２段東側盛土断面図

第118図　墳丘盛土断面図（1/40）

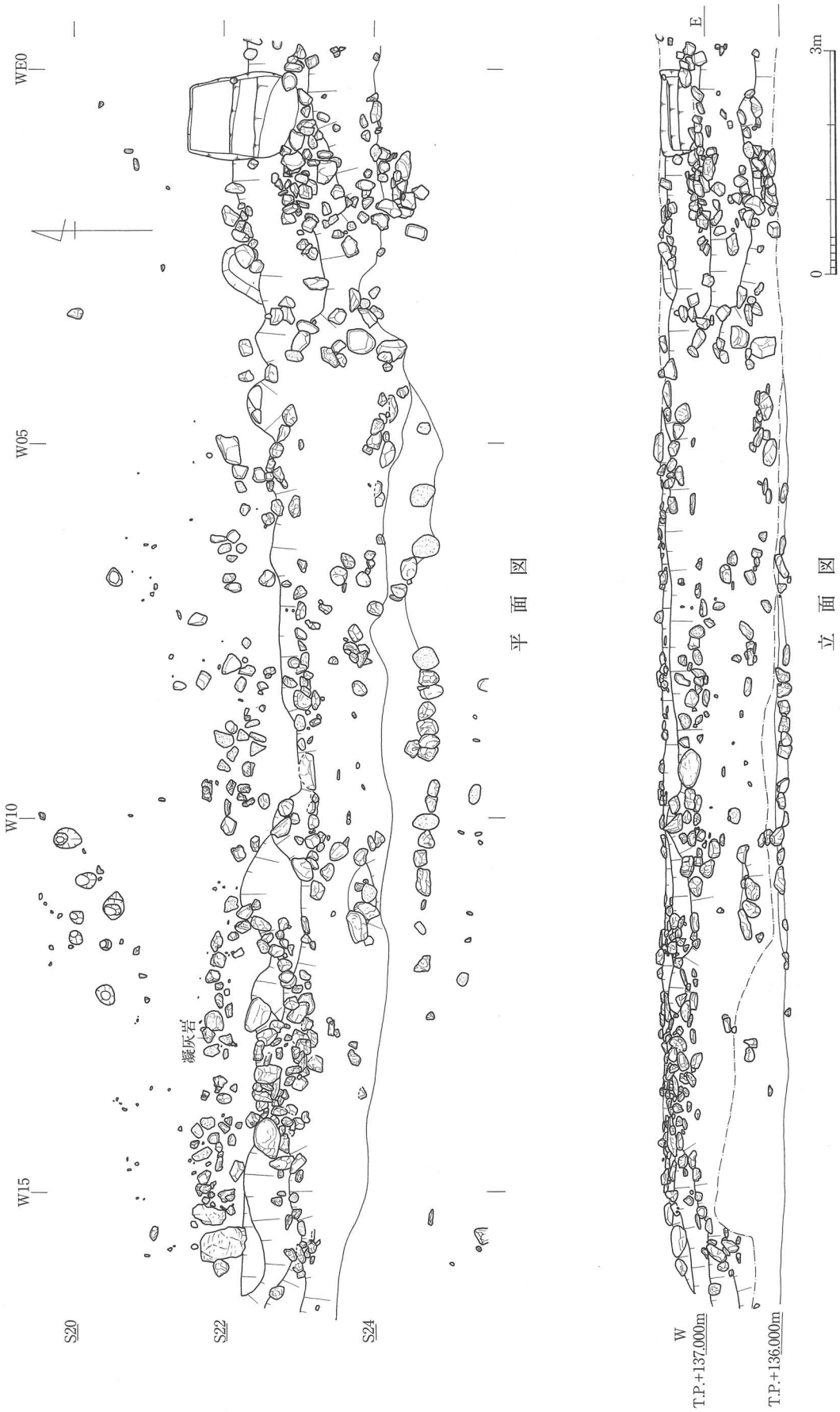


第119図　墳丘第1段南辺東半部および東辺貼石平面図・立面図（1/80）

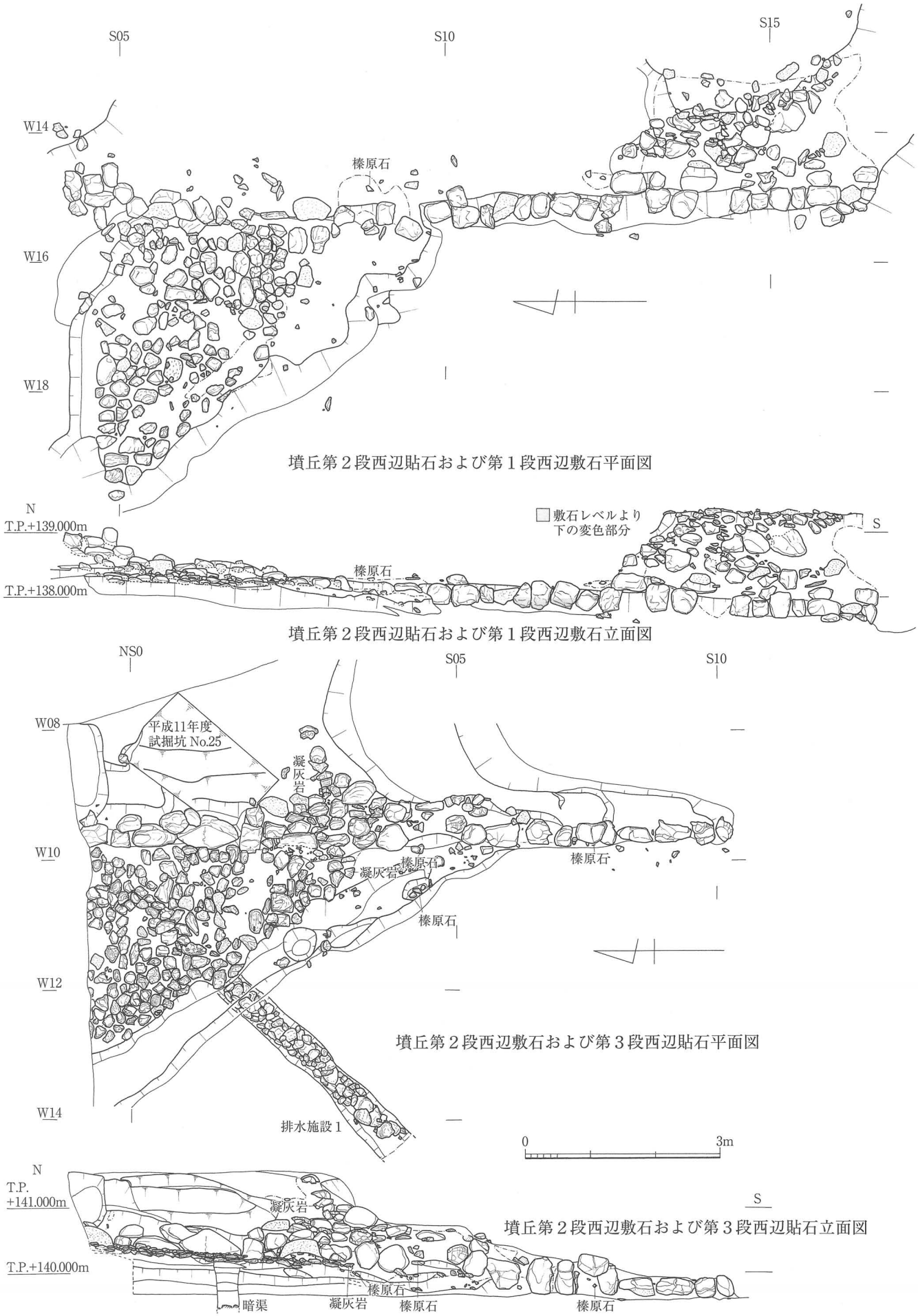


第120図　墳丘第１段西辺および第２段南辺西半部貼石平面図・立面図（1/80）

南東コーナーを斜めに削った面となるので、断面図の東側のそれぞれの層界がやや高くなるのは、正確には北にやや高くなっているのであり、つまり、北から南へ若干傾斜した面が反映されていることになる。下層に 15 ～ 40㎝の厚みの粘質土を何度か積み、それより上位に 5 ～ 10㎝厚の砂質土とやはり同じような厚さの粘質土を交互に積んでいる。次いで第２次の盛土が施されているが、これは層厚 20 ～ 30㎝の非常に堅くしまった砂質土を 5 ～ 6 層水平に盛っている。土圧により下位の粘質土に沈み込んでより安定した上面が得られている。この工程の後、最後の盛土がなされるが、まず盛られるのは礫を多量に含む粘質土、もしくは砂質土である。この盛土



第121図　墳丘第１段南辺西半部貼石平面図・立面図（1/80）



第122図　墳丘第２段西辺・南辺東半部貼石および第１段西辺敷石平面図・立面図（1/80）

第123図　墳丘第２段南辺東半部・東辺貼石および第１段東辺敷石平面図・立面図・断面図（1/80）

の上から、それより下の盛土をしっかりと固定させるかのように、最終的に厚さ70㎝の粘質土と砂質土が互層となって積み上げられる。特にその粘質土の部分は赤土のように見え、墳丘第３段裾の撹乱個所の露呈した土質に似ている。以上の段の盛土を終えてから側面に黒褐色粘土を用いて石を貼った様子が、この断面の東斜面によく現れている。ここでは粘土の厚さは10㎝程度

であり、また盛土の崩れを防ぐために厚さ25㎝程度の石を立て据えていた。

石室開口部前の撹乱坑を利用した断面（G － G'断面）観察も第２段の構築状態を示し、面積は狭小ながら、こちらは南北方向からの積み上げ状態が観察できる。これによると観察された断面には大きく２回の工程がみられた。最初の工程は、10㎝以下の薄い層と10～15㎝の厚い層を交互に水平に盛り上げ、南側をいったん斜面としてから、再びその南側斜面を覆っていくように厚さ5㎝の土を水平に盛り上げている。ここでも粘質土と砂質土を交互に用いていた。これらの盛土は第１段のそれとは異なり、比較的薄い層を細かく積み重ねている点で、版築状の盛土といえるかも知れない。この工程を経て、盛土は貼石を施工する前の盛土、つまり墳丘の原形となる。同じような断面は調査区東側の南西～北東方向の壁面に設定した補足トレンチ（F － F'断面中央）でも確認された。そこでは東に傾斜する層界を観察したが、やはりこのラインを挟んで２工程の盛土となっている。これらの断面は南側から東側へと、墳丘の最初の盛土を巡るようにその外側に積み上げられた一連の作業を示すと考えられる。このように少なくとも第２段の構築には、前後２回の過程があったことが知られた。しかしそれが中心から周辺に向かって積み上げていく単なる過程に過ぎないのか、その間に何か別の工程を挟んでいたのか、それを判断できる証拠は得られなかった。水平に盛り上げていく各土層の中に、このように前後２回に渡る工程が識別され、その層界のラインが石室からみて南と東に傾斜する形となっている。そして最初の工程を終えた段階で、墳丘第２段の土台はできあがっているとみられる。つまり、石室構築の基礎はこの段階で得られていることになる。

（3）貼石（第115～123図）

貼石が良好な状態で残っていたのは第２段南側で、ここでは段裾からテラス面までほぼ斜面全体の様子を掴むことができた。しかし、その他の部分については、各段に裾の貼石だけが残る状態であった。さらに墳丘のコーナーの貼石については、既に述べたように墳丘角がすべて削られていた関係上、どのように石が貼られていたのか分からない。全体的にみると南側と西側の貼石は、まず墳丘裾に縦長のほぼ一様な石材を用い、それより上位の貼石の基礎としている。規模は東側のそれに較べて大きく、均一な材を使用しようとしたことが明らかである。すなわち、墳丘第１段西側、第２段南側、第３段西側では50～70㎝×30～40㎝の石が多く使用されているが、第１段東側や第２段東側では50㎝を超えるものは非常に少ない。貼り方についてみても、南側から西側にかけては比較的整然としているが、東側は雑然とした印象を受ける。また西に低く東に高い地形に制約されるので、西側の段の高さを東に延長すると、どうしても段そのものの立ち上がりが東側では際立たなくなる。このことからみて、平石谷開口部に面する南西側の側面が、ここでは重視されざるを得ない地形となるのである。

貼石の良好に残る部分についてみると、特に、最初に据えられる石は基本的に直方体の石を選んでおり、これを縦位置と横位置で据える。墳丘第２段南辺を例にとると、中軸線より西では、W2・W5・W7・W9、東側ではE3・E5、第１段西側ではS11・S13・S15・S17などに縦位置

で用い、その間を横位置で貼る傾向が認められる。作業の区切りとして何か目印のようにそうするのであろうか。南辺の縦位置の石の部分を少し浮かせて裏面を見てみたが、黒褐色粘土が存在するだけで、特段注目されるような事実はなかった。

貼石と敷石の施工上の関係を示唆するものとして、第２段南側や西側の裾の貼石に水平方向に変色部分が認められる石がある（第１段西側南北のS14 ～ 17にかかる貼石、第２段西側南北のS11 ～ 12にかかる貼石、第２段南側東西のW2 ～ 3、4 ～ 6にかかる貼石）。この変色のラインは１段目でT.P.136.5 ～ 136.7 m、２段目でT.P.137.9 ～ 138.0 mを測り、ほぼ一定している。このことから石が貼られた後、テラス面が整えられ、その上に石が敷かれたので、貼石の側面の下部はある程度埋まり、それより上位は露呈したままになったため風化により変色したと考えられる。

貼石の残る部分には、墳丘の構造で述べた黒褐色の粘土が必ず用いられている（第119 ～ 122図のトーンで示した部分）。石はこの粘土に押しつけて貼られている。また、貼石が外れた部分でもこの粘土の残るところがある。粘土は貼石をより強固に固定させるために用いられたようである。貼石の中にはいわゆる榛原石が散見される。しかしそれは特にこの石材でなければならないというような状態ではなく、大きさもまちまちである。一般に石室内に用いられるのがこれまでの調査で判明しているので、おそらくその余りを外部にも用いたと考えたい。

（4）敷石（第122 ～ 123図）

各段上面のテラスに石を敷き詰めたもので、第１段・第２段の北西隅、第１段の北東隅において検出された。第１段北西隅では7.0㎡、第２段北西隅では6.8㎡、第１段北東隅では15.8㎡が開墾から免れて残っていた。第１段北西隅の敷石はT.P.138.2 ～ 138.5 m、第２段北西隅のそれはT.P.140.1 ～ 140.4 m、第１段北東隅のそれはT.P.138.3 ～ 138.6 mで、全体的にみて北から南へ若干傾斜面をなす。第１段北西隅のこの高さと、貼石のところで述べた石の一部に変色部分がみられる高さとを較べると、0.30 ～ 0.50 mの高低差が生じている。このことからすると南北方向のテラス面の高さは必ずしも水平ではなく、北から南に下がる地形の緩傾斜面に合わせている。それは単に合わせていたというにとどまらず、石敷きの雨水などを始末する上では、若干の勾配をつけたほうが水はけに都合がよい。さりとてこの程度の傾斜なら、水平な段と平坦なテラスのイメージが損なわれるほどのこともない。後述する排水施設１の底面高をみても第１段テラスに高さを合わせているので、テラス面の滞水をできるかぎり南に落とそうとする意図が施工段階から働いていたとみられる。

第１段と第２段の北西隅、第１段北東隅に敷き詰められた石に共通するのは、20㎝大の石が多用されていること、風化して砂状になった石が認められること、必ずしも石の平たい面を揃えてはいないことである。またこれらの３個所の敷石を比較してみると、最も丁寧に密に整えて施工しているのは第２段北西隅であり、また第１段北西隅では石と石の間にやや隙間が目立つが、この南端の一部に２段目と同様に密に敷き詰めた部分が残るので、本来は２段目とほぼ同じよ

うな丁寧な施工が行われていたと考えられる。これに対して第１段北東隅では石の大きさがまちまちであることに加えて、敷石間の凹凸が激しく、用いられている石も大振りの40㎝を超えるものを乱雑に置いている。よって前２個所にみられたような平坦面とする意識は薄い。ここでは貼石裾の傾斜角が比較的に緩くなっていることとも相俟って、テラス面から段斜面への変換は一見すると気づかないほど漸次的に移行する。

以上の３個所以外の敷石は耕地開墾の過程でほとんど取り去られたようである。ただ貼石と同様、石を固定する黒褐色粘土はここにも使用されており、そのわずかな痕跡が各所に認められたことも含めて、敷石は本来少なくとも第１・２段のテラス全面に施されていたと考えたい。

３．外部施設

外部施設としては墳丘の土台となる壇、その上面に墳丘裾を三方からを取り巻く周溝がある。

（1）壇（第121図）

墳丘の南に南北約25ｍ、東西は東が農道によって削られ、崖面となり、西は谷地への傾斜面までの余地を勘案すると、少なくとも70ｍを測る。また東では第５調査区、西では第１調査区の東西トレンチでいずれも谷地への傾斜変換部を捉え、これをそれぞれ南へ延長し、壇の東西ラインを交わるところから見て少なくとも70ｍを下回ることはない。壇上面の東端はT.P.136.3ｍ、西端はT.P.135.9ｍ、南辺での地山面と盛土面の境は、東半でT.P.135.5～135.7ｍ、西半でT.P.134.3～134.7ｍであり、東端と西端の比高差は1.4ｍで、この高低差を盛土によって克服し、水平な壇造成を行っている。壇の盛土を南北方向で見た場合（第116図中央土層断面図）、地山面は南端でT.P.134.8ｍ、北端でT.P.135.0ｍと北から南へ緩やかに傾斜し、その上に厚さ35～50㎝の粘質土（第132層）が堆積している。土質は均一で、サヌカイト剥片が出土し、壇の盛土以前の堆積土と思われる。これより上に壇の盛土が行われている（同図壇盛土模式図）。それは大きくｄ－３→ｄ－２→ｄ－１の順に積み上げられ、ｄ－４で南の斜面を補強して壇の盛土は完了する。ｄ－１の盛土の過程でも南側を先に土手状に盛り上げておいて、それによって低くなった北側を盛る傾向がみられる。その結果、北側の墳丘裾寄りに浅い凹部ができたが、これが周溝となって、墳丘構築後そこに徐々にレンズ状に粘質土（ｃ）が溜まっていった。その後は棚田の中に埋没し、耕土・旧耕土などのブロックが混じる後世の耕作土（ｂ）、さらにその南端に石積みして棚田を造成した際の盛土（a）に覆われた。

壇の造成に用いられている土やその盛り方は、墳丘で観察されたものとはまったく異なっている。粘質土が主体であるが、墳丘にみられるような互層状ではなく、大部分が土塊状となっている。礫は特に東半部に混入が著しい。上記の壇盛土以前の132層は壇より南、すなわち第３調査区南トレンチではまったく認められず、そこでは地山だけとなっていること、また地山の土質に似ていることから、礫まじりの地山を削って、それを盛土として用いた可能性が高い。また、谷地に近い傾斜面への地滑りを防止するためか、事前に横木を強いてからその上に土を盛った形跡が壇南側の断面で確認された（図版56参照）。